秋田県文化財調査報告書第208集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書X

－ 上猪岡遺跡 －

秋田県埋蔵文化財センター

1991・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書X

－ 上猪岡遺跡 －

1991・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成3年度の完成を目指して着々と工事が進められております。秋田県教育委員会では、昭和60年度から路線内に存在する遺跡の発掘調査を実施し、歴史的に貴重な資料を得て逐次その成果を公表してまいりました。

本報告書は、昭和63年度に調査した上猪岡遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、横手市教育委員会・平鹿町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成3年3月15日

秋田県教育委員会
教育長　橋本　顕信

例　　言

1．本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の10冊目の報告書である。

2．本書は、昭和63年度に調査された横手市・平鹿町に所在する上猪岡遺跡の調査結果を収めたものである。

3．調査の内容については、すでにその一部が調査略報などによって公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。

4．本書の執筆は第5章を除き、武藤祐浩が行った。

5．第5章の放射性炭素年代測定は学習院大学に、また花粉分析・鉱物分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託したものである。

6．本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『横手』地形図である。

7．遺構土層図中の土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

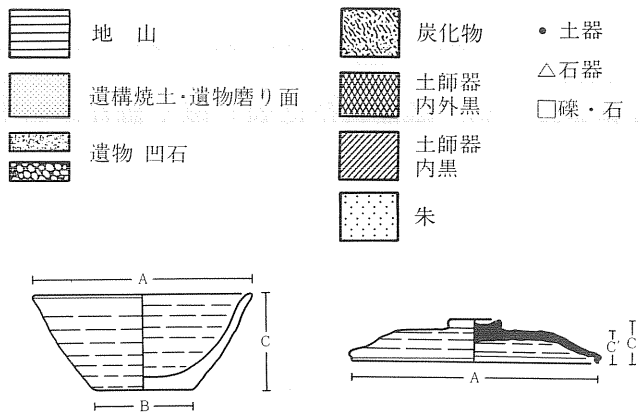
8．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付してある。その際に鉄製品には石器の通し番号を付した。この番号は図版中の遺物番号と対応している。

9．遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＫＩ…竪穴状遺構　ＳＮ…焼土遺構　ＳＫ…土坑

ＳＲ…土器埋設遺構　ＳＤ…溝状遺構　ＲＰ…土器　ＲＱ…石器

10．挿図に使用したスクリーントーン・シンボルマークは以下の通りである。また須恵器蓋・杯・土師器杯の実測図に付した計測値は下図に基づく。



目　　次

序
例言
目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 3
第２章　遺跡の立地と環境 …… 5
　第１節　遺跡の立地 …… 5
　第２節　周辺の遺跡 …… 9
第３章　発掘調査の概要 …… 12
　第１節　遺跡の概観 …… 12
　第２節　調査の方法 …… 14
　第３節　調査経過 …… 15
第４章　調査の記録 …… 18
　第１節　縄文時代及び弥生時代 …… 18
　　1　検出遺構と遺構内出土遺物 … 21
　　2　遺構外出土遺物 …… 67
　第２節　平安時代以降 …… 99
　　1　検出遺構と遺構内出土遺物 … 99
　　2　遺構外出土遺物 ……125
第５章　自然科学的分析 ……135
　第１節　放射性炭素年代測定 ……135
　第２節　花粉分析 ……135
　第３節　鉱物分析及び屈折率測定 ……140
第６章　まとめ ……144
写真図版

挿　図　目　次

第１図　横手市周辺の路線と遺跡 …… 4
第２図　遺跡位置図 …… 5
第３図　周辺の表層地質 …… 6
第４図　周辺の遺跡 …… 7
第５図　基本土層模式図 …… 13
第６図　工事計画と調査範囲 …… 17
第７図　遺構配置図 …… 19・20
第８図　ＳＩ84・遺構内出土遺物（１）… 22
第９図　ＳＮ70・92 …… 23
第10図　遺構内出土遺物（２）…… 24
第11図　ＳＫＩ12 …… 25
第12図　遺構内出土遺物（３）…… 26
第13図　ＳＫ02・06・21・34・54・55 … 29
第14図　遺構内出土遺物（４）…… 30
第15図　ＳＫ22・88・95 …… 32
第16図　遺構内出土遺物（５）…… 33
第17図　遺構内出土遺物（６）…… 34
第18図　ＳＫ07・09 …… 35
第19図　遺構内出土遺物（７）…… 35
第20図　ＳＫ14・15・16・25・26 …… 37
第21図　遺構内出土遺物（８）…… 38
第22図　遺構内出土遺物（９）…… 39・40
第23図　遺構内出土遺物（10）…… 41
第24図　遺構内出土遺物（11）…… 42
第25図　ＳＫ37・45・50・52・72・96 … 44
第26図　遺構内出土遺物（12）…… 46
第27図　遺構内出土遺物（13）…… 47
第28図　ＳＫ76・81・83・86 …… 49
第29図　遺構内出土遺物（14）…… 51
第30図　遺構内出土遺物（15）…… 52
第31図　ＳＫ87・89・91・93 …… 53
第32図　ＳＫ32・61・94 …… 55
第33図　ＳＫ01・05・10・38・39・
　　41・46・47・49 …… 56
第34図　ＳＫ53・56・57・62・66・
　　67・69・74・78・79・82 …… 57
第35図　遺構内出土遺物（16）…… 58
第36図　遺構内出土遺物（17）…… 59
第37図　ＳＲ03・44・
　　遺構内出土遺物（18）…… 64
第38図　ＳＤ04・36 …… 65
第39図　遺構内出土遺物（19）…… 66

第40図　遺構外出土遺物（1）…… 68
第41図　遺構外出土遺物（2）…… 69
第42図　遺構外出土遺物（3）…… 70
第43図　遺構外出土遺物（4）…… 71
第44図　遺構外出土遺物（5）…… 72
第45図　遺構外出土遺物（6）…… 75
第46図　遺構外出土遺物（7）…… 76
第47図　遺構外出土遺物（8）…… 77
第48図　遺構外出土遺物（9）…… 78
第49図　遺構外出土遺物（10）…… 79
第50図　遺構外出土遺物（11）…… 81
第51図　遺構外出土遺物（12）…… 82
第52図　遺構外出土遺物（13）…… 83
第53図　遺構外出土遺物（14）…… 84
第54図　遺構外出土遺物（15）…… 85
第55図　遺構外出土遺物（16）…… 86
第56図　遺構外出土遺物（17）…… 87
第57図　遺構外出土遺物（18）…… 88
第58図　遺構外出土遺物（19）…… 89
第59図　遺構外出土遺物（20）…… 91
第60図　遺構外出土遺物（21）…… 92
第61図　遺構外出土遺物（22）…… 93
第62図　遺構外出土遺物（23）…… 94
第63図　遺構外出土遺物（24）…… 95
第64図　遺構外出土遺物（25）…… 96
第65図　遺構外出土遺物（26）…… 97
第66図　遺構外出土遺物（27）…… 98
第67図　ＳＪ40 ……100
第68図　遺構内出土遺物（20）……101
第69図　遺構内出土遺物（21）……102
第70図　遺構内出土遺物（22）……103
第71図　ＳＫＩ31 ……105
第72図　遺構内出土遺物（23）……106
第73図　ＳＫＩ58 ……107
第74図　ＳＫＩ59 ……108
第75図　ＳＫＩ80 ……109
第76図　ＳＫ13・17・19・20・
29・33・ＳＮ28 ……111
第77図　遺構内出土遺物（24）……112
第78図　ＳＫ27・35 ……113
第79図　遺構内出土遺物（25）……114
第80図　遺構内出土遺物（26）……115
第81図　遺構内出土遺物（27）……116
第82図　ＳＫ63・85・90 ……118
第83図　遺構内出土遺物（28）……119
第84図　ＳＱ30 ……120
第85図　遺構内出土遺物（29）……120
第86図　ＳＤ71 ……122
第87図　遺構内出土遺物（30）……123
第88図　遺構内出土遺物（31）……124
第89図　遺構内出土遺物（32）……125
第90図　遺構内出土遺物（33）……126
第91図　ＳＤ43・73 ……127
第92図　遺構外出土遺物（28）……128
第93図　遺構外出土遺物（29）……129
第94図　遺構外出土遺物（30）……130
第95図　遺構外出土遺物（31）……131
第96図　遺構外出土遺物（32）……132
第97図　遺構外出土遺物（33）……133
第98図　ＬＰ36の土層断面と
分析試料の層位 ……136
第99図　ＬＰ36花粉化石群集変遷 ……138
第100図　ＬＰ44の土層断面と
分析試料の層位 ……141
第101図　テフラ試料の重鉱物組成
ダイヤグラム ……143
第102図　テフラ試料の軽鉱物組成
ダイヤグラム ……143

表　目　次

第１表　周辺の遺跡 …… 8
第２表　縄文時代土坑一覧 …… 28
第３表　ＬＰ36花粉分析結果 ……137
第４表　重鉱物組成の内訳 ……142
第５表　軽鉱物組成の内訳 ……142

図 版 目 次

図版１　１　遺跡周辺の地形（南▶北）…145
図版２　１　調査前全景（南東▶北西）…146
　　２　調査後全景（西▶東）……146
図版３　１　遺構集中部分（南▶北）……147
　　２　ＳＩ84（南東▶北西）……147
図版４　１　ＳＫ07土層断面
　　（北東▶南西）……148
　　２　ＳＫ09土層断面（東▶西）…148
　　３　ＳＫ14（東▶西）……148
図版５　１　ＳＫ15検出状況
　　（南西▶北東）……149
　　２　同遺物出土状況（北▶南）…149
　　３　ＳＫ16土層断面（北▶南）…149
図版６　１　ＳＫ25遺物出土状況
　　（南▶北）……150
　　２　ＳＫ26（南東▶北西）……150
　　３　ＳＫ37（北西▶南東）……150
図版７　１　ＳＫ50調査状況（西▶東）…151
　　２　ＳＫ52（北▶南）……151
　　３　ＳＫ52遺物出土状況
　　（北▶南）……151
図版８　１　ＳＫ02（西▶東）……152
　　２　ＳＫ55（西▶東）……152
　　３　ＳＫ22・98（西▶東）……152
　　４　ＳＫ22遺物出土状況
　　（西▶東）……152
　　５　ＳＫ95（西▶東）……152
　　６　ＳＫ32（南西▶北東）……152
　　７　ＳＫ01（南東▶北西）……152
　　８　ＳＫ53・54（南▶北）……152
図版９　１　ＳＲ03（北西▶南東）……153
　　２　ＳＤ04（北▶南）……153
　　３　ＳＤ36検出状況
　　（北西▶南東）……153
図版10　１　ＳＪ40調査状況
　　（北西▶南東）……154
　　２　ＳＪ40（南東▶北西）……154
図版11　１　ＳＫＩ31（西▶東）……155
　　２　ＳＫＩ58・59（西▶東）……155
図版12　１　ＳＫ17検出状況
　　（南西▶北東）……156
　　２　ＳＫ17（南▶北）……156
　　３　ＳＫ19・29・33検出状況
　　（南東▶北西）……156
　　４　ＳＫ19土層断面
　　（北西▶南東）……156
　　５　ＳＫ19・29・33(南▶北）……156
　　６　ＳＫ20（東▶西）……156
　　７　ＳＮ28（南東▶北西）……156
　　８　ＳＱ30（南▶北）……156
図版13　１　ＳＫ27上部配石
　　（南東▶北西）……157
　　２　同遺物出土状況(南▶北）……157
　　３　同下部土坑（西▶東）……157
図版14　１　ＳＤ71（南東▶北西）……158
　　２　ＳＤ11（南東▶北西）……158
　　３　同土層断面（北▶南）……158
図版15　１　出土遺物（１）……159
図版16　１　出土遺物（２）……160
図版17　１　出土遺物（３）……161
図版18　１　出土遺物（４）……162
図版19　１　出土遺物（５）……163
　　２　出土遺物（６）……163
図版20　１　出土遺物（７）……164
　　２　出土遺物（８）……164
図版21　１　出土遺物（９）……165
　　２　出土遺物（10）……165
図版22　１　出土遺物（11）……166
　　２　出土遺物（12）……166
図版23　１　出土遺物（13）……167
　　２　出土遺物（14）……167
図版24　１　出土遺物（15）……168
　　２　出土遺物（16）……168
図版25　１　出土遺物（17）……169

2　出土遺物（18）……169
図版26　1　出土遺物（19）……170
図版27　1　出土遺物（20）……171
図版28　1　花粉顕微鏡写真（1）……172
図版29　1　花粉顕微鏡写真（2）……173
図版30　№8に含まれる
火山ガラス ……174

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮、陸上交通体系の改善など地域の生産活動や住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として、東北縦貫自動車道を岩手県の北上市で分岐し、横手市、大曲市を経て秋田市に至る延長約108kmの高速道路である。

このうち横手市－秋田市間57.4kmについては、昭和46年6月に基本計画が示され、昭和53年11月には整備計画とともに第８次施行命令が下された。これに伴い昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和55・56年の２ケ年にわたって遺跡の分布調査を行い、計画路線内に44遺跡が存在することを報告した。[註1・2] さらに昭和58年にはこれら遺跡の詳細分布調査[註3]を行い、最終的に路線内には37遺跡[註4]が存在することを報告している。

これらの調査結果に基づき、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で、37遺跡の保存について協議されたが、路線変更の不可能なことから、記録保存の措置をとることで合意し、昭和60年度から調査が開始されたのである。

調査は、秋田市寄りの遺跡から順次着手され、昭和60年には、河辺郡河辺町七曲地区の６遺跡[註5]、翌61年には仙北郡協和町中淀川地区の上ノ山Ⅰ・Ⅱ、館野遺跡[註6]、それに同町峰吉川地区に所在する半仙遺跡の一部の調査が実施されている。さらに昭和62年には半仙遺跡の残りの部分と、西仙北サービスエリア予定地の上野台遺跡とその北側の寺沢遺跡[註7]、仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅱ・小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部、平鹿郡大森町の下田遺跡[註9]、横手市の手取清水遺跡[註10]の調査を行っている。

昭和63年には横手市の上猪岡遺跡をはじめ、上ノ山Ⅱ遺跡の拡幅部分[註11]、小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の残りの部分と小出Ⅳ遺跡[註8]、北田山田ケ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡[註12]、大曲市の石神[註13]・太田[註14]・下田谷地遺跡[註9]、平鹿郡平鹿町の竹原窯跡[註15]の調査を行い、翌平成元年には大畑潜沢Ⅱ遺跡の調査が行われている。

註

1　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第79集　1981（昭和56年）

2　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

3　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第116集　1984（昭和59年）

4　37遺跡のうちその後の範囲確認調査で遺跡範囲が路線内に及んでいないことが判明した遺跡があり、また、新たに館野遺跡、北田山田ケ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡を加えて、結果的に調査の対象となった遺跡は27遺跡である。

5　秋田県教育委員会「石坂台Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ、松木台Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』　秋田県文化財調査報告書第150集　1986（昭和61年）

6　秋田県教育委員会「上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・館野遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988（昭和63年）

7　秋田県教育委員会「上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』　秋田県文化財調査報告書第180集　1989（平成元年）

8　秋田県教育委員会「小出Ⅰ遺跡・小出Ⅱ遺跡・小出Ⅲ遺跡・小出Ⅳ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』　秋田県文化財調査報告書第206集　1991（平成３年）

9　秋田県教育委員会「下田・下田谷地遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第189集　1990（平成２年）秋田県教育委員会

10　秋田県教育委員会「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第190集　1990（平成２年）

11　秋田県教育委員会「上ノ山Ⅱ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ（補遺）』秋田県文化財調査報告書第186集　1989（平成元年）

12　秋田県教育委員会「北田山田ケ沢Ⅰ遺跡・北田山田ケ沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ』　秋田県文化財調査報告書第205集　1991（平成３年）

13　秋田県教育委員会「石神遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第191集　1990（平成２年）

14　秋田県教育委員会「太田遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ』秋田県文化財調査報告書第207集　1991（平成３年）

15　秋田県教育委員会「竹原窯跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第209集　1991（平成３年）

第２節　調査の組織と構成

遺　跡　名　　上猪岡遺跡[註1]
調査主体者　　秋田県教育委員会
遺跡所在地　　横手市猪岡字猪岡245外
調 査 面 積　　2,700㎡
調 査 期 間　　昭和63年９月５日～12月６日

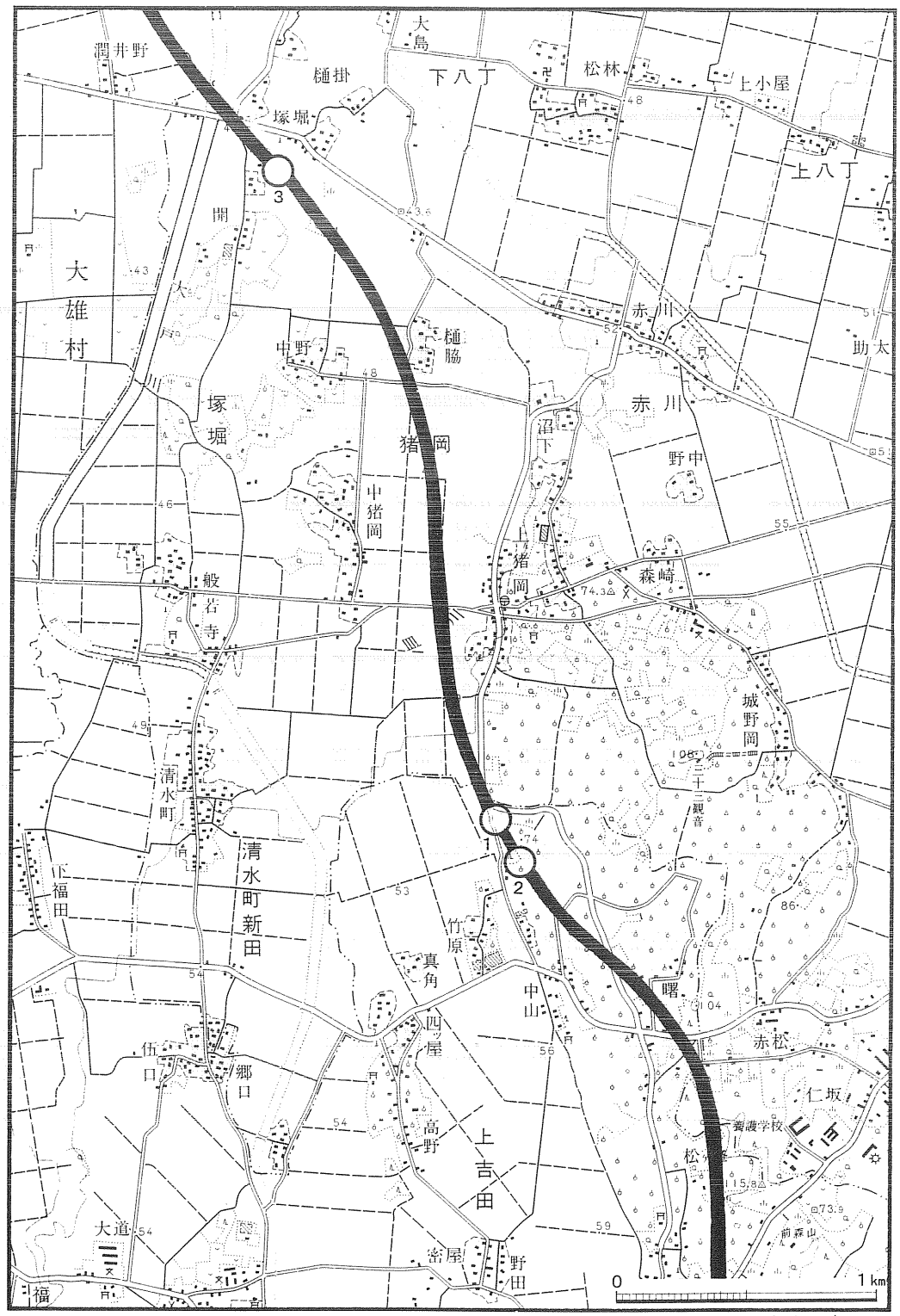
専門指導員　　白石建雄　秋田大学教育学部教授
　　戸沢充則　明治大学文学部教授
　　林　謙作　北海道大学文学部助教授
　　吉岡康暢　国立歴史民俗博物館考古研究部教授
　　渡辺　誠　名古屋大学文学部助教授（現　名古屋大学文学部教授）
　　（五十音順）

調査担当者　　武藤祐浩　秋田県埋蔵文化財センター学芸主事
　　吉田　真　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員
　　藤原　司　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員

総務担当者　　加藤　進　秋田県埋蔵文化財センター主査（現　秋田県立博物館課長補佐）
　　佐田　茂　秋田県埋蔵文化財センター主査（平成元年４月転入）
　　高橋忠太郎秋田県埋蔵文化財センター主事

調査協力期間　横手市・横手市教育委員会・平鹿町・平鹿町教育委員会

註
1　現在の遺跡名は、岩野沢Ｂ遺跡に変更されている。
　横手市教育委員会『秋田県横手市　遺跡詳細分布調査報告書』　横手市文化財調査報告書11
　1986（昭和61年）
　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』　1987（昭和63年）



第１図　横手市周辺の路線と遺跡

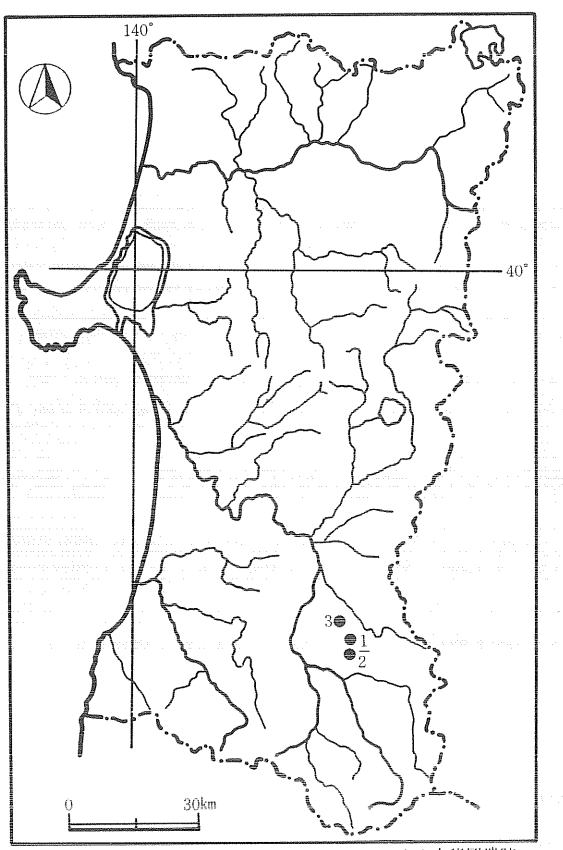
１：上猪岡遺跡
２：竹原窯跡
３：手取清水遺跡

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

１　遺跡の位置

遺跡の所在する横手市は横手盆地の中央東端にあって、人口43,030人、面積110.66㎢、県南部の中核都市である。東部は奥羽山脈に連なる丘陵地であるが、盆地床にあたる南東から北西にかけての部分は、緩やかに傾斜した平坦な土地が広がり、そのほとんどが水田として利用されている。国道13号線を南下し、横手バイパスの中程で右折すると、市街地の西に広がる水田地帯の中に、中山丘陵の北端部分が現れる。遺跡はこの丘陵の西側にある。遺跡の所在は横手市猪岡字猪岡である。遺跡は市域の南西端にあたり、範囲の一部は横手市の南西に隣接する、平鹿町におよぶ。遺跡の位置はＪＲ横手駅から直線で約3.8㎞、東経140°31′16″、北緯39°18′23″である（第２・３図）。

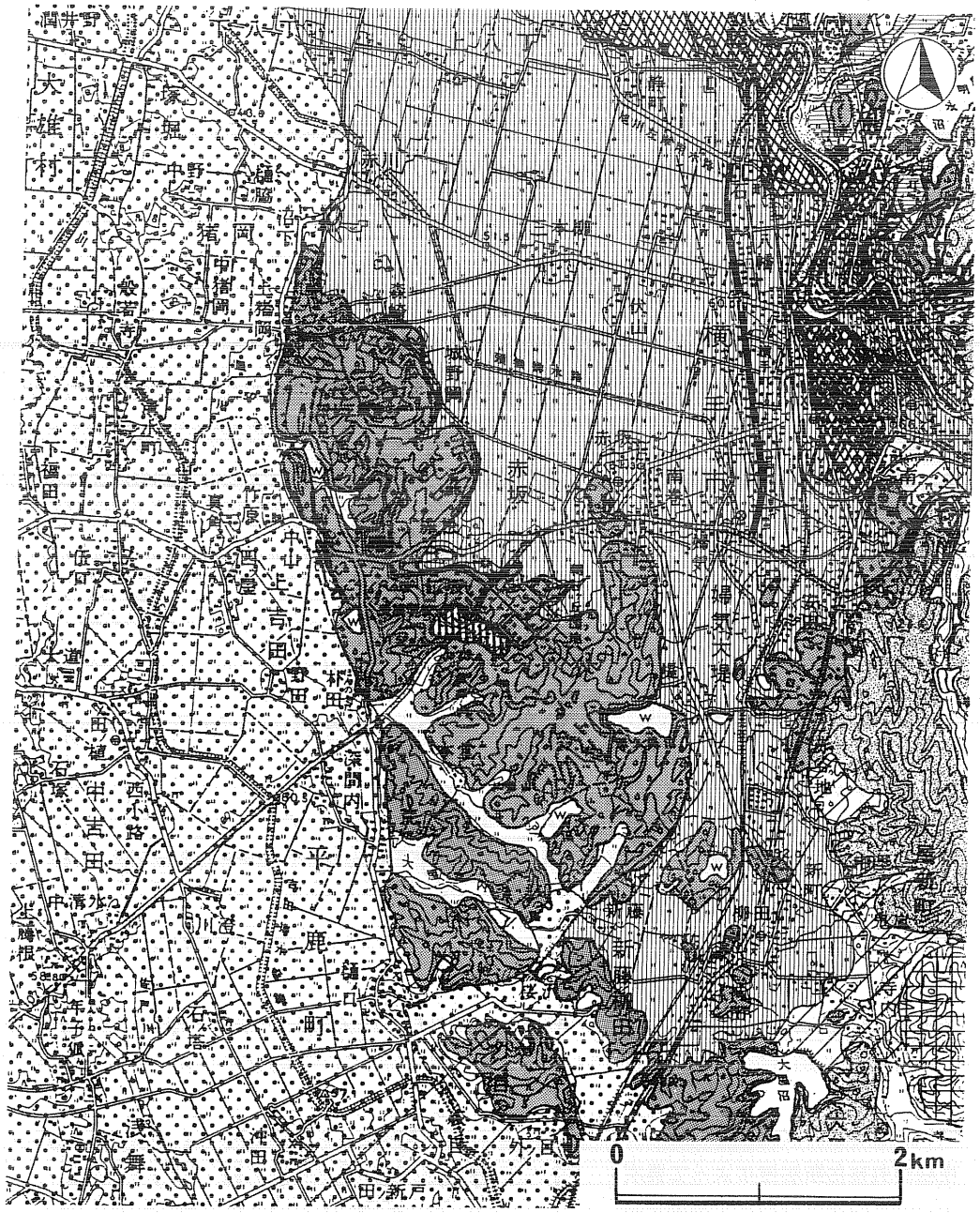


１：上猪岡遺跡
２：竹原窯跡
３：手取清水遺跡

第２図　遺跡位置図

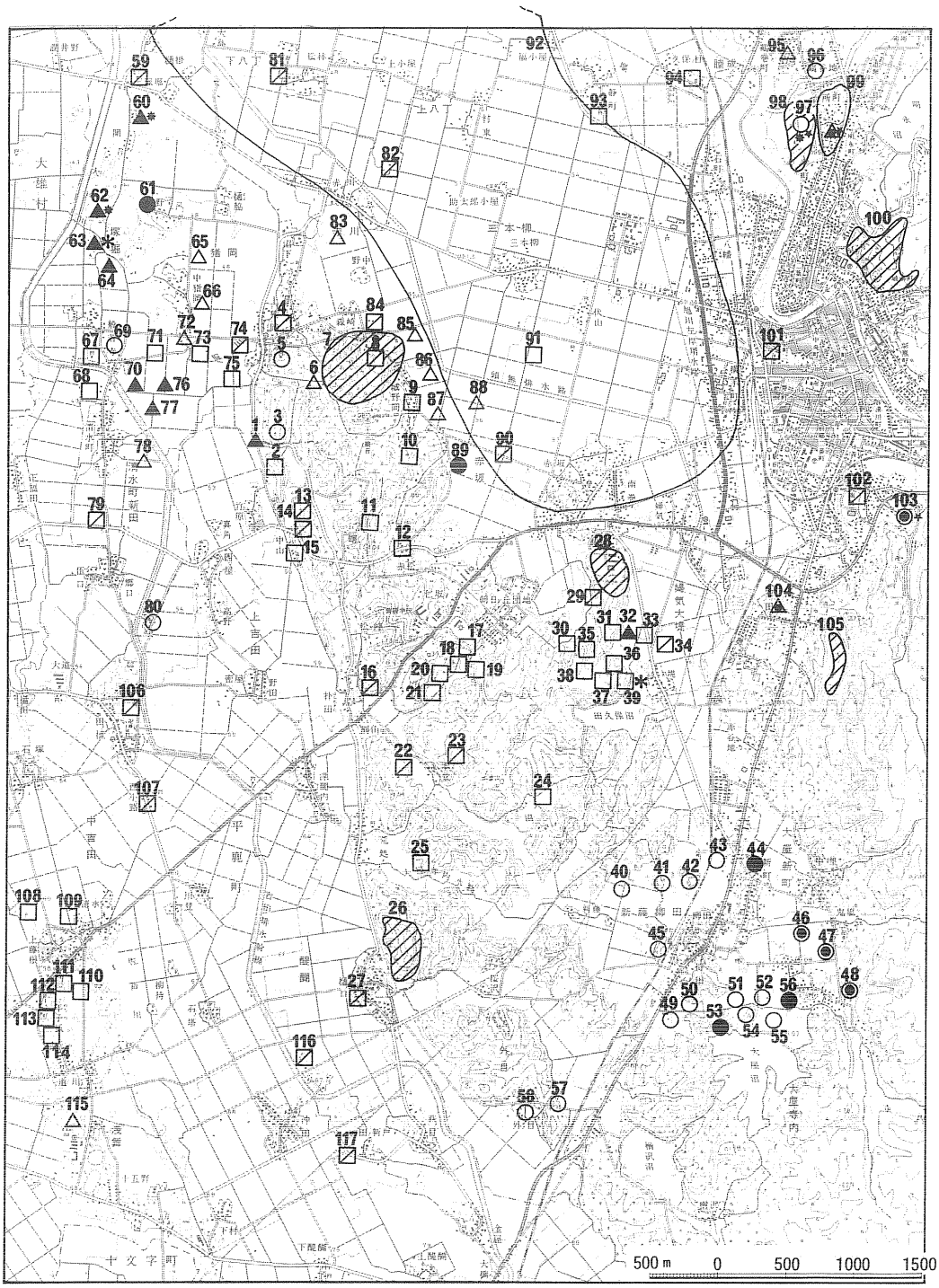
２　遺跡周辺の地形と地質

横手盆地は秋田県の南東部、雄物川の上・中流域に広がる。西奥羽内陸盆地列のなかでも最大の盆地で南北の長さ60㎞、東西の最大幅15㎞にもおよぶ。盆地の周囲は、東縁が真昼岳断層崖によって奥羽山脈に、西縁は姫神・大黒森断層崖によって出羽山地に接する。南部では国見断層崖・東鳥海断層崖が明瞭であり、北部の角館付近には分離丘陵が多い。こうした周囲の地形との対比から、横手盆地が



中起伏山地　小起伏山地　丘陵地Ⅱ
砂礫段丘Ⅰ　破礫段丘Ⅱ　砂礫段丘Ⅲ+
砂礫段丘Ⅲ　砂礫段丘Ⅳ+　砂礫段丘Ⅳ
砂礫段丘Ⅴ　谷底平野・氾濫平野　扇状地
河原　旧河道　人工改変地

第３図　周辺の表層地質



★旧石器時代　○縄文時代(二重マーク：中期以前　黒塗：後･晩期)　✸弥生時代

✻古墳時代　□古代　△縄文時代･古代の複合(縄文時代区分に同じ)　▨ ▨中世以降

第４図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡

番号	遺　跡　名	時期・性格	番号	遺　跡　名	時期・性格	番号	遺　跡　名	時期・性格
1	上 猪 岡	縄文・古代	40	新藤柳田字中村	縄文	79	宮　　表	中世
2	竹原窯跡	古代	41	柳 田 Ⅱ	縄文	80	新 城 下	縄文
3	岩野沢Ａ	縄文	42	柳 田 Ⅰ	縄文	81	古 館 跡	館跡
4	猪 岡 館	館跡	43	小 松 原	縄文	82	赤 川 館	館跡
5	長 瀞 Ｂ	縄文	44	新　　町	縄文	83	野　　際	縄文・古代
6	猪　　岡	縄文・古代	45	札　　塚	縄文	84	森　　崎	中世
7	城野岡館	館跡	46	掘 ノ 内	縄文	85	赤坂字高口	縄文・古代
8	城野岡塚群	塚	47	大屋寺内字寺村Ａ	縄文	86	城野岡前Ａ	縄文・古代
9	城 野 岡	古代	48	大屋寺内字寺村Ｂ	縄文	87	城野岡前Ｂ	縄文・古代
10	城野岡窯跡	古代	49	笹 崎 Ａ	縄文	88	赤坂字堤下	縄文・古代
11	明　　通	古代	50	笹 崎 Ｂ	縄文	89	橋　　本	縄文
12	沢　　口	古代	51	笹 崎 Ｃ	縄文	90	下喜連森	中世
13	中 山 Ⅱ	近世・現代	52	長 谷 下	縄文	91	柴　　崎	古代
14	中 山 Ⅰ	近世・現代	53	長谷山乙	縄文	92	条 里 制	条里
15	福　　島	古代	54	長 谷 Ａ	縄文	93	長　　田	古代
16	朴 田 館	館跡	55	長 谷 Ｂ	縄文	94	下久保目	古代
17	西ケ沢山Ⅰ	古代	56	寺　　内	縄文	95	鶴　　巻	縄文・古代
18	西ケ沢山Ⅱ	古代	57	前 村 Ａ	縄文	96	杉沢字吉沢Ｂ	縄文
19	西ケ沢山Ⅲ	古代	58	前 村 Ｂ	縄文	97	小 吉 山	旧石器・縄文・弥生
20	西ケ沢前森	古代	59	塚堀字塚腰塚	塚	98	大島井柵	館跡
21	西 ケ 沢	古代	60	手取清水	縄文・弥生・古代	99	台 処 館	旧石器・縄文・古代
22	家 ノ 前	中世	61	猪岡字萱原	縄文	100	朝 倉 城	館跡
23	本 堂 前	館跡	62	オホン清水北	縄文・弥生・古代	101	平　　城	館跡
24	大 沼 入	古代	63	オホン清水Ｂ	縄文・古墳・古代	102	前 郷 館	館跡
25	向内の目	古代	64	オホン清水Ａ	縄文・古代・江戸	103	大乗院塚	縄文・旧石器
26	樋ノ口城	館跡	65	鷹匠道下	縄文・古代	104	柳　　堤	縄文・古代
27	善福寺貞和碑	板碑	66	中 堰 西	縄文・古代	105	安 田 館	館跡
28	郷 土 館	館跡	67	般 若 寺	古代	106	吉 田 城	館跡
29	郷土館Ａ	中世	68	宮　　下	古代	107	古　　城	館跡
30	大 沢 沼	古代	69	薬 師 前	縄文	108	中 藤 根	古代
31	郷土館窯跡	古代	70	清水町新田字堤	縄文・古代	109	中 谷 地	古代
32	郷土館Ｂ	縄文・古代	71	中猪岡Ｂ	古代	110	中 清 水	古代
33	田久保下	古代	72	中猪岡Ａ	縄文・古代	111	上藤根Ⅰ	古代
34	中　　田	中世？	73	川 口 Ａ	古代	112	上藤根Ⅱ	古代
35	富ケ沢Ａ	古代	74	川 口 Ｂ	江戸	113	年子狐Ⅱ	古代
36	富ケ沢Ａ窯跡	古代	75	長 瀞 Ａ	古代	114	年子狐Ⅰ	古代
37	富ケ沢Ｂ窯跡	古代	76	猪岡字八幡	縄文・古代	115	一 関 向	縄文・古代
38	富ケ沢Ｃ窯跡	古代	77	大 堰 端	縄文・古代	116	松　　館	館跡
39	田久保下遺跡	古代・古墳	78	宮　　東	縄文・古代	117	醍 醐 館	館跡

断層をともなった構造盆地であることがわかる。横手盆地の南東に接する金峰山山地の南端からは、その支脈である中山丘陵が北西方向に雁行状にのび、横手市の中央西端で盆地面下に埋没している。

遺跡は、中山丘陵北端の西側斜面端部の狭い平場と、それに続く緩やかな斜面上に立地している。標高は、調査区内で最も高い平坦部分で54.3ｍ、西側の斜面下方では51.1ｍを測る。遺跡周辺の地形は中山丘陵地と横手低地に二分される（第３図）。

中山丘陵地の表層地質は、新第三紀中新世の相野々層に対応する。西側は石灰質団塊を含む黒色泥岩、東側は石英安山岩質凝灰岩の層から成り立っている。土壌は森林褐色土壌であり、土性が細かく粘性の強い土である。土色は黄褐色を呈するが、土質によって丘陵の西側は豊丘統、東側は小坂統として区分されている。また、豊丘統の下層は礫層となっている。

横手低地は中山丘陵を挟んで成瀬川・皆瀬川扇状地と横手川下流地域から構成される。さらに成瀬川・皆瀬川扇状地は、二段の崖線によって高・中・低位の三面に分けてとらえられる。遺跡付近はこの高位面にあたる。地質的には第四紀沖積世の沖積低地堆積物からなる。土壌は細粒グライ土壌であり、地下水位が30～60㎝で水田に非常に適する幡野統に分類されている。

遺跡地は、丘陵斜面を利用してリンゴ・ブドウ等の果樹園として、斜面下方の低地は水田として利用されていた。また、調査区の東側は県道金沢・吉田・柳田線と、そこから分岐して平鹿町の中山集落に至る町道とによって削平されていた。

第２節　周辺の遺跡

上猪岡遺跡のある横手盆地中央南東部分には、横手市での170遺跡、平鹿町での81遺跡をはじめとして数多くの遺跡が確認されている。第４図は、国土地理院発行１／50,000「横手」の西側２／３弱の範囲に現在確認されている遺跡を示したものである。図中の遺跡数は総数で117にのぼる（第１表）。時代別の遺跡数は、旧石器時代３・縄文時代51・弥生時代４・古墳時代２・古代59・中世以降28・不明３である。縄文時代と古代の遺跡が多く、県内では希な古墳時代の遺跡も２例調査されている。上記の遺跡には数時代が複合したものが多く、［旧石器・縄文］１・［縄文・古代］17・［古墳・古代］１・［近世・現代］２・［旧石器・縄文・弥生］１・［旧石器・縄文・古代］１・［縄文・弥生・古代］３・［縄文・古墳・古代］１・［縄文・古代・近世］１である。縄文時代と古代の複合遺跡の多くは盆地床面である沖積地に立地している。以下時代毎の状況について概観してみる。

旧石器時代の遺跡は、横手市で４遺跡（図中３遺跡）確認されている。いずれも横手川周辺の標高70～90ｍ前後の台地上に存在する。大剰院塚遺跡[註1]（103「第４図中の番号」以下同じ）・

睦成字鶴谷地遺跡は県内では早く、昭和30年代に旧石器時代の遺物が確認された遺跡として著名である。また、具体的な成果を挙げることはできなかったが、前者においては発掘調査も試みられている。

分布図中に示した縄文時代の遺跡の時期毎の遺跡数は、前期１・前期～中期１・中期１・中期～後期３・後期～晩期９・晩期５・不明31である。この地域において、早期の遺跡は確認されていない。前期の遺跡も大剰院塚遺跡(103)・台処館遺跡（97）の２遺跡と少ない。ともに旧石器時代との複合遺跡であり、台地上に立地している。横手市内では、金沢地区の保土森遺跡で大木６式期と推定される竪穴住居跡が確認されている。中期の遺跡は、小吉山遺跡（97）や杉沢地区の中杉沢遺跡[註2]・平鹿町の大保中台遺跡[註3]が知られている。小吉山遺跡では中期前半の土坑群が調査されており、また中期後半から後期初頭の土器も多く出土している。中杉沢遺跡・大保中台遺跡とも、住居跡の調査された集落遺跡であり、中期前葉～中葉に位置付けられる。これらの遺跡は前時期までの遺跡と同じく台地上に立地したものである。これに対し、中期後半には千畑町に平野部の自然堤防上に立地する集落遺跡があり、横手盆地内での遺跡立地の変化を伺わせる。この後、後期・晩期では平野部に立地する遺跡が一般的になり、遺跡数も増加する。また上猪岡遺跡（１）を含め、この時期の遺跡は第４図内では北西部分に集中する傾向が見られる。中でも、上猪岡遺跡（１）北西1.5kmにあるオホン清水Ａ遺跡（64）は、後期後半～晩期前半にかけての墓域を含めた集落遺跡である。土壙墓200基以上、竪穴住居跡10数棟、土器埋設遺構が検出されたほか、土器捨て場から多量の遺物が出土している。

弥生時代になると遺跡数は激減する。平野部に立地する本遺跡北北西2.5kmの手取清水遺跡（60）と同北西２kmのオホン清水北遺跡（62）のほか、小吉山遺跡（97）のように台地上の遺跡もある。いずれも遺物は出土しているが、明確な遺構は検出されていない。

古墳時代の遺跡は県内では非常に少ないが、この地域ではオホン清水Ｂ遺跡[註4]（63）と田久保下遺跡（39）の２遺跡確認されている。大戸川右岸の自然堤防上に立地するオホン清水Ｂ遺跡では竪穴住居跡が検出され、五世紀末～六世紀前半に位置付けられる土師器・須恵器有蓋高坏が出土している。また中山丘陵中央東端の丘陵裾にある田久保下遺跡からは六世紀代の土師器と須恵器蓋坏のほか鉄製品が副葬された８基の土壙墓が検出されている。これらの遺物や遺構の存在は、畿内と西東北北辺にあたるこの地域とを結び付けるものであり、同時に古墳時代以降のこの地域を特色づけるものとして注目される。

古代の遺跡は、基本的に平野部に立地する集落遺跡と丘陵斜面を中心とする土器生産遺跡にわけてとらえられる。集落遺跡は、中山丘陵の北西側塚堀・猪岡・清水町地区、同北東側の城野岡地区、同南西側の上藤根・年子狐地区を中心とする３地域に集中している[註5]。このうち年子狐遺跡（113・114）では奈良時代中葉の竪穴住居跡と土師器・須恵器が出土している。平安時

代には遺跡数が急増する。手取清水遺跡（60）では、旧河道の中に墨書土器を含む多量の須恵器が捨てられており、付近に官衙遺跡の存在も想定される。また、横手川と大戸川の間の広大な沖積地には条理制遺構（92）がある。考古学的な時期の特定はできないが、この一帯には上八丁の上小屋をはじめ福小屋・助太郎小屋など、いわゆる48小屋といわれる小屋のついた地名が残っており、満徳長者・地福長者・明永長者などの長者伝説とともに、卜部一族や清原一族が平安中期頃にこの泥炭地帯を開発したときの名残だといわれている。数多く確認されている集落遺跡との関係からも興味深いものがある。

この地域だけでも13遺跡確認されている土器生産遺跡群（須恵器窯跡）は、その在り方から４群に分けてとらえられる。[註５] １つは中山丘陵北西に位置する独立丘の中央西側にある竹原窯跡（２）と本遺跡である。２つ目は同東側にある城野岡窯跡（10）である。３つ目は同丘陵中央西麓の西ケ沢山Ⅰ（17）・Ⅱ（18）・Ⅲ窯跡（19）、西ケ沢前森窯跡（20）、西ケ沢窯跡（21）であり、４つ目は郷士館窯跡（31）、富ケ沢Ａ（36）・Ｂ（37）・Ｃ窯跡（38）、田久保下遺跡（39）である。４群の遺跡群の殆どは平安時代の遺跡であるが、竹原遺跡には奈良時代のものが含まれている。この点については、奈良時代の集落が検出されている上藤根・年子狐地区との関連も想定でき注目される。また平安時代の集落と生産遺跡の状況は、県内でも特筆される地域である。本遺跡も含まれる中山丘陵周辺は、近世～現代でも「中山焼き」（13・14）で知られる地域であり、これらの古代の遺跡もこの地の良質の粘土に支えられたものであろう。

最後に、平安時代末葉にかかわる遺跡として、横手市街地北側の独立丘陵にある大鳥井山遺跡（98）をあげることができる。この遺跡は奥州清原一族の光頼・頼遠父子によって築かれ、後三年の役で源義家・清原清衡の連合軍により焼失せられたとされている城柵である。ここからは、掘立柱建物跡・土塁・空堀・柵列などのほかに土師器・須恵器・陶磁器・木製品・銭貨などが出土し、中世社会への移行期の遺跡として重要である。

註

1　大剰院塚遺跡は『秋田県の考古学』において、先土器時代の遺跡として紹介されている。しかし残念ながら明確にその時代と特定される遺物は確認されていない。
　奈良修介・豊島　昴　「第二章　先土器文化」『秋田県の考古学』　1967（昭和42年）

2　横手市教育委員会　『第７次中杉沢遺跡発掘調査概報』　1974（昭和54年）

3　平鹿町史編纂委員会　『平鹿町史』　1979（昭和59年）

4　横手市教育委員会　『オホン清水～第３次遺跡発掘調査報告書』　横手市文化財調査報告10　1984（昭和59年）

5　秋田県教育委員会　「第２章　遺跡の立地と環境」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ―竹原窯跡―』秋田県文化財調査報告書第209集　1991（平成３年）

参考文献

横手市教育委員会　『秋田県横手市　遺跡詳細分布調査報告書』　横手市文化財調査報告11　1986（昭和61年）

第３章　調 査 の 概 要

第１節　遺跡の概観

県道金沢・吉田・柳田線は、国道13号線に平行し仙南村の金沢と横手市南部の柳田とを結ぶ。朝夕の通勤時間には国道13号線の混雑を避けるために、この道を利用する人も多い。仙南村後三年から南下し横手川を越え、水田地帯を過ぎると、左手前方には中山丘陵が見えて来る。道路はこの丘陵の西裾を巡る。上猪岡の集落を過ぎると、丘陵の斜面は果樹園として利用されており、また右手には再び水田が続く。道路は間もなく横手市と平鹿町との境界にさしかかる。この境界付近から右側には平鹿町中山集落に至る町道が分岐する。遺跡はこの分岐点と町道の西側にある。遺跡の所在は横手市猪岡字猪岡であるが、範囲の一部は平鹿町になっている。遺跡の北東側には先の県道を挟んで縄文時代の遺跡とされる岩野沢Ａ遺跡が、また南東側には奈良・平安時代の生産遺跡である竹原窯跡がある。

第２章第１節に述べたとおり、遺跡は中山丘陵北部の西側斜面端部に立地する。地形的にはわずかな平場とそれに続く緩やかな斜面及び下方の沖積地から構成される。標高は、平坦部分で54.3ｍ、斜面下方で51.1ｍを測る。調査前は周辺と同じく果樹園と水田として利用されていた所である。また、遺跡の東側は先の町道によって削平されていた。

調査区の基本層位はⅠ～Ⅴ層に分層される。

Ⅰ　黒褐色土(10YR2／3)　表土　層厚10～30cm

Ⅱ　黒褐色土(10YR3／3)　粘質で、Ⅲ層よりもよくしまっている。層厚約30cm

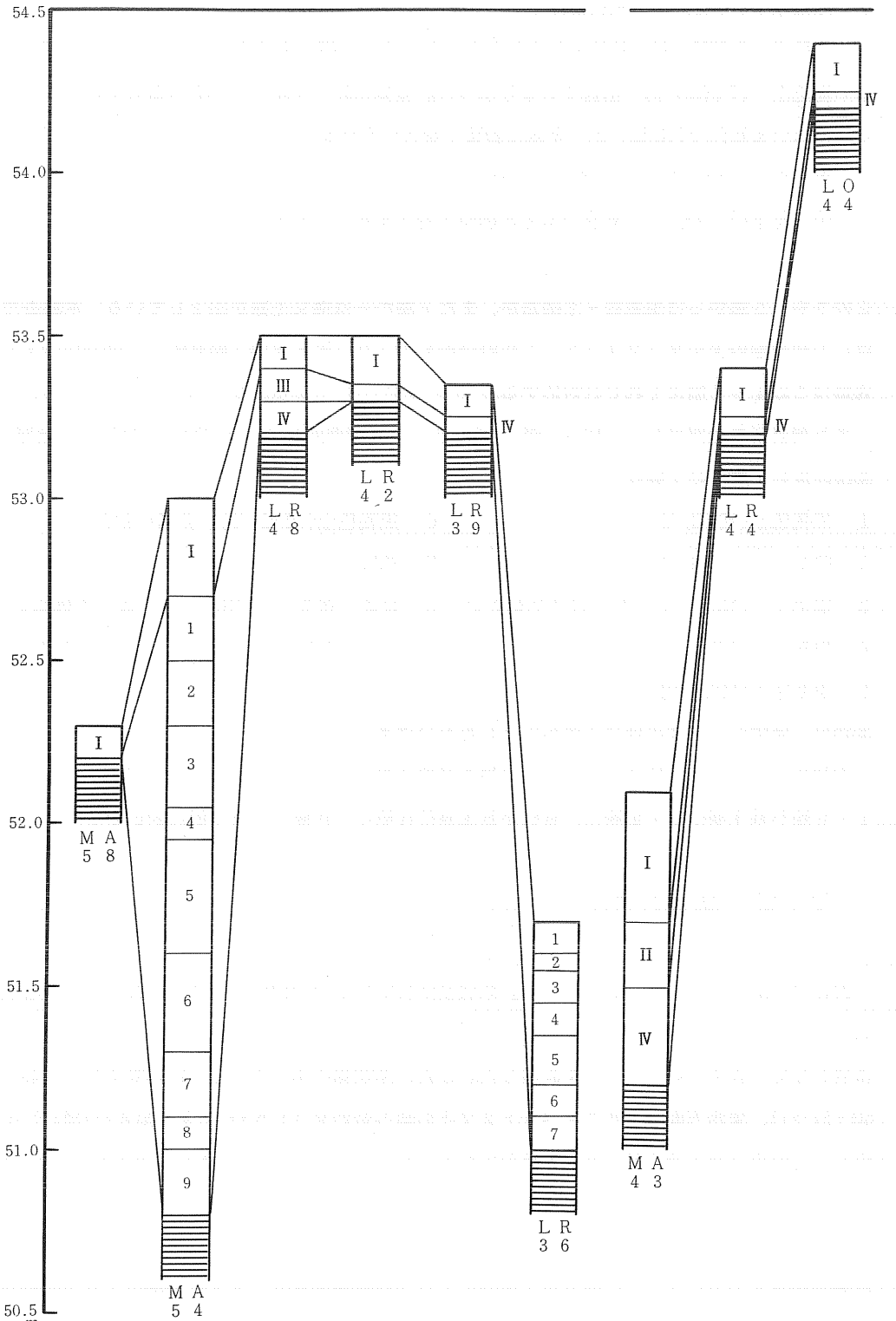
Ⅲ　暗褐色土(10YR3／3)　粘性・しまりとも普通である。層厚約10cm

Ⅳ　褐色土　(10YR4／6)　粘性やや強く、堅くしまっている。層厚約５～20cm

Ⅴ　黄褐色土(10YR5／6)　地山　調査区内では部分的に砂利層の所もある。

Ⅲ層は遺物包含層であるがＬＰ46グリッド周辺に僅かに広がる程度で、殆どはⅠ層表土とⅣ層漸移土そして遺構確認面である地山（Ⅴ層）である。なお、Ⅱ層は調査区の西側、沖積地へ移行する部分に検出される堆積層である。遺構はＳＱ30をⅡ層中、ＳＲ03をⅢ層中で検出したほかは、すべて地山上面の精査によって検出した。遺構外出土の遺物はほとんどがⅠ～Ⅲ層から出土したものである。またその分布は、全体的にＬＱライン以東の42～47グリッド、遺構集中部分の北西側に多いが、縄文土器・須恵器・土師器はそれぞれの分布に偏りがあり、特に須恵器は調査区南部、土師器は調査区中央部西側から多く出土した。

尚、調査区南部の沖積地（ＬＲ36付近）の土層は


54.5
54.0
53.5
53.0
52.5
52.0
51.5
51.0
50.5
m
I
M A
5 8
I
1
2
3
4
5
6
7
8
9
M A
5 4
I
III
IV
L R
4 8
I
L R
4 2
I
IV
L R
3 9
1
2
3
4
5
6
7
L R
3 6
I
IV
L O
4 4
I
IV
L R
4 4
I
II
IV
M A
4 3

第５図　基本土層模式図

1　黒褐色土(10YR2／3)　水田耕作土

2　黒色土　(10YR2／1)　粘性・しまりともにふつう。Ｖ層に由来する砂利を多く混入する。

3　褐色土　(7.5YR2／3)　粘質でしまりふつう。全体に粒子が粗く、小石が混入する

4　にぶい黄褐色土(10YR5／3)　全体に砂質で拳大の石が混入する。

5　黒色土　(10YR1.7／1)　粘質でしまりはふつう。

6　灰褐色土(7.5YR4／2)　粘質であるが砂粒の混入も多い。しまりはふつう。

7　にぶい黄褐色土(10YR5／4)　全体に砂利を多く混入する。

このうち、５層からは須恵器・土師器が、また７層からは縄文土器が出土している。本調査ではこの沖積地の土をサンプリングして花粉分析を行った（第５章第２節参照）。第98図のⅠ～Ⅶ層はこの１～７層にそれぞれ対応する。

また調査区の北部に幅４～12m、深さ1.5～２ｍの沢が埋没していた（ＭＡ54付近）。層厚30cm前後のⅠ層下の土層は

1　黒褐色土(10YR2／2)

2　暗褐色土(10YR3／4)

3　黒色土　(10YR2／1)　粒子はきめ細かい

4　黒褐色土(10YR2／3)

5　黒褐色土(10YR2／2)

6　黒褐色土(10YR2／2)　非常に粘質

7　褐灰色土(10YR4／1)　粘質

8　にぶい黄褐色土(10YR5／4)　拳大の礫多い

9　にぶい黄褐色土(10YR4／3)　小石多量混入

遺物は６層中から２片の縄文土器が出土しただけである。

本調査では、鉱物分析を行っている（第５章第３節）。試料採取地点（第100図）の層位はⅠ・Ⅱ層が基本層位Ⅰ・Ⅲ層に、Ⅲ層が基本層位Ⅳ層に、Ⅳ層以下はⅤ層に対応する。

第２節　調査の方法

調査の方法はグリッド法を採用した。東北横断自動車道秋田線路線内には、20ｍ毎に中心杭が打設されている。調査では、このうちのＳＴＡ64＋00を原点とし、国家座標第Ｘ系の座標にに合わせて一辺４ｍのグリッドを設定した。また、座標軸の南北方向に２桁の算用数字（49・50・51･･･)、東西方向にアルファベット２文字の組み合わせ（ＬＮ･･･ＬＴ・ＭＡ･･･ＭＥ）を付し、この組み合わせを各グリッド杭の名称とした（例　ＭＡ50)。各グリッドの呼称は、グリッドの南東隅の杭の名称を用いている。

範囲確認調査の結果、調査区内の遺物包含層は薄く、遺構確認面までも浅いため、掘り下げは表土から人力で行った。遺構外出土遺物の取り上げは出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土遺物については１点ごとに番号を付して取

り上げるようにしたが、覆土一括としたものもある。これら遺物の出土状況は必要に応じて適宜図面作製や写真撮影を行った。遺構の確認は掘り込み面で行うように努めたが、果樹園造成時及び畑の耕作による撹乱が著しく、大半は地山面で検出した。

遺構の精査は、対象となる遺構によって２分法・４分法を用いた。記録は主に図面と写真によった。図面は断面図と平面図を作成したが、遺構によってはエレベーション図を作成したものもある。また、作業手順の不手際により土層図の作成できなかったものもある。平面図はグリッド杭を利用した遣り方測量で作図した。各図の縮尺は基本的に１／20で作図したが、場合によっては１／10で行ったものもある。遺構図面は、遺物出土状況・重複関係などから数回にわたる図面作製を行っている。また、ＳＪ40須恵器窯跡の1／20平面図と１／200遺構配置図の作成は、空中写真測量による図化を委託した。

写真は、基本的には35㎜、必要に応じて６×4.5㎜のモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

この他、遺跡の古環境や年代把握のために、試料のサンプリングを行い、分析を委託した。

室内における整理は、遺構については実測図より第２原図を作成し、これをトレースしている。また遺物については、洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行っている。

第３節　調査経過

調査は昭和63年４月に現地調査を行った後、９月５日から12月６日までの延べ63.5日を費やして行われた。以下に日誌から抜粋して調査経過を略述する。

９月５日　作業員に対し作業説明を行い作業開始。調査区内の下草刈りを行った後、調査前の全景写真を撮影。範囲確認調査時のトレンチの埋土除去と土層観察を行う。

７日　調査区南東部ＬＮ・ＬＯグリッドから掘り下げを開始。縄文時代晩期の土器片・石鏃・磨製石斧等が出土する。

９日　道路本体工事の担当者と排土地について打ち合わせる。

19日　地山面の精査によってＬＯ45グリッド内にＳＫ01、ＬＯ44グリッド内にＳＫ02を検出。またＬＱ46グリッドⅢ層中に埋設された土器を検出しＳＲ03とする。

20日　遺構の精査を開始。調査区南側低地部分の掘り下げも開始する。この部分の遺物出土量はさほど多くないが、須恵器破片がややまとまっている。

22日　ＳＫ06～10を検出。調査区中央部のⅠ・Ⅲ層除土作業では土師器の出土が目立つ。

29日　精査中のＳＫ09・15・16は、確認面からの深さ70㎝前後に達する。坑口よりも下半が膨らむ袋状の土坑であることが判明する。

10月１日　ＭＡ50グリッド杭の南東側についてはほぼⅠ・Ⅲ層の除去を終了する。調査区内を縦断する溝（ＳＸ11）を確認。またＬＯ・ＬＰ38～44グリッドにかけては多くの土坑があり、ＬＮ37グリッドでは範囲確認調査時に確認されていた須恵器窯跡のプランを検出する。

３日　Ⅰ～Ⅲ層の除去は南西部分へ移行。農繁期に入り作業員が減少している。

４日　配石を伴う古代の土坑を検出しＳＫ27とする。

７日　検出遺構数は54基となった。

８日　日本道路公団仙台建設局横手工事事務所所長と地権者会の人々が来跡し見学。

15日　ＳＫ14内より一括廃棄された剥片が多数出土する。

26日　調査体制の見直しを行い、調査員を増員、期間は12月上旬までとなる。

27日　南側の掘り下げを終了し、作業は北半へ移行。

28日　北側に小さな沢が入り込んでいることが判明する。

11月８日　検出遺構数76。内11は撹乱などであるため欠番である。

９日　道路公団より３名来跡し、調査状況を視察。ＳＫ77・78検出。

10日　初観雪。

14日　Ⅰ～Ⅲ層の除土作業完了。ＳＫ80～82を検出。

28日　最終遺構確認精査によってＳＫ95まで検出。

30日　地形及び遺構配置図を写真測量によって行うため、調査区をセスナ機により航空写真撮影。

12月１日　調査区南部の沖積地において花粉及び鉱物分析用のサンプルを採取。

４日　ＳＪ40の写真測量のため、リフトセンサーにより写真撮影。

５日　調査区の近景写真撮影。

６日　機材の撤収作業等を行い発掘調査を終了する。

第６図　工事計画と調査範囲

第4章　調 査 の 記 録

調査では、竪穴住居跡１軒、竪穴状遺構５基、焼土遺構３基、須恵器窯跡１基、土坑66基、土器埋設遺構２基、集石遺構１基、環状溝状遺構１基、溝状遺構５基の計85遺構を検出した。また、出土遺物には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、土製品、石器、石製品、鉄製品があり、その総量はコンテナで100箱である。

検出した遺構および出土した遺物には、縄文時代及び弥生時代のものと平安時代以降のものがあり、以下では第１節縄文時代及び弥生時代、第２節平安時代以降に分けて記述する。

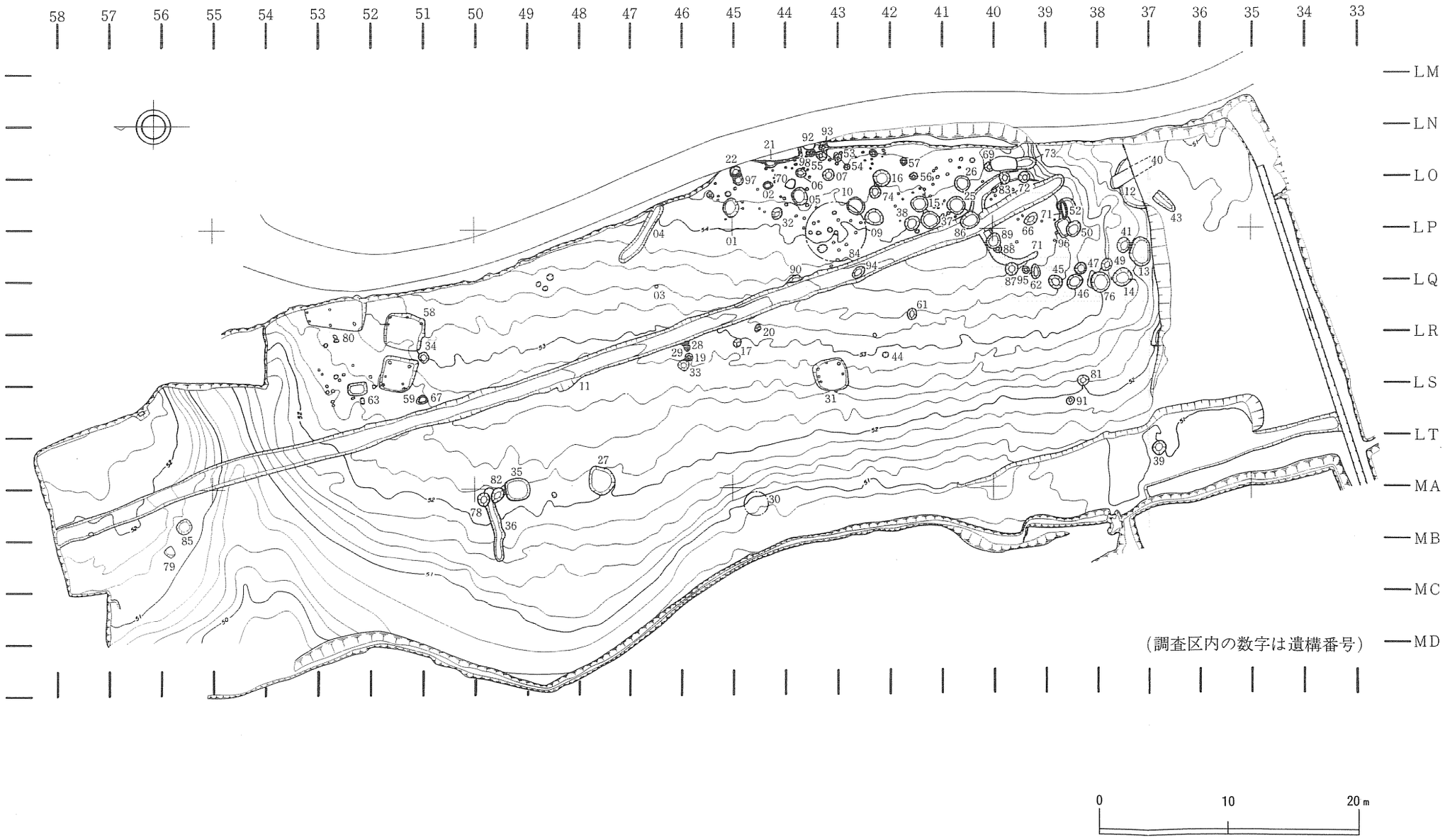
なお、遺構の時期は出土遺物と遺構の形態・規模などの特徴によって特定したが、出土遺物や明瞭な特徴のないものについては、遺構の分布なども考慮して各節に含めている。遺構は種類ごとに扱ったが、複数遺構の場合は遺構番号順に記述した。また遺構内外から出土した縄文土器と弥生土器については、縄文時代早・前期の土器をⅠ群、中期の土器をⅡ群、後期の土器をⅢ群、晩期前半の土器をⅣ群、晩期後半の土器をⅤ群、弥生時代の土器をⅥ群、縄文だけの土器・無文土器・底部及び時期を特定しがたい土器をⅦ群として記述した。

第１節　縄文時代及び弥生時代

検出した遺構は、竪穴住居跡１軒・焼土遺構２基・竪穴状遺構１基・土坑55基・土器埋設遺構２基・溝状遺構２条の計63遺構である。このうち２基の焼土遺構は、周辺に多くのピットを検出していることから住居にともなったものである可能性が高い。また、55基検出した土坑はそれぞれの特徴によって分類可能である。これらの遺構はⅢ層中で検出したＳＲ03土器埋設遺構を除き、すべて地山（Ⅴ層）上面の精査によってプランを確認した。出土した遺物からＳＫ95土坑は縄文時代中期後葉、ＳＩ84竪穴住居跡・ＳＲ03土器埋設遺構は弥生時代の遺構と考えられるが、ほかの遺構のほとんどは縄文時代晩期のものである。

遺構内外から出土した土器には、縄文時代早期から弥生時代までのものがある。その中で主体となるのはⅣ群とした晩期前半の土器である。石器には石鏃・石錐・石匙・石箆・不定形剥片石器・打製石斧・磨製石斧・凹石・磨石・石皿などがある。このほか、ミニチュア土器・円盤状土製品・土偶の破片や石剣・ボタン状石製品なども出土している。

土坑を中心とする遺構の多くは、調査区南東部分の平場に集中し、２条の溝状遺構はこの北側と北西側に分布する。また住居跡及び焼土遺構は、遺構集中部分の中でも北よりの分布を示す。遺物の出土量の多寡は、遺構の分布に対応し、遺構集中部分とその周囲に多かった。


58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33
LM
LN
LO
LP
LQ
LR
LS
LT
MA
MB
MC
MD
（調査区内の数字は遺構番号）
0
10
20m

第７図　遺構配置図

１　検出遺構と遺構内出土遺物

（１）竪穴住居跡

ＳＩ84　（第８図）

遺構集中部分の北西、ＬＯ42・43・ＬＰ42・43グリッドに位置する。地山上面の精査によって、焼土および埋設土器を検出。また周囲に方形に配置されたピット群を検出し、住居跡と判断した。

壁は遺存しないが、この部分のＩ層掘り下げ中に不明瞭ながら暗褐色土の広がりを確認しており、住居自体は竪穴構造と考えられる。焼土の確認状況からみて、地山上面を床としており地山は掘り込んでいない。床はほぼ平坦であるが、全体にしまりがなく柔らかい。ピットは８個（Ｐ1～Ｐ8）検出した。ピットの平面形は径25～34㎝の円形を呈し、地山上面からの深さ35～50㎝を測る。炉を囲んで方形の配置をとるＰ1～Ｐ4が主柱穴と見られる。各柱穴間の距離はＰ1・Ｐ2間1.8ｍ、Ｐ2・Ｐ3間2.2ｍ、Ｐ3・Ｐ4間2.0ｍ、Ｐ4・Ｐ1間2.0ｍである。炉は地床炉で、柱穴間のほぼ中央にある。焼土が20×15㎝の略方形に広がり、地山も10㎝程の深さまで赤変しているが、掘り込みは伴わない。炉の北東側に土器（第８図１）が埋設されていた。掘り方の平面形は径20㎝程の円形で、深さは12㎝である。埋土中には焼土粒子と炭化物が多く、炉との関係も考えられる。住居全体の平面形については不明であるが、主柱穴に囲まれた部分の面積は4.2㎡である。

１は口頸部を欠く壷形土器である。最大幅が体部中央より若干上にあるが、全体として球形を呈する。肩部に平行沈線を緩やかな波状にめぐらせ、沈線内の縄文を磨消している。地文はＲＬ縄文であるが、体部中央付近では条が横走する。内面にはハケ状工具による、横方向の調整痕が著しい。本調査の出土遺物の内、明瞭にⅥ群に位置付けられる土器はこれ１点である。遺構検出時に、炉の周辺からⅦ群の細片が３点、剥片１点が出土している。

本遺構は、方形の主柱穴の配置と埋設土器から弥生時代の住居跡と考えられる。

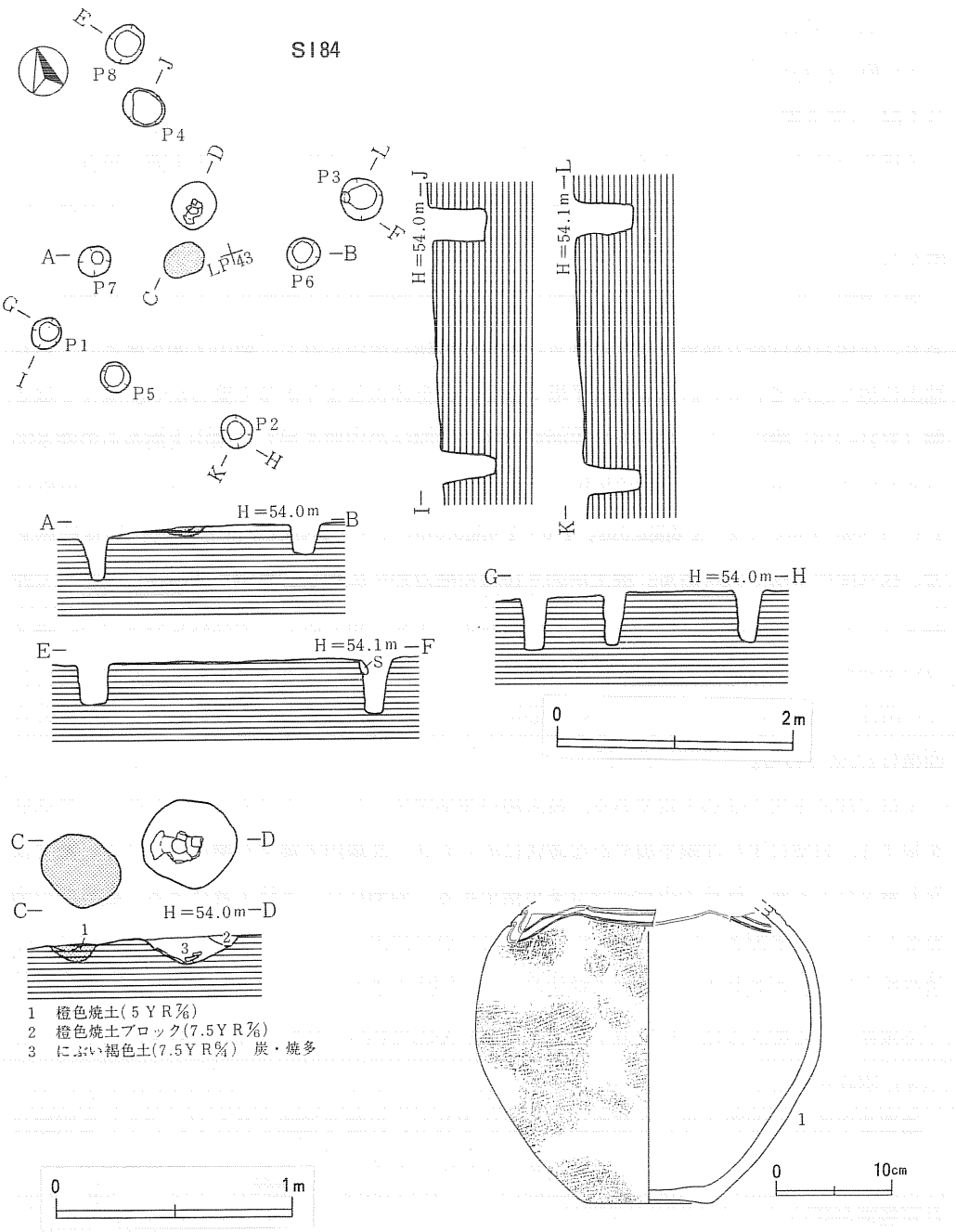
（２）焼土遺構

遺構集中部分の北寄りで、２基検出した。いずれも、Ⅳ層で確認されたが、プランを明瞭にしたのは地山上面である。周辺に柱穴用ピットが多く検出されており、本来は住居の炉であった可能性が高い。

ＳＮ70（第９・10図）

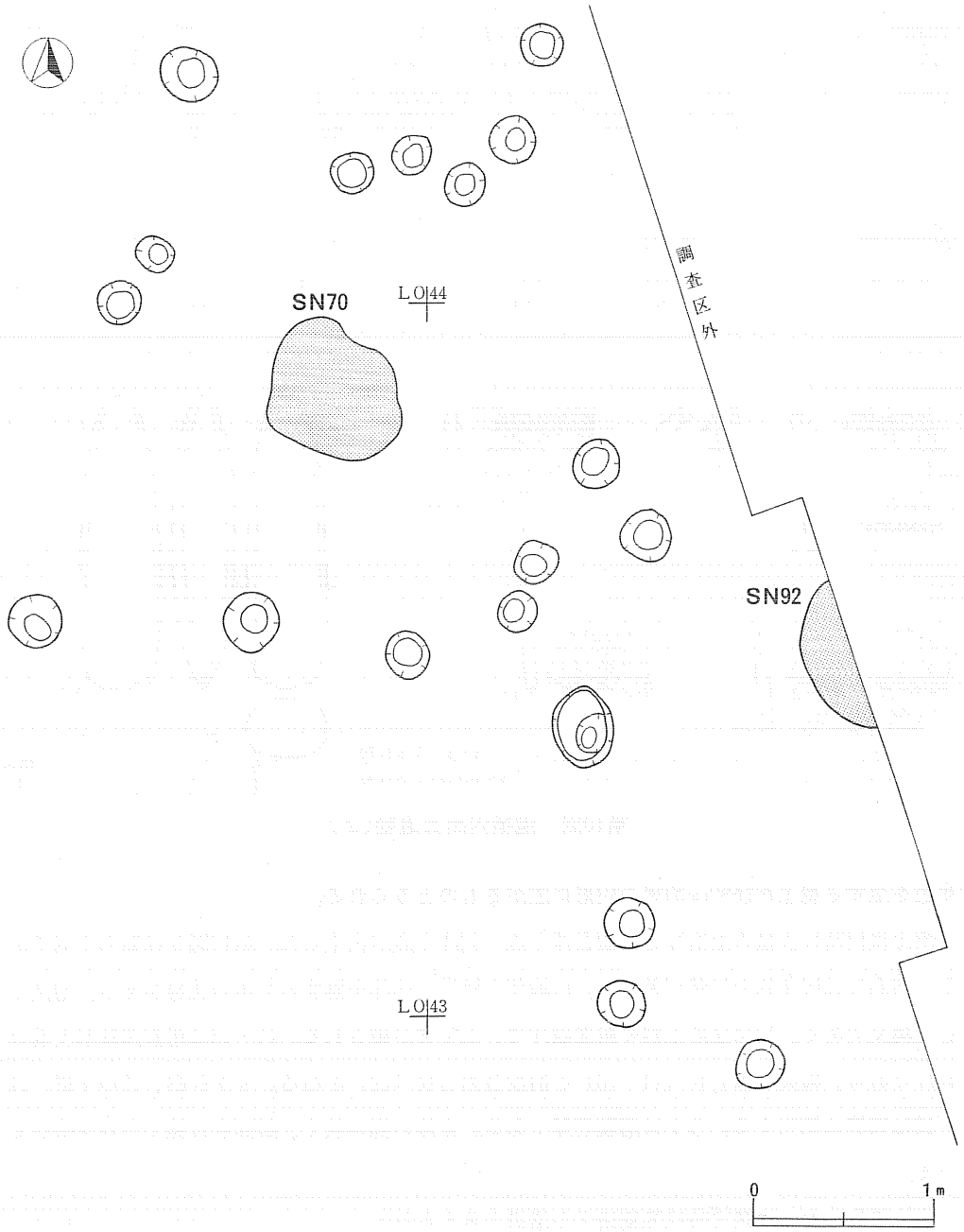
ＬＯ43グリッド北東隅に位置する。焼土は橙色を呈し、70×80㎝の不整な方形に広がる。中央部がやや盛り上がっており、その部分は厚さ20㎝に及ぶ。掘り込みは伴わない。

焼土中および焼土検出時に21点の土器片と土師器坏の底部１点、剥片３点が出土した。第10図２・８が焼土中の遺物である。２は鉢形土器の体部破片である。幅の広い沈線で変形工字文



第８図　SI84･遺構内出土遺物(１)

を描いている。器面は内外とも丁寧に調整されている。８は小型の鉢形土器である。円筒状に成形した底部から口縁部まで直線的に外傾する形を呈する。器面は内外とも丁寧に調整されている。３～７は粗製土器の破片である。４は深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部が平坦に整形されている。縄文は３～６がＬＲ、７は前段合撚ＬＲである。このうち６は条が横走する。



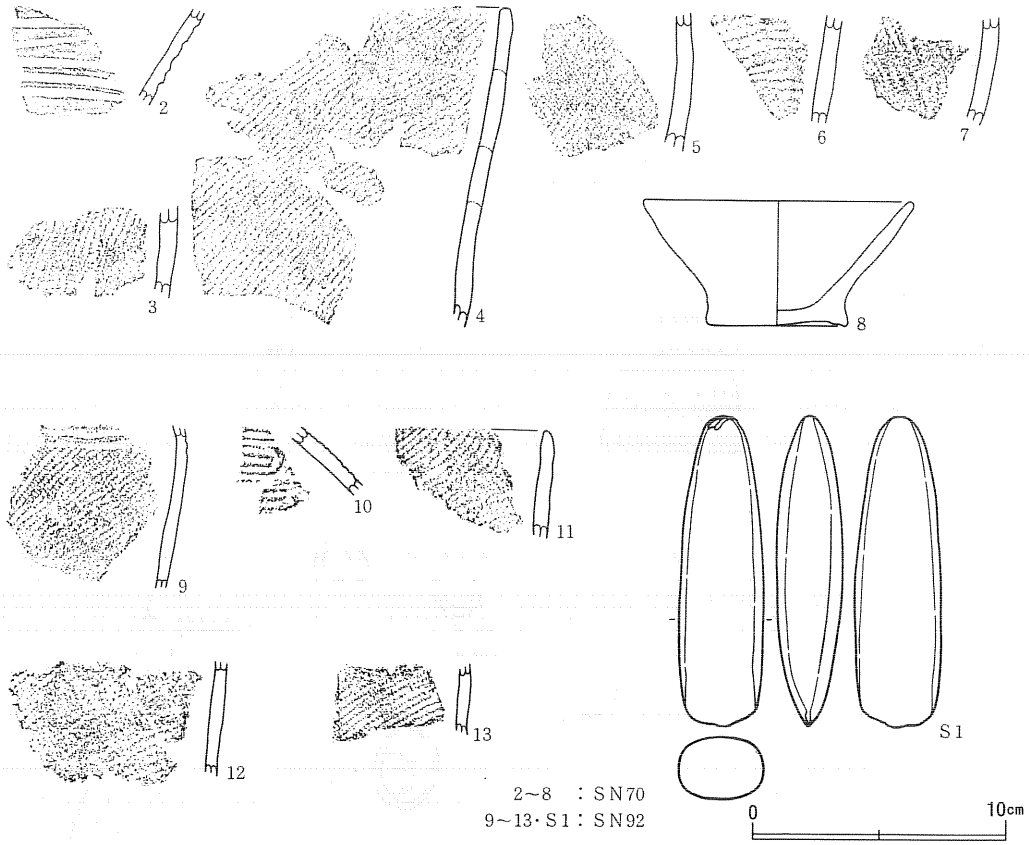
第９図　SN70･92

２はⅤ群、３～８はⅦ群である。

焼土中の出土遺物から縄文時代晩期後半の遺構である。

SN92（第９・10図）

調査区東端のＬＮ43グリッドで検出した。プランの半分ほどは調査区外に延びている。明赤



第10図　遺構内出土遺物（２）

褐色を呈する焼土が径80㎝前後の円形に広がるものとみられる。

焼土検出時に少量の土器片と磨製石斧１点・剥片６点が出土した。第10図９は鉢形土器である。内面には炭化物の付着が著しい。口縁部文様帯と体部を画する２本の沈線がある。地文はＬＲ縄文である。10は壷形土器の肩部破片で、工字文が施される。11～13は粗製深鉢形土器の破片である。縄文にはＬＲ（11・13）と前段合撚ＬＲ（12）がある。９がⅣ群、10がⅤ群、11～13はⅦ群に相当する。Ｓ１は磨製石斧である。全体の幅が狭く、断面形は強く円みを帯びている。

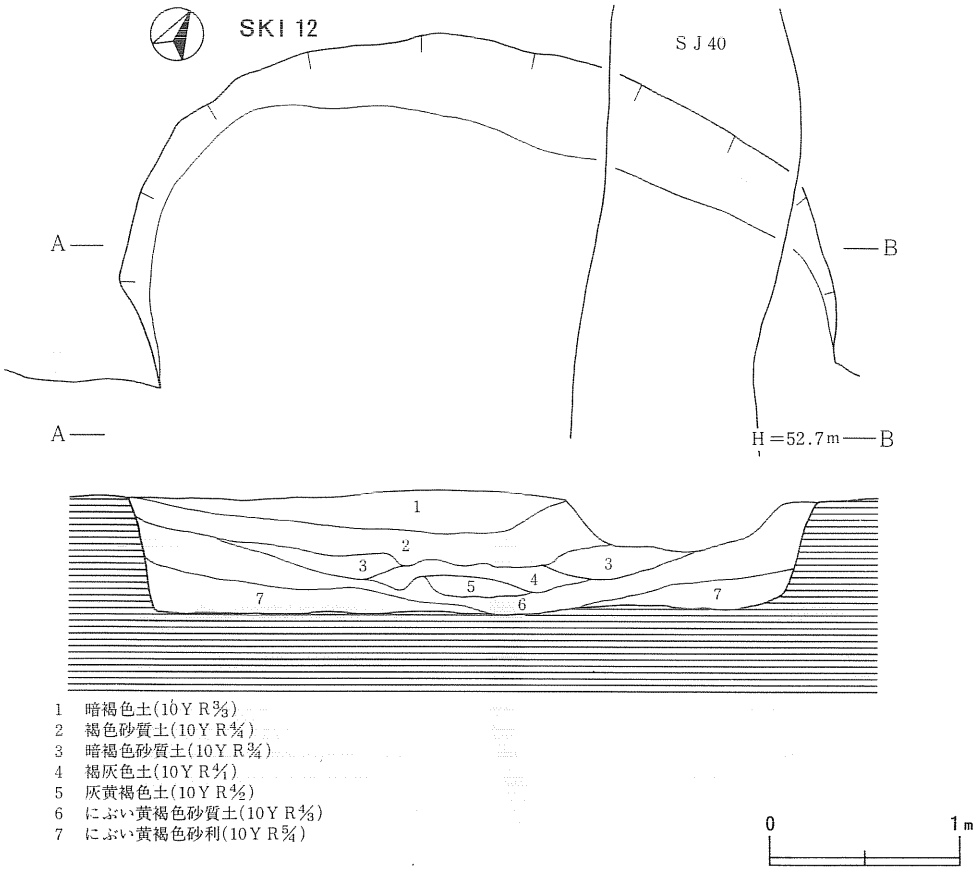
出土遺物をもとに縄文時代晩期後半の遺構と考えられる。

（３）竪穴状遺構

ＳＫＩ12（第11・12図）

調査区南部の斜面下方にあたるＬＮ・ＬＯ37グリッドで検出した。検出面は地山上面である。南半は削平されている。また東側の覆土を掘り込んでＳＪ40が構築されている。

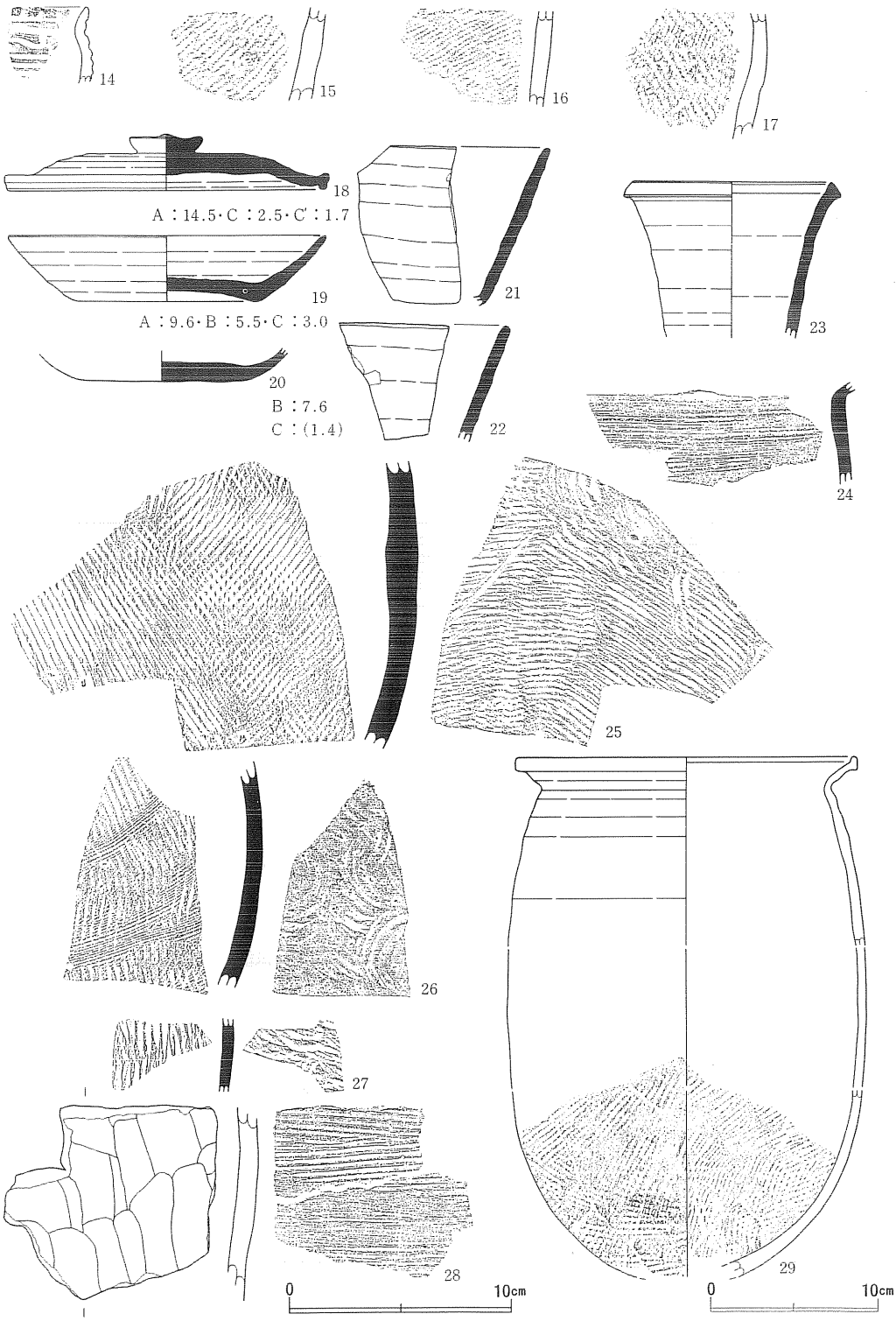
遺存した部分は3.8×1.7ｍの略方形を呈し、4.1㎡である。壁は急傾斜で立ち上がる。壁高



第11図　SKI 12

は５～60cmほどであるが、地形に制約され南側ほど低い。床面は平坦で非常に堅くしまっているが、炉跡・柱穴等は全く検出されていない。覆土は７層に分けられた。全体に自然堆積を呈する。

出土遺物の内第12図18～29は覆土１層上部から、また14～17は床面から出土した。14は口頸部に屈曲のある鉢形土器の口縁部破片である。15・17の縄文はＲＬ、16はＬＲである。14がⅣ群、15～17はⅦ群である。18は須恵器の蓋形土器（以下では蓋）である。上半部分の整形はケズリによる。19～22は須恵器坏形土器（以下では坏）とその破片である。19・20の切り離しはヘラ切りである。21・22の焼成は良好であるが、全体が白色を呈する。またこの２点は本調査で出土した須恵器坏の中では飛び抜けて器高が高い。23は須恵器壷形土器（以下では壷）の口頸部、24～27は須恵器甕形土器（以下では甕）の体部破片である。24は上部の屈曲度から29のように長胴の器形を呈するものであろう。28は土師器甕の体部破片である。器表面にはロクロ成形後のケズリが認められる。29も土師器甕である。長胴・丸底の器形を呈する。体部上半にはロクロ目が観察されるが、下半は底まで叩目が見られる。このほかⅦ群の土器片少量と、剝



第12図　遺構内出土遺物（３）

片が２点出土している。

遺構内からは須恵器・土師器がまとまって出土したものの、本遺構は床面出土の遺物から縄文時代晩期前半のものと考えられる。

（４）土坑

調査区南東部を中心に55基検出した。縄文時代中期後半のものが１基（ＳＫ95）あるが、晩期のものが圧倒的に多い。掘り方の形態以外に特徴を有するものはその特徴を優先し、またそのほかについては掘り方の平面形・断面形・規模に着目して以下の５類に分類できる。

Ａ：土坑上面ないしは坑中に礫を伴うもの（７基）

Ｂ：土坑中に完形土器または土器片を埋め込むもの（３基）

Ｃ：土坑の断面形がフラスコ状または袋状を呈するもの（20基）

Ｄ：平面形は楕円形、断面形は円筒形を呈し、確認面からの深さが1.5ｍ前後のもの（３基）

Ｅ：平面形は円形ないし楕円形を呈し、深さが10～30㎝前後のもの、また柱穴用ピットと見られる小型のものも一括した。（22基）

土坑の位置・分類・規模・長軸方位などは観察表（第２表）にまとめ、以下では覆土、遺物の出土状況および出土遺物を中心に記述する。記述は上の分類によって進めたが、各分類内では遺構番号順に行った。

Ａ類　礫を伴う土坑を一括したが、礫は遺構確認面上にあるもの、坑内部にあるものがある。

ＳＫ02（第13・14図）

土坑中央やや北側に寄せて人頭大の礫を６個組み合わせている。礫は土坑中位からあり一部は確認面上に現れる。覆土２層には炭化物が多く混入する。

遺物は少量出土した。第14図30・31は粗製の深鉢形土器の破片である。縄文はＬＲ。31の下方には綾絡文が見られる。この２点を含めて出土した土器片はいずれもⅦ群である。ほかに剥片が１点出土した。

遺構の時期は特定できない。

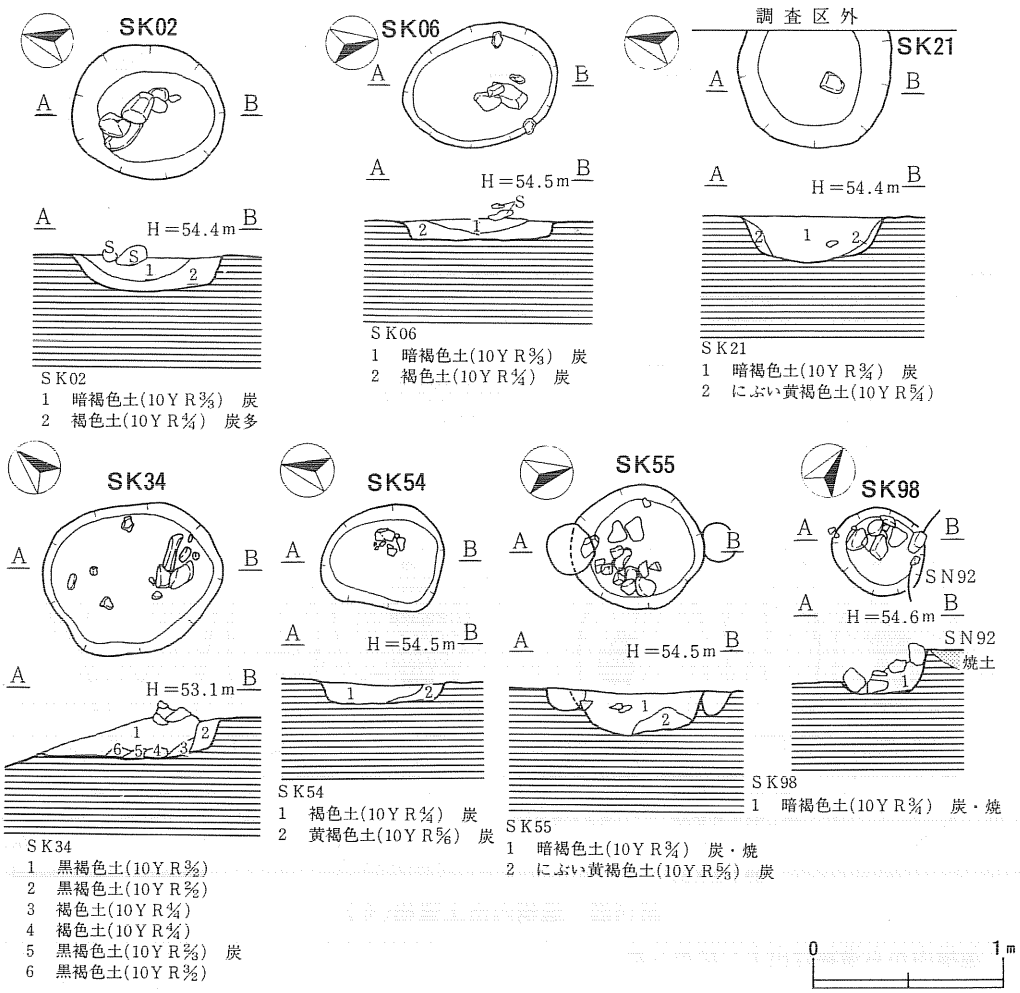
ＳＫ06（第13・14図）

遺構確認面で拳大の礫４個を検出した。ＳＫ02同様に礫の位置はやや北側に寄せられている。土坑の平面形や規模の点でもＳＫ02に類似する。覆土中には炭化物が混入する。

第14図32は鉢形土器の口縁部破片である。口唇部下に三叉文が施される。33～35も鉢形土器の破片であるが、33・34は口縁部、35は体部上半の破片である。いずれも口縁部文様帯には羊歯状文が認められる。粗製深鉢形土器の破片である36を含めて縄文はＬＲである。32～35がⅣ群、36がⅦ群である。このほか10点の剥片と少量の土器片が出土した。

第2表　縄文時代の土坑一覧

遺構番号	検出区	法量（単位cm）	長軸方位	分類	備考	遺構番号	検出区	法量（単位cm）	長軸方位	分類	備考
1	LO44・45	134×107×22	N－85°－W	E		55	LN43	70×66×22	N－19°－E	A	
2	LO44	80×71×39	N－14°－W	A		56	LN・LO41	60×50×36	N－54°－W	E	
5	LO43	113×107×28	N－81°－E	E		57	LN41	62×38×34	N－86°－W	E	
6	LN43	83×64×10	N－14°－W	A		61	LQ41	122×67×136	N－68°－W	D	
7	LN・LO43	81×75×48	N－31°－W	C		62	LP39	114×88×12	N－84°－E	E	
9	LO42	136×108×61	N－8°－E	C		66	LO39	90×88×14	N－64°－W	E	
10	LO42	140×134×33	N－41°－E	E		67	LS50・51	84×60×18	N－14°－W	E	
14	LP・LQ37	146×134×91	N－53°－W	C		69	LN40	62×58×16	N－19°－W	E	
15	LO41	110×100×67	N－38°－E	C		72	LN・LO39	90×87×19	N－17°－W	C	＜SD71
16	LN・LO42	130×124×89	N－75°－W	C		74	LO42	65×64×23	N－74°－E	E	
21	LN44	85×76×24	N－47°－W	A		76	LP・LQ37・38	146×141×43	N－76°－E	C	
22	LN・LO44	142×132×28	N－87°－W	B	＞SK97	78	MA49	102×82×32	N－71°－E	E	＞SD36
25	LO40	121×116×55	N－67°－W	C		79	MB55	96×90×13	N－9°－W	E	
26	LN・LO40	130×115×72	N－42°－E	C		81	LR・LS38	82×80×95	N－79°－W	C	
32	LO44	88×70×165	N－24°－W	D		82	MA49	115×85×24	N－33°－W	E	＞SD36
34	LR50・51	95×78×22	N－42°－W	A		83	LN・LO39	93×85×29	N－57°－W	C	＜SD71
37	LO41	126×105×74	N－67°－E	C		86	LO42	128×124×75	N－68°－W	C	＜SD11
38	LO41	114×97×20	N－29°－W	E		87	LP39	98×92×62	N－21°－E	C	
39	LT39	104×89×53	N－50°－W	E		88	LP39	77×70×28	N－78°－E	B	＜SD71
41	LP37	108×98×15	N－41°－W	E		89	LP39・40	114×108×84	N－27°－E	C	＜SK88・SD71
45	LP・LQ38	106×94×71	N－52°－E	C		91	LS38	62×58×88	N－29°－E	C	
46	LP・LQ38	132×105×30	N－26°－W	E	＞SK47	93	LN43	58×45×35	N－85°－W	C	
47	LP38	114×97×20	N－5°－E	E	＜SK46	94	LP42	94×62×130	N－61°－W	D	
49	LP37	110×41×23	N－81°－E	E		95	LP39	61×60×11	N－64°－W	B	
50	LO・LP38	102×110×54	N－62°－W	C	＜SK96	96	LO・LP38	148×143×36	N－70°－W	E	＞SK50
52	LO38	131×122×48	N－73°－W	C	＜SD71	97	LN・LO44	133×107×74	N－33°－W	E	＜SK22
53	LN42・43	65×63×8	N－68°－W	E		98	LN43	50×45×22	N－71°－E	A	＜SN92
54	LN42	64×62×14	N－60°－W	A							



第13図　SK02・06・21・34・54・55・98

出土遺物から縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

SK21（第13・14図）

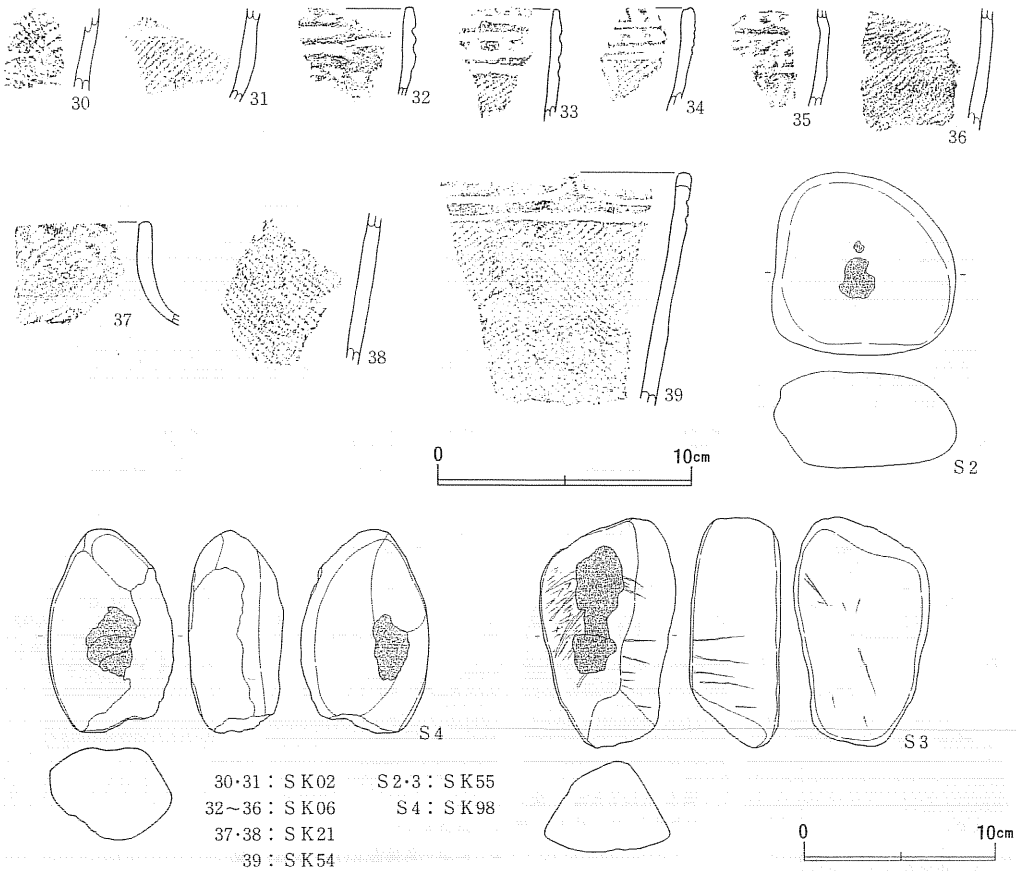
土坑中位に、手の平大の偏平な礫が１個検出されたものである。礫が置かれたような状態であったため、一応この類に含めた。

第14図37は断面形から壷形土器の破片と考えられる。縄文はＬＲ。38は鉢形土器の体部破片で、縄文はＲＬである。ともにⅦ群の破片である。このほかの出土遺物は土器細片４点と剥片１点だけである。

遺構の時期は特定できない。

SK34（第13図）

遺構確認面上に人頭大の礫３個を組み合わせたものである。礫の位置は、全体として楕円形を呈するプランの南東側に寄せられている。覆土下部の３～６層はブロック状を呈する。



第14図　遺構内出土遺物（４）

遺構内から遺物は出土しなかった。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ54（第13・14図）

土坑中程に拳大の礫と小石が集中する部分がある。これらの礫は平面プランの上では中央やや東側に寄る。覆土中には炭化物が少量混入している。

第14図39は鉢形土器の口縁部破片である。口縁上に小さな山形の突起が付く。口縁部には２本の平行沈線が巡るが、上の１本は突起内に収束する。地文は羽状縄文である。Ⅳ群に相当する。このほかⅦ群の細片が６点出土した。

覆土中の遺物から縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ55（第13・14図）

土坑中南側半分に、径５～15㎝程の礫を14個充填するような形で入れ込んだものである。礫のレベルは底面よりも若干浮いている。覆土１層には炭化物、焼土粒が混入する。また２層は地山ブロックである。

14個の礫の内２個は凹石である（第14図Ｓ２・Ｓ３）。Ｓ３は砥石として使用された後、凹石として使用されたもので、断面Ｖ字状の擦痕を凹部が切っている。ほかの遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ98（第13・14図）

土坑中位北半に礫を６個入れたものである。礫の一部は確認面上にも出ている。土坑のプランが小さいためか、石を充填したようにも感じられる。

６個の礫の内１個が凹石（第14図Ｓ４）である。遺構内から、ほかに遺物は出土していない。

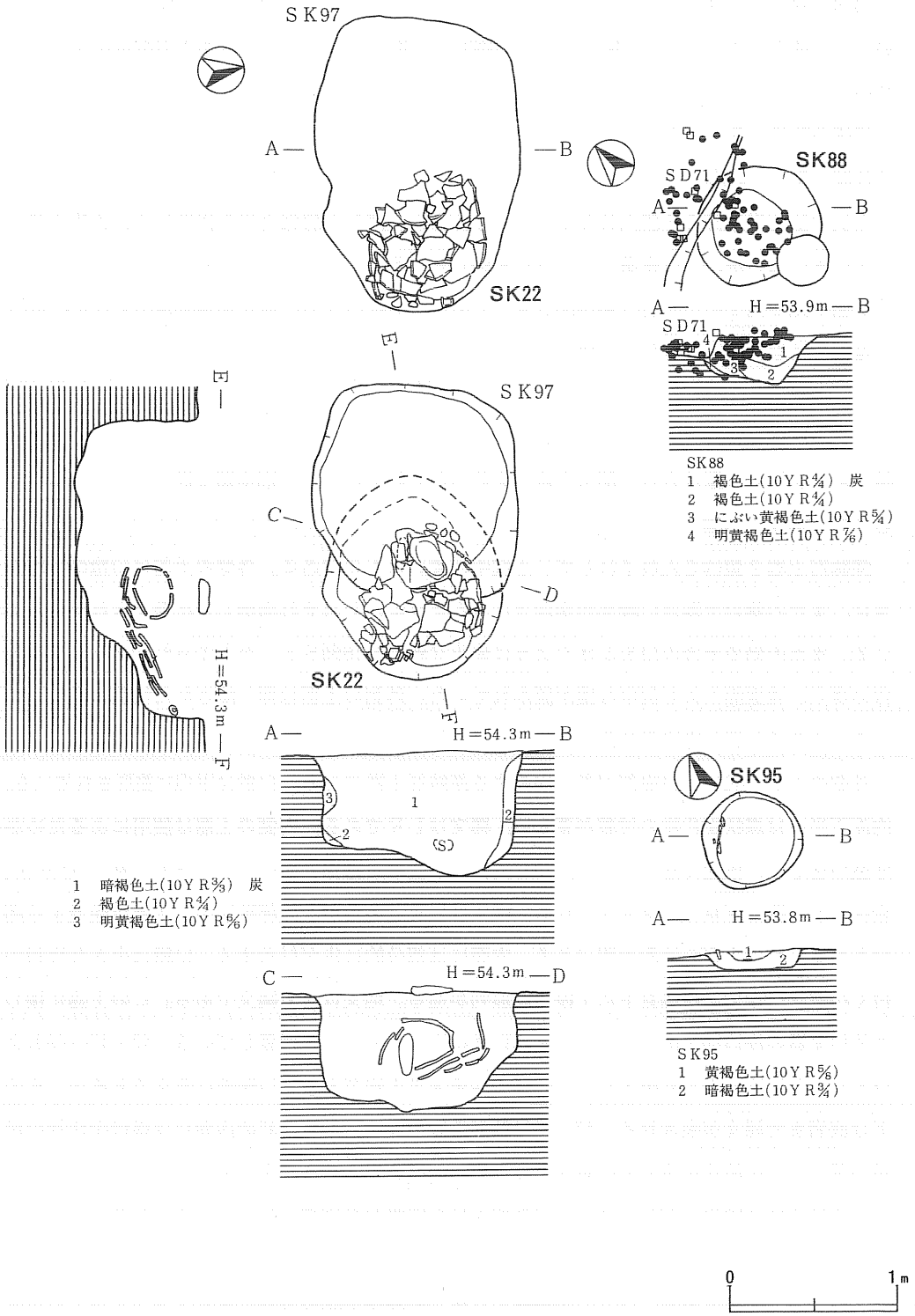
遺構の時期は特定できなかった。

Ｂ類　土坑中に完形土器を埋納した土坑であり、２基検出した。また、唯一縄文時代中期の遺構であるＳＫ95は掘り方の一部に土器片を並べたものであり、一応本類で扱った。

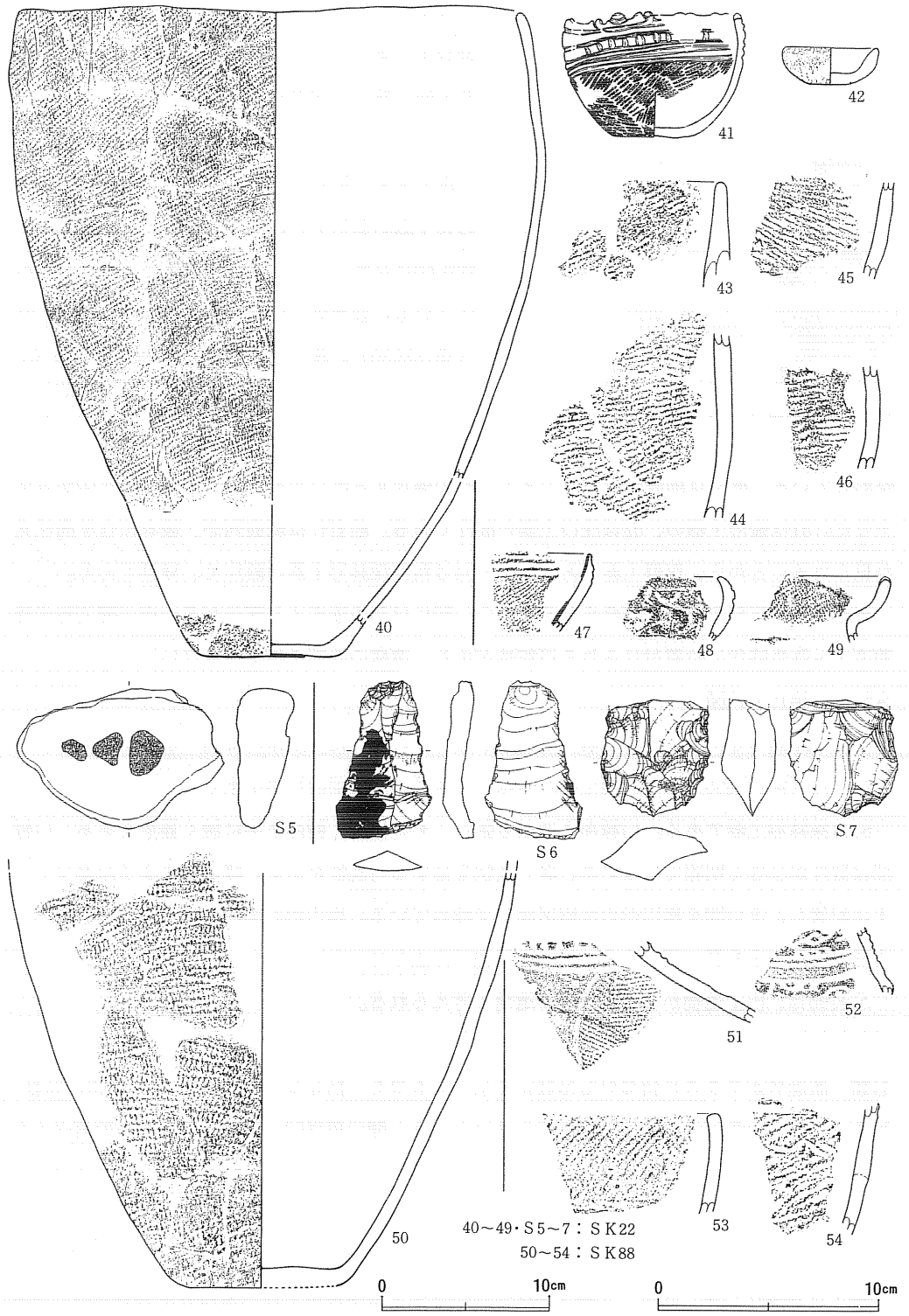
ＳＫ22（第15・16図）

深鉢形土器２個体を入れ子にして、土坑中に置いたものである。外側の土器は口縁部が西向きに、また内側の土器は口縁部が南向きになるように、それぞれ横倒しの状態で入れ子にしている。また内側の土器の口をふさぐように偏平な礫（第16図Ｓ５）があてられ、さらにこの土器の真上、確認面上にも偏平な礫が置かれていた。外側の土器は押し潰された状態で出土している。このほか掘り方底面の東側に寄せて41が置かれていた。

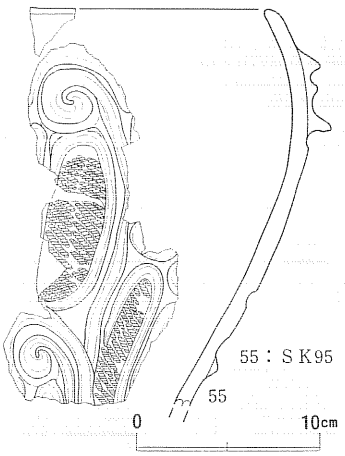
外側の土器（40）は口縁部が若干内湾する深鉢形土器である。口唇は平坦に整形されている。内面下半には煤状炭化物の付着が著しい。縄文はＬＲである。内側の土器は使用によるためか摩滅が著しく、復元できなかった。43は内側の土器の口縁部、44は同じく体部の破片であり、全体にずん胴のプロポーションとなる。縄文はＬＲであるが、体部破片中には条が横走する部分もある。41は小型の鉢形土器である。内面には部分的に朱が付着する。口縁は小さな突起の付く小波状口縁で、口端直下に１段の載痕列が巡る。地文はＲＬ縄文である。この土器に接して注口土器の注口部が出土したが、割れ口にはアスファルトが付着している。42・45～49およびＳ６・７は埋土中から出土した。42はミニチュア土器である。口縁部は無文であるが、その下は底面まで縄文が施される。47・48は鉢形土器の破片である。47の内面には煤状炭化物の付着が著しい。小波状を呈する口縁部下に円形の刺突を巡らせる。またその下に２本の沈線がある。48は全体に摩滅・剥落が著しいが胴部には半肉彫的な文様が見られ、朱も付着している。49は壷形土器の口頸部破片であろう。41・47・48はⅣ群、40・42～46・49はⅦ群である。また縄文はすべてＬＲである。Ｓ６の両側縁には微小剥離痕が認められ、またアスファルトの付着が著しい。Ｓ７の右側縁には二次加工が認められる。



第15図　SK22・88・95



第16図　遺構内出土遺物（５）



第17図　遺構内出土遺物（６）

遺構の時期は、底面出土の遺物から縄文時代晩期前半と考えられる。

ＳＫ88（第15・16図）

ＳＫ22同様に土器が埋められていたと見られる土坑である。調査時点では根などによる撹乱のために土器の原形を止めていなかったが、遺物出土状況図に示すとおり、遺構内全体に土器片が広がっている。底部破片はほとんどの破片が接合した（第16図50）。覆土１層には炭化物が混入する。

50は口縁部を欠く深鉢形土器である。内面には縦方向の整形痕があり、底部付近も丹念に削って整形している。縄文は前段合撚ＬＲである。条の横走する部分が多い。51～54は埋土中から出土した。51は壷形土器の、52は注口土器の破片である。前者には載痕列が、後者には羊歯状文が見られることから、Ⅳ群土器である。53・54は粗製深鉢形土器の破片で、Ⅶ群である。

出土遺物にⅣ群の土器片が含まれるものの、50には条の横走する部分が多い点で縄文時代晩期後半～弥生時代に位置付けられる可能性があり、遺構の時期を特定できない。

ＳＫ95（第15・17図）

土坑の北側の壁に沿って、５個の土器片が並べられていた。土器片は同一個体でありすべて接合した（第17図55）。また覆土中からは同一個体の口縁部破片が出土した。

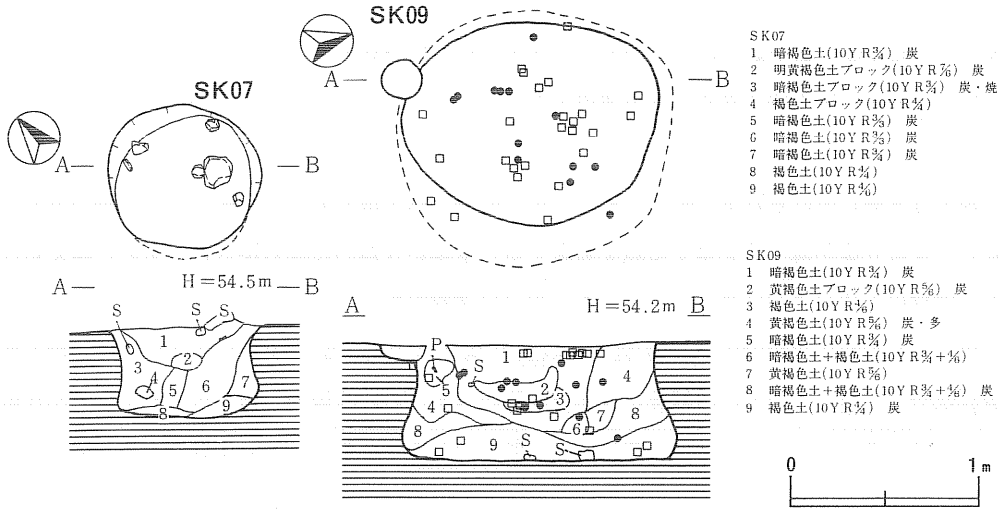
55は深鉢形土器である。口縁部下で最も張り、その後緩く胴部下半に続く器形である。口縁部は破片が小さく明瞭ではないが、緩い波状を呈する可能性がある。隆起線による渦巻文を上下に配置し、その間を楕円形の沈線区画文で埋めている。楕円形区画内の縄文はＬＲである。文様の特徴からⅡ群に相当する。ほかに遺物は出土していない。

ＳＫ95は、出土遺物から中期後葉の遺構と考えられる。

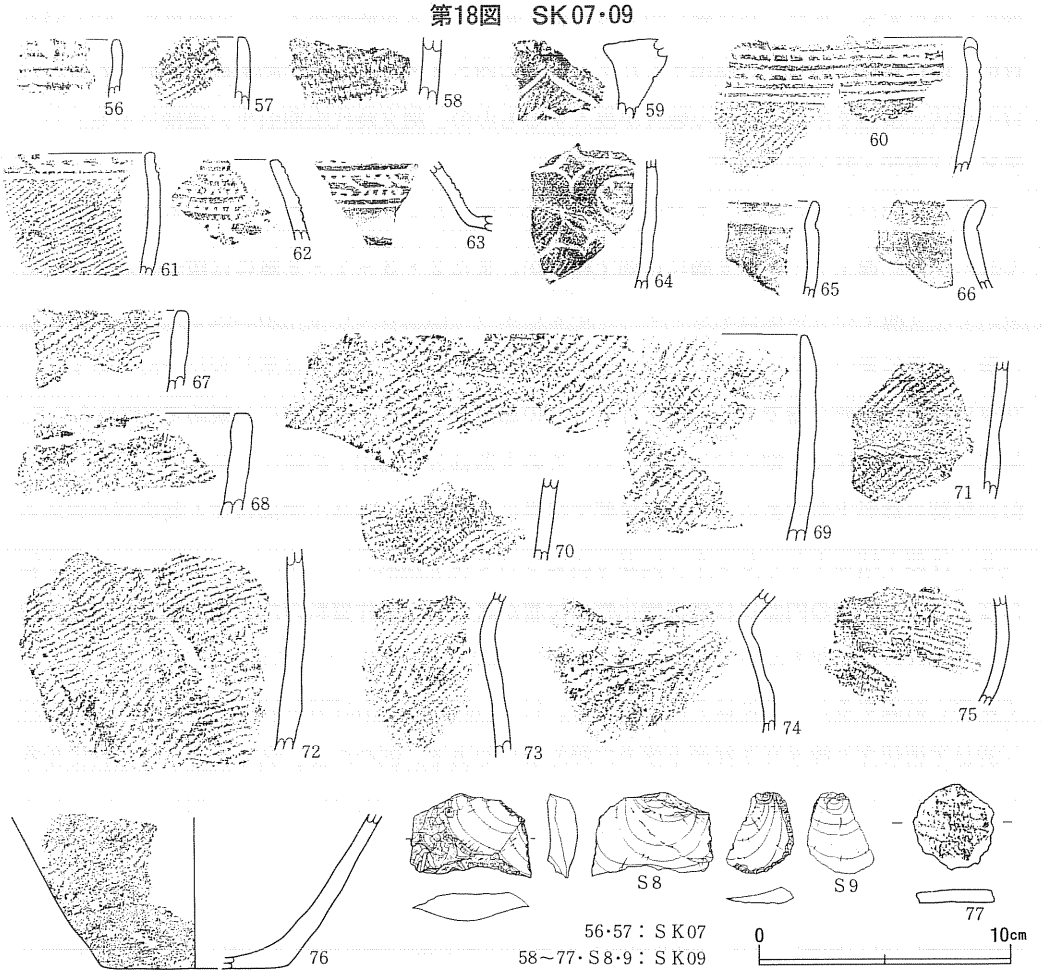
Ｃ類　断面形がフラスコ状ないしは袋状を呈するものを一括した。規模で開口部径1.3ｍ前後、地山上面からの深さ80㎝前後の比較的大きいものと、開口部径60㎝前後、深さ30㎝前後の小さいものとがある。特に前者の内、10基からは一括廃棄されたと見られる遺物が出土しており、当時の土器組成を考える上で注目される。

ＳＫ07（第18・19図）

覆土は９層に分けられる。２層は明黄褐色を呈する粘土塊であり、遺構埋没過程ないしは遺構埋め戻しの際に投棄されたものと見られる。３層中に炭化物が多くまた焼土粒も混入する。



第18図　SK07・09



第19図　遺構内出土遺物（７）

覆土中からの遺物は少ない。第19図56は口縁端部が載痕列状に刻まれ、その下に平行沈線が巡る。57は粗製土器で縄文はＬＲである。56がⅣ群、57はⅦ群である。

出土遺物から縄文時代晩期前半の遺構である。

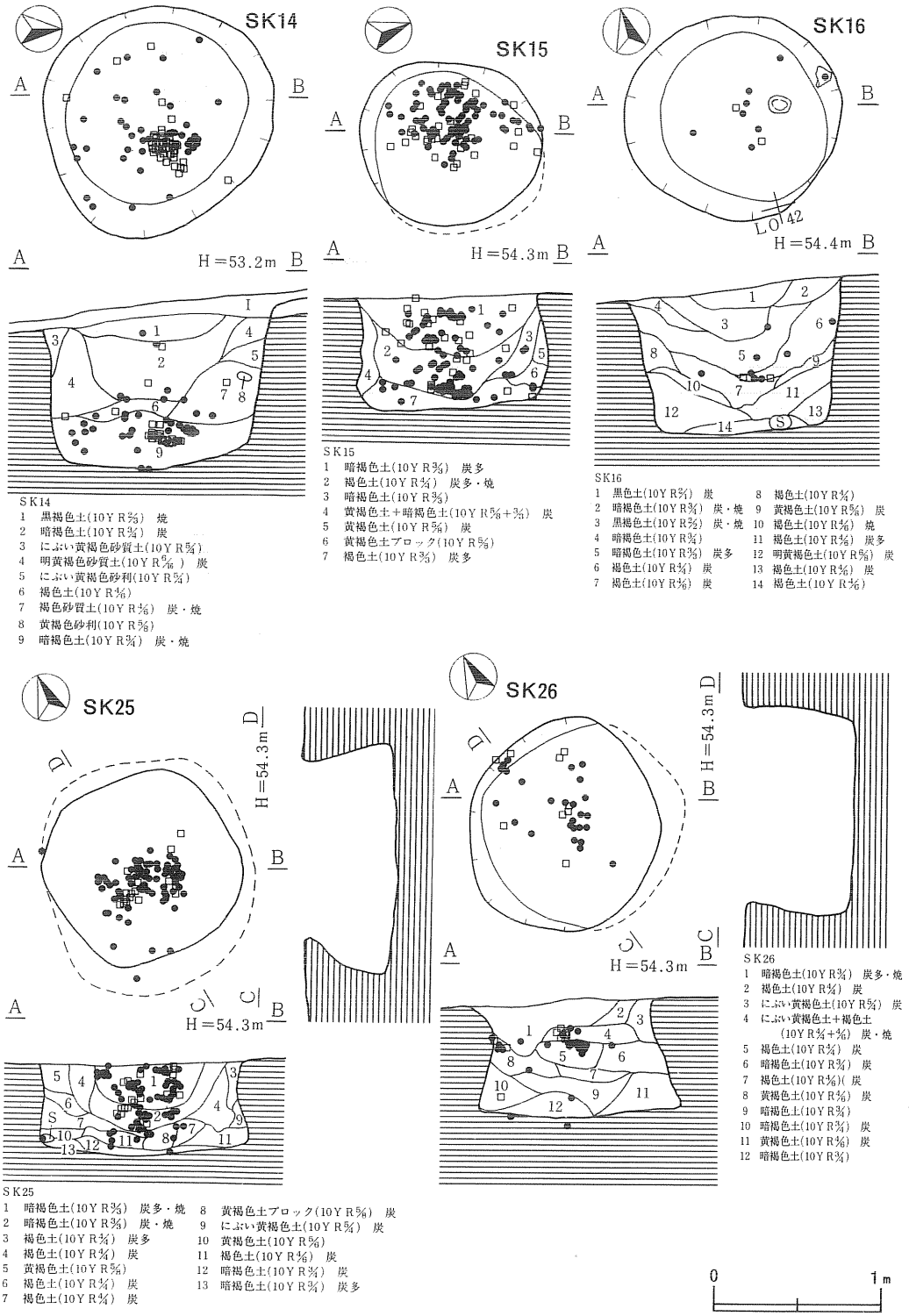
ＳＫ09（第18・19図）

覆土は９層に分けられる。覆土２層はＳＫ07同様に粘土塊である。４層には炭化物の混入が多い。また８層が混土状を呈する点を考慮すると全体が人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物出土状況に示されるとおり、覆土中央に遺物が多い。

出土した遺物は比較的多い。第19図59は波状口縁を呈する。破片中央に大きい突起が付くが突起部分は欠損している。口縁部には平行沈線が施される。沈線内の縄文はＬＲであるが沈線の外は磨り消される。60～63には羊歯状文・載痕列が施される。60・61は鉢形土器、62・63は注口土器の破片である。67～76は粗製の土器である。深鉢形土器が殆どであるが、73・74は口頸部が外反する。また、75は破片の丸みが強く壷形になる可能性がある。59がⅢ群、60～64がⅣ群、他はⅦ群である。20点出土したフレークの内Ｓ８・９には微小剥離痕が認められる。77は円盤状土製品である。Ⅲ群の破片が混入するものの、縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ14（第20・21・22・23図）

覆土は９層に分けられる。ＳＫ14の地山は砂利層になっており、覆土中には全体に小石が多く混入する。覆土１・７・９層には焼土粒子が、また２・３・７・９層には炭化物が顕著である。２・６層中からは接合するフレークがまとまって出土している（第22図Ｓ11～14）。土器は覆土下部に集中して出土した。復元等により器形を推定できたのは第21図78～81である。78は粗製の深鉢形土器である。縄文はＲとＬの部分があり、また一部には綾絡文が認められる。体部中央には煤状炭化物の付着が著しい。この土器はＳＫ09出土の破片と接合している。79～81は精製の鉢形土器である。79の口縁部文様帯には末端のかみ合う羊歯状文と載痕列が認められる。体部下端は１ないし２本の沈線で区切られその下は無文である。80・81の底部は上げ底になっている。79の内面には煤状炭化物の付着が著しい。破片資料の内、第23図95は胎土に砂粒を多く含み、器厚も厚い。96・100は深鉢形土器の口縁部破片と見られる。共に沈線によって体部と区画するが、96には２段の三叉文、100には口縁端部に円形の刺突列が施される。97～99は羊歯状文の施される鉢形土器の口縁部破片である。98の内面、99の表面には煤状炭化物が付着する。104は口縁部に屈曲を持つ鉢形土器である。平坦に整形された口唇の一部にＢ突起が付されている。101は皿形土器の口縁部である。内面には漆、表面には朱が認められる。105～109は粗製土器の破片であるが、109の内面全体には朱が残っている。95がⅡ群、78・105・109がⅦ群、他はⅣ群である。56点出土したフレーク・チップの内24点が接合した（第22図）。接合資料は２個ある。Ｓ10は接合資料Ａの内の一点である。一部に礫皮を残す剥片の一側辺に



SK14
1　黒褐色土(10Y R 2/3)　焼
2　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭
3　にぶい黄褐色砂質土(10Y R 5/4)
4　明黄褐色砂質土(10Y R 6/6)　炭
5　にぶい黄褐色砂利(10Y R 5/4)
6　褐色土(10Y R 4/6)
7　褐色砂質土(10Y R 4/6)　炭・焼
8　黄褐色砂利(10Y R 5/6)
9　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭・焼

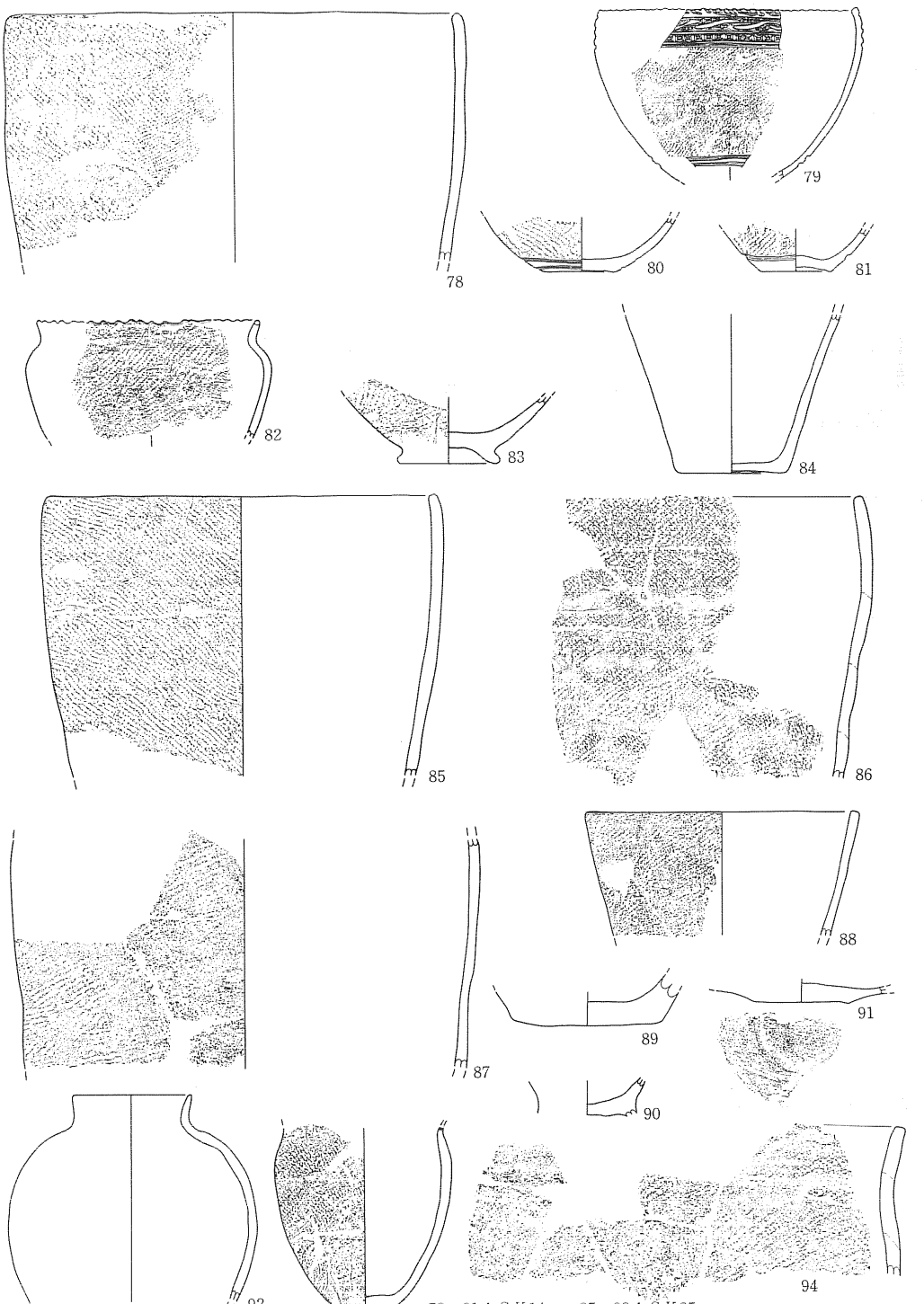
SK15
1　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭多
2　褐色土(10Y R 4/4)　炭多・焼
3　暗褐色土(10Y R 3/3)
4　黄褐色土＋暗褐色土(10Y R 5/8＋3/3)　炭
5　黄褐色土(10Y R 5/4)　炭
6　黄褐色土ブロック(10Y R 5/6)
7　褐色土(10Y R 3/3)　炭多

SK16
1　黒色土(10Y R 2/1)　炭
2　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭・焼
3　黒褐色土(10Y R 2/2)　炭・焼
4　暗褐色土(10Y R 3/4)
5　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭多
6　褐色土(10Y R 4/4)　炭
7　褐色土(10Y R 4/6)　炭
8　褐色土(10Y R 4/4)
9　黄褐色土(10Y R 5/4)　炭
10　褐色土(10Y R 4/6)　焼
11　褐色土(10Y R 4/6)　炭多
12　明黄褐色土(10Y R 6/6)　炭
13　褐色土(10Y R 4/6)　炭
14　褐色土(10Y R 4/6)

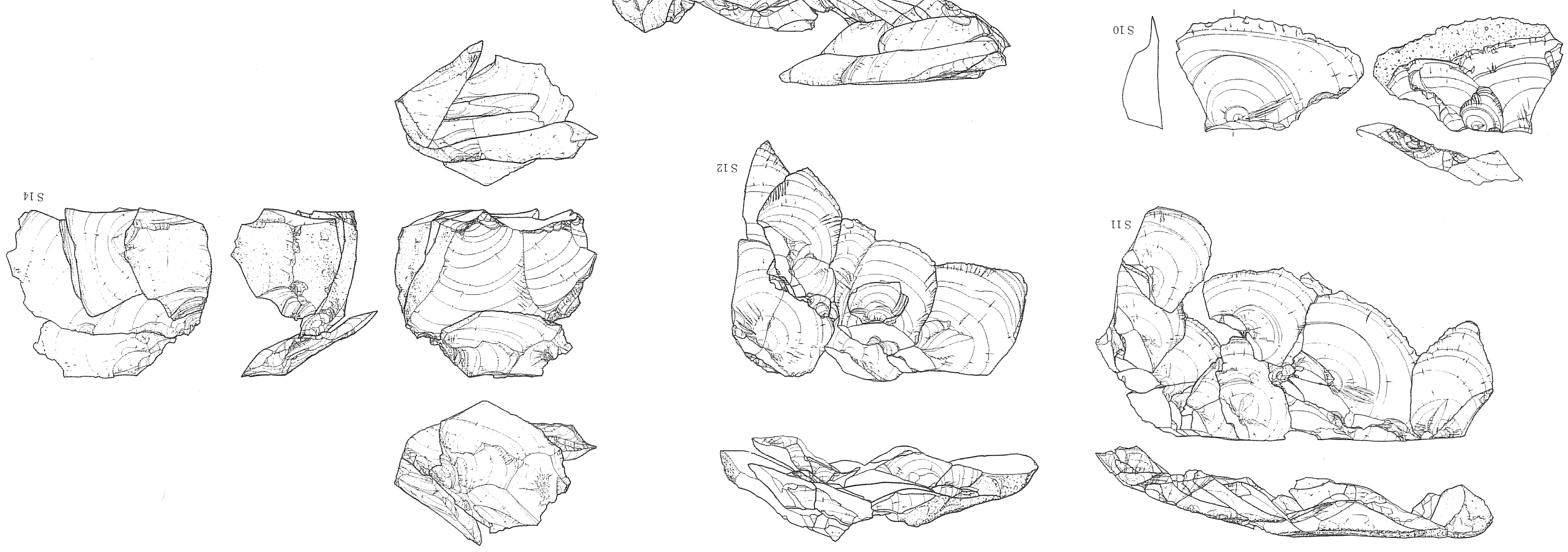
SK25
1　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭多・焼
2　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭・焼
3　褐色土(10Y R 4/4)　炭多
4　褐色土(10Y R 4/4)　炭
5　黄褐色土(10Y R 5/4)
6　褐色土(10Y R 4/4)　炭
7　褐色土(10Y R 4/4)　炭
8　黄褐色土ブロック(10Y R 5/6)　炭
9　にぶい黄褐色土(10Y R 5/4)　炭
10　黄褐色土(10Y R 5/4)
11　褐色土(10Y R 4/6)　炭
12　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭
13　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭多

SK26
1　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭多・焼
2　褐色土(10Y R 4/4)　炭
3　にぶい黄褐色土(10Y R 5/4)　炭
4　にぶい黄褐色土＋褐色土
　(10Y R 3/4＋4/6)　炭・焼
5　褐色土(10Y R 3/4)　炭
6　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭
7　褐色土(10Y R 4/6)(　炭
8　黄褐色土(10Y R 5/6)　炭
9　暗褐色土(10Y R 3/4)
10　暗褐色土(10Y R 3/4)　炭
11　黄褐色土(10Y R 5/6)　炭
12　暗褐色土(10Y R 3/4)

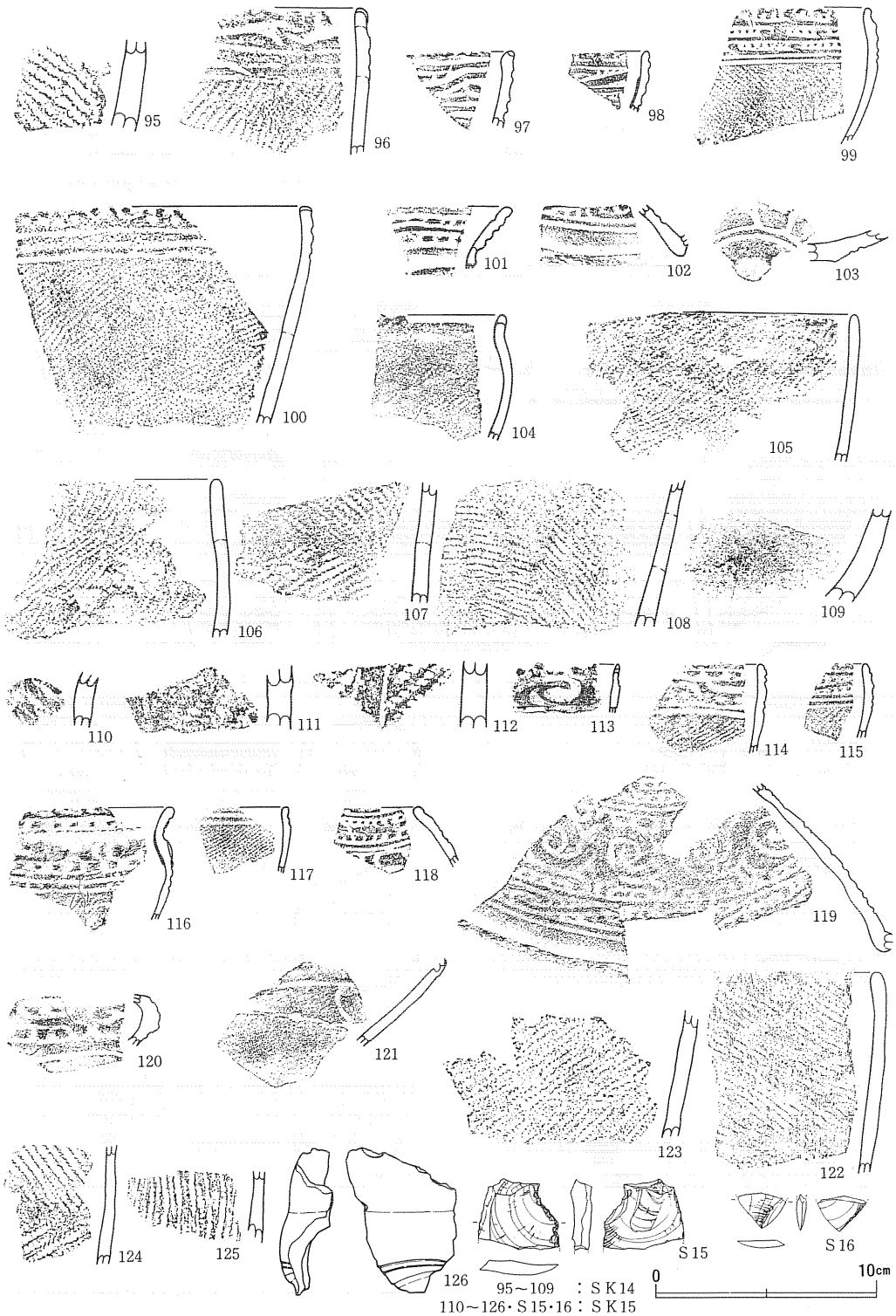
第20図　SK14・15・16・25・26



第21図　遺構内出土遺物（８）



第22図　遺構内出土遺物(9)



第23図　遺構内出土遺物(10)

第24図　遺構内出土遺物(11)

二次加工を施す。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ15（第20・21・23図）

覆土は７層に分けられる。１・２・７層には炭化物が多く、２層には焼土粒も混入する。全体に覆土のしまりが弱く、人為的な埋土と見られる。遺物は覆土中央に集中する。復元により図化できたのは２個体であるが、ほかに器形を推定できる破片が２個体ある。

第21図82は口縁部の屈曲する鉢形土器である。口唇は緩く刻まれ小波状口縁となっている。この土器の一部はＳＫ25出土のものである。83は台付鉢形土器である。第23図116は精製の鉢形土器であるが、口縁部に屈曲を有する。119は注口土器である。破片の大きさから見て、かなり大きいものであろう。破片資料の内、110は貝殻腹縁文が施されている。出土遺物中唯一早期の土器片であり、Ⅰ群である。111・112は胎土に砂粒を多く含み器厚も厚い。縄文部と無文部を区画する縦位の沈線が施される。113～115・117は鉢形土器の口縁部破片、118・120～124は注口土器の破片である。115・118・120には羊歯状文が見られる。122～125は粗製深鉢形土器の破片である。124の縄文は羽状であり、125は条の縦走する前段合撚ＬＲである。111・112がⅡ群、82・113～124がⅣ群、他はⅦ群である。ほかに中空土偶の右腕部分の破片が１点出土している。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ16（第20・21・24図）

覆土は13層に分けられる。全体に炭化物・焼土粒が多く混入する。人為的埋土と見られる。遺物は覆土中に散発的にあり、少ない。

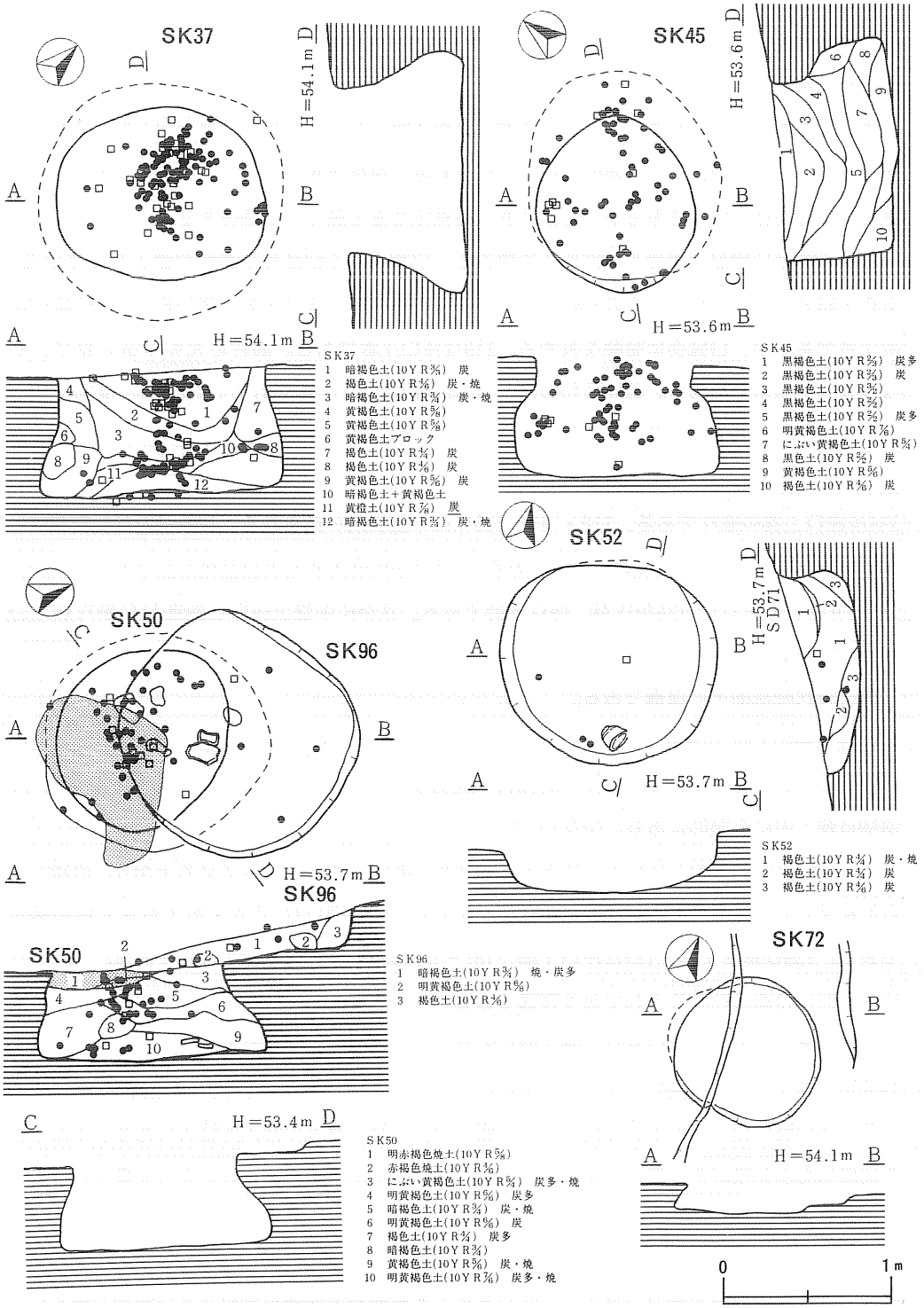
第21図84は鉢形土器の体部下半である。底部から非常に角度をもって立ち上がり、直線的な器形を呈する。無文であるが底面に網代痕を止める。第24図127は器厚・胎土からⅡ群の破片である。128は鉢形土器、129は注口土器、131・132は粗製深鉢形土器の破片である。128・129には載痕列が施されておりⅣ群である。

Ⅱ群の破片が混入しているが、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ25（第20・21・24図）

覆土は13層に分けられる。上部の１～３層には炭化物・焼土の混入が顕著であり、また下部の13層にも炭化物が多く混入する。プランの中央、覆土上部から下部にわたって多くの遺物が出土した。

第21図85～87は粗製の深鉢形土器である。89は深鉢形土器の底部。88は鉢形土器の上半部であり、表面に煤状炭化物が付着する。93はやや丸みを帯びた体部に外反する口頸部が取り付くものと考えられるが、口頸部は欠失している。91は体部がほとんど立ち上がらない皿状の器形



第25図　SK37・45・50・52・72・96

を呈する。92は球形の体部に口縁部が直立する壷形土器である。器厚が非常に薄い。90は台付き土器の底部である。90・91は共に無文。以上の９点はいずれもⅦ群である。破片資料ではそれぞれの文様により第24図133・134がⅡ群、135～139がⅣ群に相当する。また140～144はⅦ群である。135・142の内面には煤状炭化物が付着する。145はミニチュア土器であるが、全体が歪んでいる。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ26（第20・21・24図）

覆土は12層に分けられる。ほかの土坑同様に、覆土全体に混入物が多い。４層は混土状を呈している。遺物は覆土中央からややまとまって出土したが総量は比較的少ない。

第21図94は深鉢形土器の体部上半から口縁部にかけての破片であるが、口縁部は緩く外反する器形を呈する。第24図146は器厚・胎土からⅡ群の破片である。147は鉢形土器の口縁部破片で羊歯状文が施される。148・149は粗製土器の破片であるが、149は口縁部にかけて外傾している。147はⅣ群、94・148・149はⅦ群である。他に凹石が２点出土している（Ｓ19・20）が、Ｓ20は磨石兼用である。

縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ37（第25・26・27図）

覆土は12層に分けられる。覆土中央の２・３層および覆土下部の12層に炭化物・焼土粒子の混入が顕著であり、全体に人為的な埋土と考えられる。遺物は覆土上部と覆土下部に集中する。

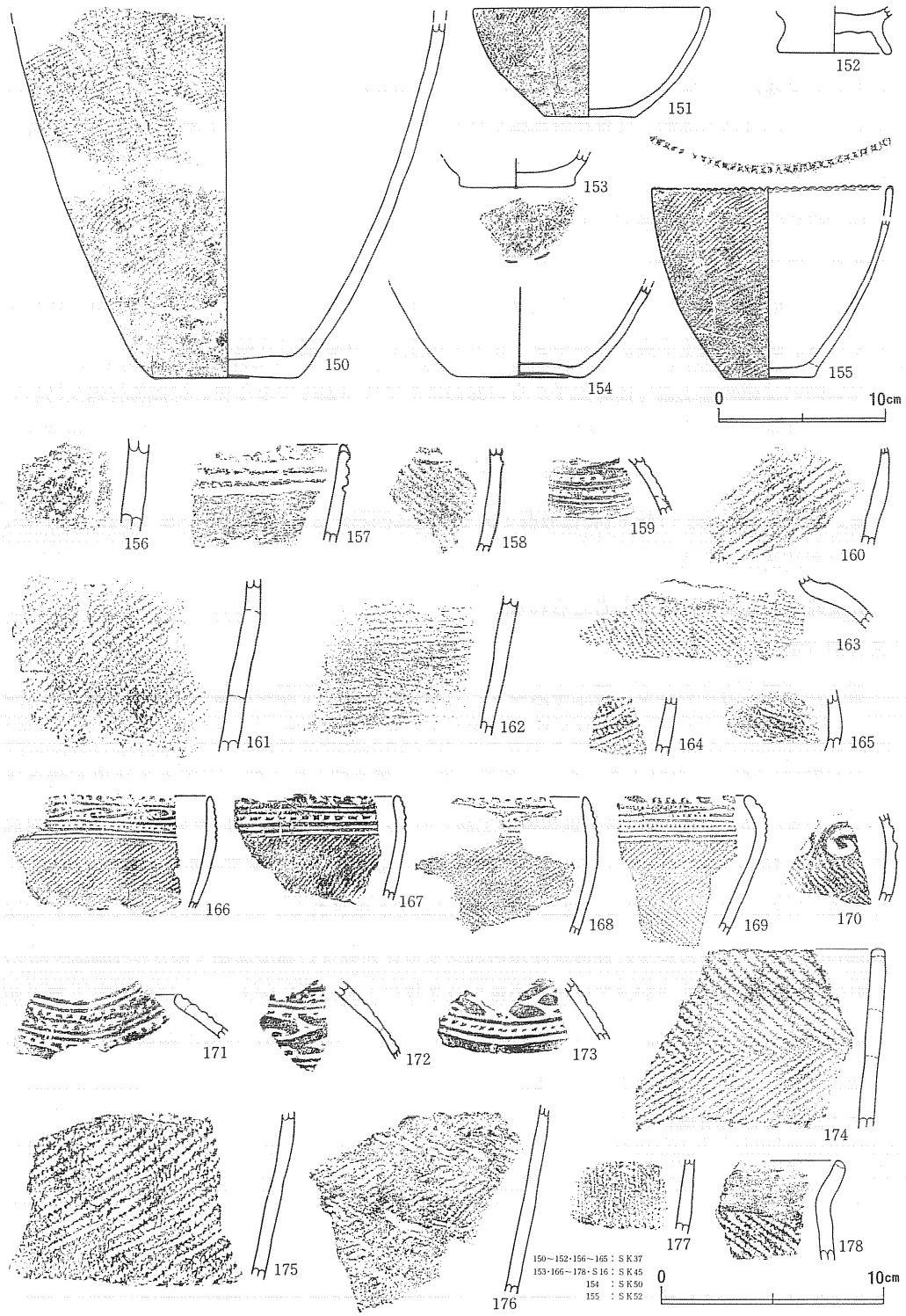
第26図156は胎土に砂粒を多く含み、器厚も厚い。縄文部と無文部を区画する沈線が縦に垂下している。150・160～162は粗製深鉢形土器である。縄文は150が０段多条ＲＬ、161が前段合撚ＬＲ、160・162はＬＲである。162は条が横走する。157・158も深鉢形土器の口縁部破片である。157は小波状を呈する口縁直下に円形の刺突が施される。151は鉢形土器である。口縁部は再生されたものである。体部は非常に丸みを帯びており、壷形土器であった可能性がある。152は台付土器の台部、159は羊歯状文の施される注口土器の破片であり、165は壷形土器の肩部破片である。156はⅡ群、157～159はⅣ群、150～153・160～165はⅦ群に相当する。Ｓ25の側縁には雑な二次加工が施されている。

縄文時代晩期の遺構と考えられる。

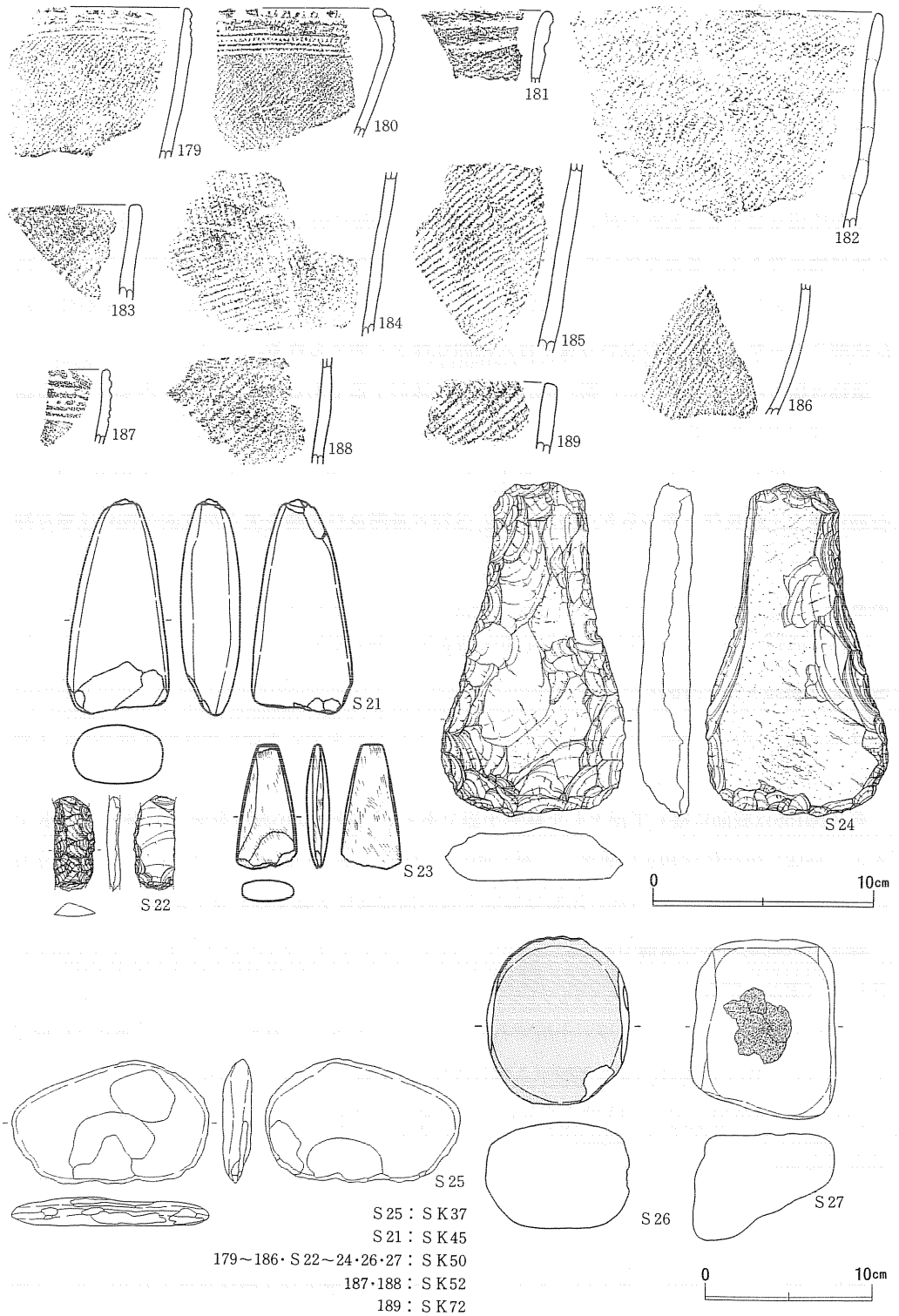
ＳＫ45（第25・26・27図）

覆土は10層に分けられる。覆土中には全般に炭化物が混入しているが、特に１・３層に顕著である。遺物は覆土中央から上部にかけて多く出土している。

第26図166～169は鉢形土器の口縁部破片、170は同じく体部上半の破片である。167・169には煤状炭化物の付着が著しい。171～173は注口土器の破片である。口縁部文様帯には羊歯状文



第26図　遺構内出土遺物(12)



S 25：ＳＫ37
S 21：ＳＫ45
179～186・Ｓ22～24・26・27：ＳＫ50
187・188：ＳＫ52
189：ＳＫ72

第27図　遺構内出土遺物(13)

や載痕列が施される。153・174～178は粗製土器である。178は口縁部が緩く外傾し、口唇上は間隔を開けて刻みが施されている。166～173はⅣ群、153・174～178はⅦ群相当する。Ｓ21の磨製石斧が１点出土している。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ50（第25・26・27図）

上部に切り合ってＳＫ96が構築されている。覆土は10層に分けられるが、上部の暗褐色土１・２層は焼土である。また全体に焼土粒・炭化物の混入が多く、特に10層の炭化物はブロック状を呈する。また10層は、上部の非常に粘性の強い土が下部の褐色土を多く混入する土を覆う様な状態であった。これらの点から覆土は人為的な埋土と考えられる。

遺物は覆土中央に集中する。第27図179～181は鉢形土器である。179・180の内面、181の器表面に煤状炭化物が著しい。182～186は粗製深鉢形土器の破片である。154は上げ底状の底部であるが、内面には僅かに朱が認められる。179～181がⅣ群、153・182～186がⅦ群である。石器は覆土上部及び下部から５点出土した。Ｓ22は基部及び先端を欠くが片面全面に丁寧な押圧剥離が施されている。Ｓ23は小型の磨製石斧、Ｓ24は鍬状石器、Ｓ26は磨石、Ｓ27は凹石である。

遺構の時期は179・180をもとに縄文時代晩期前半と考えられる。

ＳＫ52（第25・26・27図）

覆土上部をＳＤ71が通っている。覆土は３層に分けられるが、全体に炭化物を混入し、１層には焼土粒も認められる。

第26図155は底面に接して出土した鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し、縄文はＬＲである。全体に煤状炭化物が付着する。第27図187は鉢形土器の口縁部破片であるが口縁部文様帯に羊歯状文が施される。188は粗製深鉢形土器の体部破片で縄文はＬＲである。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ72（第25・27図）

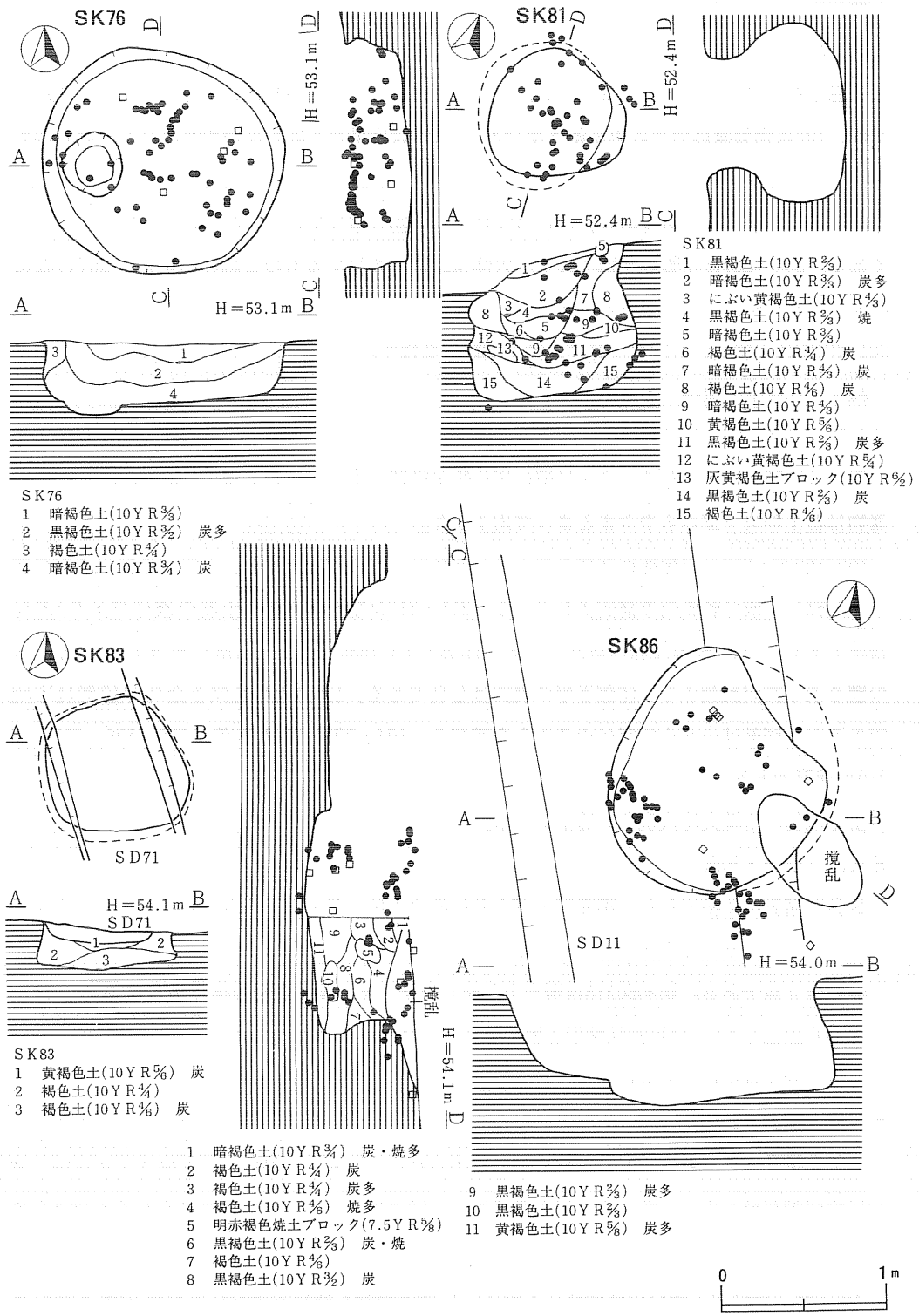
平面形全体が小さく、また浅い土坑である。ＳＤ71の精査中に検出したが、土層図は作成できなかった。出土遺物は、土坑底面から第27図189が１点出土しただけである。

189は粗製深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部は平坦に整形されている。縄文はＬＲ。Ⅶ群である。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ76（第28・29図）

底面西側に径30cm前後、深さ10cm弱のピットを有する。覆土は４層に分けられる。２・４層に炭化物が認められるが、２層が圧倒的に多い。遺物は覆土上部にまとまっているが、全体か



SK76
1　暗褐色土(10YR3/3)
2　黒褐色土(10YR3/2)　炭多
3　褐色土(10YR4/4)
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭

SK81
1　黒褐色土(10YR2/3)
2　暗褐色土(10YR3/3)　炭多
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
4　黒褐色土(10YR2/3)　焼
5　暗褐色土(10YR3/3)
6　褐色土(10YR4/4)　炭
7　暗褐色土(10YR4/3)　炭
8　褐色土(10YR4/6)　炭
9　暗褐色土(10YR4/3)
10　黄褐色土(10YR5/6)
11　黒褐色土(10YR2/3)　炭多
12　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
13　灰黄褐色土ブロック(10YR6/2)
14　黒褐色土(10YR2/3)　炭
15　褐色土(10YR4/6)

SK83
1　黄褐色土(10YR5/6)　炭
2　褐色土(10YR4/4)
3　褐色土(10YR4/6)　炭

1　暗褐色土(10YR3/4)　炭・焼多
2　褐色土(10YR3/4)　炭
3　褐色土(10YR4/4)　炭多
4　褐色土(10YR4/6)　焼多
5　明赤褐色焼土ブロック(7.5YR5/8)
6　黒褐色土(10YR2/3)　炭・焼
7　褐色土(10YR4/6)
8　黒褐色土(10YR3/2)　炭
9　黒褐色土(10YR2/3)　炭多
10　黒褐色土(10YR2/3)
11　黄褐色土(10YR5/6)　炭多

第28図　SK76・81・83・86

ら散発的に出土している。

第29図190は口縁部で屈曲する鉢形土器である。口縁部は羊歯状文風に刻まれ、全体が小波状口縁となっている。その下は上下２段の列点文によって文様が構成されている。191は鉢形土器、192は粗製深鉢形土器の体部下半である。192は底部から非常に緩やかに立ち上がる器形を呈する。縄文はともにＬＲであるが、192では条が横走する。193は無文の壷形土器である。器面の調整が非常に丁寧である。197～199は鉢形土器の破片であり、200は台付き土器の台部である。201～207は粗製の土器である。大体は深鉢形を呈するものと思われるが、207の様に断面が丸みを帯びるものもある。190・191・197～200はⅣ群、192・201～207はⅦ群である。201は円盤状土製品、Ｓ28は一側片に微小剥離痕を残す。

縄文時代晩期の遺構である。

ＳＫ81（第28・29・30図）

覆土は15層に分けられる。２・11層に炭化物が顕著であり、また４層には焼土粒が混入する。遺物は覆土中央下部からややまとまって出土した。

第30図209・210は口縁部に文様の施された深鉢形土器の破片である。小波状を呈する口縁部下の文様は２段の載痕列で構成されている。211～216は粗製の深鉢形土器の破片であり195は底部である。194は壷形土器の体部である。体部上半は載痕列と平行沈線に挟まれて、Ｘ字状の磨り消し文が展開する。体部下半の縄文はＬＲである。196は上半を欠き全体の器形は不明であるが、底部は小さく体部はやや丸みを帯びる。194・209・210はⅣ群、195・196・211～216はⅦ群である。

出土遺物から縄文時代晩期の遺構である。

ＳＫ83（第28・30図）

ＳＤ71精査中に検出した。平面形・深さ共に他の土坑より一回り小さいものである。１～３層に分けられる覆土は全体にしまりがない。

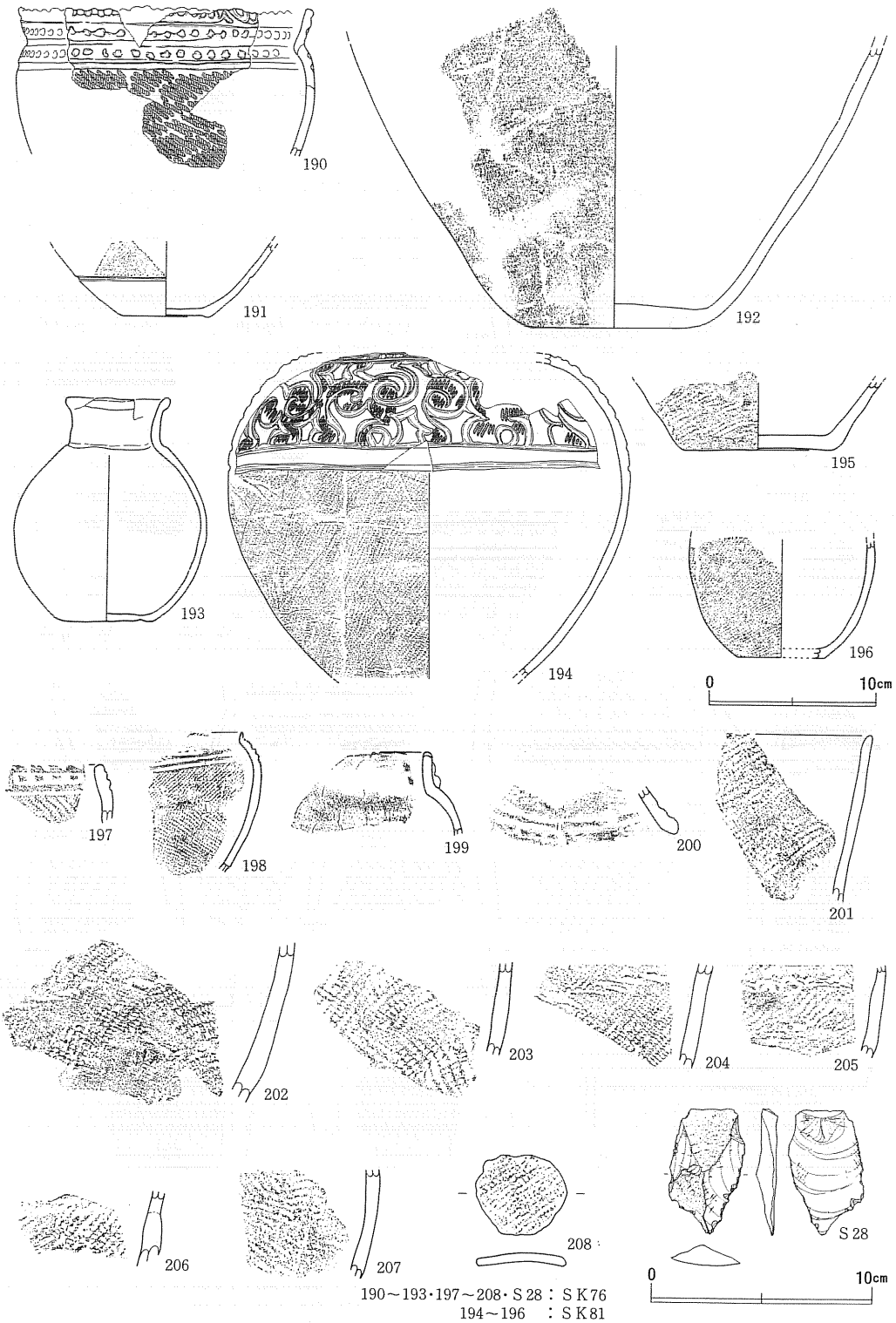
遺物は２点である。第30図218は覆土上部から出土した。須恵器甕の体部破片である。覆土下部から出土した217は粗製深鉢形土器の体部破片であり、Ⅶ群である。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ86（第28・30図）

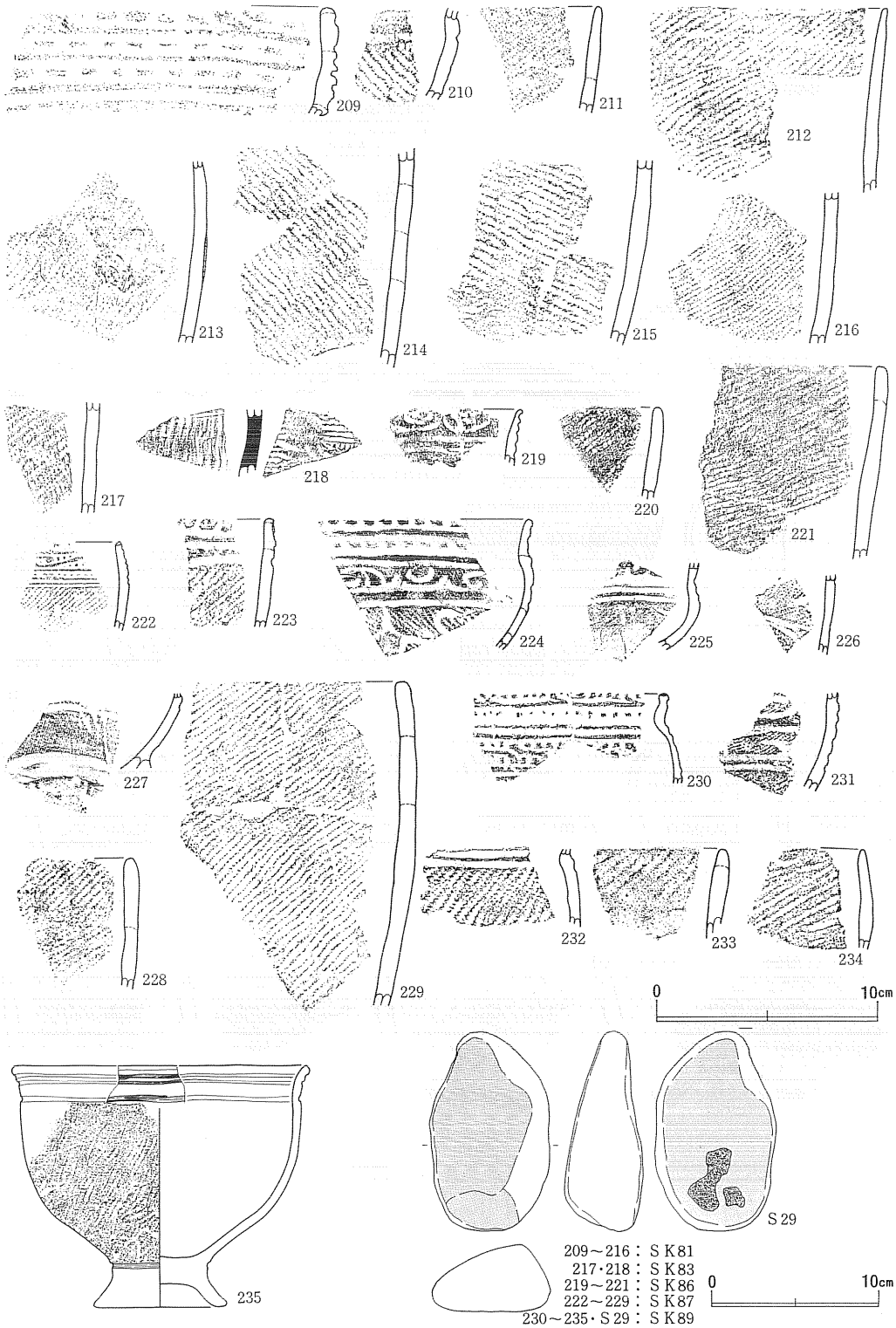
上部を撹乱されており、ＳＤ11精査中に検出した。１・４・６層に焼土を混入するほか、全般に炭化物が混入する。特に底面付近の11層では顕著で、ブロック状を呈するものも認められた。遺物は上部からやや多く出土している。全般に細片が多く図示し得たのは３点だけである。

第30図219は鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は緩い波状を呈し、その波頂部を囲むように２本一組の沈線が施されている。220・221は粗製深鉢形土器の口縁部破片である。219は

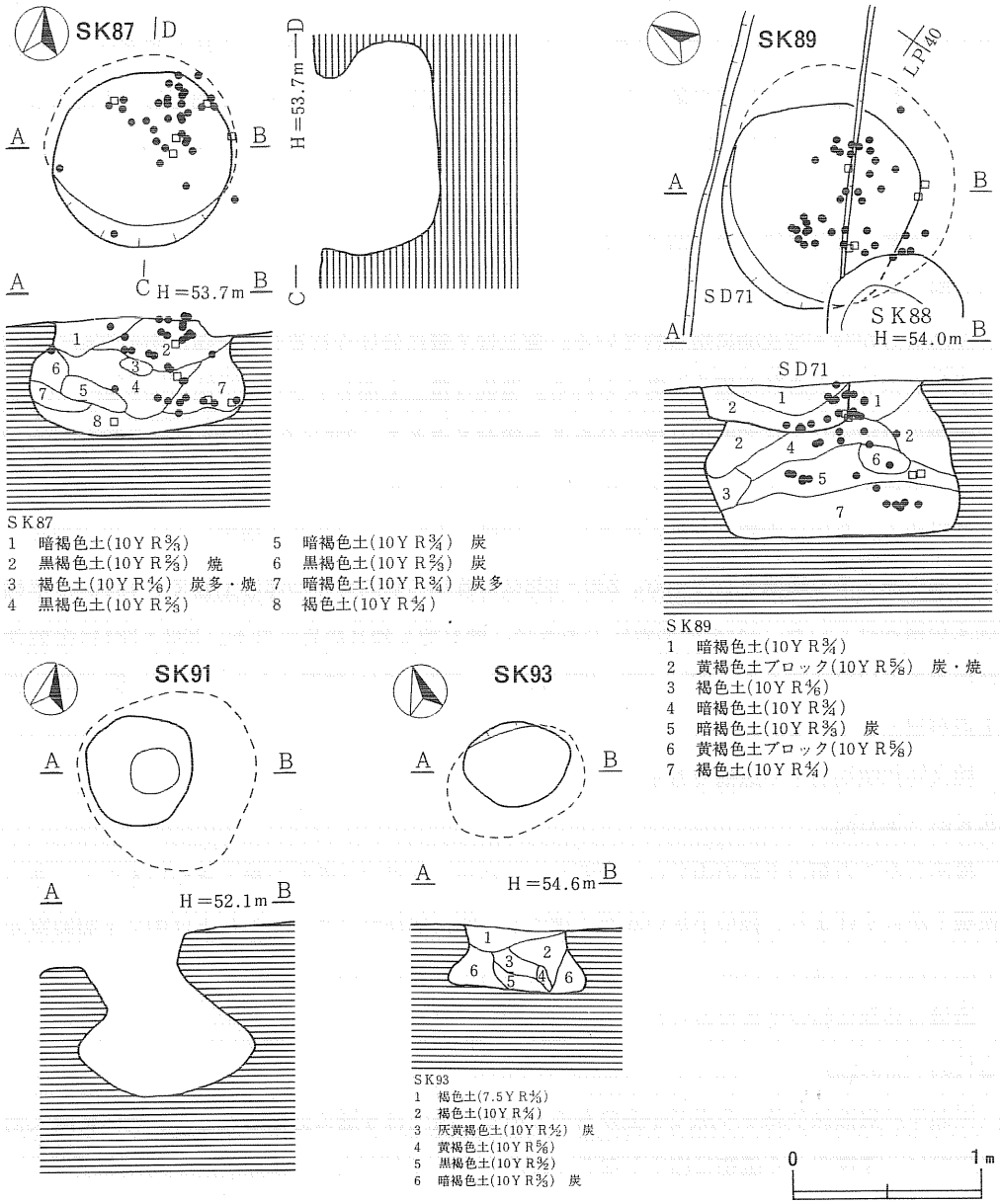


190～193・197～208・Ｓ28：ＳＫ76
194～196　：ＳＫ81

第29図　遺構内出土遺物(14)



第30図　遺構内出土遺物(15)



SK87
1　暗褐色土(10YR3/4)
2　黒褐色土(10YR2/3)　焼
3　褐色土(10YR4/6)　炭多・焼
4　黒褐色土(10YR2/3)
5　暗褐色土(10YR3/4)　炭
6　黒褐色土(10YR2/3)　炭
7　暗褐色土(10YR3/4)　炭多
8　褐色土(10YR4/4)

SK89
1　暗褐色土(10YR3/4)
2　黄褐色土ブロック(10YR5/8)　炭・焼
3　褐色土(10YR4/6)
4　暗褐色土(10YR3/4)
5　暗褐色土(10YR3/4)　炭
6　黄褐色土ブロック(10YR5/8)
7　褐色土(10YR4/4)

SK93
1　褐色土(7.5YR4/4)
2　褐色土(10YR4/4)
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭
4　黄褐色土(10YR5/6)
5　黒褐色土(10YR2/3)
6　暗褐色土(10YR3/3)　炭

第31図　SK87・89・91・93

Ⅳ群、220・221はⅦ群である。

本遺構は縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ87（第30・31図）

ＳＤ71に一部切られている。覆土は８層に分けられ、上部２・３層に焼土粒、７層には炭化物が混入する。全体にしまり弱く、人為的な埋土と考えられる。遺物は北側に偏って出土した。

第30図222～225は鉢形土器の破片である。224は口縁部に屈曲を持ち、体部には磨り消し縄文が展開する。225は体下半部の状態から台が付く可能性がある。226は全体の器形は不明であるが、文様の施された体部の破片である。文様は無文部分が削られる形の肉彫的な手法によっている。228・229は粗製深鉢形土器の口縁部破片である。222～227はⅣ群、228・229はⅦ群である。

出土遺物から縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ89（第30・31図）

上部をＳＤ71・ＳＫ88に切られている。覆土は７層に分けられるが、全体に中央が盛り上がる堆積を示し、人為的な埋土と考えられる。遺物は覆土上部および覆土下部から少量出土した。

遺物には復元によって器形全体の分かる土器が１点ある。235は台付鉢形土器である。台部は外側に踏ん張る形を呈し、体部は球形に立ち上がった後、上半では直立し、口縁端部が僅かに外反する。全体に均整のとれた形である。口縁は平縁で、口縁部文様帯は３本の平行沈線と沈線間の無文帯で構成されている。230・232は口縁部に屈曲を持つ鉢形土器で、232には羊歯状文が施されている。231は体部破片であるが、磨り消し縄文が見られる。233・234は粗製深鉢形土器の口縁部である。230・232・235はⅣ群、233・234はⅦ群である。ほかに磨石兼凹石１点が出土している。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ91（第31図）

検出したこの類の土坑の中では、壁面がオーバーハングする部分が最もきついもので、その後緩やかにすぼまり、径の小さい底面に達する。開口部径が小さく、掘り下げ中に土層観察面が崩れたため土層図を作成できなかった。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ93（第31図）

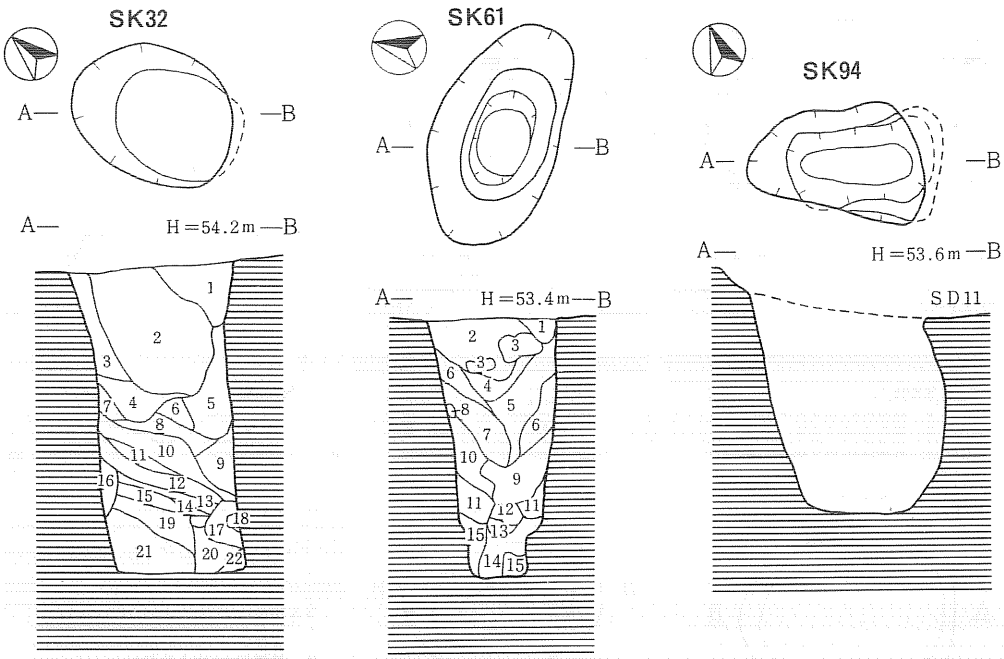
平面での規模及び深さの点で小型のものである。覆土は６層に分けられるが、全体に混入物は少ない。遺構内から遺物は出土しなかった。

遺構の時期は特定できなかった。

Ｄ類　平面形が楕円形、断面形が円筒形を呈し、深さ1.5ｍ前後を測るものである。３基検出したが調査区中央から南西に直線的に並んでいる。

ＳＫ32（第32図）

覆土は22層に分けられた。２・４・５・８・11・20・21・22層に混入する炭化物はいずれも微量である。また覆土全体が堅くしまった土であった。遺構内からは縄文土器の細片が出土し



SK32
1　暗褐色土(10YR3/4)　焼
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭
3　褐色土(10YR4/4)
4　暗褐色土(10Y3/4)　炭
5　黄褐色土(10YR5/6)　炭
6　褐色土ブロック(10YR4/6)
7　褐色土(10YR4/4)
8　褐色土(10YR4/4)　炭
9　黄褐色土(10YR5/6)
10　黄褐色土(10YR5/6)
11　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　炭
12　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
13　明黄褐色土(10YR7/6)
14　灰色土ブロック(10YR5/2)
15　明黄褐色土(10YR7/6)
16　明灰白色土(7.5YR7/2)
17　灰黄褐色土(10YR5/2)
18　灰白色土ブロック(10YR8/2)
19　にぶい黄橙土(10YR6/3)
20　黒褐色土(10YR3/2)　炭
21　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭
22　明黄褐色土(10YR7/6)　炭

SK61
1　暗褐色土(10YR3/4)
2　黒色土(10YR1.7/1)　炭
3　暗褐色土ブロック(10YR3/4)　炭
4　暗褐色土(10YR3/4)
5　褐色土(10YR4/6)　炭
6　褐色土(10YR4/4)
7　黒褐色土(10YR2/2)
8　にぶい黄褐色土ブロック(10YR5/4)
9　褐色土(10YR4/6)
10　暗褐色土(10YR3/4)　炭
11　黒褐色土(10YR2/2)
12　暗褐色土ブロック(10YR3/4)
13　にぶい黄褐色土ブロック(10YR4/3)
14　黄褐色土(10YR5/6)
15　暗褐色土(10YR2/3)

0　1m

第32図　SK32・61・94

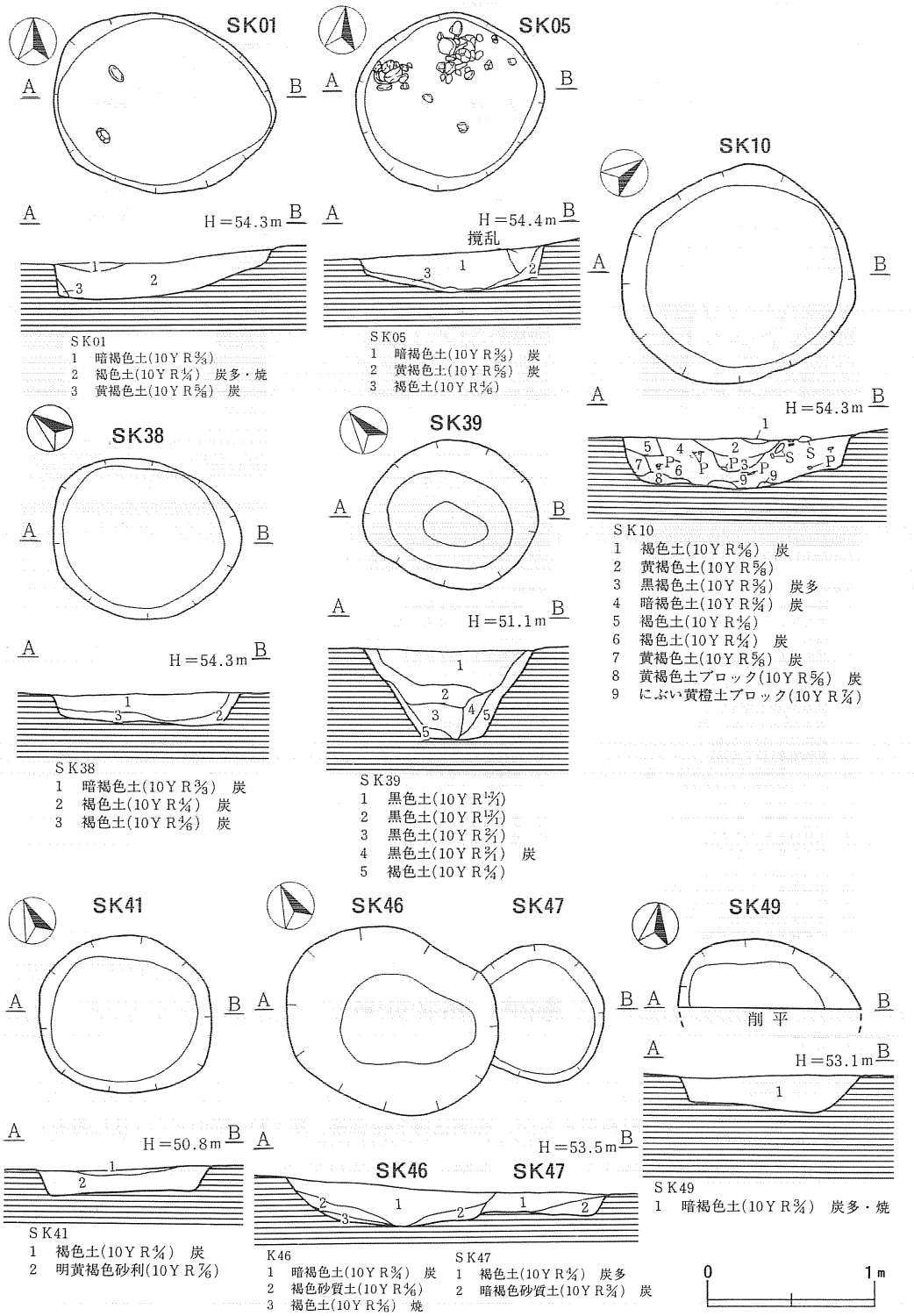
ただけである。

SK61（第32図）

全体の断面形はほぼ円筒形を呈するが、底面は径20cm前後、深さ20cm程のピット状に段をもって落ち込む。覆土は22層に分けられたが、各層中に混入物は少ない。SK32同様に覆土全体が堅くしまっていた。遺構内から遺物は出土しなかった。

SK94（第32図）

SD11精査後に検出したものである。遺構精査中に土層観察面が崩壊し、土層図を作成できなかった。SK32・61同様に覆土は全体に堅い。また覆土中の混入物は少なかった。遺構内か



SK01
1　暗褐色土(10YR3/3)
2　褐色土(10YR4/4)　炭多・焼
3　黄褐色土(10YR5/8)　炭

SK05
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭
2　黄褐色土(10YR5/8)　炭
3　褐色土(10YR4/6)

SK10
1　褐色土(10YR4/6)　炭
2　黄褐色土(10YR5/8)
3　黒褐色土(10YR3/3)　炭多
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭
5　褐色土(10YR4/6)
6　褐色土(10YR4/4)　炭
7　黄褐色土(10YR5/8)　炭
8　黄褐色土ブロック(10YR5/6)　炭
9　にぶい黄橙土ブロック(10YR7/4)

SK38
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭
2　褐色土(10YR4/4)　炭
3　褐色土(10YR4/6)　炭

SK39
1　黒色土(10YR1/1)
2　黒色土(10YR1/1)
3　黒色土(10YR2/1)
4　黒色土(10YR2/1)　炭
5　褐色土(10YR4/4)

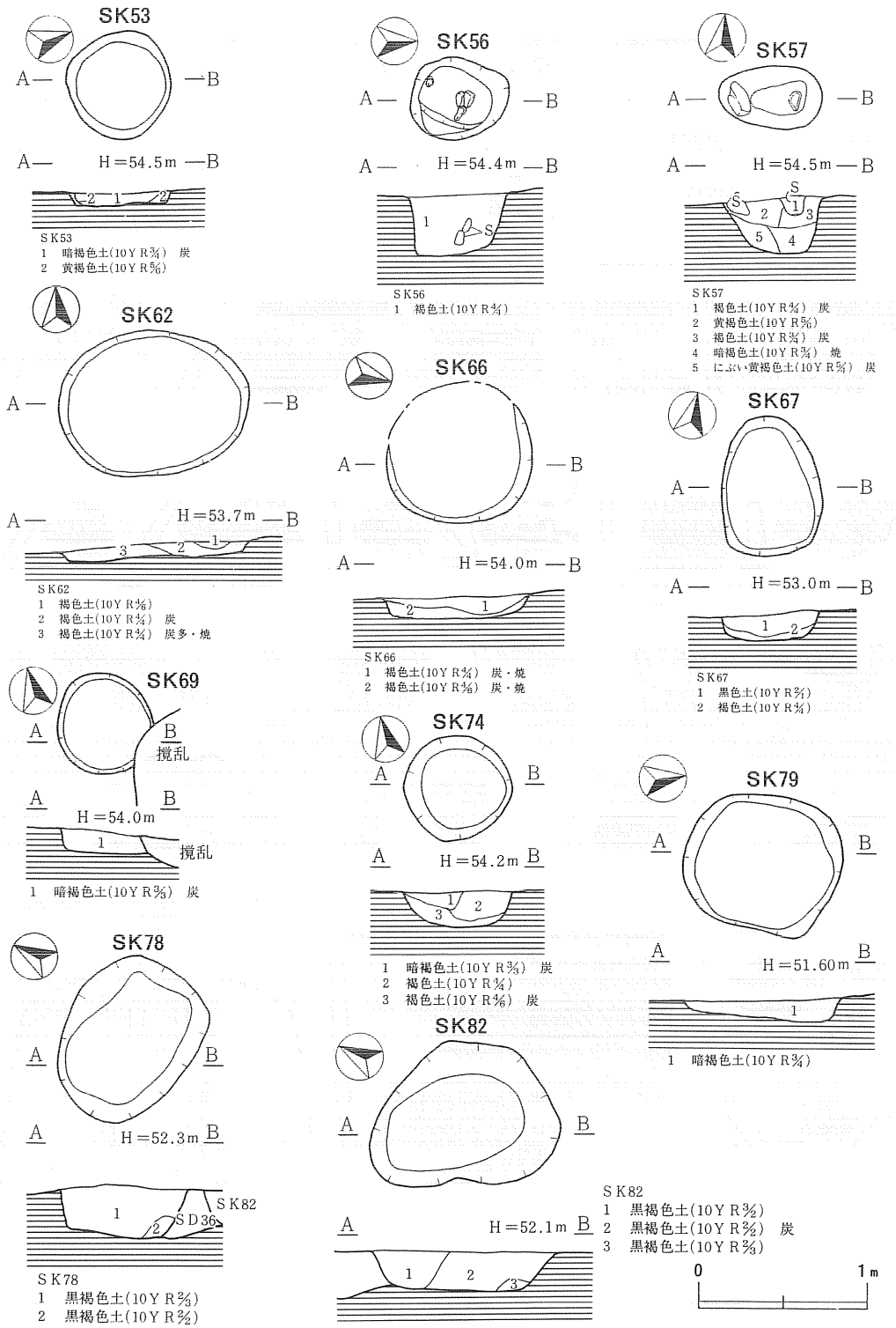
SK41
1　褐色土(10YR4/4)　炭
2　明黄褐色砂利(10YR7/6)

K46
1　暗褐色土(10YR3/4)　炭
2　褐色砂質土(10YR4/6)
3　褐色土(10YR4/6)　焼

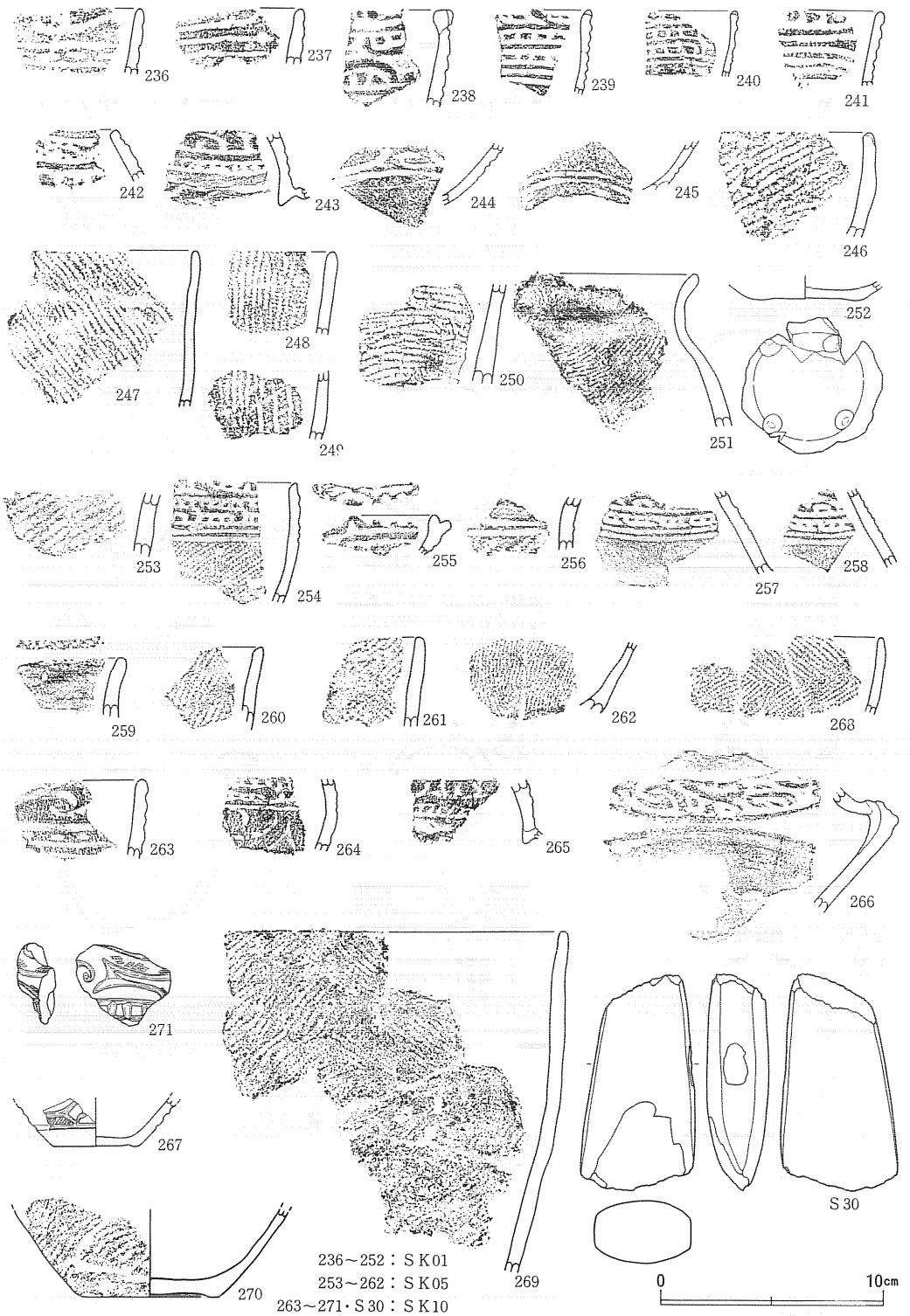
SK47
1　褐色土(10YR4/4)　炭多
2　暗褐色砂質土(10YR3/4)　炭

SK49
1　暗褐色土(10YR3/4)　炭多・焼

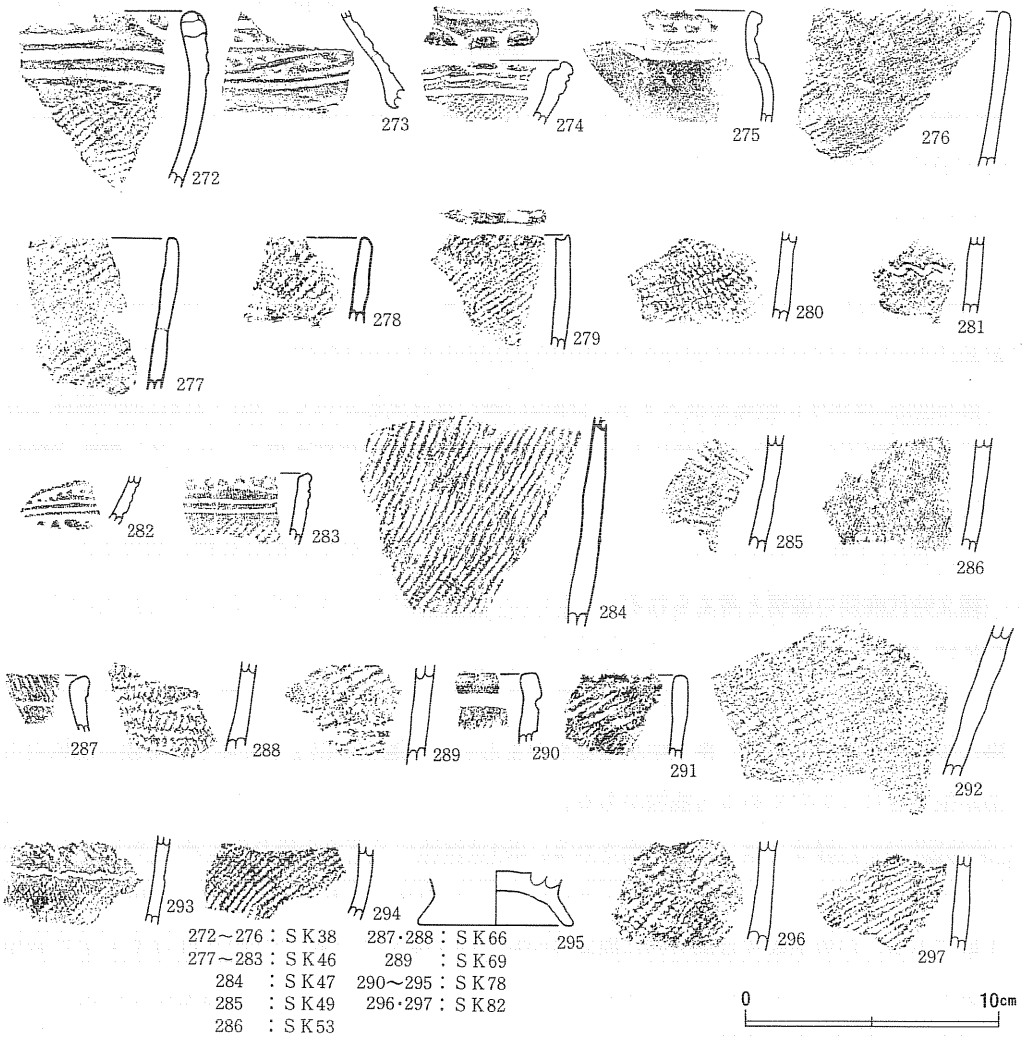
第33図　SK01・05・10・38・39・41・46・47・49



第34図　SK53・56・57・62・66・69・74・78・79・82



第35図　遺構内出土遺物(16)



第36図　遺構内出土遺物(17)

ら遺物は出土していない。

Ｅ類　掘り方は平面形が楕円形を呈し、深さも30cm前後までのものを一括した。本来的にはＡ～Ｃ類に相当するものも含まれている可能性がある。また柱穴用ピットもここに一括した。

ＳＫ01（第33・35図）

平面形は楕円形を呈する。覆土は３層に分けられるが、２層中には焼土及び炭化物が顕著である。覆土中から出土した遺物は比較的多い。

第35図236～241は鉢形土器の口縁部破片である。文様帯には末端のかみ合わない羊歯状文・載痕列・平行沈線が施される。242～244は注口土器の破片である。252は壷形土器の底部であ

り、僅かに内側から押し出される４個の足が付く。246～251は粗製土器の破片である。246～250は深鉢形土器、251は壷形土器である。247の縄文はＲＬ、他はＬＲである。また248・249は条の走行が縦方向であり、250は横である。246の器面には煤状炭化物が付着する。236～245・252はⅣ群、246～251はⅦ群に相当する。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ05（第33・35図）

平面形はほぼ円形を呈する。覆土は３層に分けられたが、１・２層中に少量の炭化物を混入する。

第35図253は胎土に繊維を混入する。255の口縁にはＡ突起が付く。257・258は同一個体である。注口土器の破片であり、破片中央には文様帯の下端に載痕列を巡らせている。259～262は粗製の土器である。259は口縁部破片であるが、口唇上に縄文が施される。それぞれの特徴により、253はⅠ群、254・257・258はⅣ群、255・256はⅤ群、259～262はⅦ群に相当する。

縄文時代晩期の遺構と考えられる。

ＳＫ10（第33・35図）

平面形はほぼ円形を呈する。覆土は９層に分けられるが覆土中央の３層、覆土下部の７・８層に炭化物が顕著である。覆土中からはややまとまった遺物が出土しており、Ｃ類の土坑の上部が削平されたものである可能性がある。

第35図263の口縁部には三叉文が施される。264は体部にＸ字状の磨り消し縄文が施されている。263・264・267は鉢形土器、265・266は注口土器の破片である。268・269は粗製の深鉢形土器である。口縁部破片は部分的に原体の回転方向を変えている。270の底部はやや上げ底風である。このほか磨製石斧１点（Ｓ30）、中空土偶の破片１点（271）が出土している。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ38（第33・36図）

平面形は楕円形を呈する。覆土は３層に分けられ、いずれにも炭化物が混入している。

第36図272・274・275・276は鉢形土器、273は注口土器の破片である。272の口縁部には小さな突起が付く。また273には羊歯状文、275には載痕列が施される。276の縄文はＬＲである。272～275はⅣ群、276はⅦ群である。このほか網代痕を止める底部破片が出土している。

出土遺物から縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ39（第33図）

調査区南西部の低地に位置する。平面形は不整な円形で、断面形はすり鉢状を呈する。覆土はＤ類とした土坑の覆土に類似して、堅くしまっていた。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ41（第33図）

平面形は楕円形を呈する。覆土１層には微量の炭化物が混入する。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ46（第33・35図）

南東側でＳＫ47と切り合うが、本遺構が新しい。平面形は楕円形を呈する。 覆土１層に炭化物が、３層に焼土粒が混入している。遺物は覆土上部から少量出土した。

第36図283の口縁は刻み込みにより小波状を呈する。282には羊歯状文が施される。277～281は粗製土器の破片である。281の口唇上には棒状工具による刺突が巡る。282・283がⅣ群、277～281はⅦ群である。

縄文時代晩期前半の遺構である。

ＳＫ47（第33・36図）

西側がＳＫ46に切られている。平面形は不整な円形を呈する。覆土は２層に分けられ、１層に炭化物が顕著に見られる。覆土上部から少量の遺物が出土した。遺物は細片が多く、１点のみ図示した。第36図284は粗製深鉢形土器の体部破片である。縄文はＬＲ。表面全体に煤状炭化物が付着している。Ⅶ群である。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ49（第33・36図）

南半は調査当初に設定したトレンチにより削平されている。平面形は楕円形を呈する。覆土は１層であり、炭化物が多く混入するほか焼土粒も見られる。覆土上部からは、回転糸切り痕を止める土師器坏の底部が１点出土している。覆土下部から出土した第36図285は粗製土器の破片であり、縄文はＲＬである。Ⅶ群である。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ53（第34・36図）

平面形は円形を呈する。覆土は２層に分けられ１層に微量の炭化物が混入する。遺物は１点出土しただけである。

第36図286は粗製深鉢形土器の破片であり、全体に摩滅が著しい。縄文はＬＲ。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ56（第34図）

平面形は楕円形を呈するが、小型である。遺構中の礫の在り方から柱穴と考えられる。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ57（第34図）

平面形・規模ともにＳＫ56に類似する。遺構上部の西側にやや大きめの石が当てられており、柱穴と考えられる。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ62（第34図）

平面形は、楕円形を呈する。覆土は３層分けられるが、３層中に炭化物焼土粒の混入が顕著である。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ66（第34・35図）

平面形は円形を呈する。覆土は２層に分けられ、ともに炭化物・焼土粒が混入する。覆土中から少量の遺物が出土した。

287は口縁端部に小さい刻みが施され、その下を沈線が巡る。288は前段合撚ＬＲの縄文であるが、条が横走している。287がⅣ群、288がⅦ群である。

縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ67（第34図）

平面形は卵形を呈する。覆土は２層に分けられるが、層中に混入物は認められない。また遺構内から遺物は出土しなかった。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ69（第34・36図）

平面形は円形を呈する。覆土は１層で炭化物が少量混入する。遺物は少量出土したが細片が多く１点のみ図示した。第36図289は粗製深鉢形土器の破片で、縄文はＬＲで、Ⅶ群に相当する。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ74（第34・35図）

平面形は円形を呈する。覆土は３層に分けられる。１・３層中に炭化物が混入する。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ78（第34・36図）

ＳＤ36を切って掘り込まれている。平面形は略方形を呈する。覆土は２層に分けられるが、共に明瞭な混入物は認められない。覆土中から少量の遺物が出土し、６点を図示した。

第36図290は口縁部を巡る１本の沈線が施される。291～294は粗製土器の破片である。深鉢形を呈するものが多いと考えられるが、294の断面はやや丸みを帯びている。291の口唇は平坦

に調整される。縄文はいずれもＬＲである。295は台付き土器の台部である。いずれもⅦ群に相当する。

縄文時代晩期の遺構と考えられる。

ＳＫ79（第34・36図）

平面形は隅丸方形を呈する。覆土は１層で暗褐色を呈し、全体にしまりが無い。遺構内から遺物は出土していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ82（第34・36図）

平面形は不整な楕円形を呈する。ＳＫ78同様にＳＤ36を切っている。覆土は全体に黒褐色を呈するが、混入物や土のしまり具合により３層に分けられる。出土遺物は少なく、Ⅶ群に相当する粗製深鉢形土器の破片だけある。

第36図296・297の縄文はＬＲである。Ⅶ群に相当する。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ96（第25図）

ＳＫ50に重複するが本遺構が新しい。平面形は不整な円形を呈し、覆土は３層に分けられるが、覆土２層は地山ブロックである。縄文土器の細片が少量出土したが、図示していない。

遺構の時期は特定できなかった。

ＳＫ97（第15図）

東側でＳＫ22と重複するが、本遺構が古い。平面形は隅丸方形を呈する。土坑底面の凹凸が著しい。覆土は３層に分けられ、１層中に少量の炭化物が混入する。遺構内から遺物は出土していない。

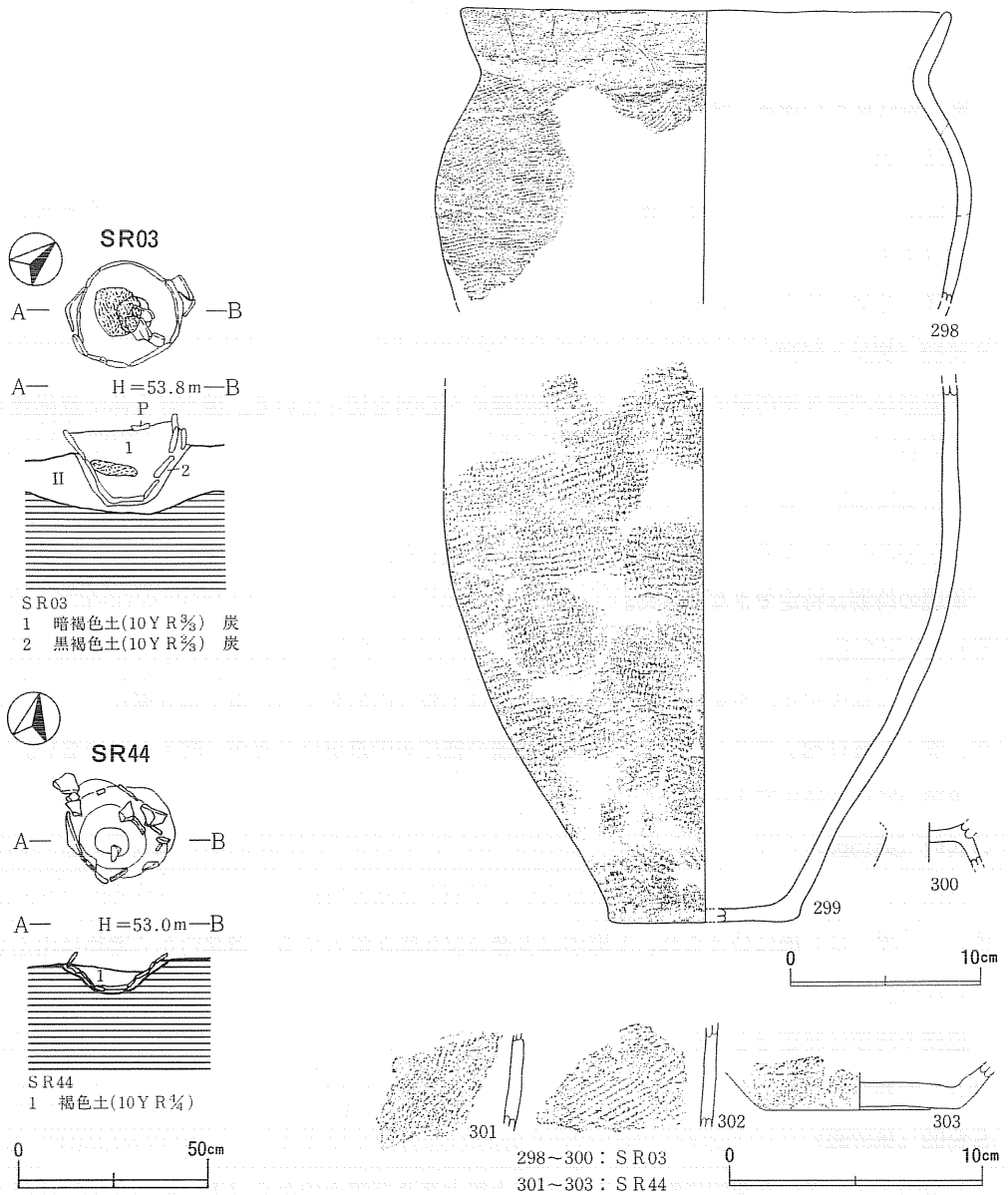
遺構の時期は特定できなかった。

（５）土器埋設遺構

ＳＲ03（第37図）

ＬＱ46グリッドのⅡ層中に検出した。埋設土器上部及び覆土中からは復元可能な別個体の土器が出土しており、この遺構に伴うものと考えられる。掘り方は土器より一回り大きい程度で径30㎝、深さ15㎝程である。地形の窪地を利用して構築されており、地山を掘り込んではいない。覆土中にブロック状の炭化物が認められた。

299は埋設されていた土器である。口縁部を欠くが、体部上半に最大幅をもつ器形を呈したものであろう。縄文はＬＲである。表面の体部にわずかに煤状炭化物が付着する。298は埋設土器上部から出土したものである。体下半部を欠く甕形土器である。口縁部は工具により横方向に整形されているが、内面の整形は雑で粘土の輪積痕が明瞭に残る。器表面の肩部に煤状炭



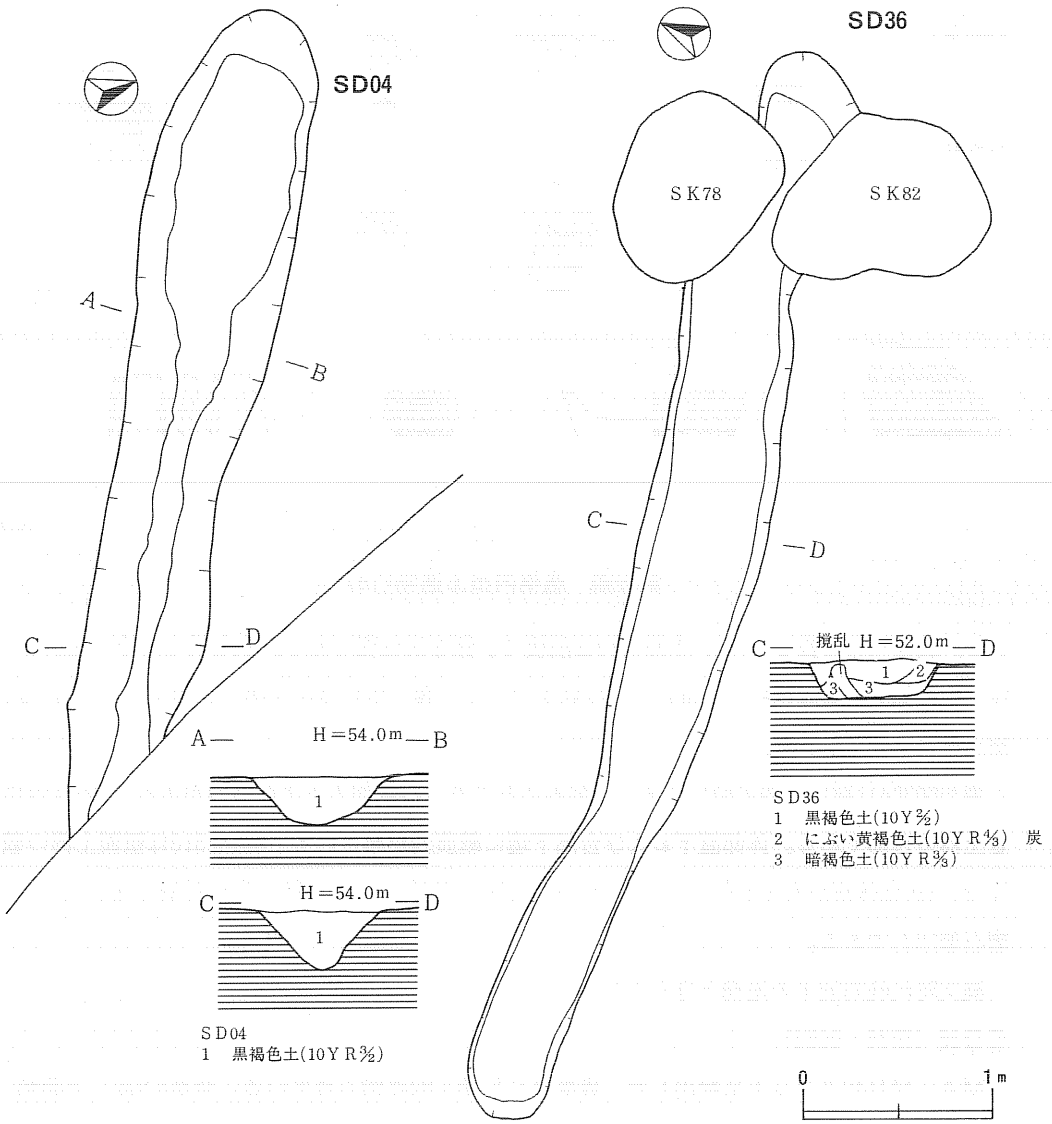
第37図　SR03・04・遺構内出土遺物(18)

化物が付着する。縄文はＬＲである。300は覆土中から出土した。台付き土器の底部で、無文である。

298の器形から、弥生時代の遺構と考えられる。

ＳＲ44（第37図）

ＬＲ42グリッドで地山上面の精査によって検出した。上部の削平および木の根による破壊により、土器も底部付近しか残存しない。土器を埋設するための掘り方は径28cmの円形で深さ10



第38図　SD04・36

cm弱である。埋設されていた土器は細片が多く復元できなかった。

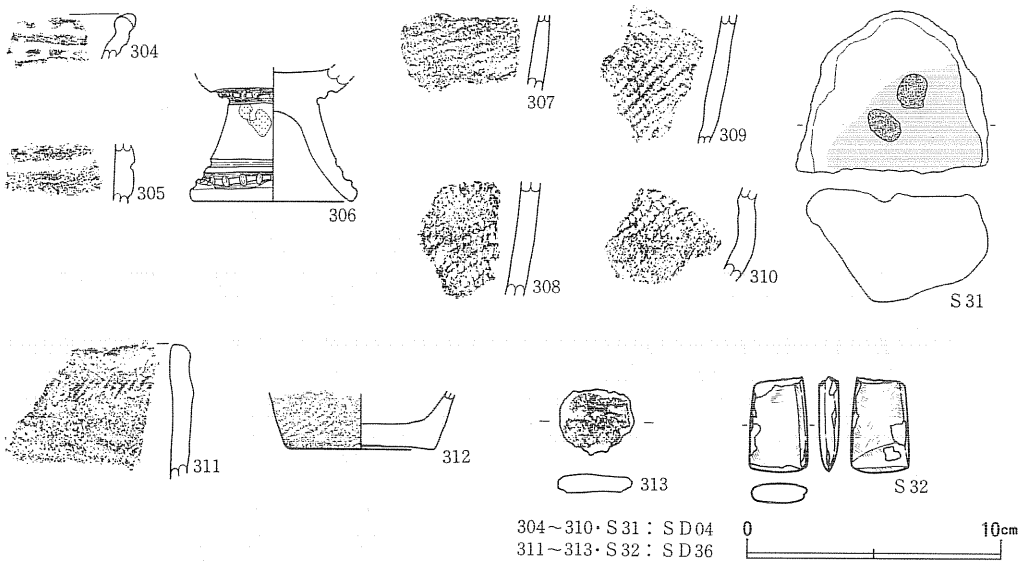
第37図301・302がその土器の体部、303が底部の破片である。粗製の深鉢形土器であり、縄文は前段合撚ＬＲ。Ⅶ群である。

遺構の時期は特定できなかった。

（６）溝状遺構

ＳＤ04（第38・39図）

調査区中央北よりのＬＯ46・ＬＰ46・47グリッドで検出した。遺構は調査区外東側に続いて



第39図　遺構内出土遺物(19)

いる。調査部分の長さ4.5m、上面幅70cm前後で、深さ20cm程である。長軸方位はＮ－82°－Ｗ。中央部分の底面は狭く断面形がＶ字状を呈する。覆土中には炭化物が少量混入している。出土遺物は少なかった。

第39図304は鉢形土器の破片である。刻み込みのある口縁部の下に載痕列が巡る。306は台付き土器の台部である。体部直下および台部下端に載痕列が施される。307～310は粗製土器の破片で、310は体部が丸みを帯びるものである。306の表面と307の内面に朱が付着する。Ｓ31は磨石兼凹石である。

縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

ＳＤ36（第38・39図）

ＭＡ・ＭＢ49グリッドに検出した。東端はＳＫ78・82に切られている。全長5.8m、上面幅60cm前後、底面幅40cm前後、深さ20cmである。長軸方位はＮ－70°－Ｅである。底面が平坦に作られており、壁はやや角度をもって立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。覆土は色調によって３層に分けられるが、いずれも混入物は少ない。遺物は縄文土器が少量出土した。

第39図311・312はいずれもⅦ群のものである。ほかに円盤状土製品１点、小型磨製石斧１点が出土している。

出土遺物によって遺構の時期を特定することはできないが、遺跡内全体の遺構配置の点から縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

2　遺構外出土遺物

遺物は主に調査区南東部の遺構集中部分とその周辺から多く出土した。遺物包含層であるⅡ層の残存する部分は狭く、Ⅰ層中からの出土が多い。また、20ｍ以上も離れて接合した遺物もあり、すでに現位置から大きく動かされたものも多いと考えられる。遺物には土器・土製品・石器・石製品がある。総量はコンテナで34箱である。

（１）土器

出土した遺物の中で最も量が多く、コンテナで22箱ほどである。小破片が多く器形までわかるものは少ない。出土土器に層位差・地点差はとらえられない。このため胎土・文様などにより、Ⅰ～Ⅶ群に分類した。このうち、主体となるのはⅥ群とした晩期前半の土器である。また、明瞭にⅥ群に分類される土器はＳＩ84に埋設されたもの１点であるため、ここではⅠ～Ⅴ・Ⅶ群について記述する。

第Ⅰ群土器（第40図314～319・321・322）

縄文時代早期・前期の土器を一括した。早期の土器はＳＫ15の覆土中から、貝殻腹縁文の施された細片が１点（第23図110）出土しただけである。前期の土器は、胎土に繊維を含み、器厚のやや厚い土器である。314は口縁部、ほかは体部の破片である。いずれの破片も胎土中に繊維を混入するが、混入量は少ない。また、いずれの破片にも文様は認められない。縄文は314はＬＲ、315～318・321はＲＬであり、322は羽状縄文である。このうち316は節が縦方向に揃っている。また、319の原体は組み紐である。各縄文の特徴から前期前葉に位置付けられるものであろう。

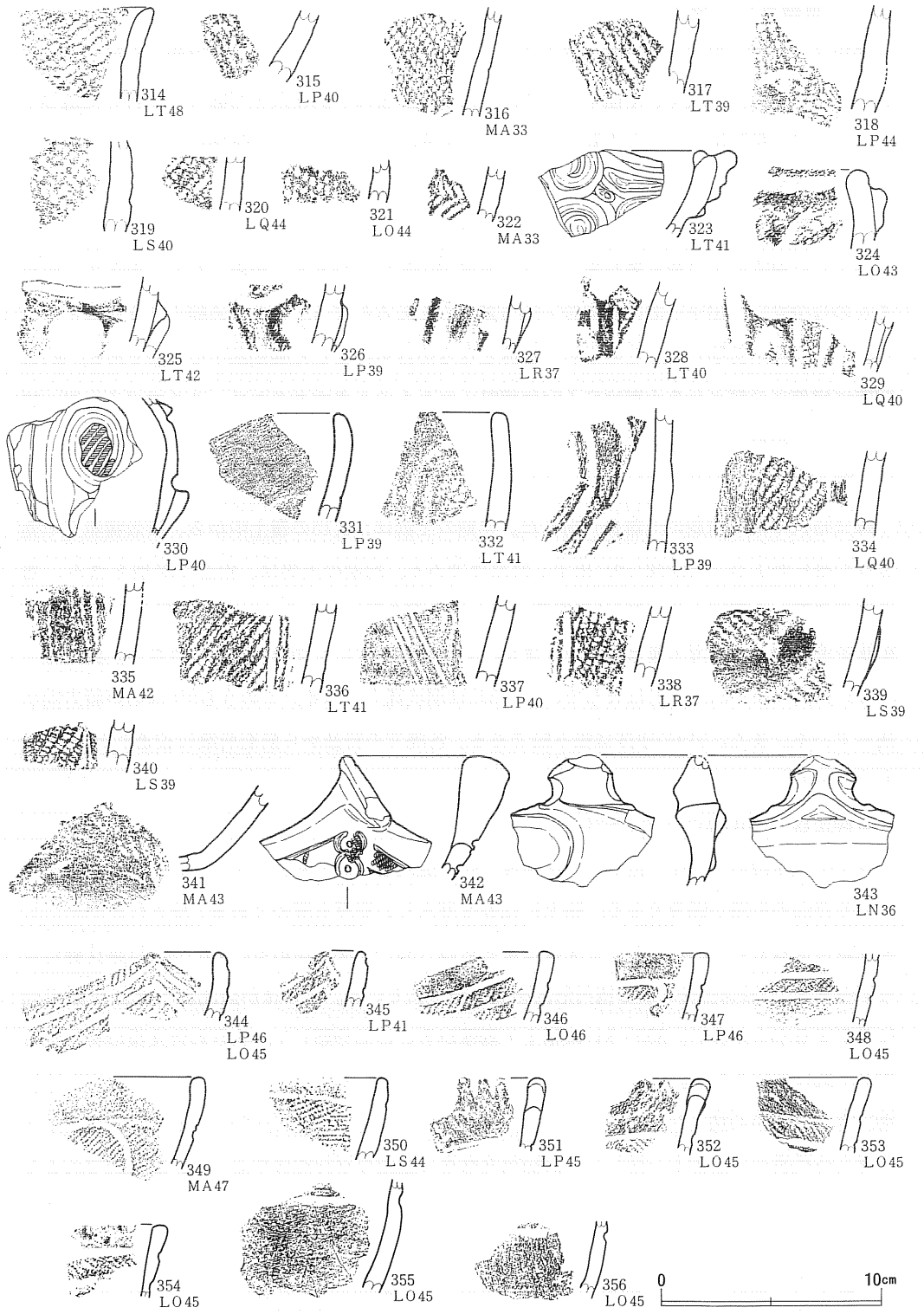
第Ⅱ群土器（第40図320・323～341）

縄文時代中期の土器を一括した。遺構覆土中に混入した破片も多いが、それらには二次加熱による器面の剝落が顕著である。胎土には砂を混入し、器厚も厚めである。施される文様には、隆沈線によるもの（323～330）と沈線によるもの（331～338）がある。323・330は隆沈線による渦巻き文、332は沈線による楕円形区画文が施されている。このほか隆沈線・沈線が縦方向に垂下するものが多い。320・341は胎土・器厚からここに分類した。施された文様の特徴から大木９式に比定される。

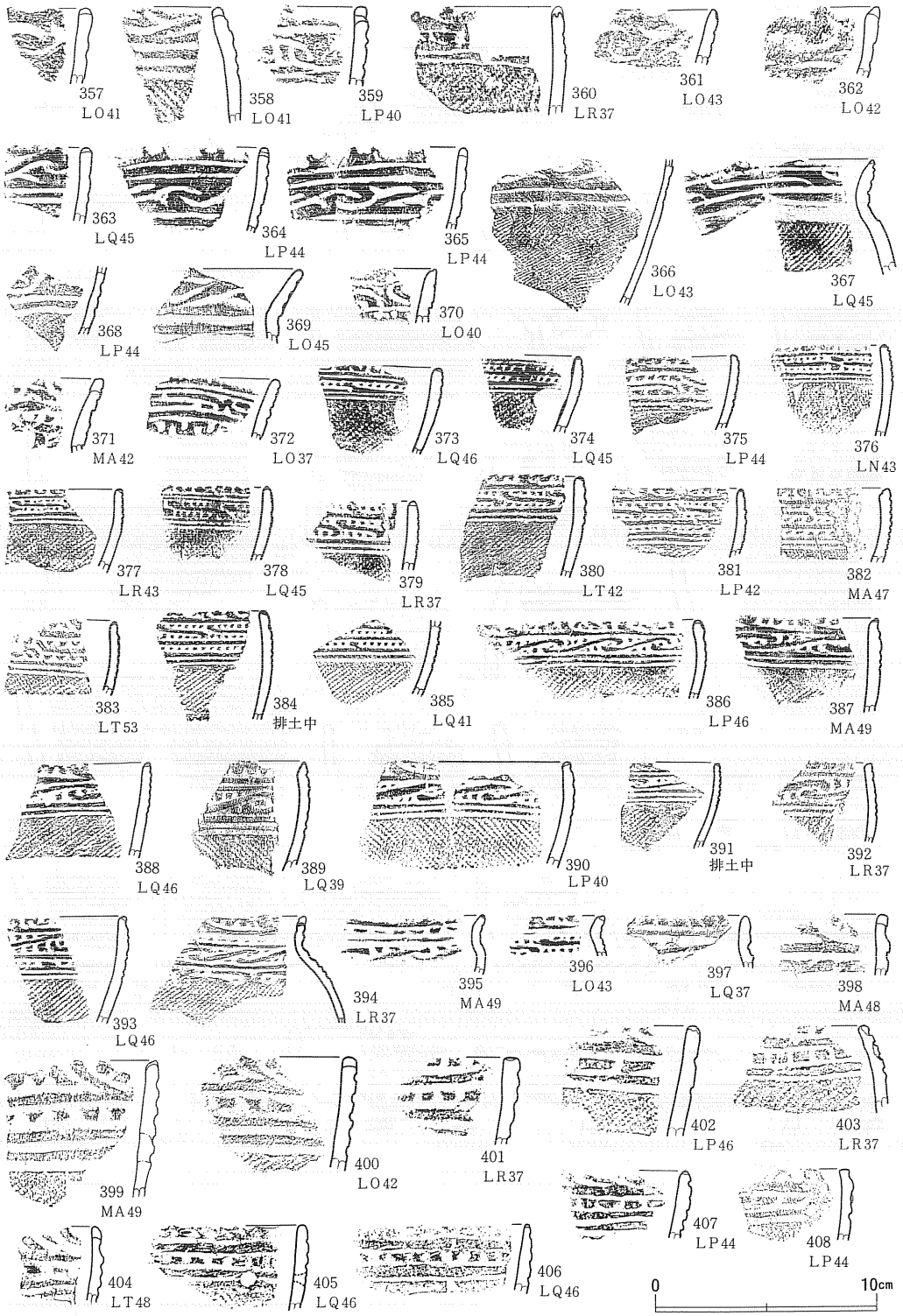
第Ⅲ群土器（第40図342～356）

縄文時代後期の土器を一括した。口縁部文様帯に数段の平行沈線を巡らし、立体的で大きな突起の発達する後期中葉の土器と、平行沈線間の縄文帯が広がり、突起が平面的で小さくなる後期後葉の土器がある。前者の胎土は僅かに砂粒を含むが全体に緻密である。これに対し後者では胎土中の砂粒が多く、器表面にも砂粒が表れている。

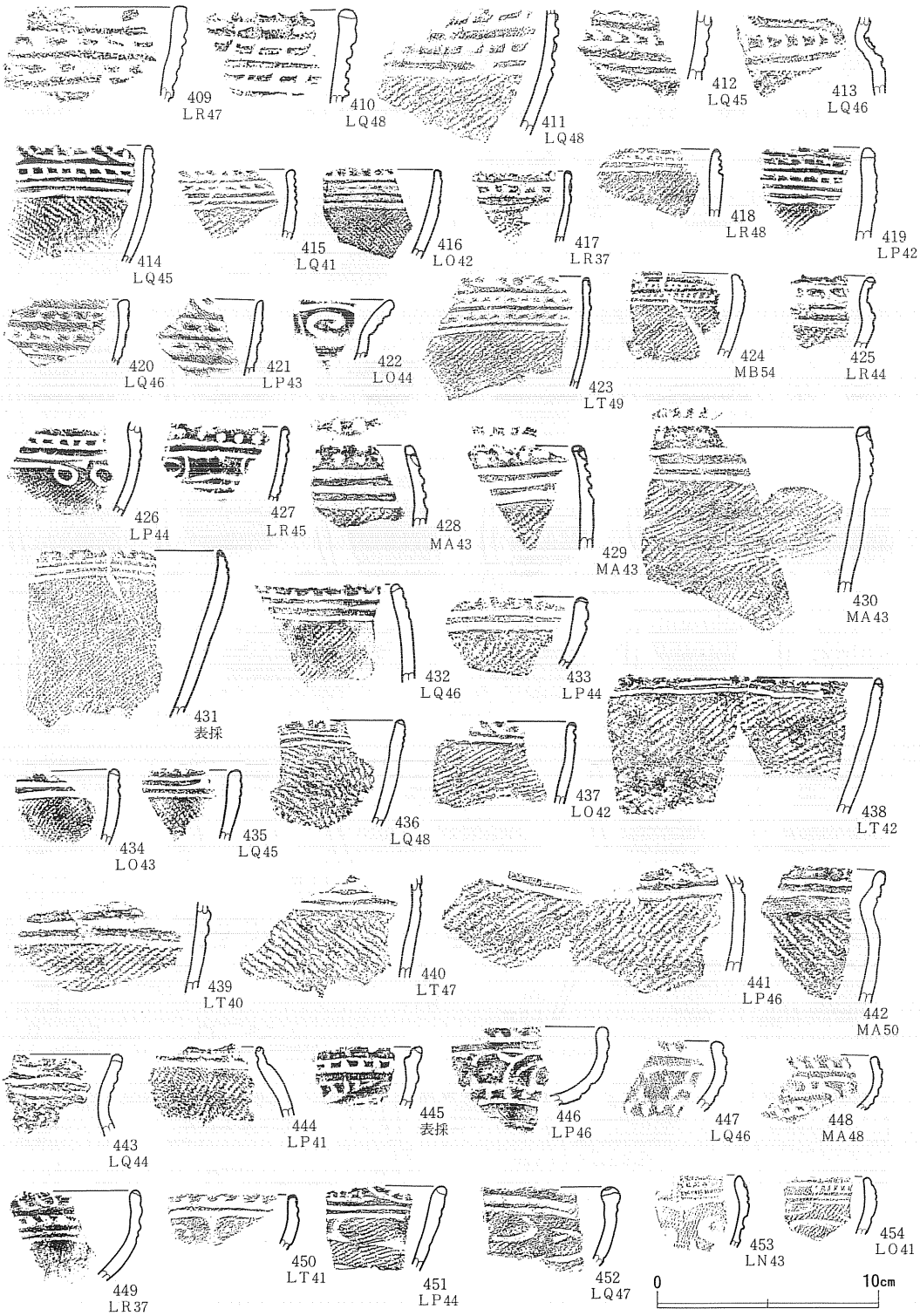
342の口縁部には、肥厚した円盤状の突起が円周に直交するように付されている。突起内に



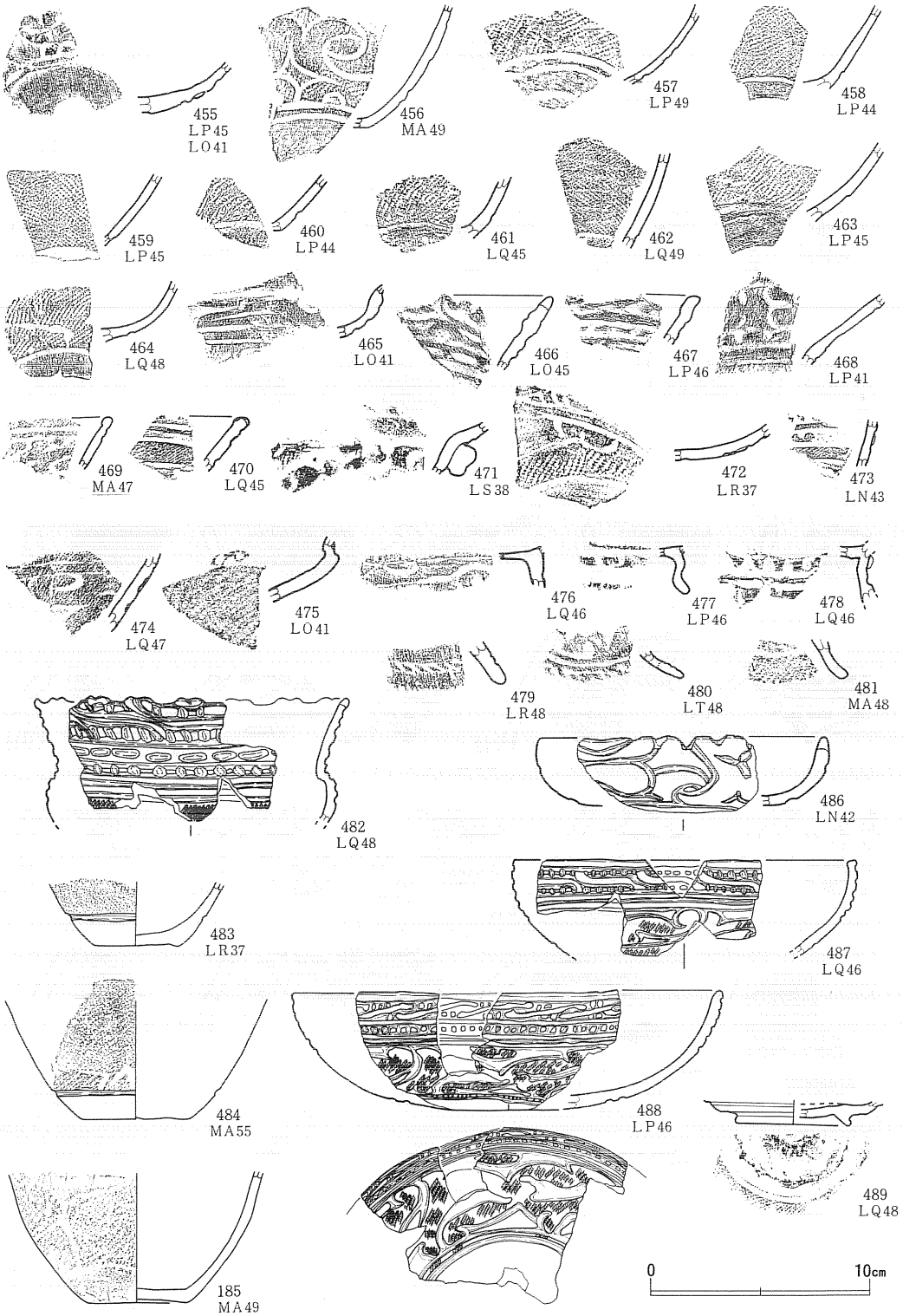
第40図　遺構外出土遺物（１）



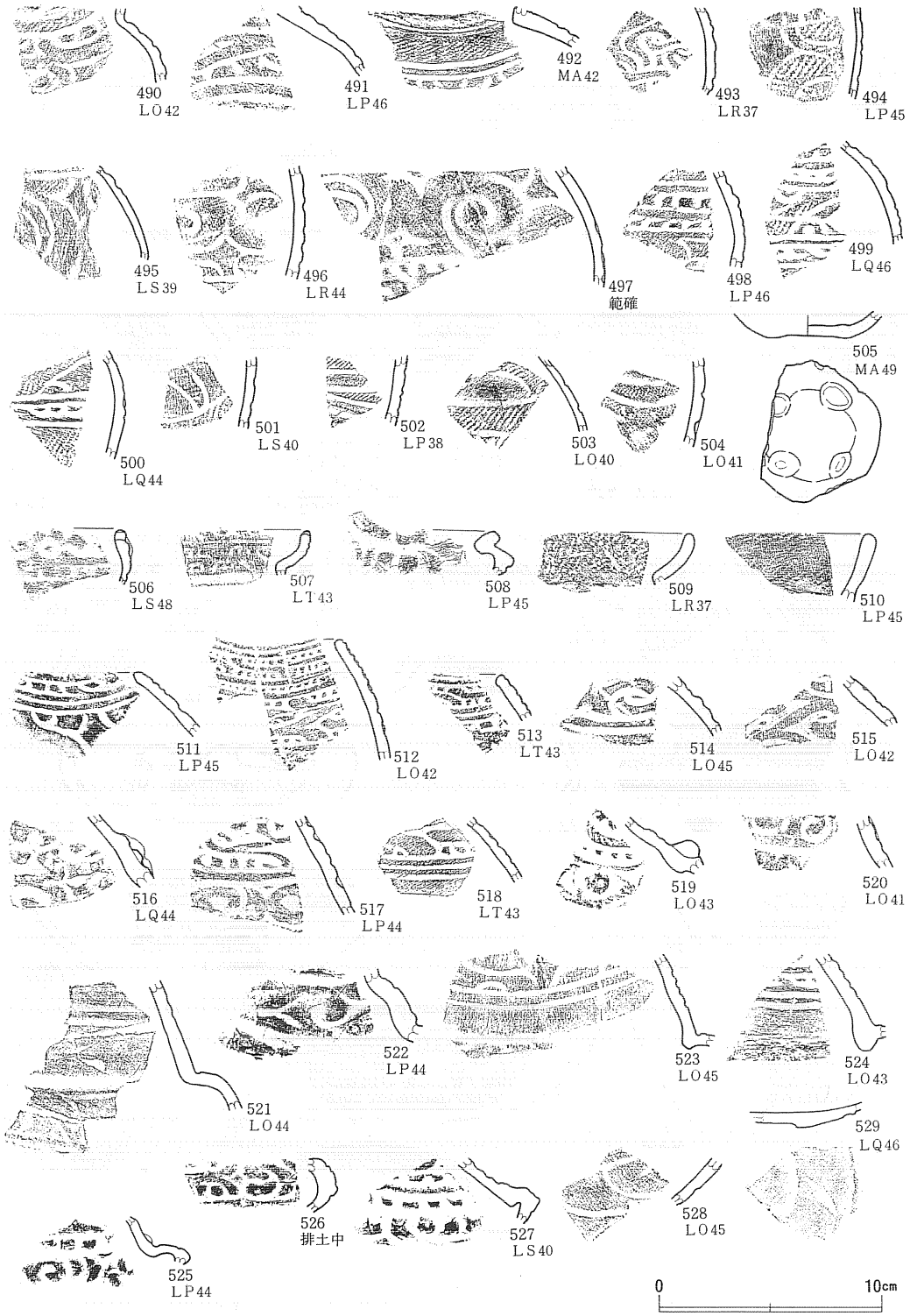
第41図　遺構外出土遺物（２）



第42図　遺構外出土遺物（３）



第43図　遺構外出土遺物（４）



第44図　遺構外出土遺物（５）

は沈線が緩く渦を巻く。342～348の口縁部には２～３段の平行沈線が認められ、さらに347には上下の沈線を連絡する沈線がある。351・352は平板な突起に縦方向の刻みが施されている。355・356は体部下半の破片であり、断面が僅かに丸みを帯びている。

第Ⅳ群土器（第41～44図）

縄文時代晩期前半の土器である。鉢形土器・皿形土器・台付土器・壷形土器・注口土器など多様な器種が存在する。施される文様の特徴によって２類に分けられる。

１類（第41図357～369・第43図465・476・486・第44図522）

沈線による三叉文の施されるものである。359・367のように明瞭な三叉文をとらないものについてもとりあえず一括した。いずれも破片で器形全体については不明であるが、深鉢形土器・鉢形土器・皿形土器・台付土器・注口土器がある。

357～362は器厚がやや厚く、胎土に砂粒を多く含む。深鉢形土器の破片である。363～368は鉢形土器の破片である。器面の調整が内外ともに丁寧に行われている。367は口縁部に屈曲を持つ形を呈するものである。476は台部である。幅の狭い部分に玉抱き三叉文が施されている。486は皿形を呈する。口縁には大きなＢ突起が付される。底部付近を区画する沈線までの、やや広い文様帯には沈線による曲線的な文様が施されるが、沈線の交差する部分に三叉文が見られる。沈線に縁どられる一方の区画内は、浅く彫られた状態になっている。522は注口土器の破片である。

２類（第41図371～第43図464・466～475・477～485・487～第44図521・523～529）

羊歯状文の施されるものである。口縁部文様帯に平行沈線が巡るだけのものも一括した。器種には深鉢形土器・鉢形土器・皿形土器・壷形土器・注口土器がある。

器厚が厚く胎土に砂粒をやや多く混入し、器面も粗い398～404・409～413・428～430・437～441は深鉢形土器と考えられる。413・441は屈曲部を持ち、他と器形を異にしている。口縁は小波状を呈するが、399・400・407・409は羊歯状文風に作っている。口縁部文様帯にはやや大きめの載痕列が施される398～413と、平行沈線を巡らせる428～430がある。前者には409・410のように載痕列が２段になるものがある。また後者では平行沈線と口縁端部の間に円形の刺突が施されるものがある。

371～397・405～408・414～427・431～438・442～463・482～485は鉢形を呈するものであろう。胎土は緻密で砂粒の混入も少なく、器の表面は非常にきめ細かい。また器面が良好に研磨されたものもある。器厚は薄い。器形は口縁部が若干内湾するものが多いが、395・425・442のように屈曲を有するものもある。また446～454は小型で椀状の器形が想定されるものである。口縁部文様帯に施される羊歯状文には、末端のかみ合うもの（386～394）と末端のかみ合わないもの（373～385）があり、また載痕列だけが施されるもの（414～421・423～425）、平行沈

線の施されるもの（431～438）もある。この口縁部文様帯と体部を区画する沈線は１～２本巡らされている。482のやや幅の広い口縁部から強く屈曲して丸みを帯びる体部に続く器形は、底部に台の付く可能性がある。文様は、口縁端からやや幅広く末端のかみ合わない羊歯状文、横楕円の刺突文帯、体部への屈曲部分に載痕列、そして縄文部との区画沈線がある。口縁にぬける羊歯状文の一端は口縁上のＢ突起中央に続いている。456は体部下半の破片であるが、体部にはＸ字状の磨り消し縄文が施され、その下端を沈線で区画している。445～455も体部に文様が施される。445・448・455には部分的に羊歯状文が見られ、447・450～454には磨り消し縄文が展開する。457～463・483～485は体部下半に沈線による区画線が施されるものである。483～485の底部は上げ底になっている。

466～473・487・488は皿形を呈するものである。466・468・471のように口縁部が大きく外傾するものと、487・488のように口縁部が直立するものがある。後者の口縁部文様帯には、487が末端のかみ合わない羊歯状文、488が末端のかみ合う羊歯状文が施される。ともに体部から底部まで磨り消し縄文による文様が施されている。477～481は台部の破片であり、477～479には載痕列が認められる。

490～505は壷形土器である。上下を沈線で区画した口縁部文様帯内には磨り消し縄文によりＸ字状の文様が展開し、部分的に羊歯状文の刻み部分が組み込まれている。506～529は注口土器である。口縁部は511～513のように内傾するものと、506～510のように椀状に広がる部分が取り付くものがある。口縁部および頸部には多段化した羊歯状文や磨り消し縄文が展開する。

第Ⅴ群土器（第45図530～561）

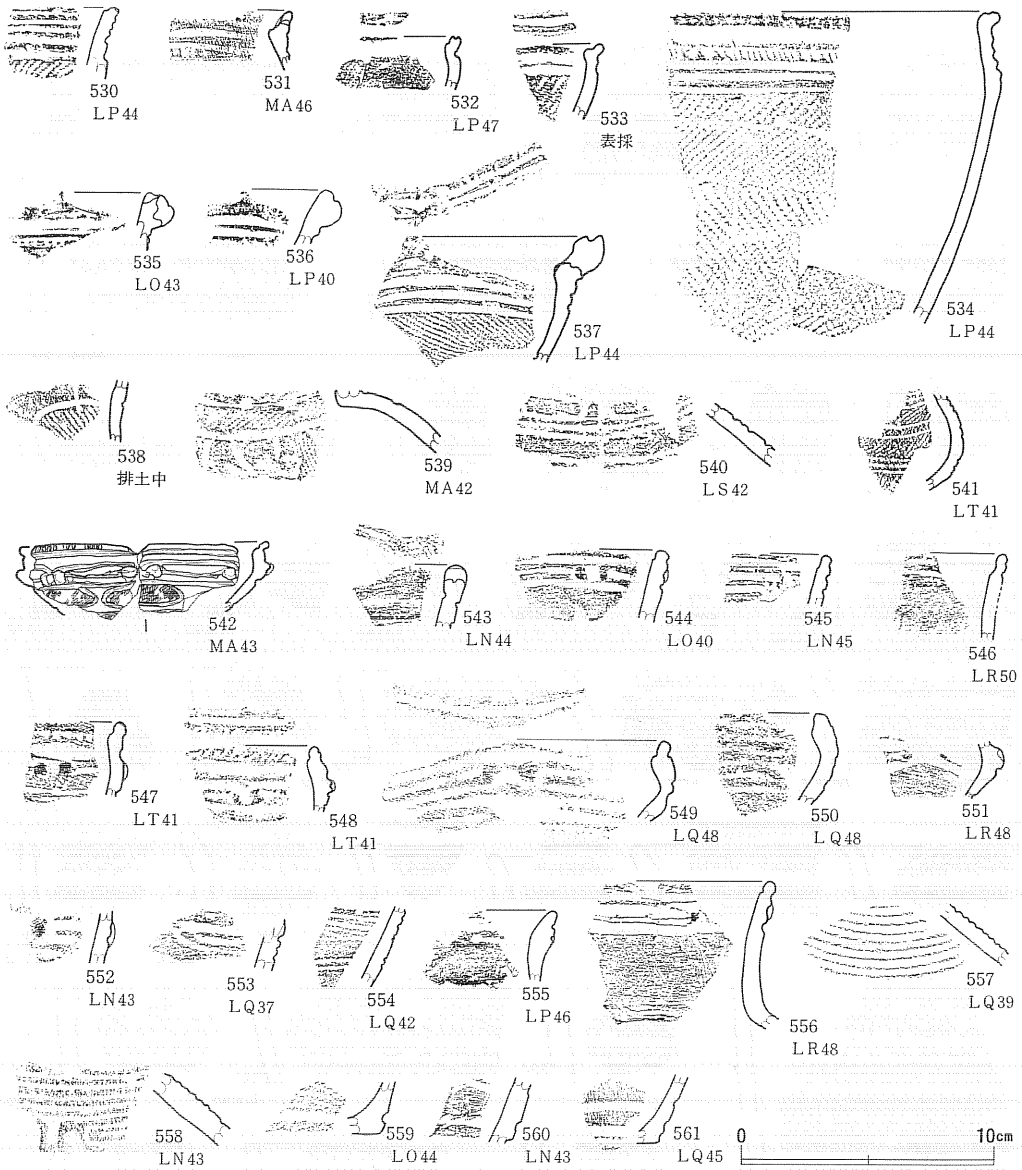
縄文時代晩期後半の土器を一括した。鉢形土器・壷形土器がある。胎土はⅣ群に近いものも含まれるが、全体に細砂粒を含み、器表面のザラついたものが多い。

口縁部文様帯に平行沈線が施される530～537の内、535～537にはＡ突起が付されている。539～541は壷形土器である。体部には磨り消し縄文により538・539に見られるような曲線的な文様を描くものと、540・541に見られるような方形の区画を取るものがある。544～558は工字文の施される土器である。544・547～549・552・556は沈線の途切れる部分に小さな瘤を張り付けて工字文を作っている。556～558は壷形土器の破片であり、556は口頸部、557・558は肩部の破片である。559～561は鉢形土器の底部付近に沈線を巡らした破片である。体部上半の文様は不明であるが、胎土に細かい砂粒を含み、若干ザラついた器面の状態からここに一括した。

第Ⅶ群土器（第46図562～第49図674）

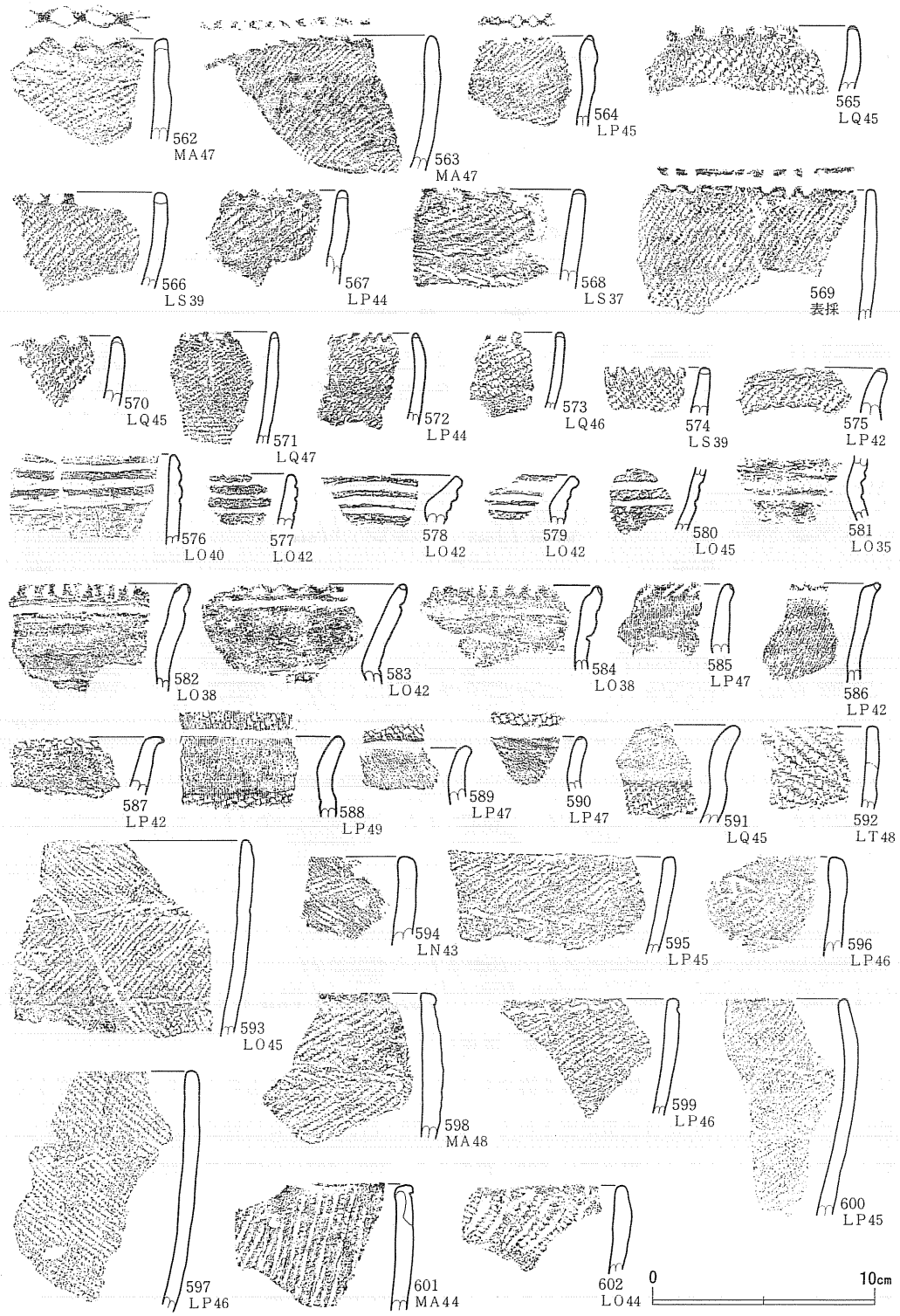
縄文だけが施されたもの・無文土器・底部および時期を特定できない破片を一括した。多くはⅣ～Ⅵ群に伴うものと考えられる。深鉢形（鉢形）土器・台付土器・壷形土器などがある。

562～630・642～644・663・665～671は深鉢形ないしは鉢形を呈する土器である。562～575

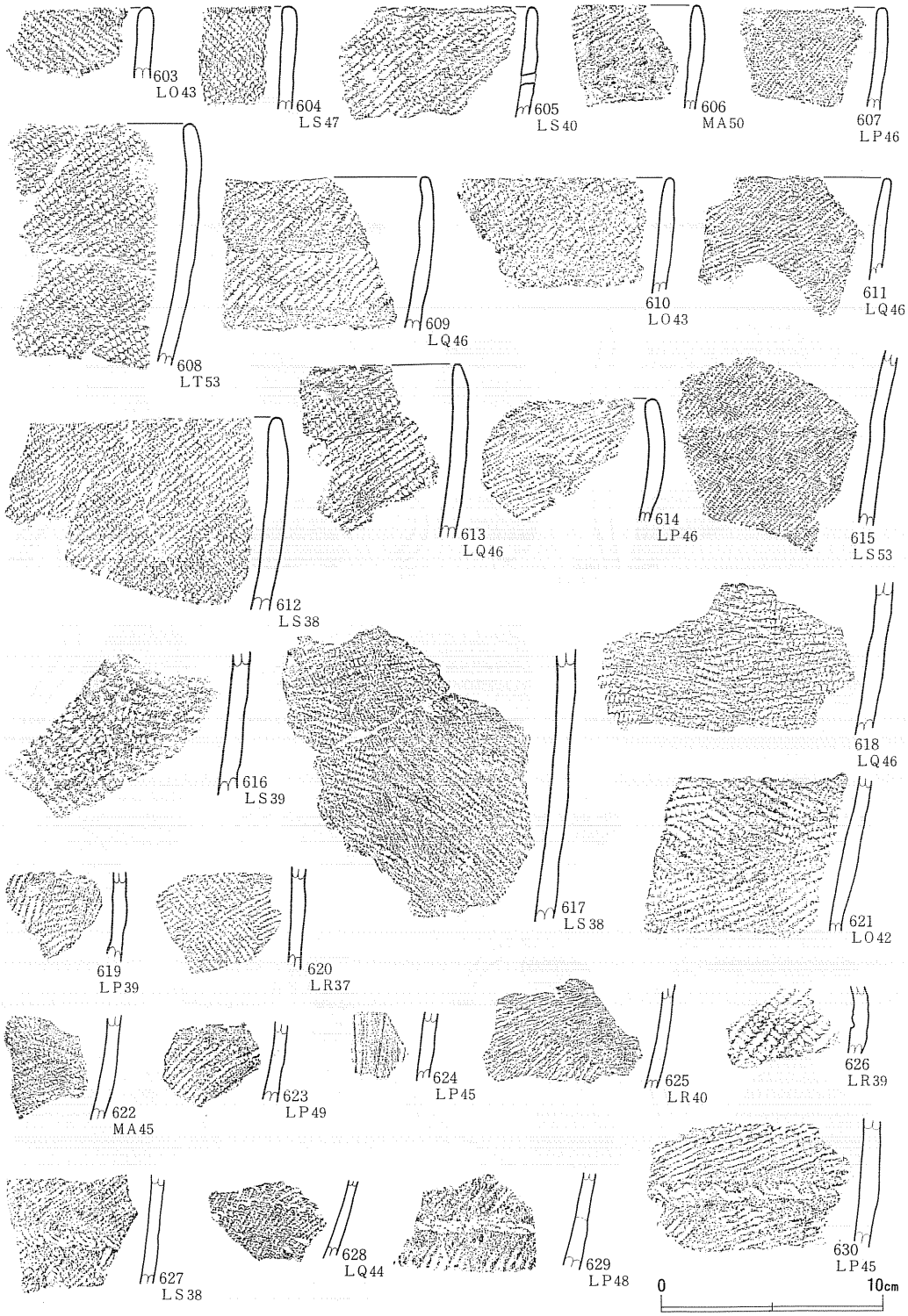


第45図　遺構外出土遺物（６）

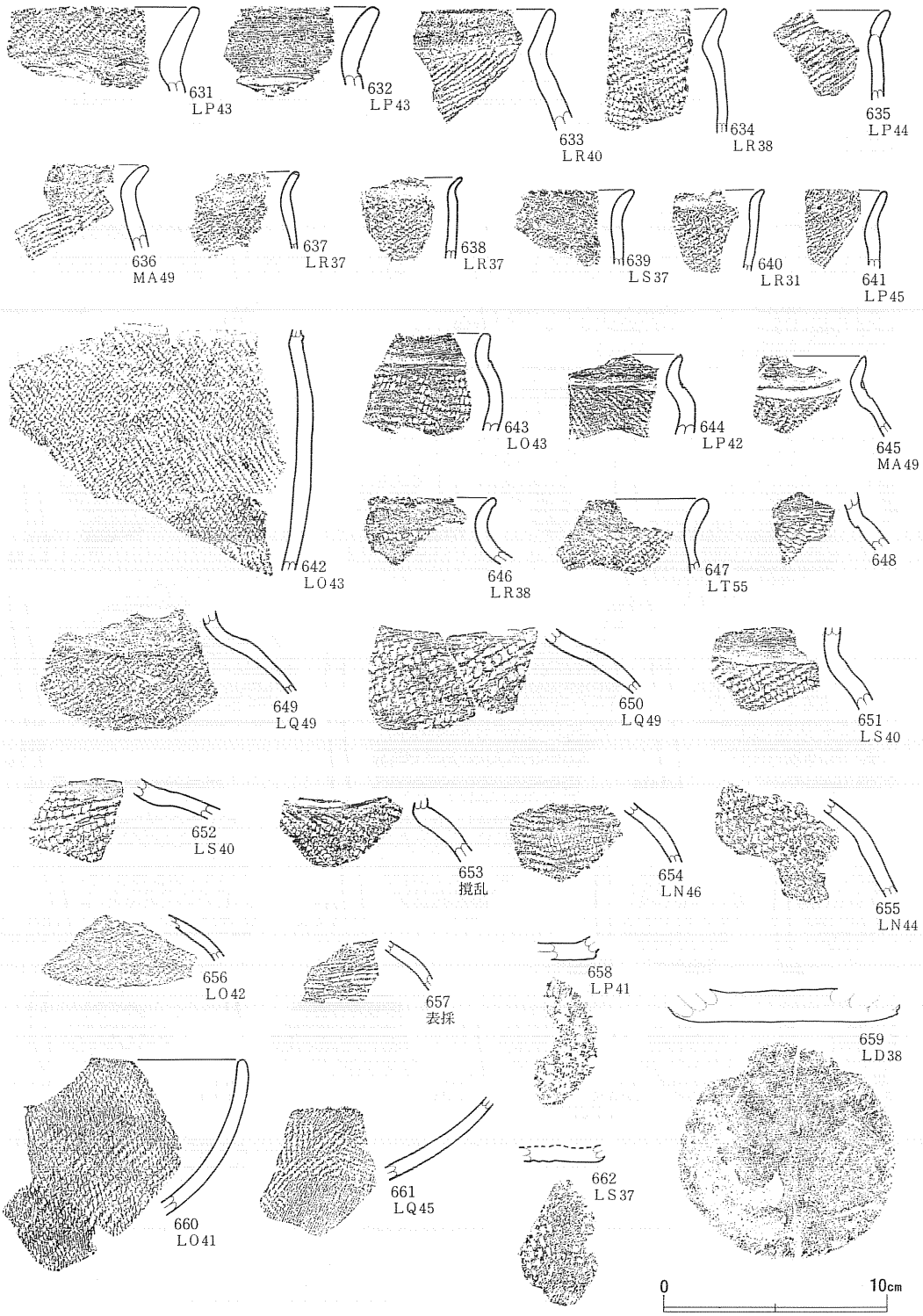
は口縁部であるが、３個一組の刻みを施すものや、小波状を呈するものであり、Ⅳ群に伴う可能性が強い。571～580には沈線が施されている。578・579のように口縁部付近の内面が肥厚し、断面三角形状になる点はⅤ群の531・533に類似する。582～587は口縁端部に刻みが施され、588～590には口唇上に縄文が施される。前者は直線的に外傾する口頸部から屈曲して体部に続く器形をなすものであり、後者は592を除き口縁部が緩く外傾するものである。器形・口縁端部の特徴からⅤ・Ⅵ群に伴う可能性がある。631～644は小型の土器であり、口縁部が外傾する器形を呈する。縄文はＬＲであり、口縁部が無文のものが多い。645～657・664は壷形を呈す



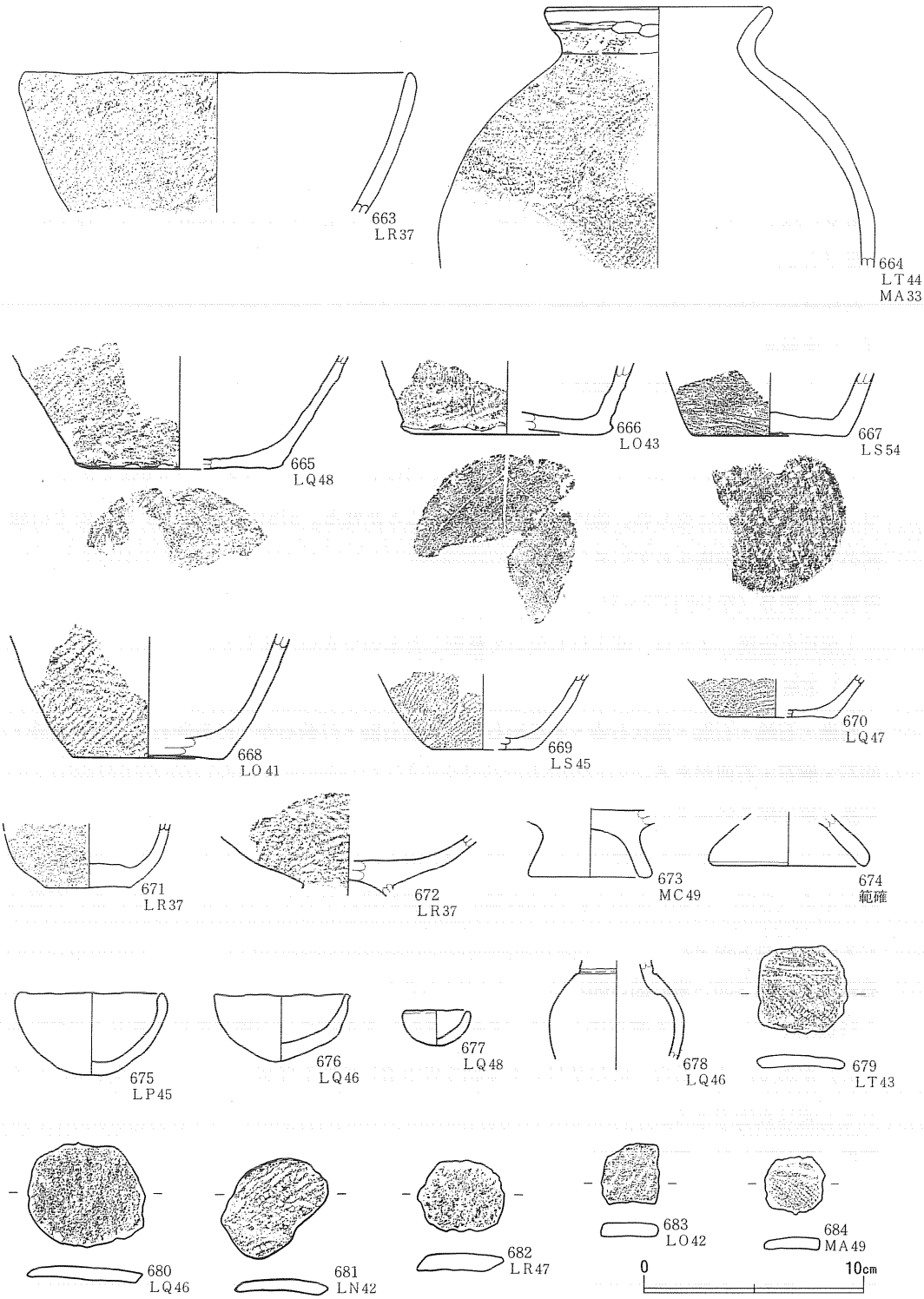
第46図　遺構外出土遺物（７）



第47図　遺構外出土遺物（８）



第48図　遺構外出土遺物（９）



第49図　遺構外出土遺物(10)

るものであり、648～657・664の肩部破片では内面の整形が雑である。660・661は鍋状の器形を呈している。672は丸みを帯びた体部に台が付く。673・674は無文の台部である。673に比べ674は外に開く形である。593～630の縄文だけが施された破片の中で、618・621のように条の横走するものはＳＲ03の299に共通する特徴であり、Ⅵ群に伴う可能性がある。このほか595～597のように縄文がＬＲのものが多く、また595～598・627～630のように綾絡文の施されるものも多い点と、606・626に顕著な前段合撚ＬＲがやや多く見られる点はⅦ群とした土器全般の特徴である。

底部資料の内659・666には木葉痕、658・662・665・667には網代痕が見られる。

（２）土製品

ミニチュア土器・円盤状土製品がある。

ミニチュア土器（第49図675～678）

４点出土した。675～677は小さな椀状のもので口径3.0～6.5㎝、器高1.5～4.0㎝である。手づくねによるものと見られ、器内外に指頭状のへこみが残る。678は壷形を呈するもので口縁部の下端に沈線が施されている。

円盤状土製品（第49図679～684）

土器片の全周、または一部を打ち欠いて整形したもので６点出土した。

（３）石器

石鏃・石錐・石匙・箆状石器・不定形石器・鍬状石器・打製石斧・打製礫石器・磨製石斧・凹石・磨石・石皿がある。

石鏃（第50図Ｓ33～Ｓ55）

23点出土した。基部を欠損するＳ33・34・54を除き、凹脚のもの（Ｓ35～Ｓ37）と有茎のものがある（Ｓ38～Ｓ48）がある。Ｓ52の基部には着柄時のアスファルトが残っている。石質はいずれも頁岩である。

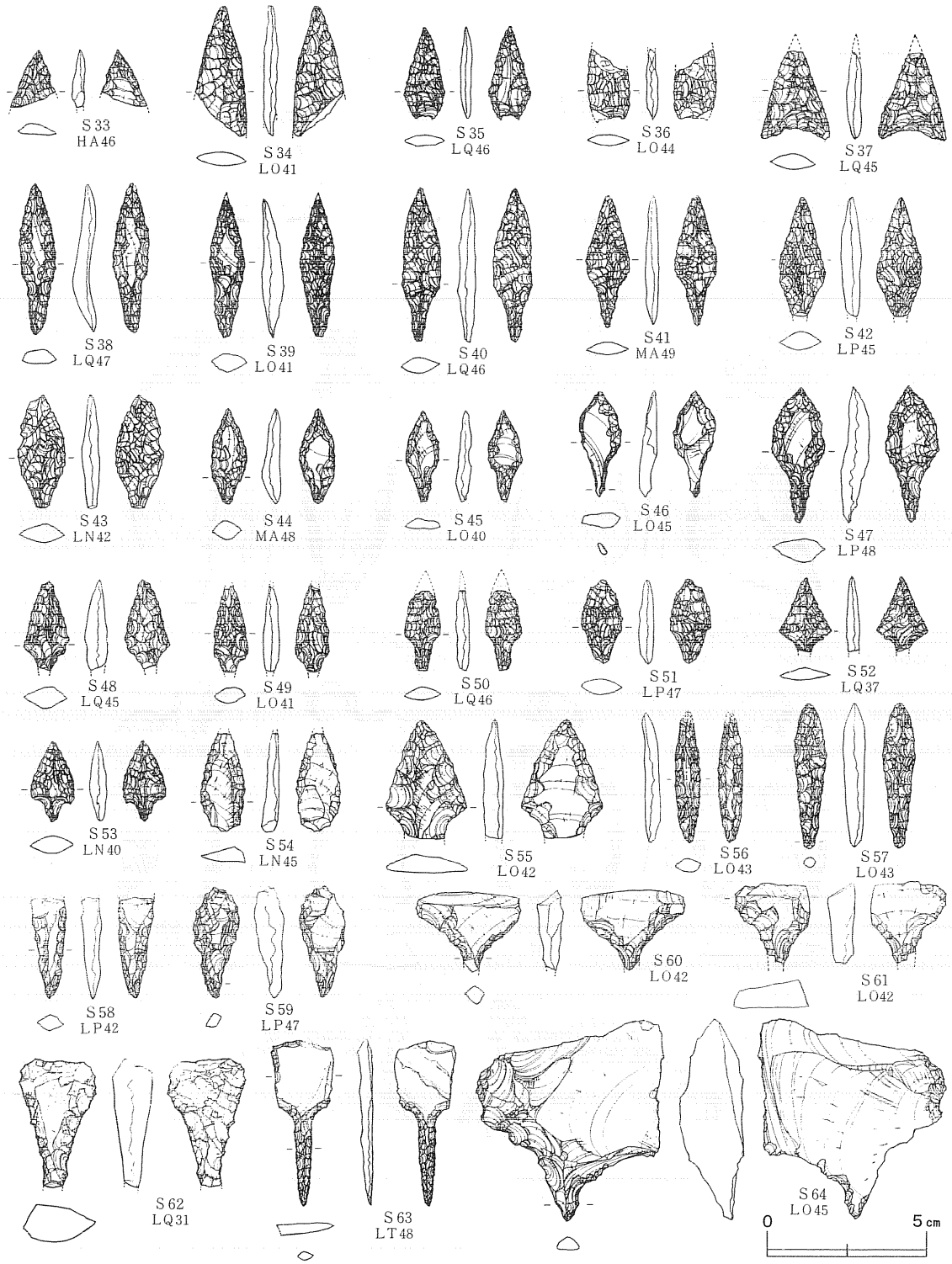
石錐（第50図Ｓ56～第51図Ｓ66）

11点出土した。つまみ部を持つもの（Ｓ60～Ｓ64）と全体の形が棒状を呈するもの（Ｓ56～Ｓ59）がある。またＳ65・66は素材とする剥片の末端に錐部を作出しているものである。いずれも石質は頁岩である。

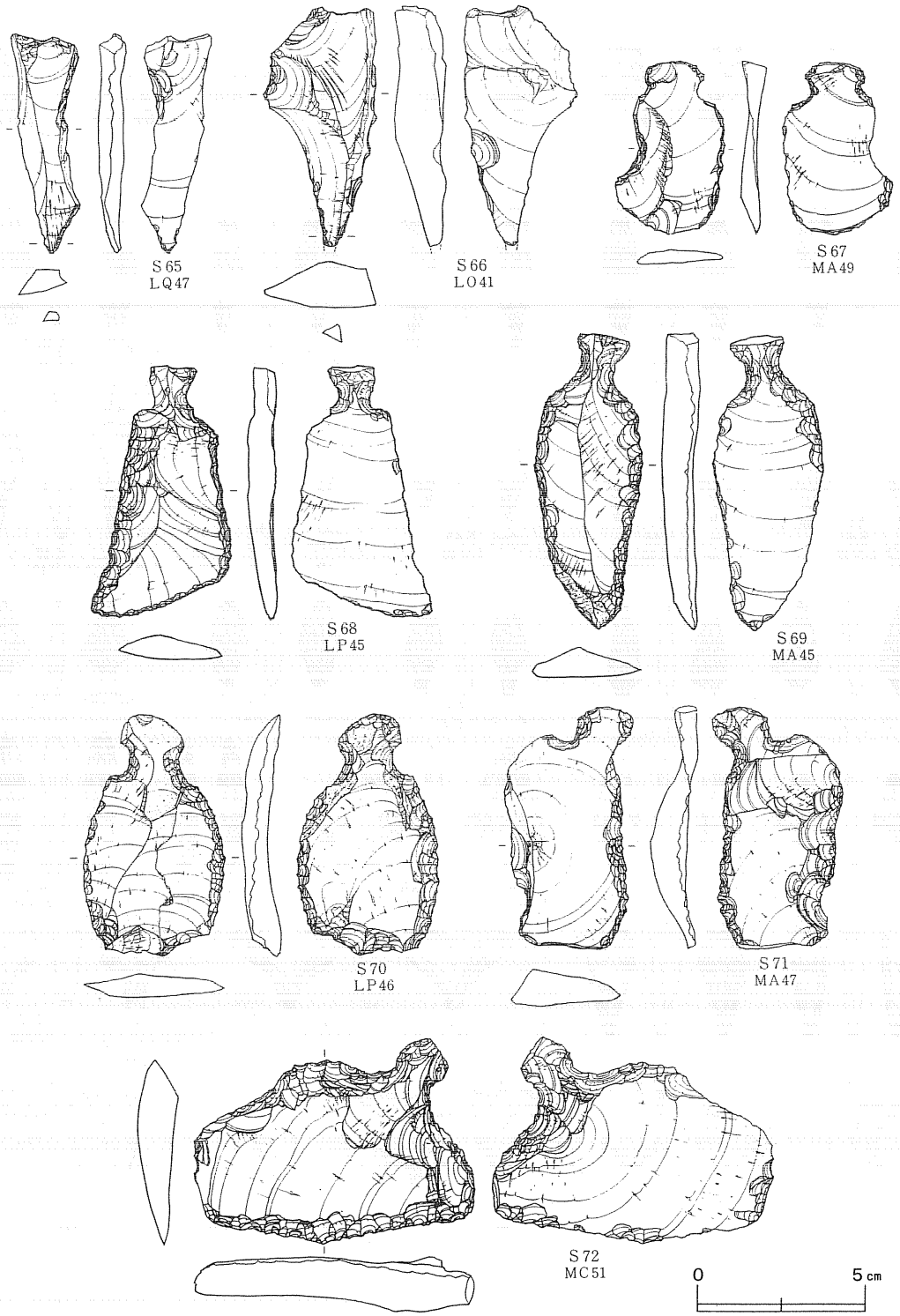
石匙（第51図Ｓ67～第53図Ｓ91）

25点出土した。縦型（Ｓ67～Ｓ71）と横型（Ｓ72～Ｓ91）の２種類がある。また、刃部は直線的になるものが多いが、Ｓ87～89は孤状を呈する。Ｓ26のつまみ部にはアスファルトが付着する。いずれも石質は頁岩である。

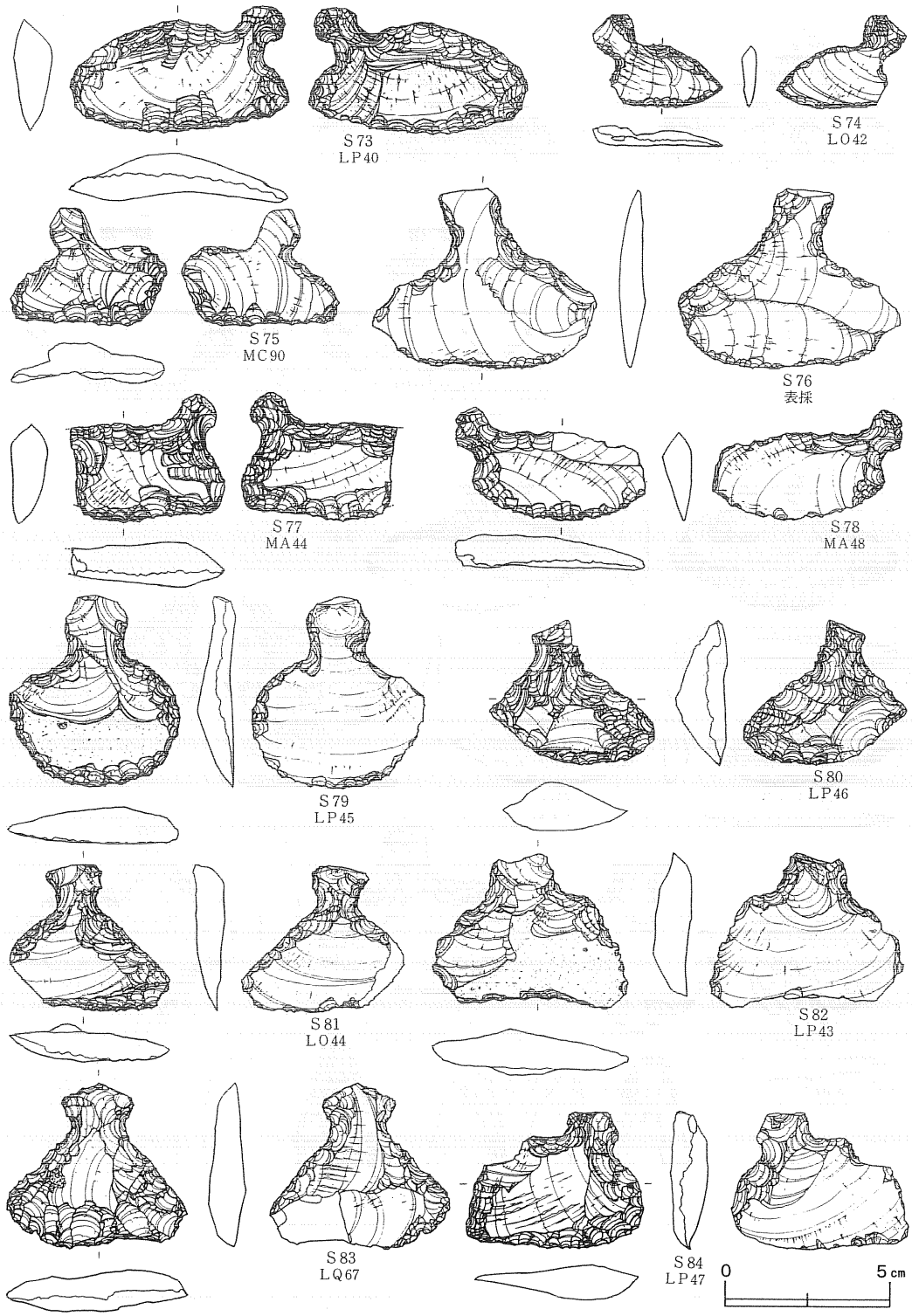
箆状石器（第53図Ｓ92～第55図Ｓ107）



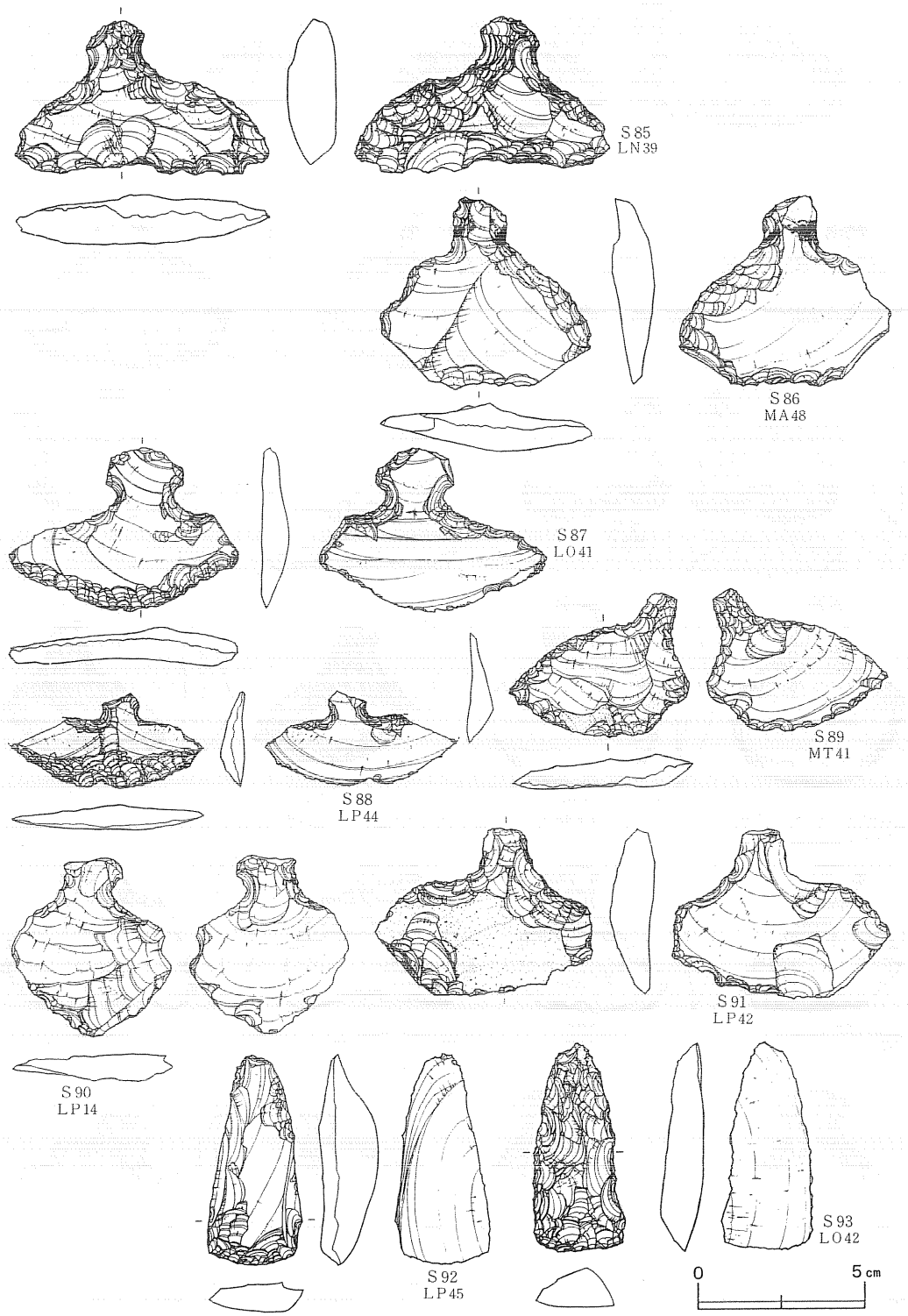
第50図　遺構外出土遺物(11)



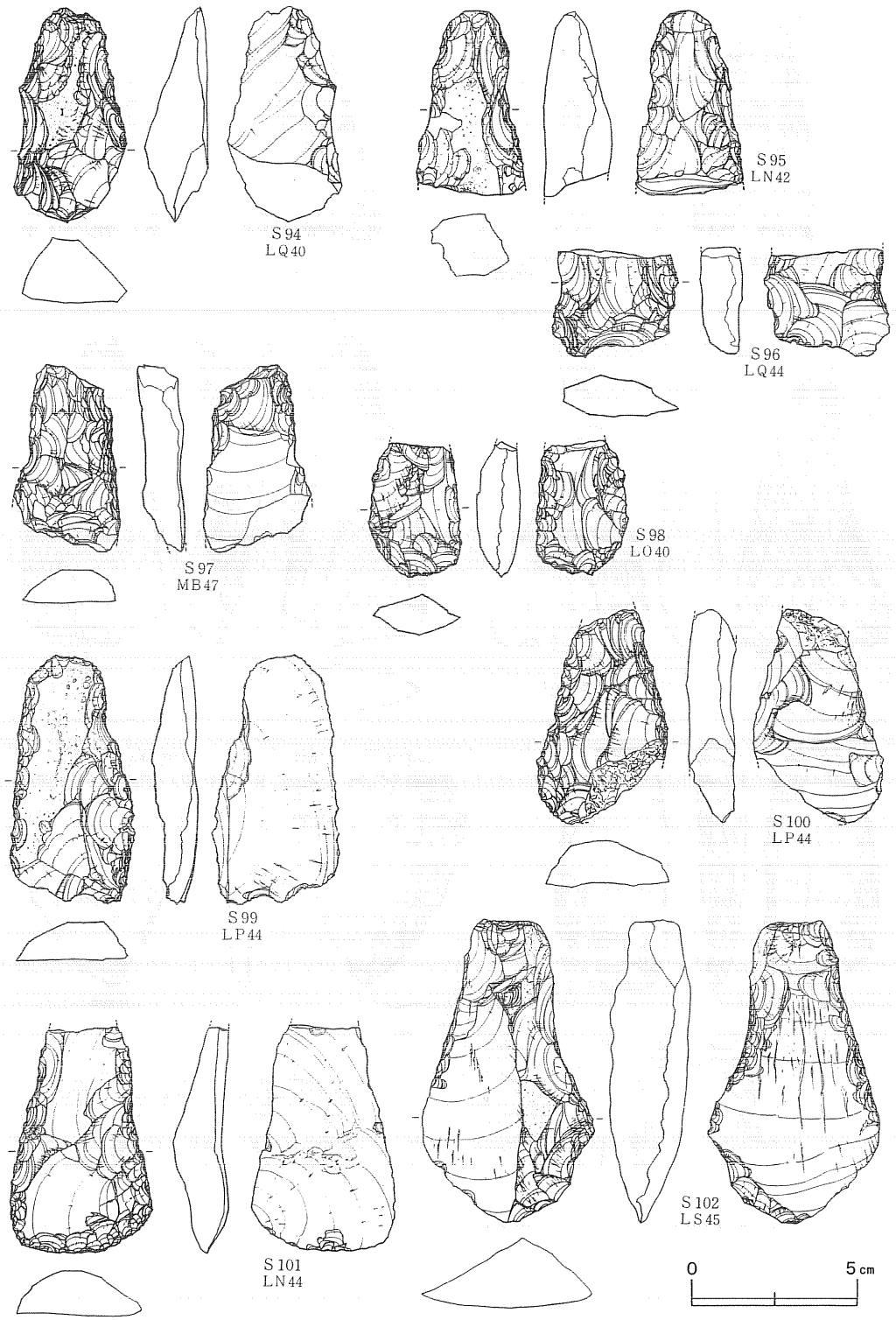
第51図　遺構外出土遺物(12)



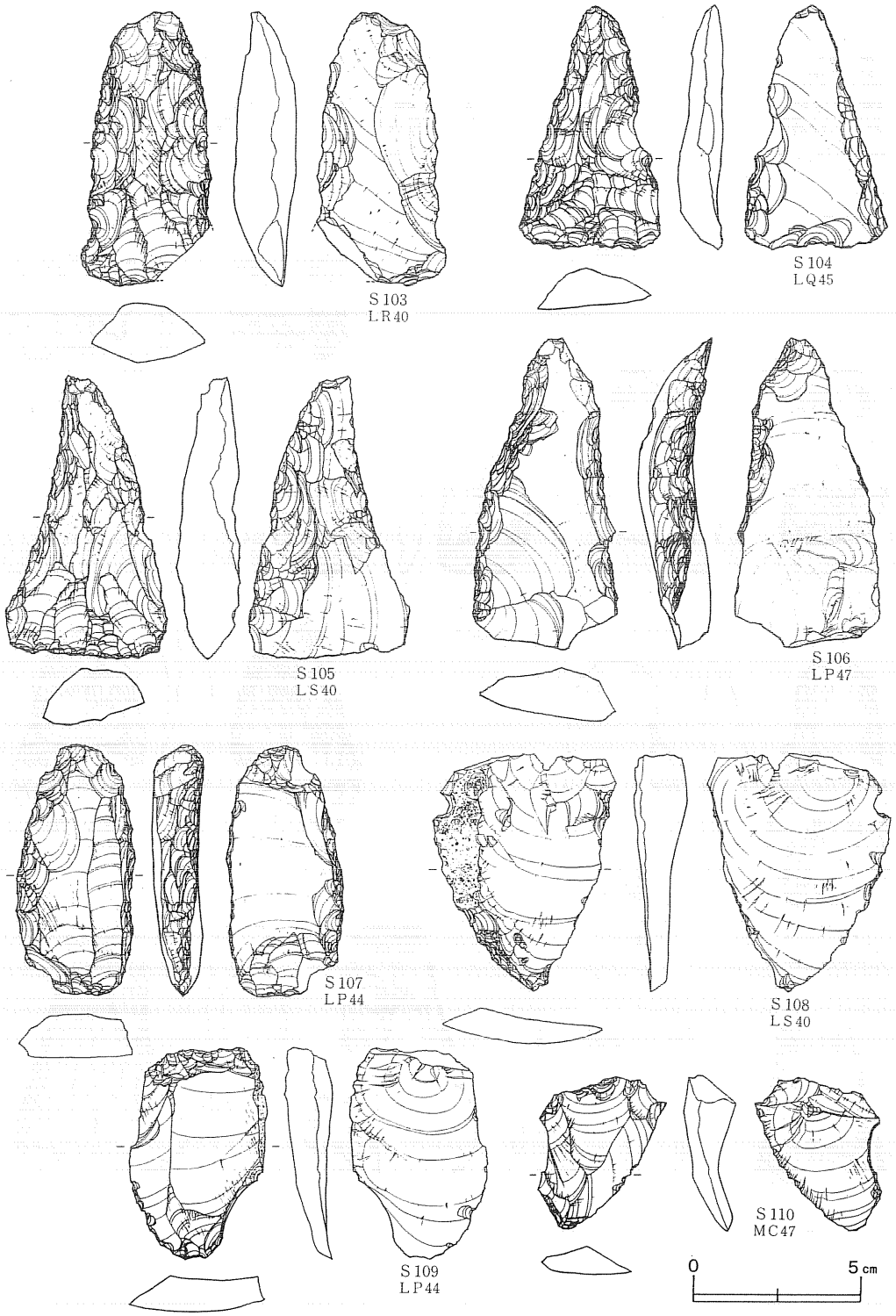
第52図　遺構外出土遺物(13)



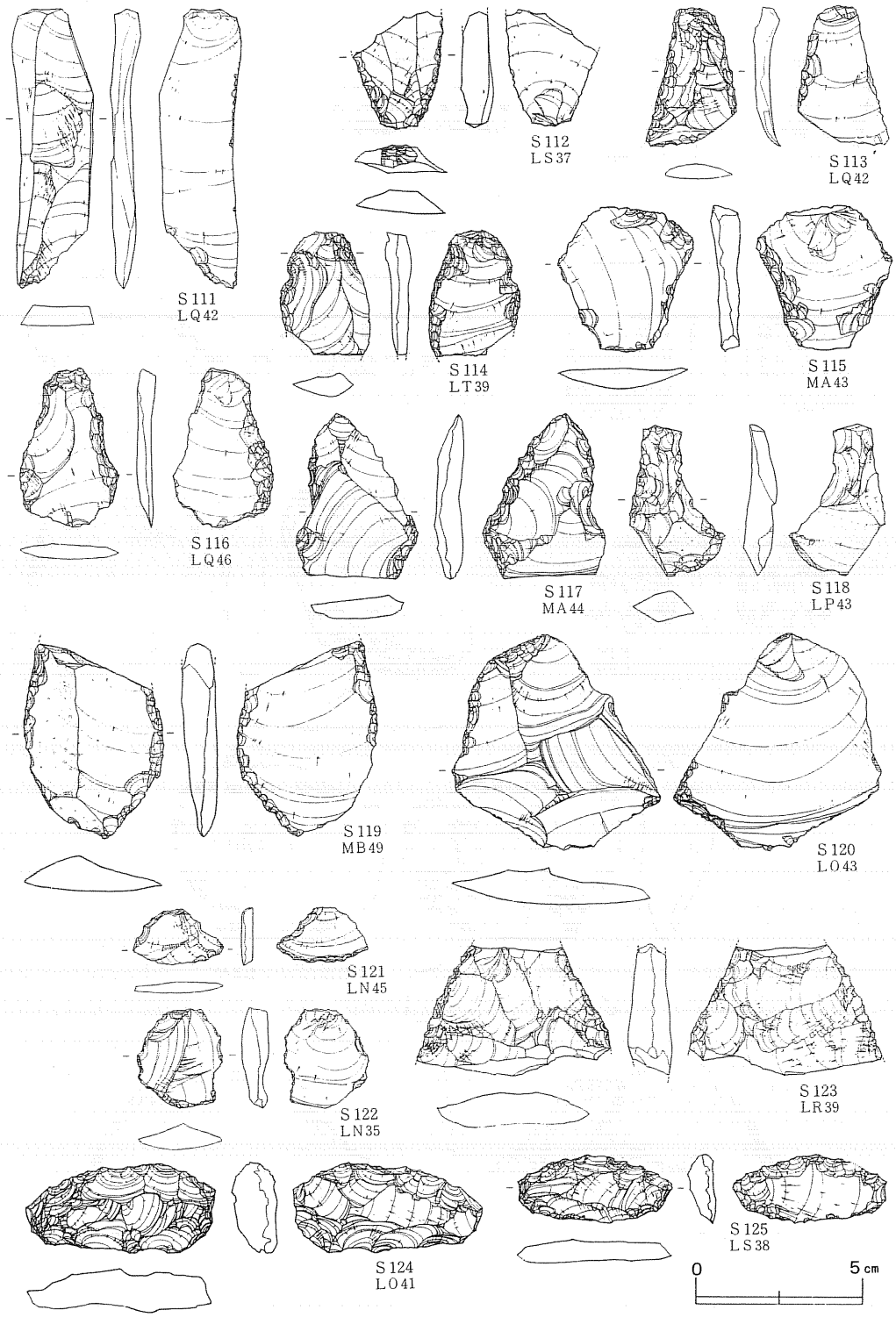
第53図　遺構外出土遺物(14)



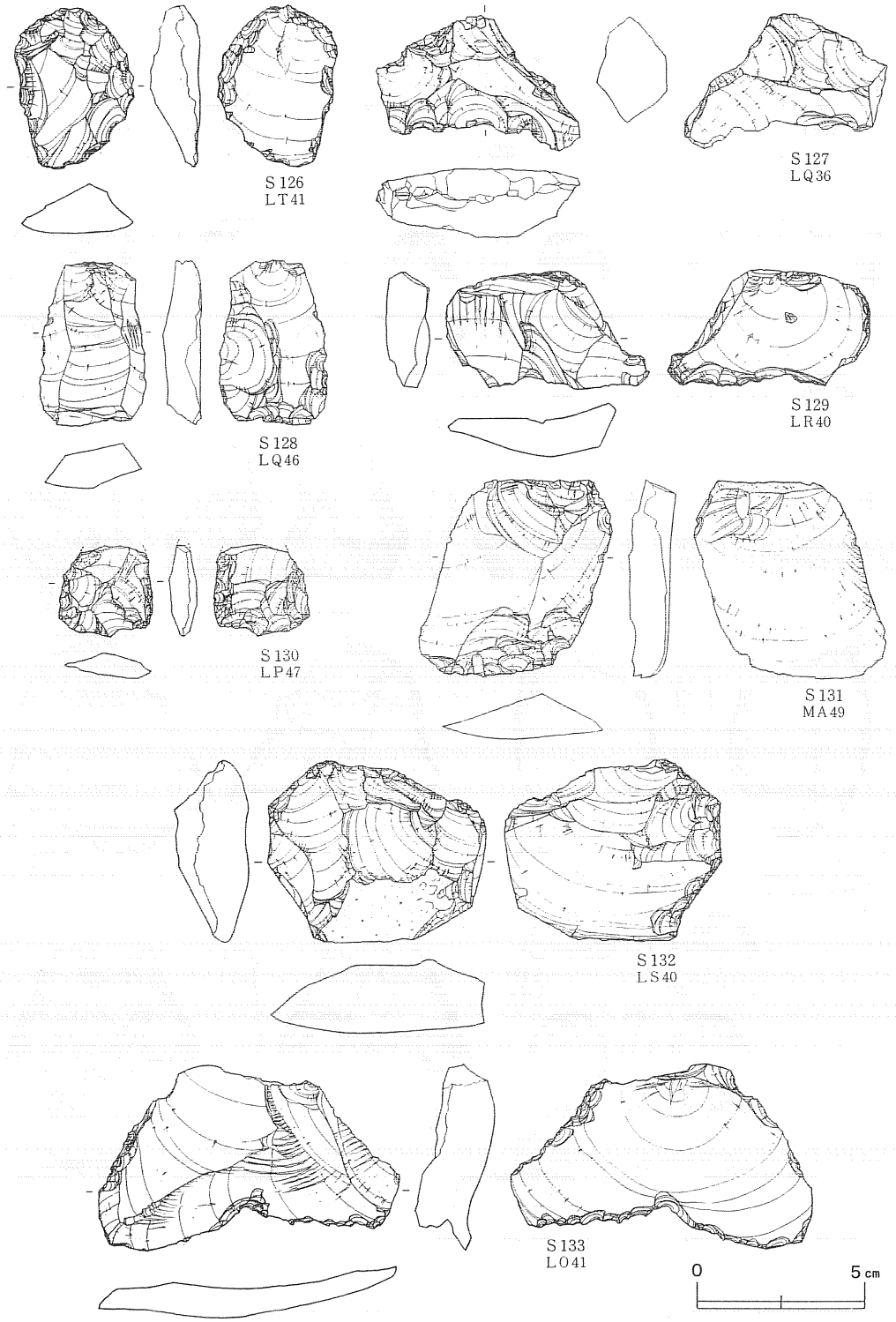
第54図　遺構外出土遺物(15)



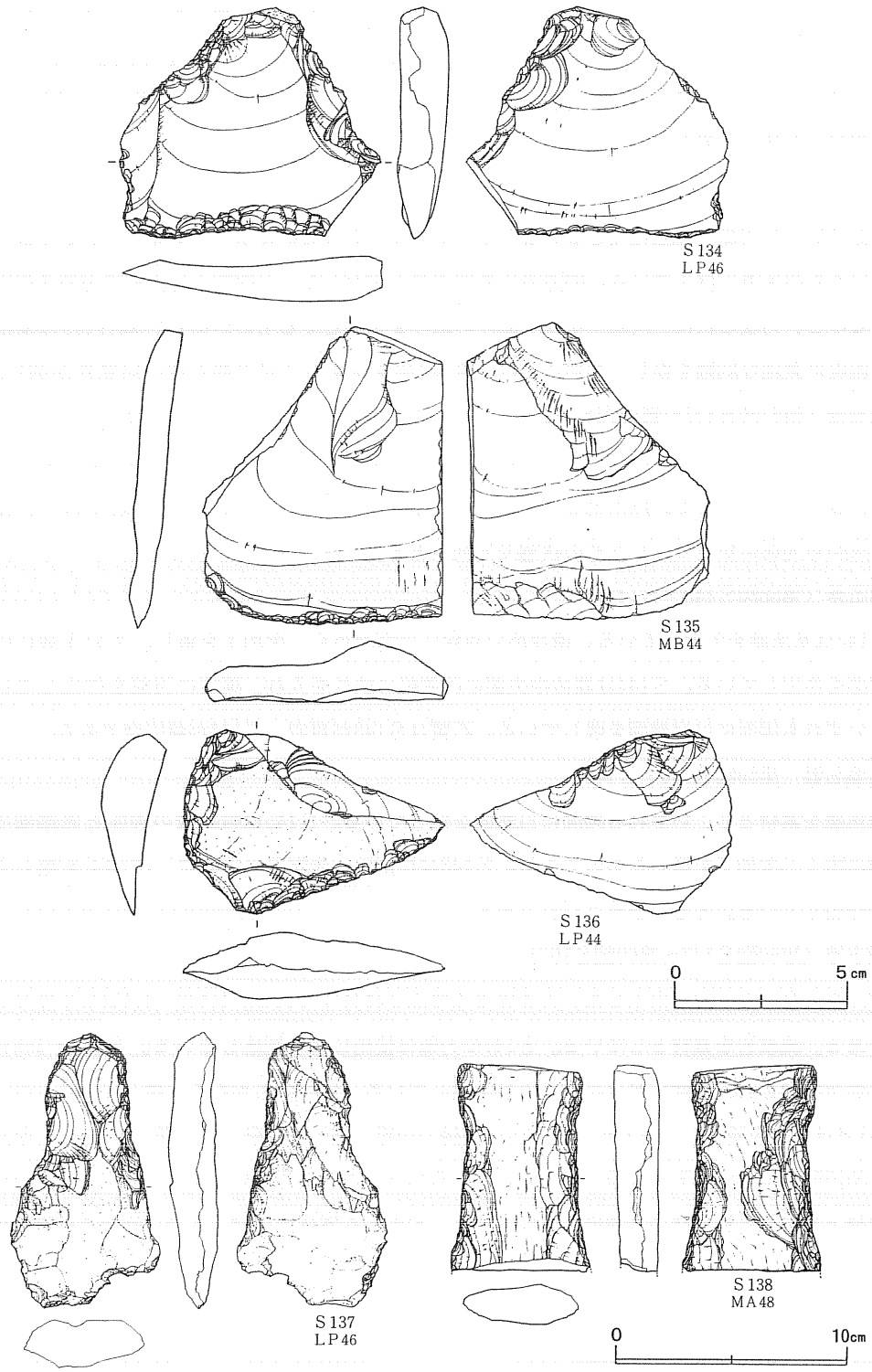
第55図　遺構外出土遺物(16)



第56図　遺構外出土遺物(17)



第57図　遺構外出土遺物(18)



第58図　遺構外出土遺物(19)

厚手の剥片に粗い二次加工を施して、全体の形状がいわゆるヘラを呈するように作出された石器である。17点出土した。二次加工は両面のもの（Ｓ95・96・98・105）、半両面のもの（Ｓ94・97・100・102～104・106・107）、片面のもの（Ｓ92・93・99・101）がある。側面からみた刃部の形状は片刃となるものが多い。

不定形石器（第55図Ｓ108～第57図Ｓ136）

石器の形状を明瞭に類型化できないものを一括した。このため従来スクレイパーとして扱われているものを多く含んでいる。69点のうち27点のみ図示した。二次加工によって刃部を作出するものと、刃潰し状に二次加工を施し剥片の縁片を刃部とするものがある。尚Ｓ112は基部の両側縁に微細な剥離を施し、基部には打面調整が認められ、ナイフ形石器の可能性が強い。

鏃状石器（第57図Ｓ137～第58図Ｓ142）

器体全周に打欠あるいは敲打を施し、全体の形状を撥形にし、先端に刃部を作出したものである。破片まで含めると10点出土した。石質は片岩のものが多いが、Ｓ137は頁岩であり、器体中央から刃部にかけてトロトロの状態で光沢がある。

打製石斧（第58図Ｓ143・Ｓ144）

Ｓ143は基部側を欠損している。遺存部の周縁には両面から二次加工を施し、その先端に円い刃部を作出している。Ｓ144は器体中央部の両側縁に抉りを入れ、両端に刃部を作出している。いずれも両面には自然面を残している。石質はＳ143が頁岩、Ｓ144が凝灰岩である。

打製礫石器（第59図Ｓ145・Ｓ146）

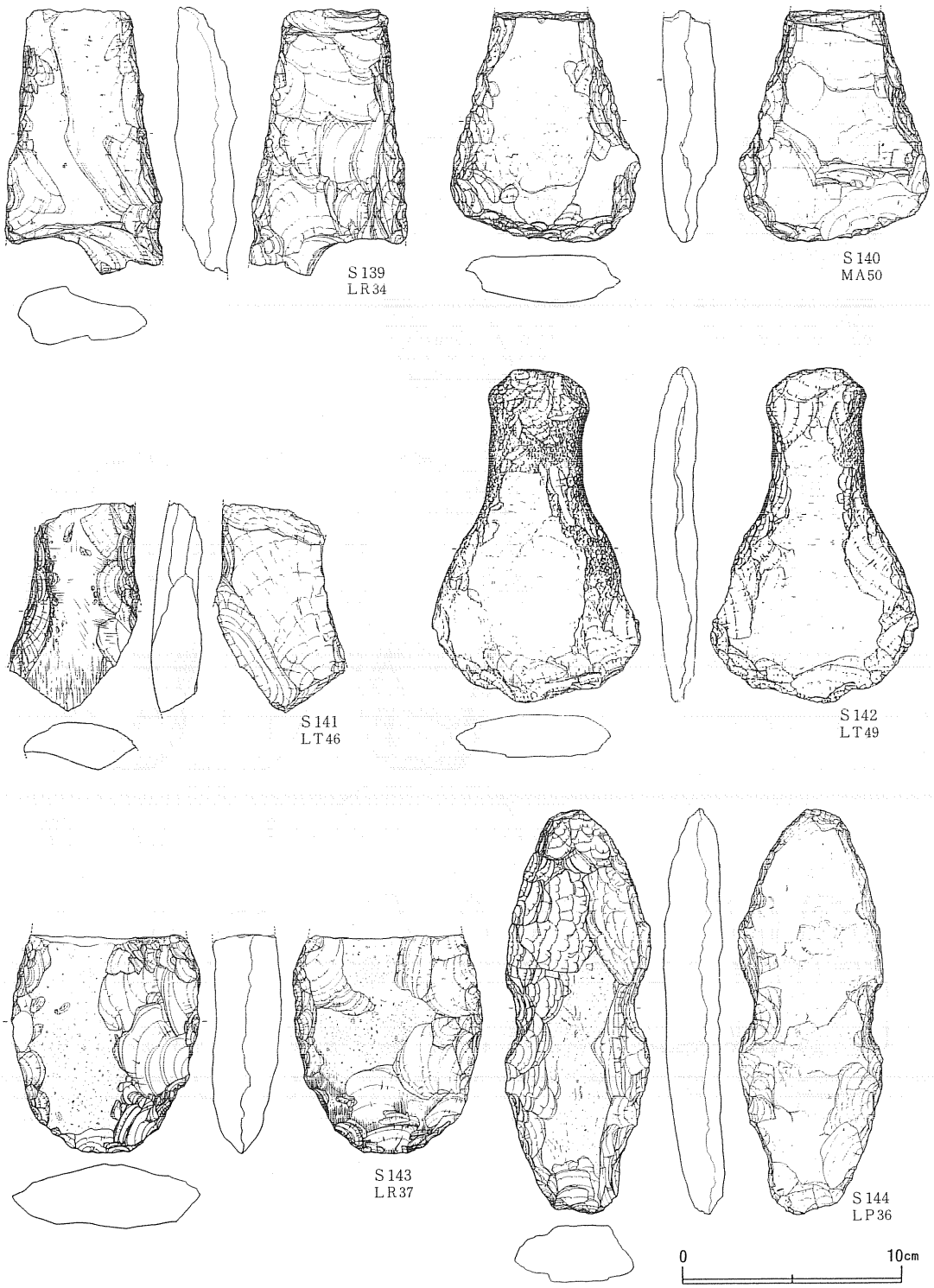
亜角礫を素材とし、いずれも両面に自然面を残している。Ｓ145は両側縁の両面と先端部の片面に粗く二次加工を施したものである。Ｓ146は片側縁と先端部の両面に二次加工を施し刃部を作出している。ともに石質は頁岩である。

磨製石斧（第59図Ｓ147～第60図Ｓ157）

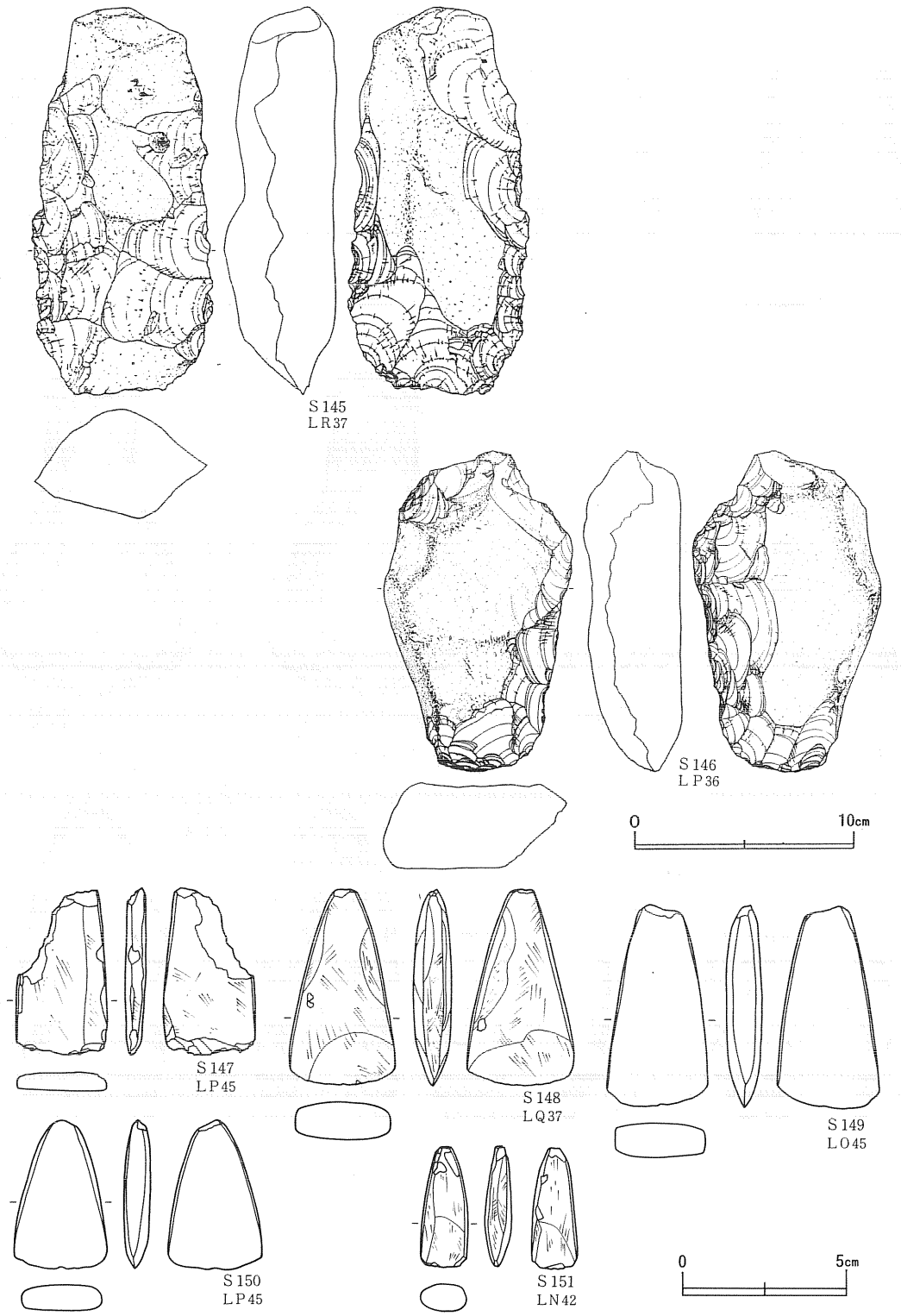
破片まで含めると22点出土した。大きさの点で二つに分けられる。Ｓ147～Ｓ151は小型のものである。流紋岩を素材としている。Ｓ147の刃部は使用により剥落している。Ｓ153～156はは全面が研磨され、断面形がほぼ隅丸方形を呈している。いずれも刃部を欠損している。Ｓ157はほぼ全面を研磨しているが、基端と片側縁の一部に整形時の敲打痕を残している。断面形は楕円形を呈する。刃部は若干潰れている。Ｓ153～Ｓ157の石質は安山岩であり、Ｓ152は両側縁と基端部に整形時の剥離痕を著しく残し、刃部から器体中央付近までの両面を研磨している。他に比べ薄身の素材を用いており、断面形は凸レンズ状を呈する。片面の刃部には剥離痕が認められる。石質は凝灰岩である。

凹石・磨石（第60図Ｓ158～第63図Ｓ173）

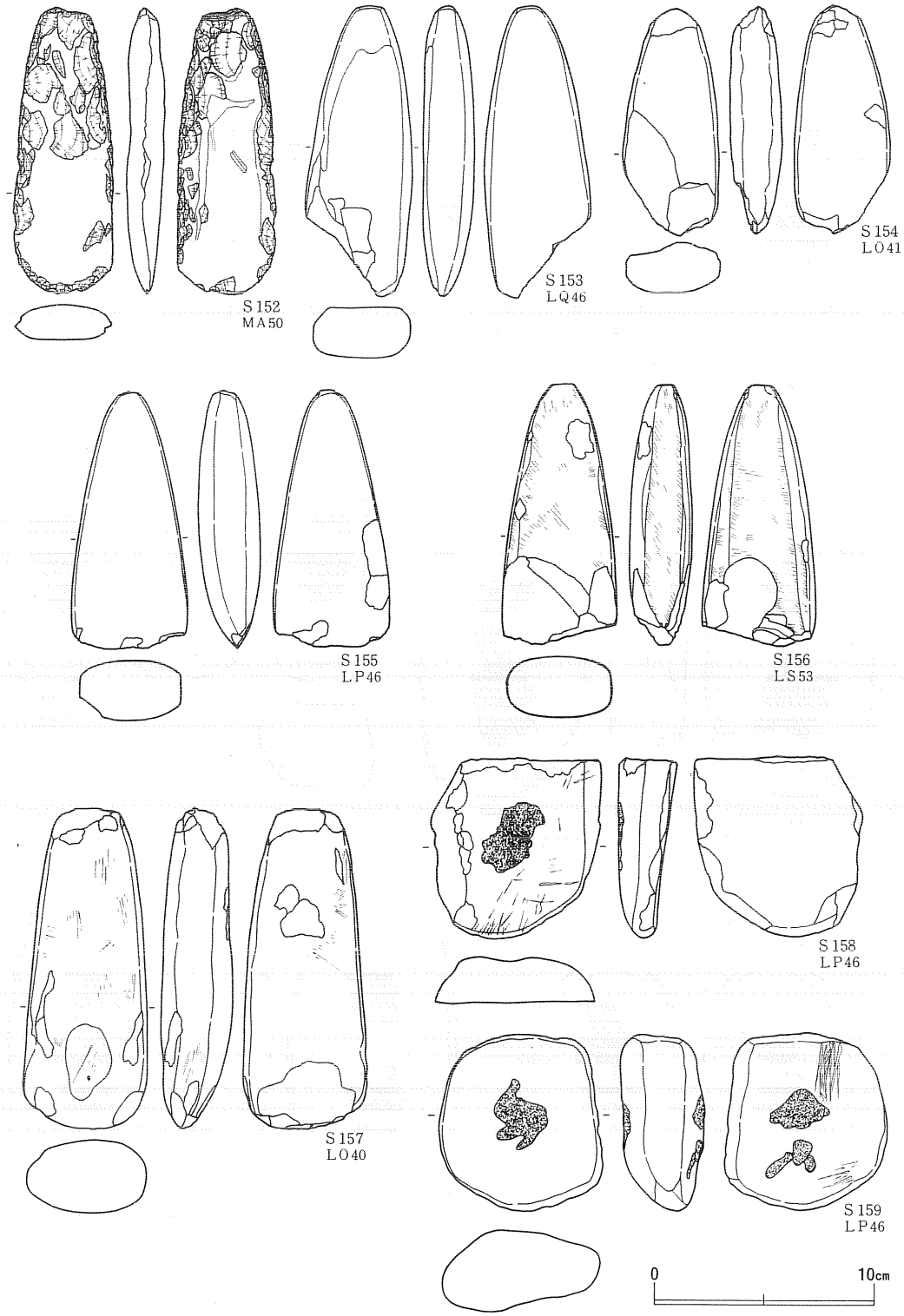
29個出土したが、凹石24個・凹石兼磨石１個・磨石４個である。石質は凝灰岩と安山岩が多



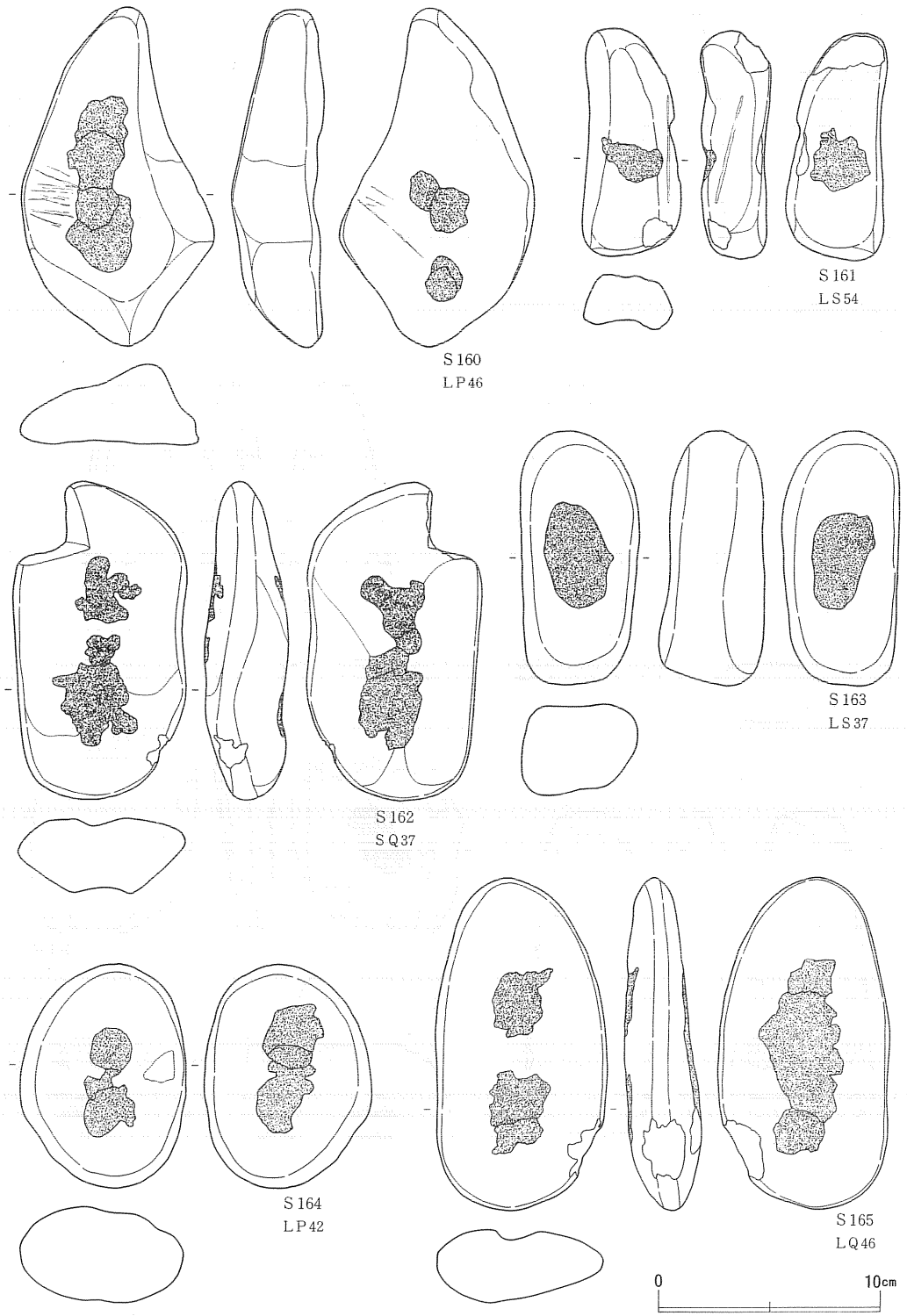
第59図　遺構外出土遺物(20)



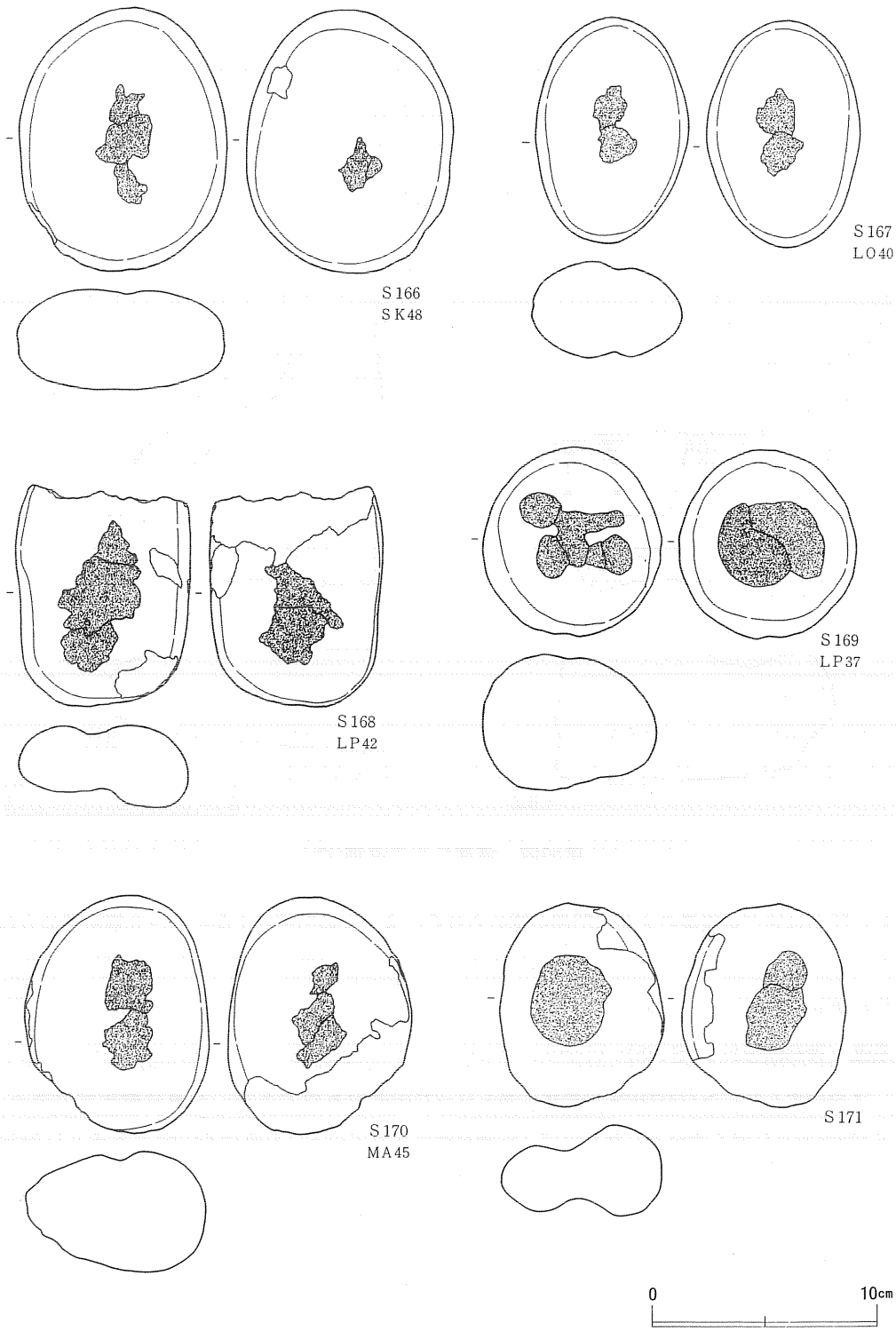
第60図　遺構外出土遺物(21)



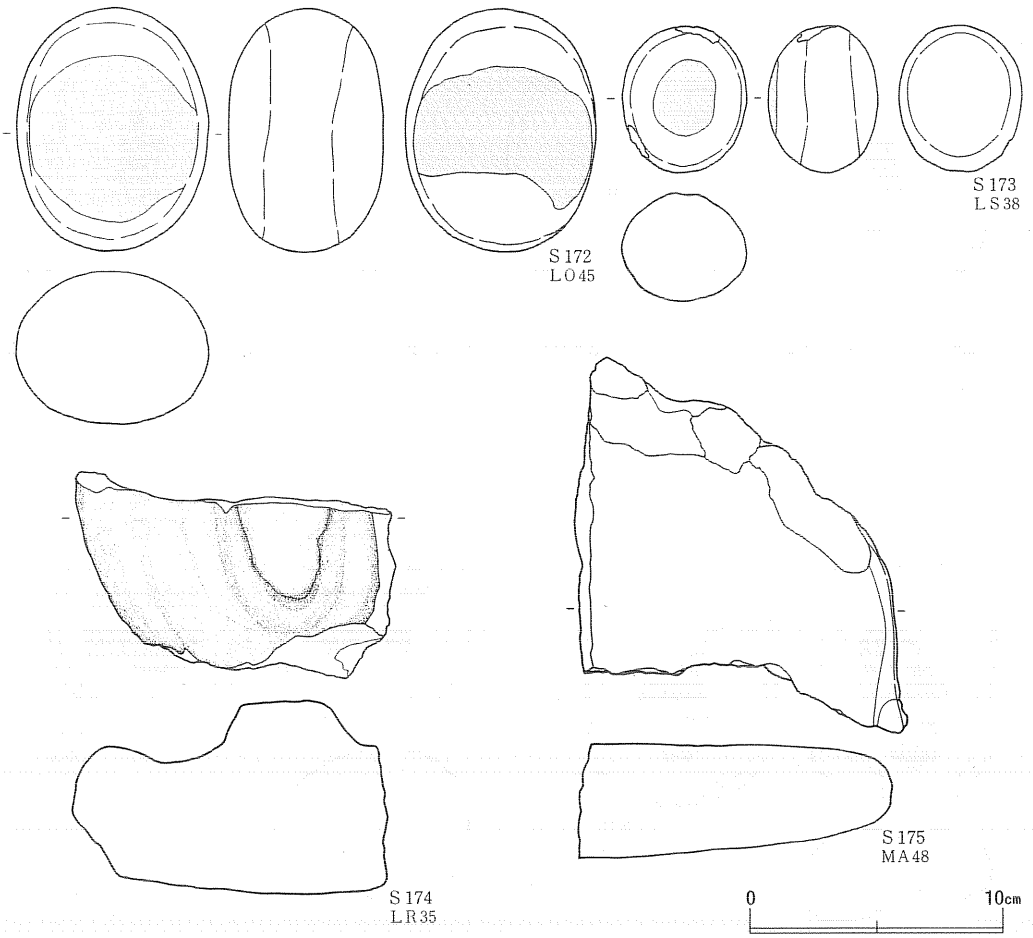
第61図　遺構外出土遺物(22)



第62図　遺構外出土遺物(23)



第63図　遺構外出土遺物(24)



第64図　遺構外出土遺物(25)

い。凹石は殆どが表裏の２面に凹部が認められる。またその凹部は１面に２～３箇所認められるものが多い。Ｓ158～161には刻線が認められる。Ｓ172・173は磨石で、前者は両面、後者は片面のみを磨面としている。

石皿（第63図Ｓ174・Ｓ175）

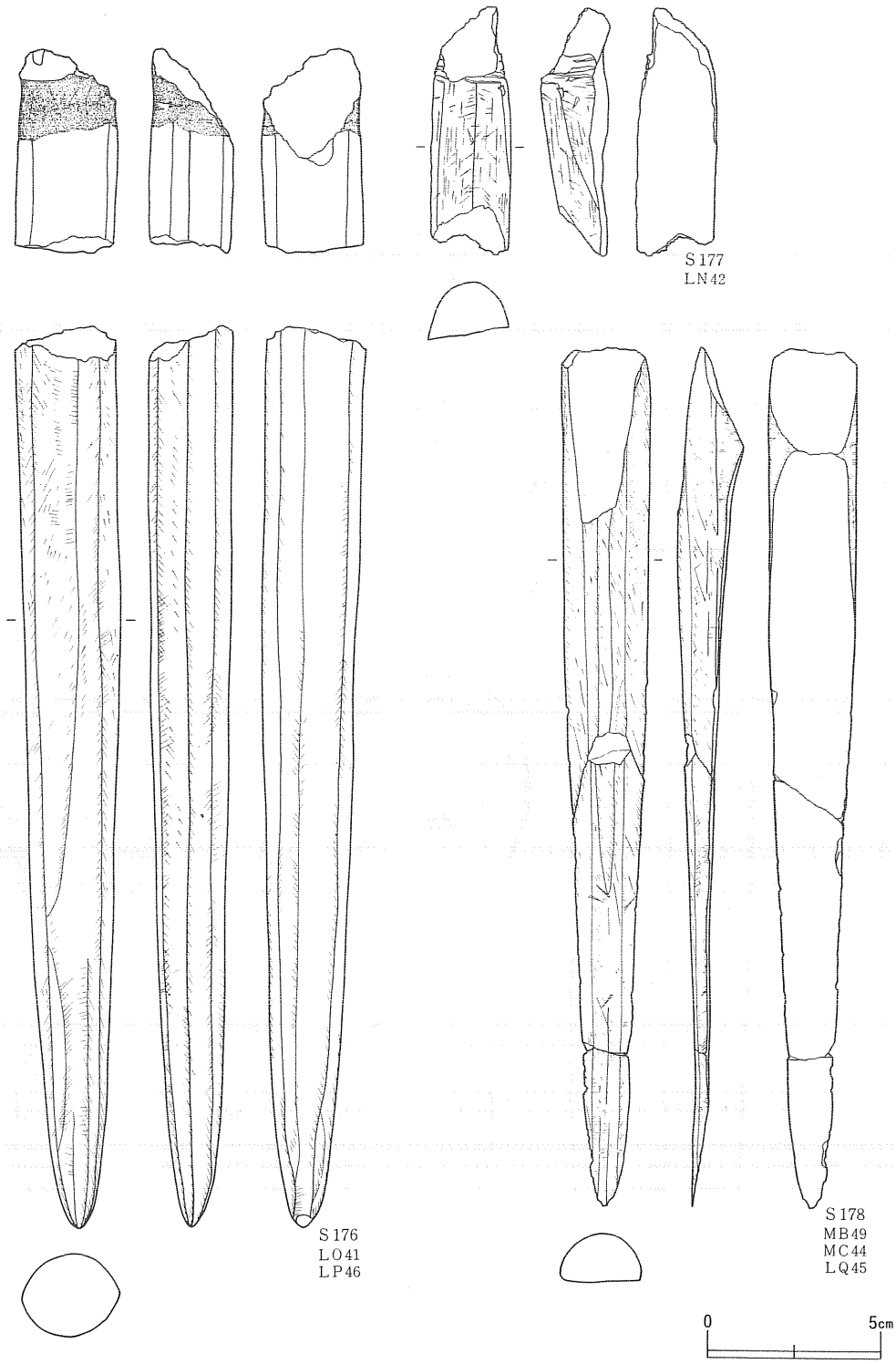
２点出土した。Ｓ174は中央が島状に高くなった中高のものである。石質は凝灰岩である。Ｓ175は偏平な礫を素材としたもので、片面が使用されている。石質は安山岩である。二次的な煤状炭化物が全体に付着して、明瞭ではないが使用面には僅かに朱が付着する。

（４）石製品

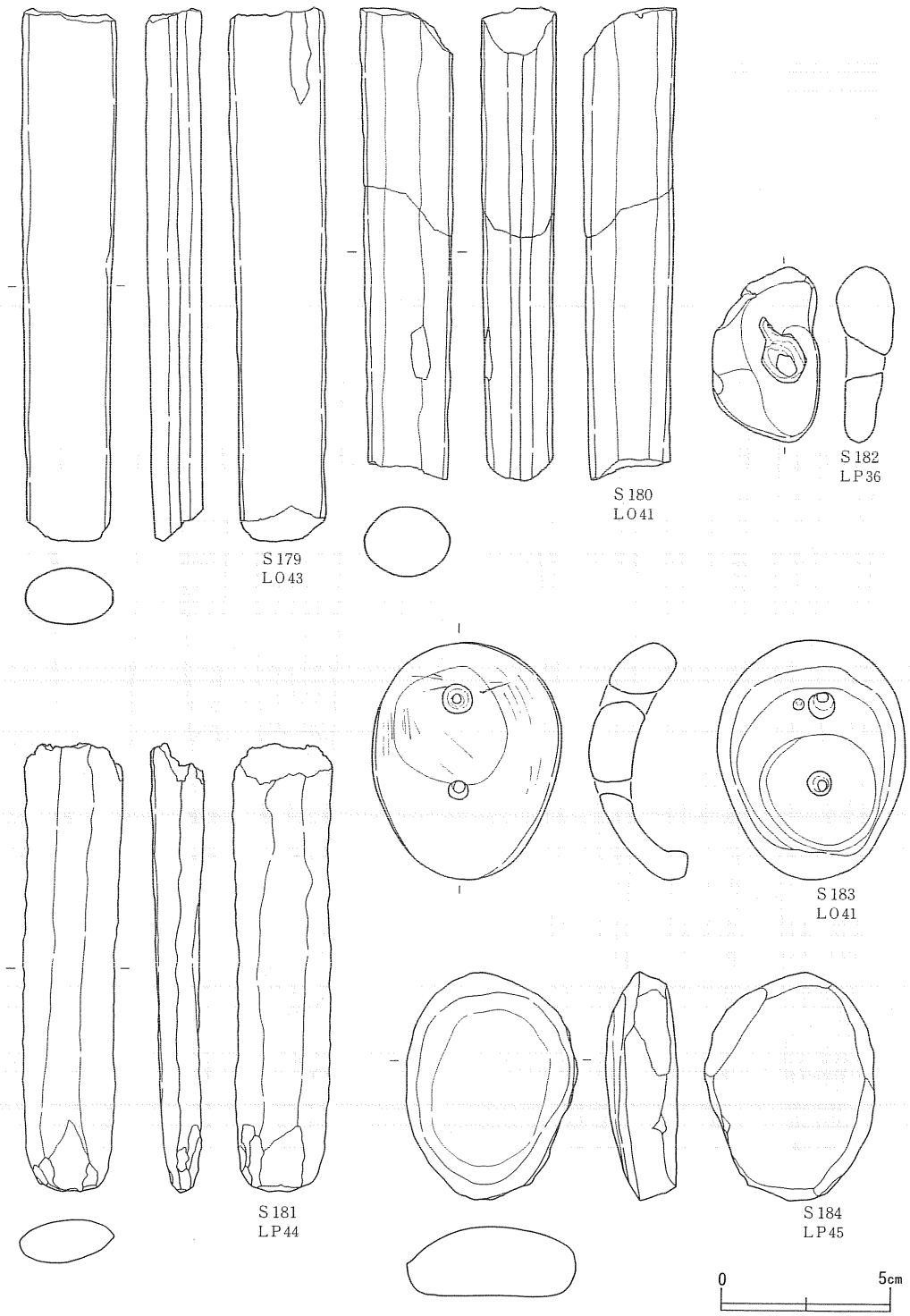
石剣・有孔礫・ボタン状石製品がある。

石剣（第65図Ｓ176～第66図Ｓ181）

破片が21点出土し、内５点が接合した。石質は片岩のものが多く、節理面による破片が多い。



第65図　遺構外出土遺物(26)



第66図　遺構外出土遺物(27)

Ｓ176は頭部付近と身が接合しないものの同一個体である。Ｓ176・177の頭部付近は、前者が敲打により、また後者は刻線によってくびれ部を作り出している。

有孔礫（第66図Ｓ182）

１点出土した。表面の風化した安山岩であり、重量28ｇである。

ボタン状石製品（第66図Ｓ183・Ｓ184）

Ｓ183・184の石質は安山岩である。Ｓ183には表裏両面からの穿孔による貫通孔が２個ある。裏側には別の穿孔痕があり、貫通させるためにやり直したものであろう。表面には整形時の擦痕が微かに認められる。Ｓ184は面取しただけの状態である。

第２節　平安時代以降

検出した遺構は、須恵器窯跡１基・竪穴状遺構４基・土坑11基・焼土遺構１基・集石遺構１基・環状溝状遺構１基・溝状遺構３条の計22遺構である。これらの遺構の内、ＳＱ30集石遺構は調査区西側の斜面下方でⅡ層中に検出した。ほかの遺構はすべて地山上面で検出したものである。遺構内外からは須恵器・土師器・砥石・鉄製品が出土している。

遺構の分布は、調査区南部の斜面にＳＪ40須恵器窯跡、調査区中央西側にＳＫＩ31竪穴状遺構・ＳＮ28焼土遺構および土坑群、また調査区北東部にＳＫＩ58・59・80竪穴状遺構３基、の３カ所に集中する。またＳＤ11溝状遺構は調査区を縦断して構築されている。遺物の分布は遺構の分布に対応し、調査区南部の斜面周辺および斜面下方では須恵器が多く出土した。また土師器の出土は調査区中央西側にややまとまっているが、調査区北半では希薄である。

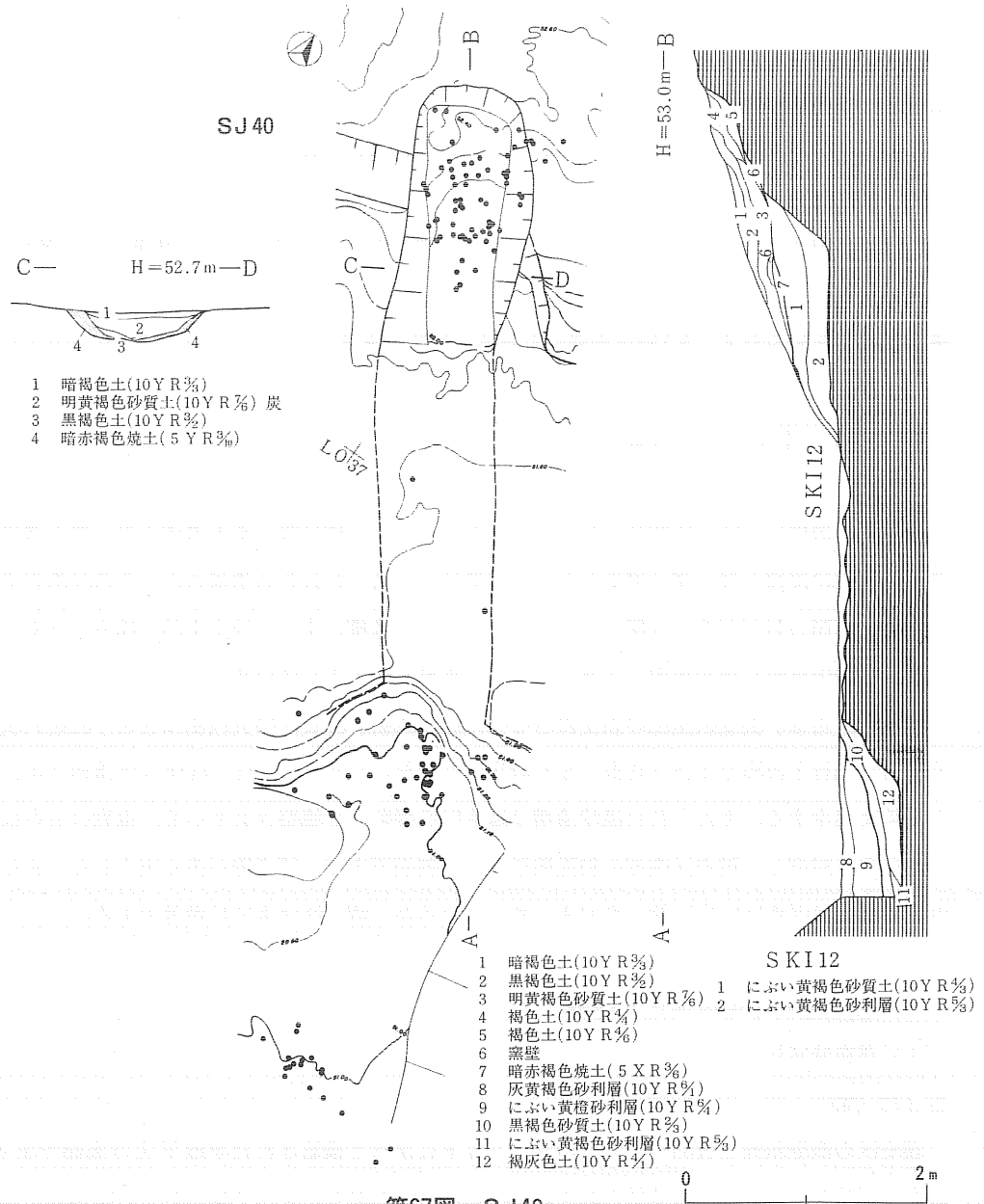
１　検出遺構と遺構内出土遺物

（１）須恵器窯跡

ＳＪ40（第67・68・69・70図）

調査区の南側斜面ＬＮ35～37・ＬＯ37グリッドにかけて構築された半地下式の窯跡である。範囲確認調査時点で存在が確認されており、地山上面の精査によって検出した。窯体中央から炊き口の部分は調査区南側沖積地を開田した際に削平されており、窯体の長さは不明である。ただし、窯体の延長上にあたるＬＮ35・36グリッド付近の窪地に、歪みの著しい須恵器杯や甕の破片が集中して出土した部分があり、その部分をこの窯に伴う灰原と判断した。縄文時代の竪穴状遺構を切って作られている。

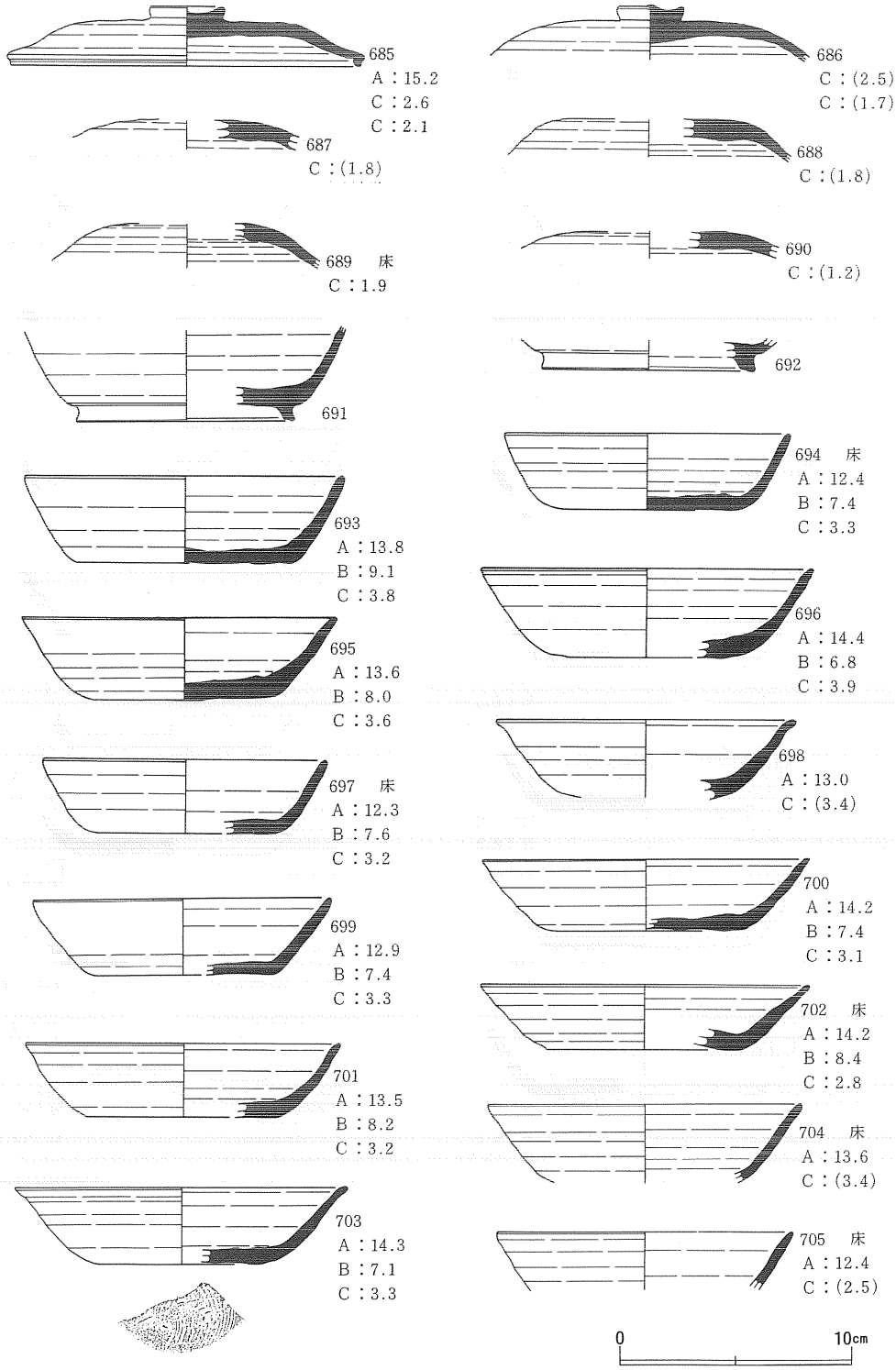
遺存する部分は、窯体中央から窯尻の部分で、長さ1.2ｍ、幅は窯体中央で0.5ｍを測る。中軸線の方向はＮ－28°－Ｗ。窯底部の傾斜は、窯体中央で10°前後であるが、窯尻では20°と



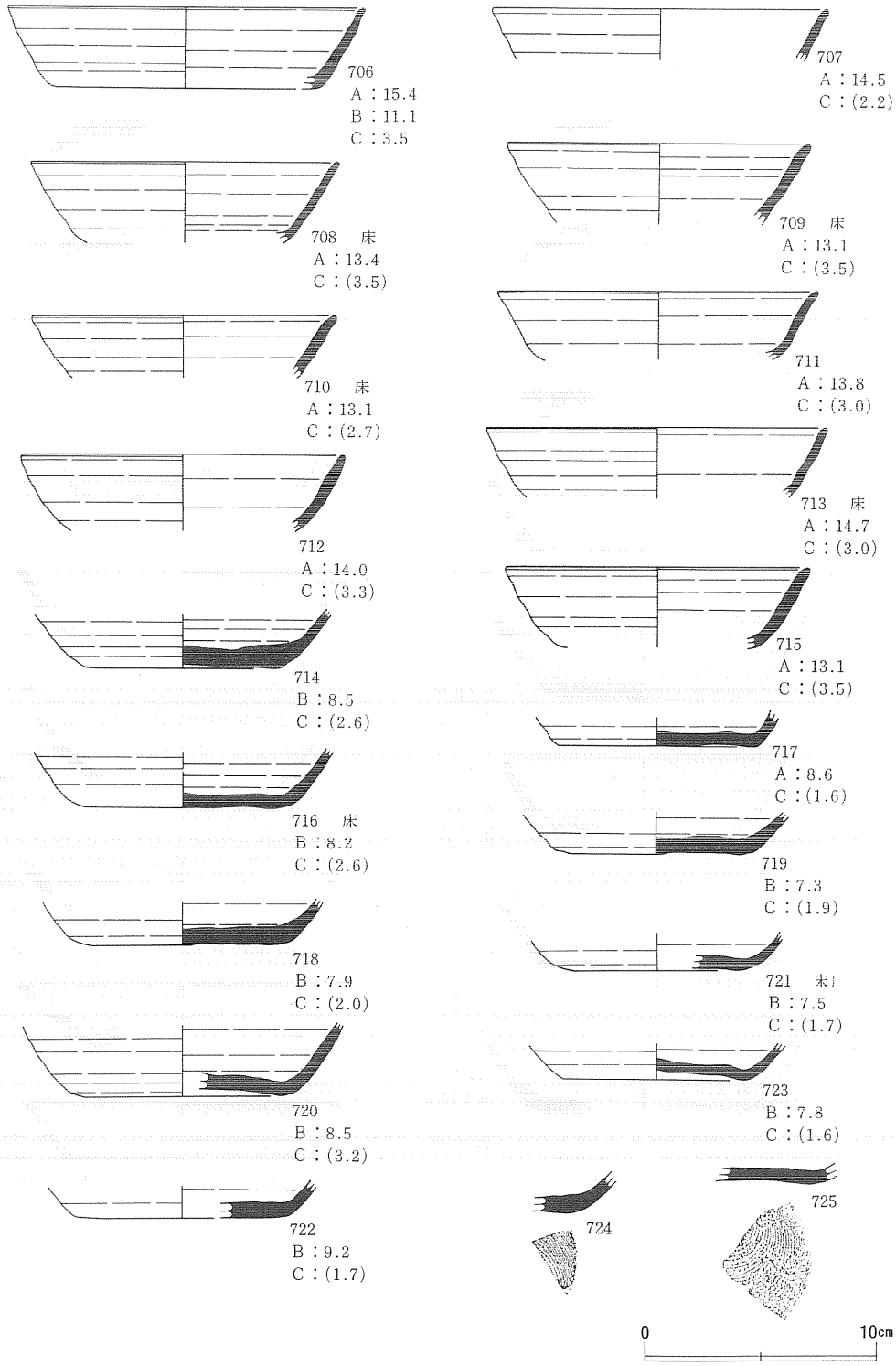
第67図　SJ40

若干きつくなる。煙出し部分は遺存しない。ＳＫＩ12と切り合う部分では黒色土を底面としており、断面観察ではその周囲が鈍く赤変している。窯体中央部での断面形はＵ字状を呈する。灰原と判断したＬＮ36グリッドの旧地形は、中央から南側が落ち込んでいる。遺物は主に10層とした黒褐色の砂質土中から出土したもので、2.0×1.3m程の範囲に広がっていた。

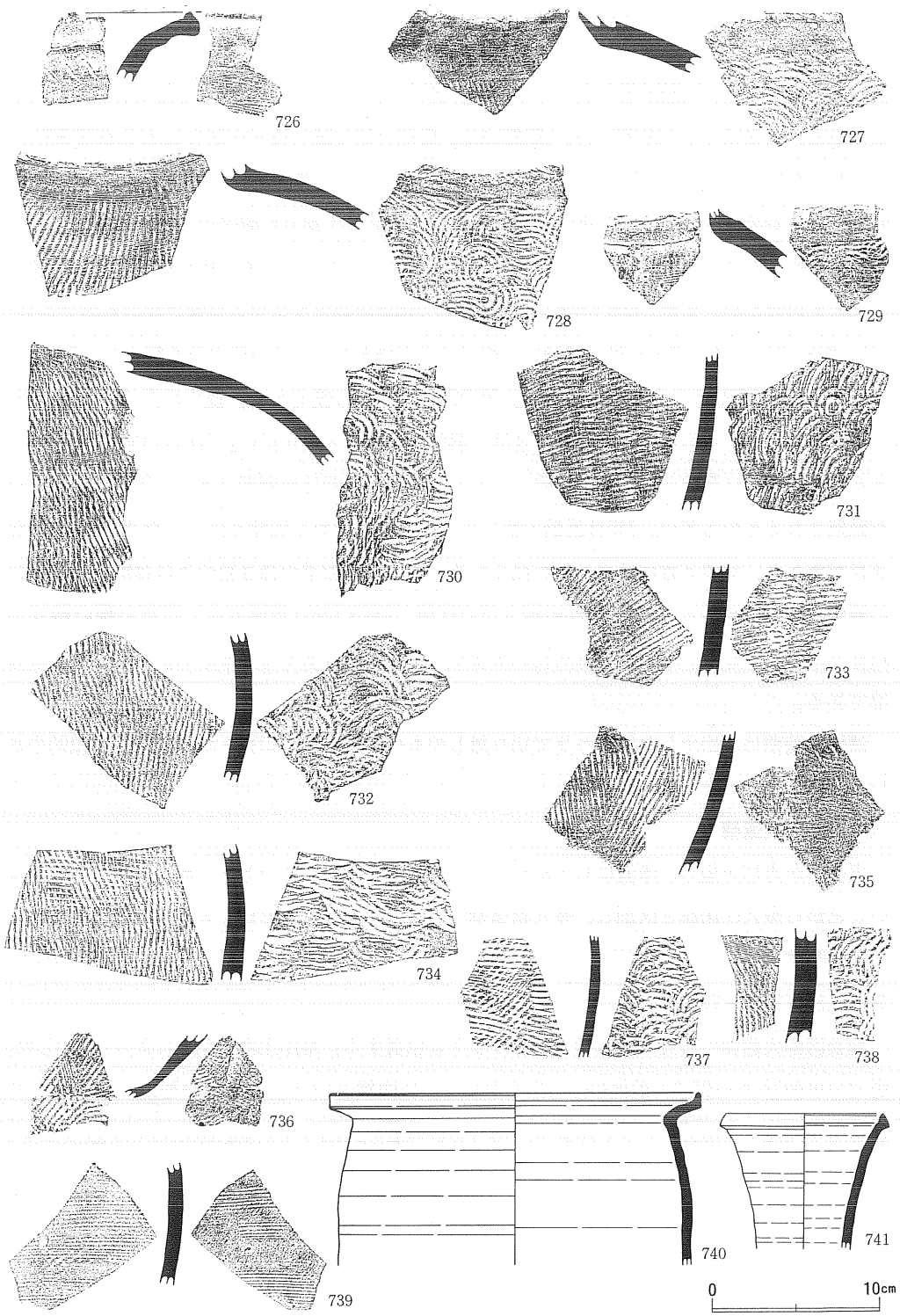
窯体内からは崩落した窯壁の一部と64片の遺物が出土し、灰原からはコンテナ２箱分の遺物が出土した。出土遺物には蓋・坏・壺・甕がある。



第68図　遺構内出土遺物(20)



第69図　遺構内出土遺物(21)



第70図　遺構内出土遺物(22)

第68図685～690は蓋である。685の端部は屈曲し内傾するが、その形は丁寧に整えられている。687・688の上半の整形はケズリである。691・692は高台付坏である。わづかに外に開く高台部分の接地部は、内側が若干上がっている。693～725は坏である。図示し得た31個体の法量の平均は、口径13.4㎝、底径8.1㎝、器高3.3㎝。底部の切り離しはヘラ切りのものが圧倒的に多いが、糸切りのもの（703・724・725）もある。器形は、口径・底径の差が小さく全体に箱形を呈するもの（693・694）、底部から丸みを帯びて立ち上がり口縁部が外傾するもの（703）など特徴的なものもあるが、両者の中間的なものが多い。なお切り離し後の調整が明瞭に認められるものはない。また、695・696・698・718・719は灰褐色を呈する生焼け状のものであり、702・705・708・711・716・721・722は、焼成は良好であるが全体が灰白色を呈する。702の内面と722の内面底部には火だすきが残る。第70図726～740は甕である。破片は多く出土したものの、復元されたものは１点であり、全体の器形は不明なものが多い。726は口頸部の破片である。727～739は肩部および体部の破片である。内外面の叩目が顕著であり、叩の後の掻き目が観察されるものも多い。740は長胴の甕である。体部下半から底部を欠く。体部上半には掻き目が施され、その下方にはケズリが見られる。また体部上半の掻き目の下には部分的に叩目の観察される所がある。739は器面の掻き目の状態、737・736は器厚の点で長胴の甕の破片の可能性がある。また、735・712は灰褐色を呈する生焼け状のものである。515は長頸壺の口頸部である。

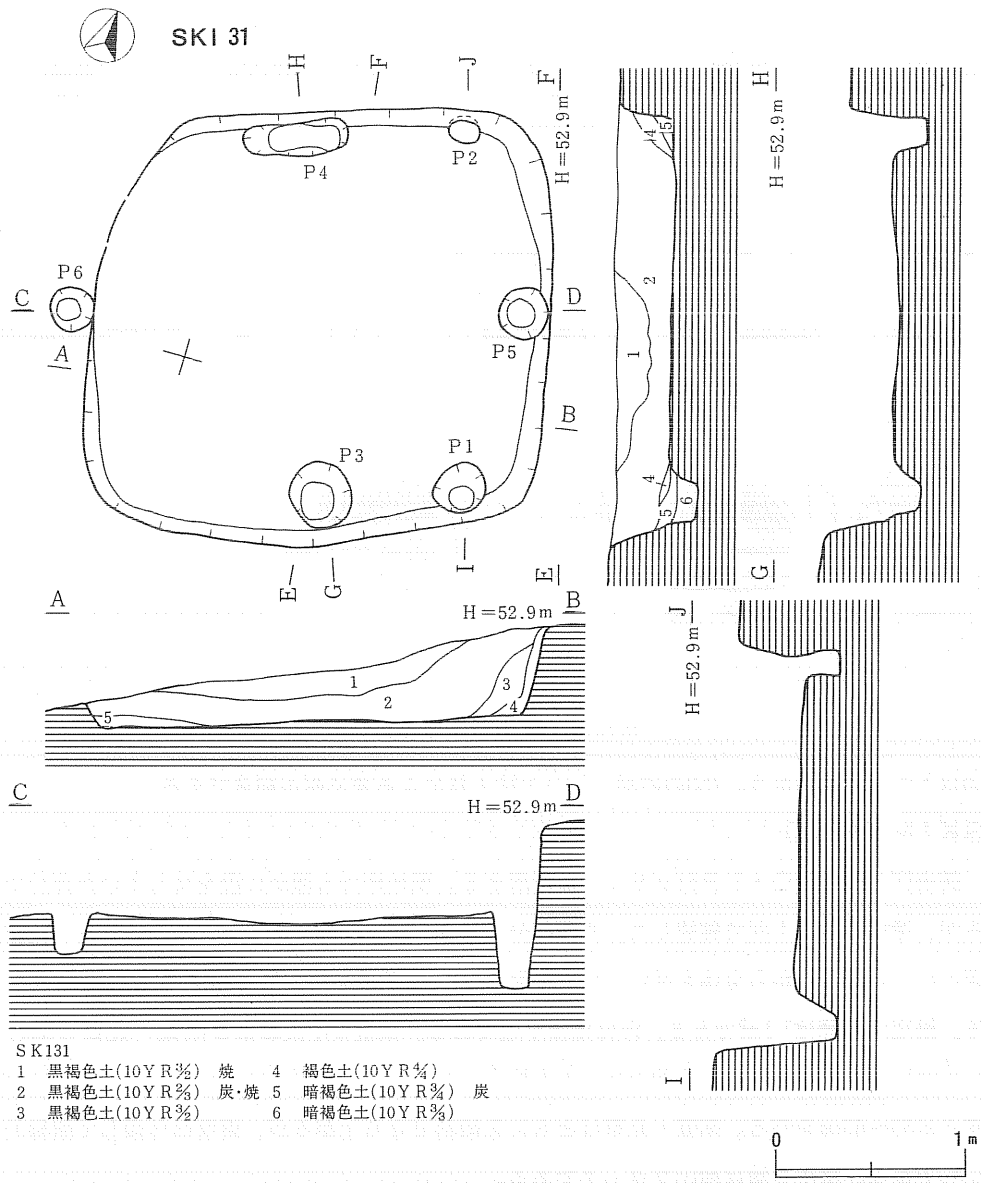
遺構の時期は、出土した坏にヘラで切り離しのものが多い点、口径・底径の差が比較的小さい点から９世紀前半と考えられる。

（２）竪穴状遺構

平面形が方形を呈し、床面にしっかりとしたピットが穿たれているが、竈が付設されていないことから竪穴住居跡と区別し、竪穴状遺構とした。４基検出したが、３基は調査区北東部分に集中している。

ＳＫＩ31（第71・72図）

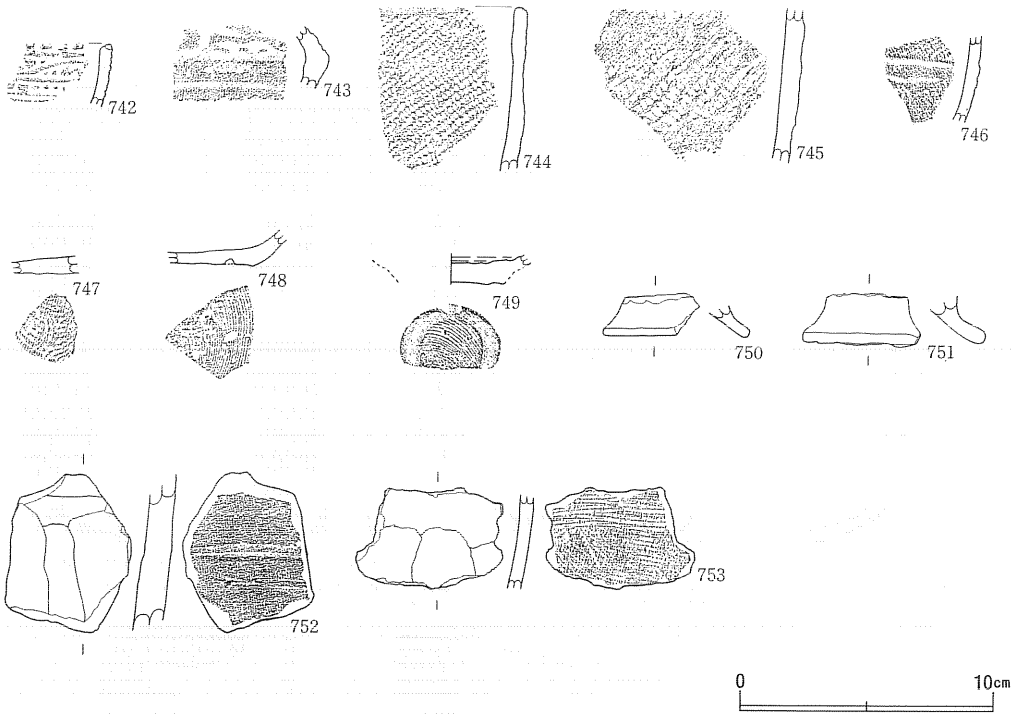
調査区中央西側のＬＲ・ＬＳ42・43グリッドに位置する。地山上面の精査によって検出した。竪穴の平面形は一辺2.3ｍ前後の略方形を呈する。床面積は4.5㎡。掘り方が地山ローム層下の砂礫層まで達する部分があり、床面の一部では砂礫層が露出している。床はほぼ平坦である。南北の壁際に各２個（Ｐ1～Ｐ4）、東西の壁際に各１個（Ｐ5・Ｐ6）の計６個のピットを検出したが、西側のピットは竪穴の外にある。Ｐ3～Ｐ6は各辺のほぼ中央に、またＰ1・Ｐ2はそれぞれ北東・南東のコーナー付近に設けられている。ピットの平面形は60×20㎝の楕円形を呈するＰ4をのぞき、ほぼ径20㎝前後の円形を呈する。また床面からの深さは60㎝前後になるＰ5をのぞき、20～30㎝前後である。急傾斜で立ち上がる壁は東側ほど高く、斜面下方の西側では低



第71図　SKI31

くなっており、壁高10～40cmを測る。覆土は１～６層に分けられるが、自然堆積である。

遺物は覆土上部から少量出土した。縄文土器と土師器がある。出土状態から、いずれも遺構埋没過程での流れ込みと考えられる。第72図742～745は縄文土器で、742・743はⅣ群、744・745はⅦ群に相当する。747・748は土師器坏の底部である。ともに切り離しは糸切りである。749～751は高台付坏の破片である。749の底部には、高台を付けた際の整形痕が明瞭である。750・751の台部はいずれも外に開く形を呈する。752・753は甕の体部破片である。ケズリの方



第72図　遺構内出土遺物(23)

向は下から上に向かう。753の内面にはハケ状工具による整形痕が顕著である。

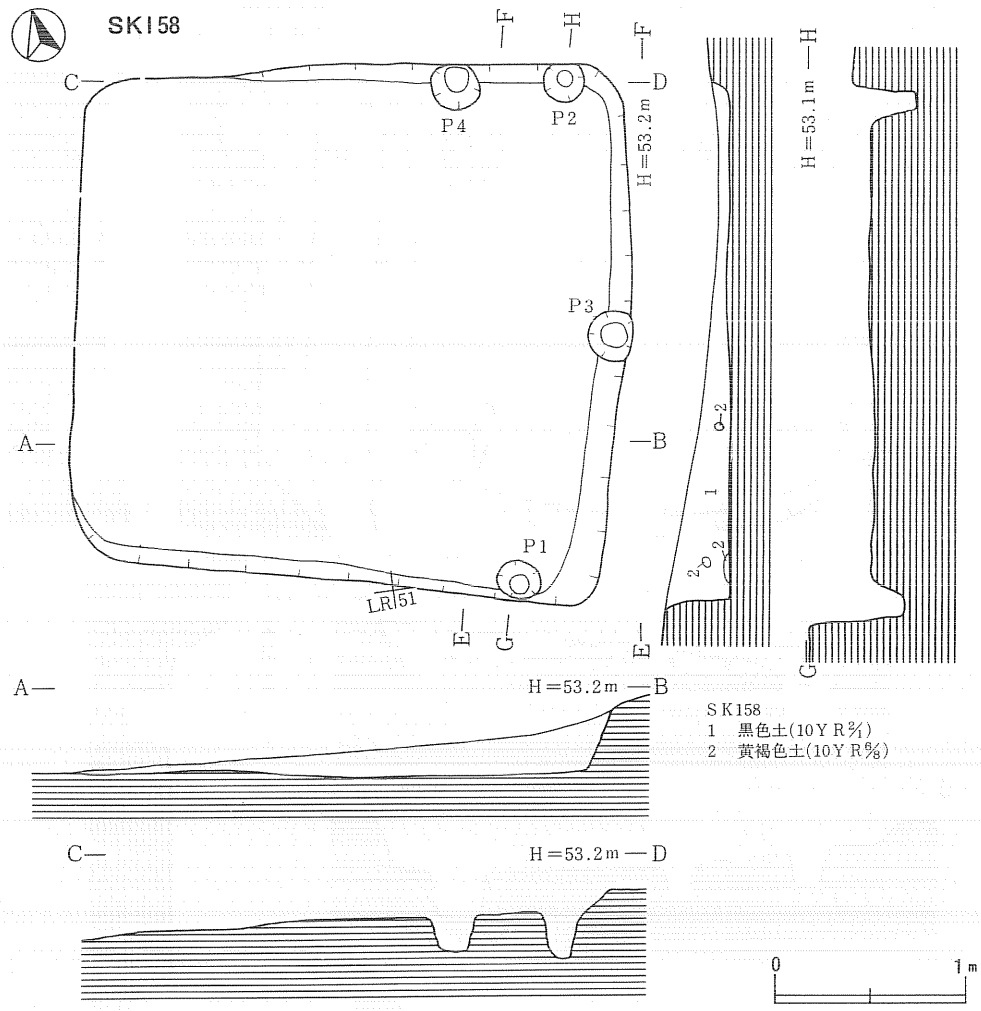
ＳＫＩ58（第73図）

調査区北東のＬＱ・ＬＲ51グリッドに位置する。現地形でも僅かに段をなしていた部分であるが、遺構は地山上面で確認した。北西部分のプランが不明瞭であるが、南西のコーナーが確認されていることから全体を推定した。平面形は2.8ｍ前後の略方形を呈するものと考えられる。推定床面積は7.1㎡である。床はほぼ平坦である。東壁の中央および南東・北東の隅、そして北壁の中央東寄りに計４個のピットを検出した。ピットの平面形は径20㎝前後の円形で、深さは30～40㎝を測る。南壁・北壁はともに急傾斜で立ち上がるが、東壁は外傾して直線的に立ち上がる。覆土２層は地山ブロックである。

遺構内から遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ59（第72・74図）

ＳＫＩ58の西側に隣接する、ＬＲ・ＬＳ51グリッドに検出した。他の遺構と同様に地山上面での検出である。平面形は一辺2.5ｍ前後の略方形であるが、南東部分がやや崩れた形でプランを確認した。床面積は5.0㎡である。床は平坦で、非常に堅く踏み締められていた。ピットは７個検出した。竪穴内の四隅に、方形に配置されるＰ1～Ｐ4が主柱穴である。Ｐ1・Ｐ2は壁際にあるが、Ｐ3・Ｐ4は若干中央に寄っている。平面形は径30㎝前後の円形で、床面からの深



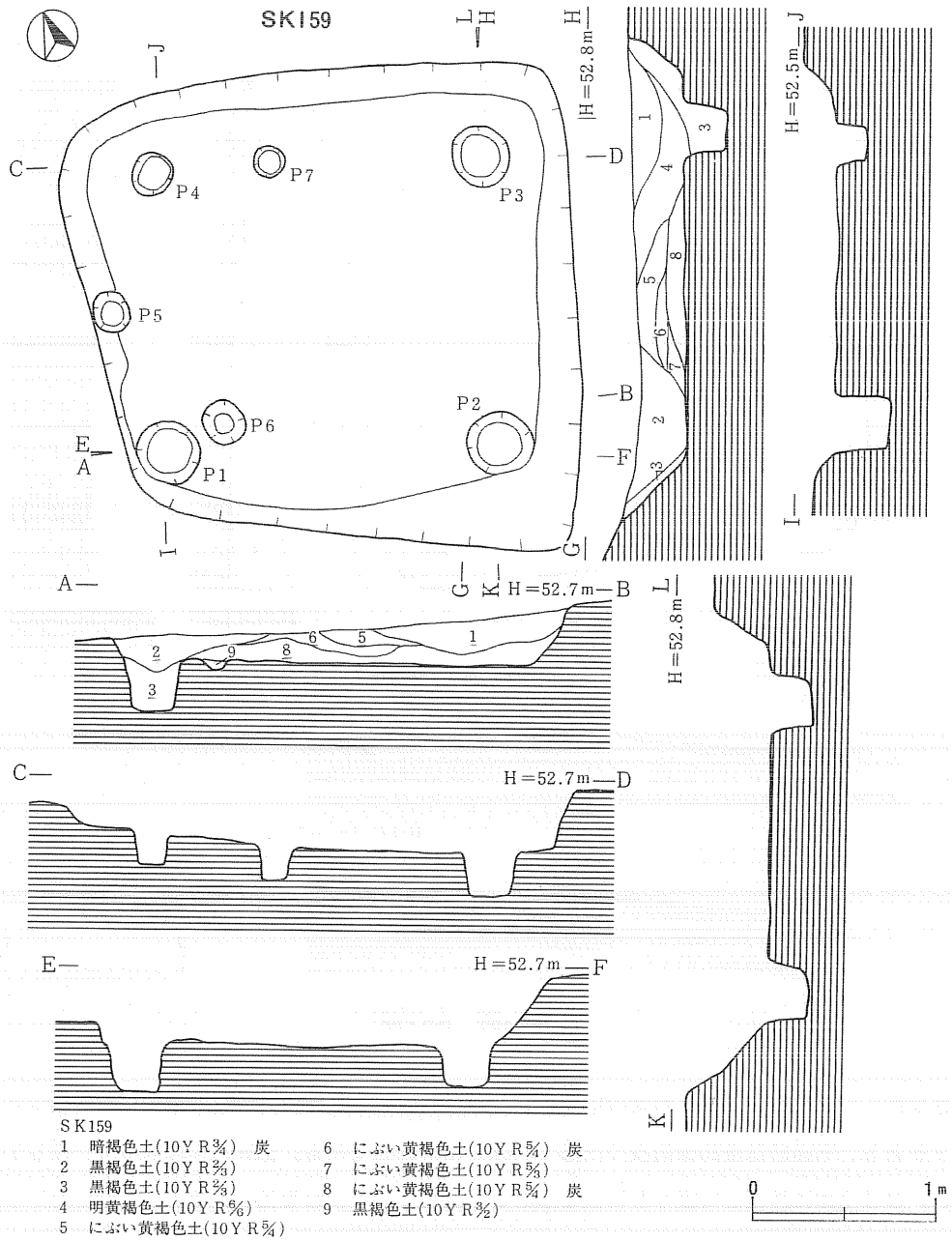
第73図　SKI58

さは20～30cmを測る。他に西壁の中央、P3・P4間のややP4寄り、P1の東側に計３個のピットがある。平面形は径20cm前後の円形で、深さは20cm程である。主柱穴に比較して一回り小さい。壁は全体に外傾して緩やかに立ち上がる。壁高は30～40cmを測る。覆土は７層に分けられた。遺構中央部には床面からマウンド状に４～７層が堆積している。これは地山に由来する土であり、明らかに人為的な埋土である。周囲の遺構を掘った時の排土を捨てた可能性がある。

遺物は覆土中から縄文土器のⅣ群土器片（第72図746）が１点出土しただけである。

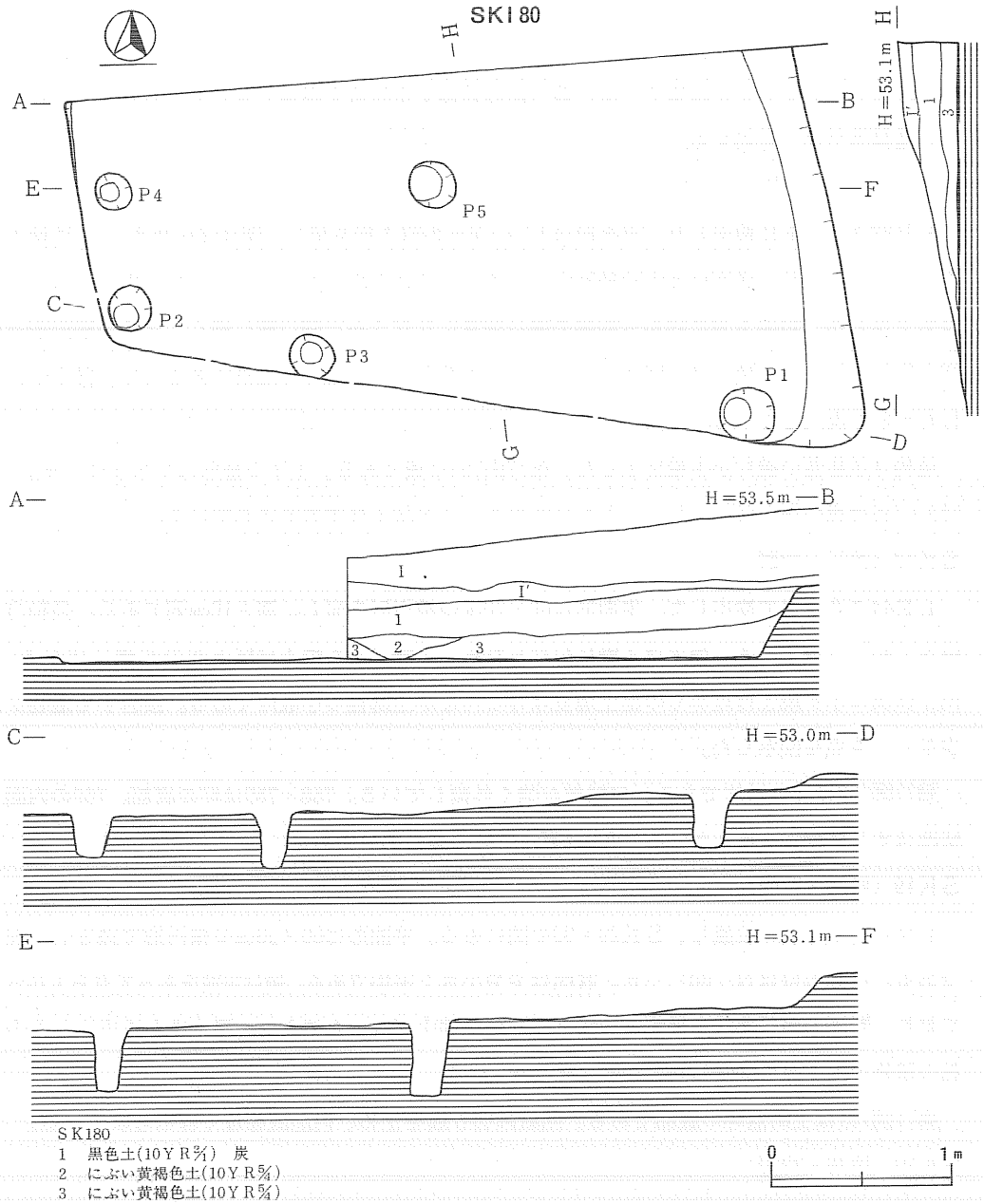
SKI80（第75図）

SKI58の北側、LQ52・53グリッドに位置する。遺構は調査区外である東側に延びている。地山上面で確認したものである。地山上面はこの付近で北側及び西側に緩く傾斜している。こ



第74図　SKI59

のため地山を掘り込んでいない北側・西側の遺構平面プランはつかめなかった。第75図には調査部分の推定プランを示した。ＳＫＩ31・58・59では壁際にピットが検出されていることを考慮して、北側に僅かに確認された壁をもとに推定したものである。調査部分の推定プラン床面積は7.0㎡である。床面はほぼ平坦であるが、やや柔らかい。５個検出したピットの平面形は



第75図　SKI 80

径20cm前後の円形で、深さ20～40cm前後である。東側の壁は緩やかに立ち上がり外傾する。壁高は40cmである。また僅かに検出された北壁の壁高は10cm弱である。覆土は１～３層に分けられるが、自然堆積と見られる。遺構内から遺物は出土しなかった。

（３）土坑

規模・形態など様々なものがある。遺構分布の点で、ＳＫ17・19・20・29・33・90が調査区中央部に集中することが指摘できる。幾つかの共通する特徴を指摘できるものもあるが、以下では遺構番号順に記述する。

ＳＫ13（第76・77図）

ＬＰ37グリッドに検出した。平面形は2.2×1.6ｍの略方形を呈し、深さ50㎝である。長軸方位はＮ－82°－Ｅ。底面は地山砂礫層中にあるが、ほぼ平坦である。北側の壁は角度をもって立ち上がるが、斜面下方に向かう南側の壁は非常になだらかに開口部に続く。土坑の断面形は逆台形状を呈する。覆土は７層に分けられる。砂礫層を掘り込んだ遺構であるため、覆土中には石が多く混入している。

遺物は須恵器の破片が少量出土した。第77図754は蓋である。上半の整形はケズリによる。755・756は甕の胴部破片である。ともに叩の後、ハケ状工具で整形されている。

ＳＫ17（第76・77図）

ＬＲ44グリッドで検出した。平面形は80×70㎝の楕円形を呈し、深さ10㎝弱である。長軸方位Ｎ－40°－Ｗである。覆土は４層に分けられる。１層とした焼土は坑上面の北側に広がる。出土状況に示す焼土付近からの出土遺物はほとんどが土師器の小破片である。接合する遺物が少なく、４点を図示した。

第77図757は坏の破片である。口縁部が強く外傾している。758・759は坏の底部。759の内面底部はすり鉢状にくぼんでいる。760は高台付坏の高台部分である。

ＳＫ19（第76・77図）

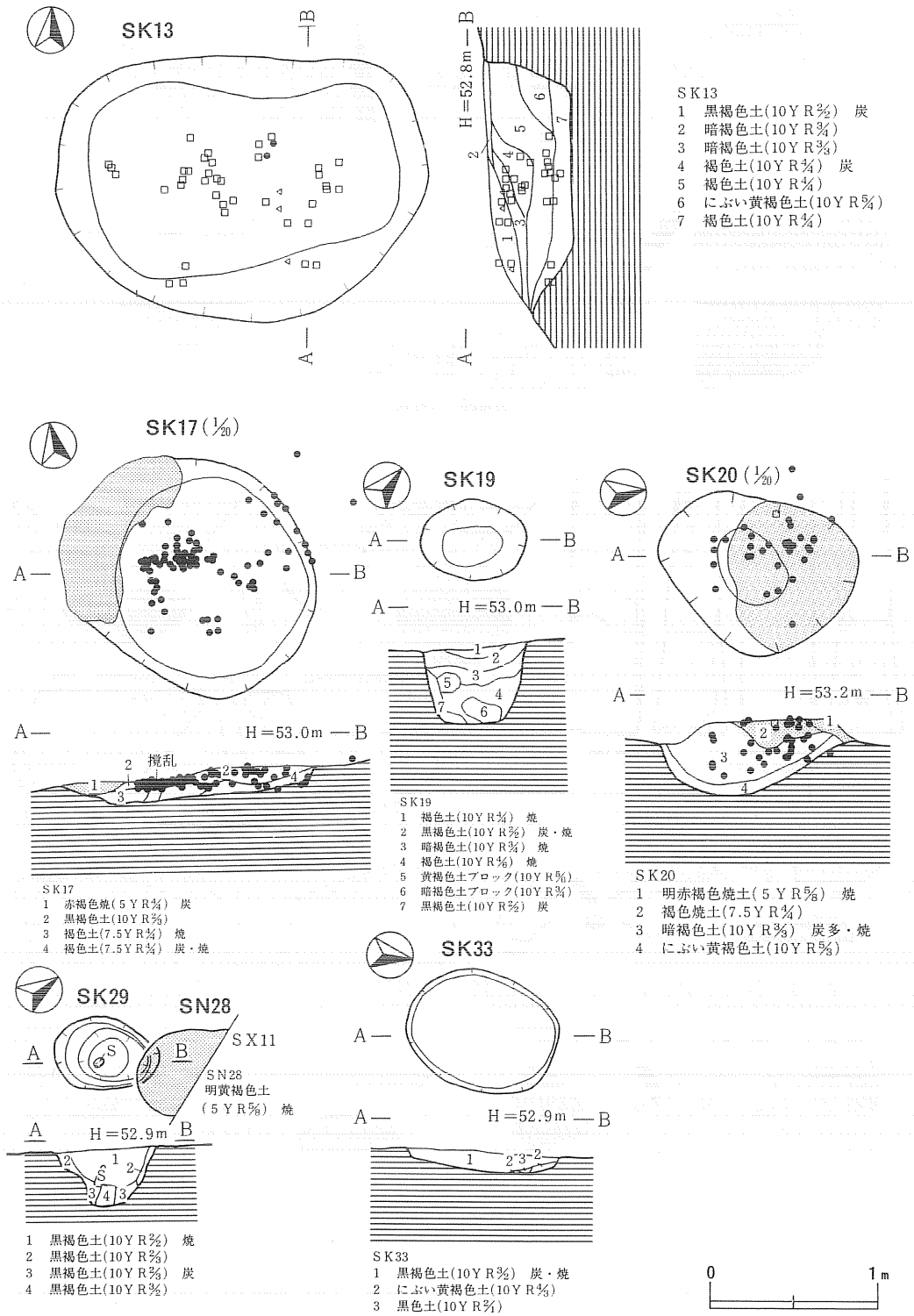
ＬＲ45グリッドに位置し、ＳＫ29・33の間にある。平面形は60×50㎝の楕円形で深さ45㎝程である。長軸方位はＮ－60°－Ｅ。底面はやや小さく平坦である。壁は角度をもって立ち上がっており、断面形がＵ字状を呈する。覆土の５層は地山ブロックである。覆土中から出土した少量の遺物の内１点を図示した。

第77図761は土師器坏の底部である。回転糸切り痕を止め、内面底部はくぼめられている。

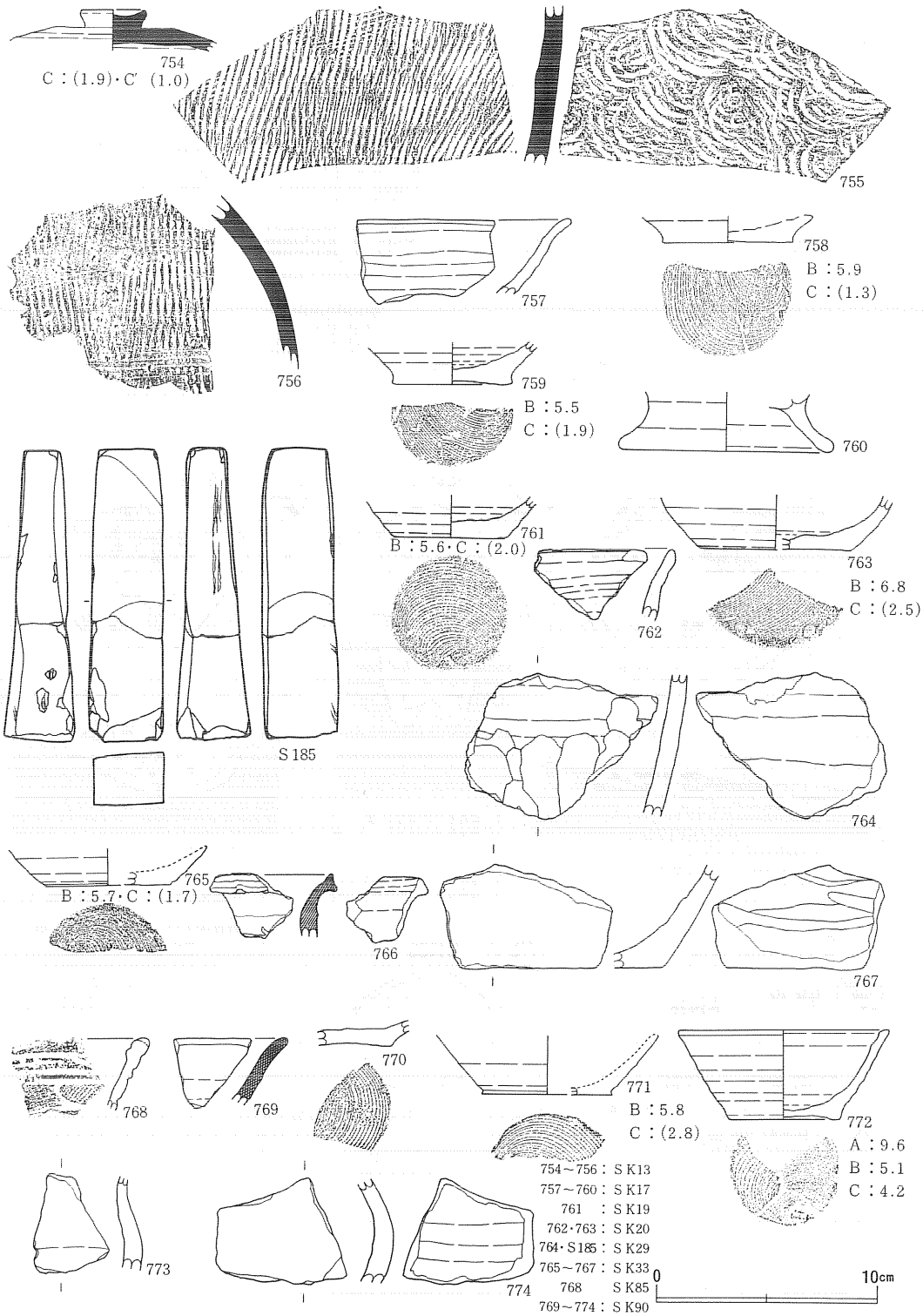
ＳＫ20（第76・77図）

ＬＱ44グリッドで検出した。ＳＫ17の南東２ｍにあたる。平面形は50×50㎝の不整な方形を呈し、深さ25㎝である。長軸方位はＮ－40°－Ｅ。底面は丸みを帯び、壁は緩く立ち上がる。ＳＫ17に類似し、覆土上部に焼土が広がる。覆土中には全体に炭化物が多い。遺物は土師器の細片が多く、２点を図示した。

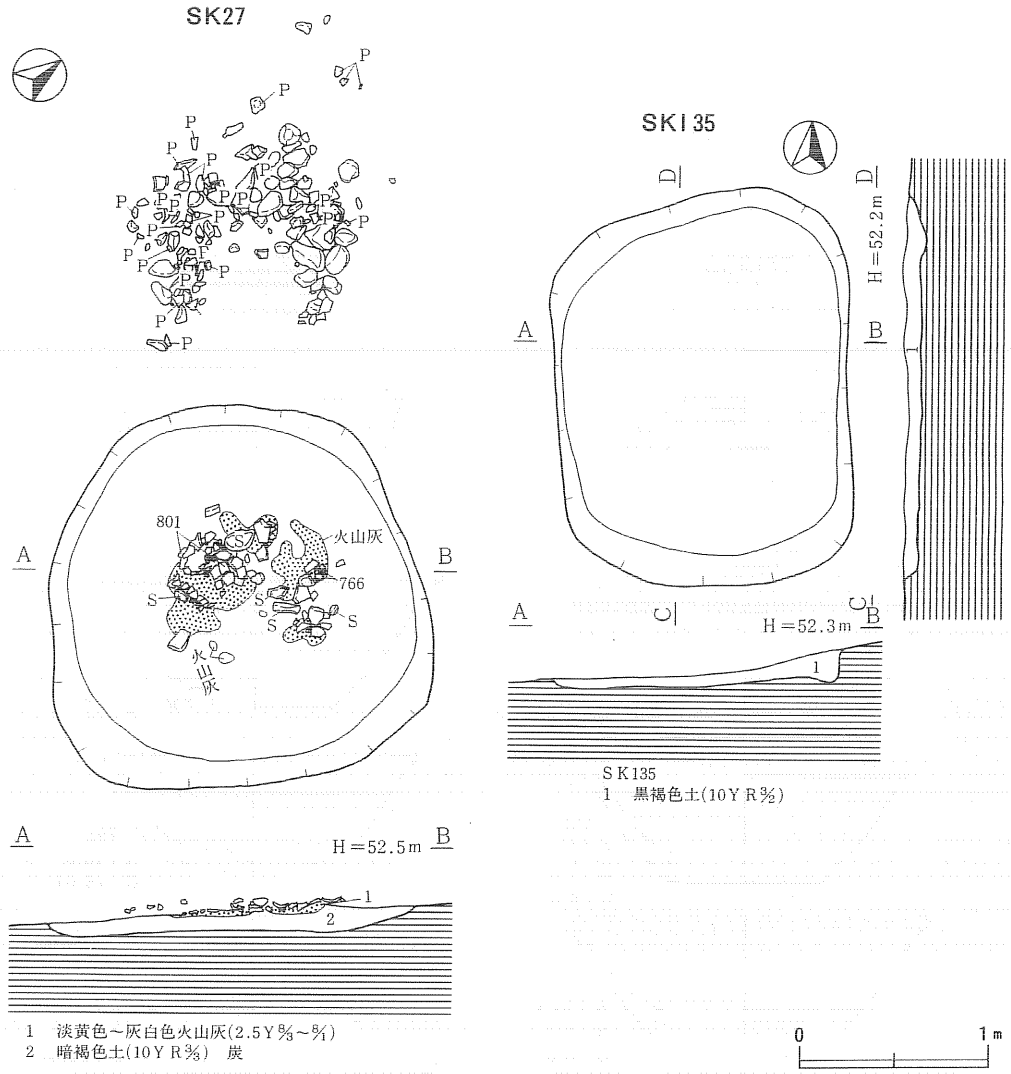
第77図762は口縁部破片であるが、歪んだ破片であり器形は不明である。二次加熱による器面の摩滅が著しい。763は坏の底部である。回転糸切り痕をもつ。内面底部中央がくぼめられ



第76図　S13・17・19・20・28・33・SN28



第77図　遺構内出土遺物(24)

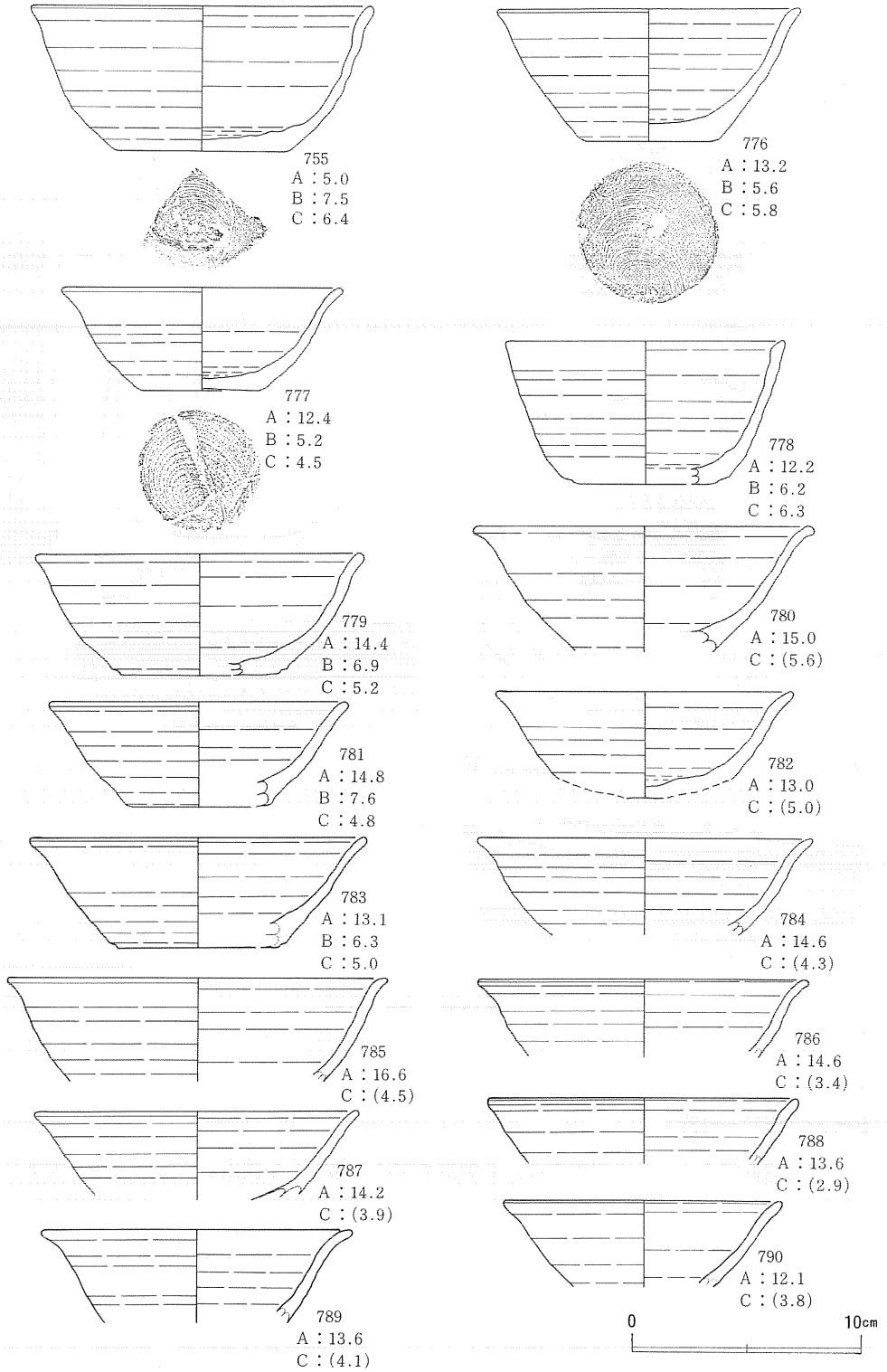


第78図　SK27・35

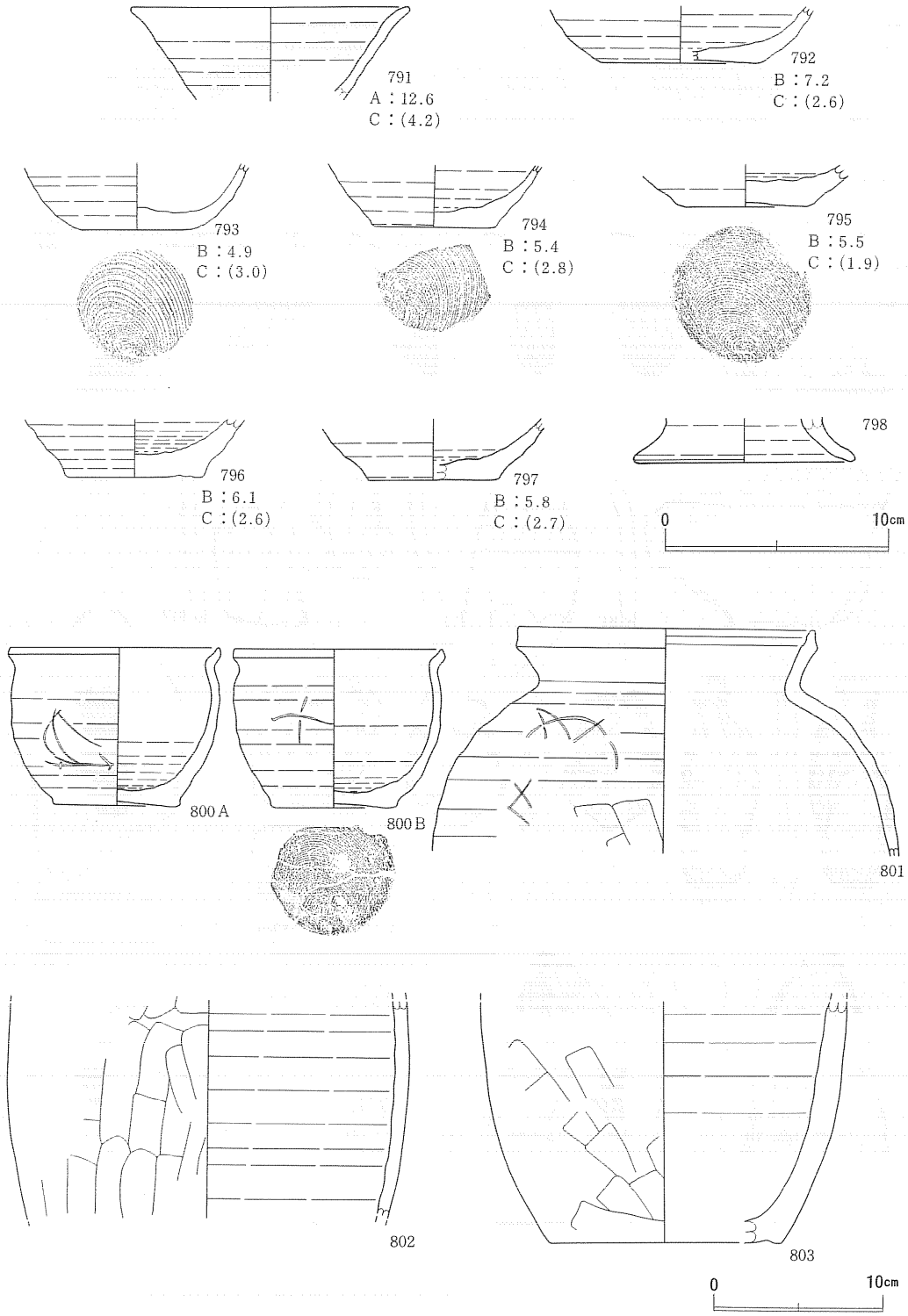
ている。

SK27（第78～81図）

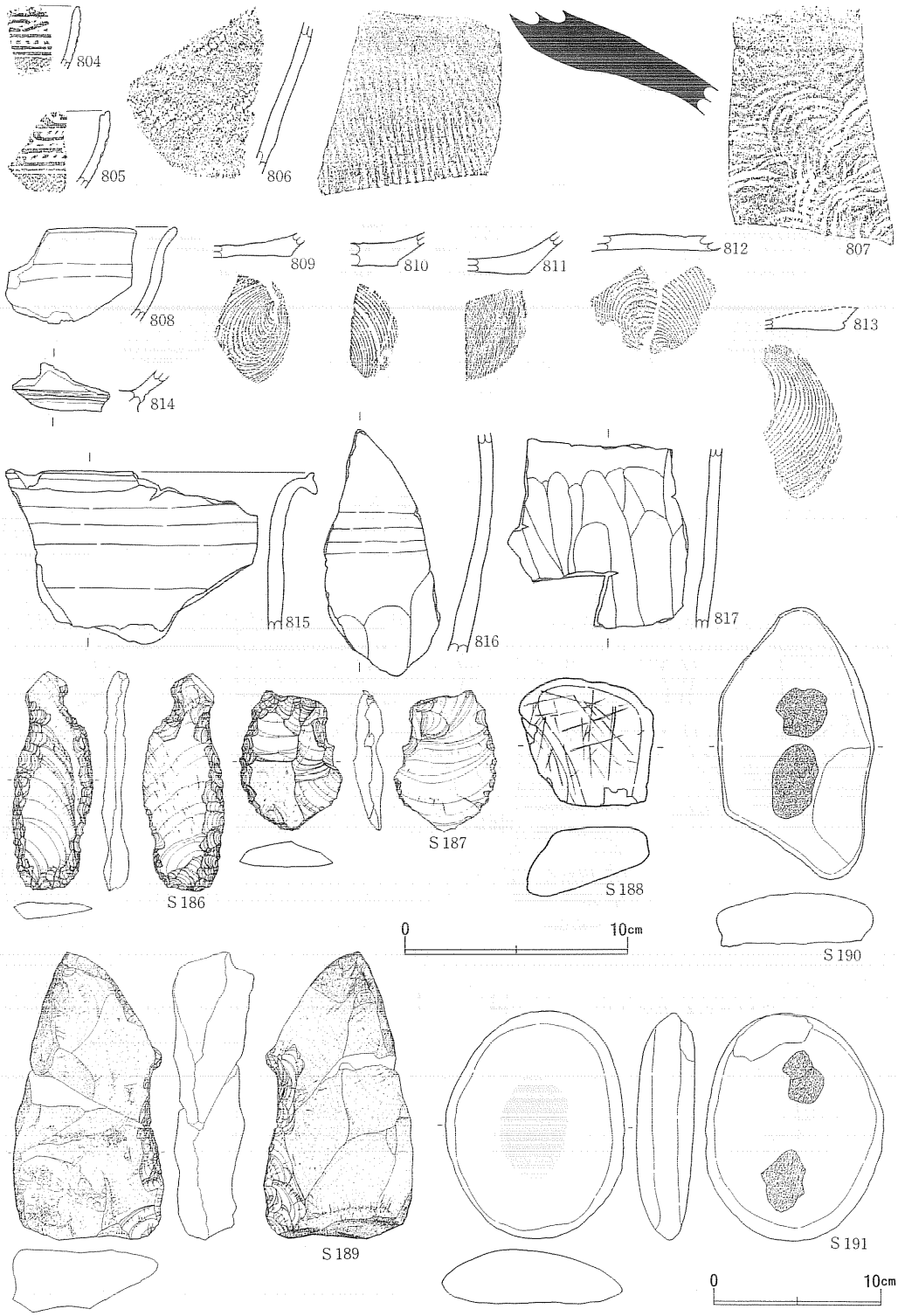
ＬＴ・ＭＡ47グリッドに位置する。Ⅱ層精査中に上部配石を検出した。配石は、大きなもので径35cm程度、小さなもので拳大の円礫46個を用いたものである。東側および北部にやや大きめの礫を組んだ部分があり、それぞれほぼ円形に組み上げられている。礫は２カ所の組み石部分の南側にも検出され、全体としては径1.2m前後の円形に広がる。北側組み石の南側には土師器甕の体部が２個正立の状態に埋設されていた。また同一レベルには、淡黄色～灰白色を呈する火山灰が検出された。火山灰は小さく４個のブロック状にまとまっており、遺構内に人為



第79図　遺構内出土遺物(25)



第80図　遺構内出土遺物(26)



第81図　遺構内出土遺物(27)

的に入れられたものと考えられる。これら遺構の上部精査後に、地山面を精査して土坑の平面プランを検出した。平面形は、径2.0ｍ前後の不整な円形を呈する。地山上面からの深さは10㎝と浅い。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は１層で少量の炭化物が混入する。

遺物は配石確認面・配石下より出土し、下部土坑中からは出土しなかった。第79図775～第80図797は土師器の坏である。底部切り離しはすべて回転糸切りである。体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外傾する器形を呈するものが多い。口径の平均13.2㎝、底径の平均6.2㎝、器高の平均5.4㎝である。798は高台付土器の台部である。799～803・815～817は甕である。803は小型のものである。体部中央の２カ所に、沈線による模様が描かれている。一方は帆掛け船状のものであり、ちょうど反対側には十字状を呈するものがある。801にも模様が描かれている。803は底部であるが非ロクロ成形後に、ロクロ整形され、更に削りが施されている。これらの土師器のほかに縄文土器Ⅳ群が２片、Ⅶ群が１片、須恵器甕の肩部破片１片が出土している。また配石中にはＳ136～Ｓ190の石器が含まれていた。

ＳＫ29（第76・77図）

ＬＲ45グリッド、ＳＫ19の東側にある。また西側にＳＮ28焼土遺構が接する。ＳＮ28焼土遺構と若干重なるが、本遺構が古い。平面形は60×40㎝の楕円形を呈し、深さ35㎝である。長軸方位はＮ－42°－Ｅ。底面は小さく径20㎝の円形である。壁は角度を持って立ち上がるが、途中に段を有し、その後開口部に緩く続く。４層に分けられる覆土の内、４層は柱痕跡と考えられる。覆土中から土師器の破片少量と砥石１点が出土した。

第77図764は土師器甕の体部破片である。器表面のケズリの方向は下から上に向かう。Ｓ185の砥石は４面使用されている。

本遺構は覆土の状態から柱穴と考えられる。

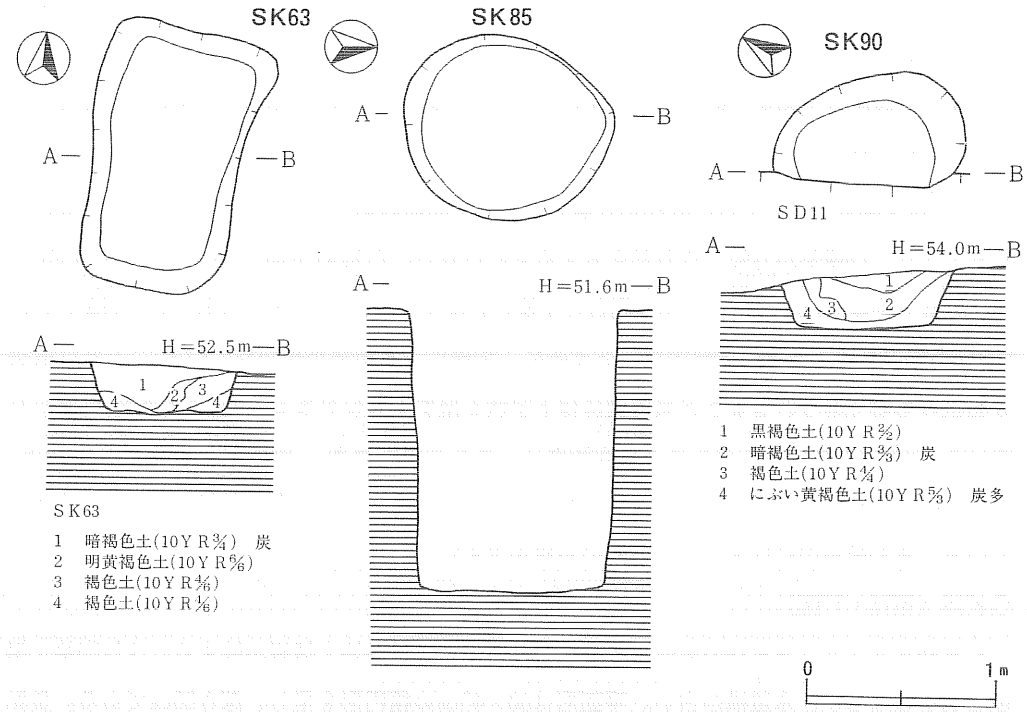
ＳＫ33（第76・77図）

ＬＲ45・46グリッドに位置し、ＳＫ19の西側にある。平面形は90×70㎝の楕円形を呈し、深さは15㎝と浅い。長軸方位はＮ－13°－Ｅである。底面は中央が緩くくぼむ。壁は急角度で立ち上がる。出土遺物は少ない。

第77図765は土師器の底部であり、回転糸切り痕を持つ。766は小型の甕の口縁部破片である。内面は黒色処理されているが、ロクロ目も観察される。767は甕の底部である。

ＳＫ35（第78図）

ＬＴ・ＭＡ48・49グリッドに位置する。平面形は2.0×1.5ｍの略方形を呈する。深さは10～20㎝と浅い。長軸方向はほぼ北である。底面は柔らかく若干の凹凸が見られる。壁は急角度に立ち上がっている。覆土は黒褐色を呈し、地山粒の混入する１層である。平面形および遺構上部の特徴は異なるが、大きさ・深さの点ではＳＫ27に共通する。



第82図　SK63・85・90

遺構内から遺物は出土していない。

ＳＫ63（第82図）

ＬＲ・ＬＳ52グリッドに検出した。調査区北東部の竪穴状遺構が集中する部分に位置する。周辺にはピットが多く検出されている。1.4×0.8ｍの方形を呈し、深さ25㎝を測る。長軸方位はＮ－11°－Ｅである。全体の掘り方はしっかりとしている。底面は堅く凹凸が著しい。壁は角度を持って立ち上がる。

遺構内から遺物は出土していないが、掘り方の状態と遺構の分布を考慮して平安時代以降のものと判断した。

ＳＫ85（第77・82図）

ＭＡ55グリッドで検出した。埋没した沢の対岸で検出した数少ない遺構の内の一つである。平面形はほぼ円形を呈し、径１ｍほどである。深さは1.5ｍと深い。周辺の地山は砂礫の混じる非常に堅い土であるが、掘り方はしっかりとしている。底面付近では東側からの伏流水が流れ込んでいる。このため、土層観察面が崩れ土層図の作成ができなかった。土坑の断面形は均整のとれた円筒形を呈する。覆土は黒色土が主体であり、混入物は少なかった。遺物は覆土上部から第77図768が出土しただけである。遺物は遺構埋没過程での流れ込みと考えられる。

768は縄文土器であり、文様からⅣ群に相当する。

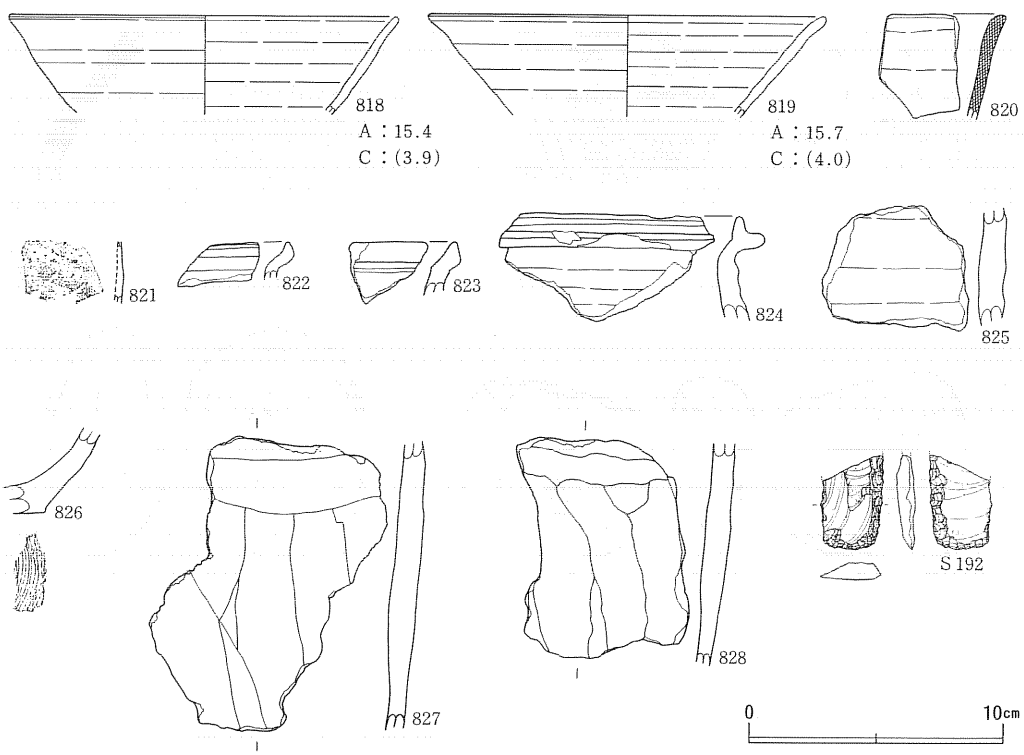
遺構の時期を特定する遺物に恵まれないが、掘り方の特徴を考慮して一応平安時代以降のものとした。

ＳＫ90（第77・82図）

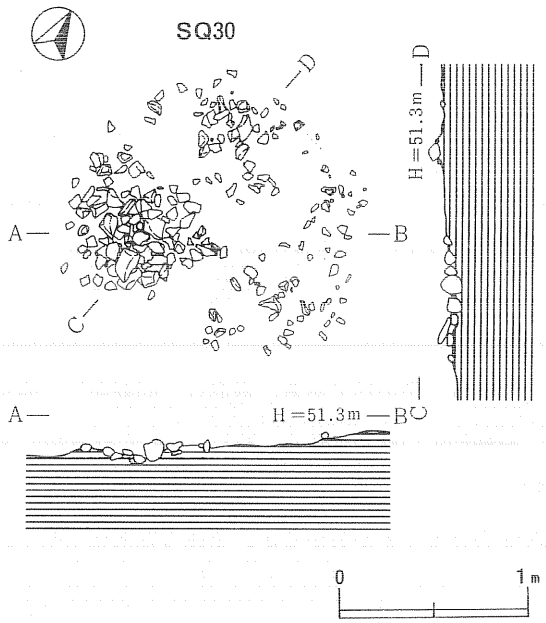
ＬＰ・ＬＱ45グリッドに位置する。西側はＳＤ11に切られている。遺存する部分から平面形を推定すると、1.0×0.7ｍ程度の楕円形を呈したものと考えられる。深さは30㎝である。長軸方位はＮ－50°－Ｗ。底面は平坦で壁が急傾斜で立ち上がり直線的に開口部に続く。このため断面形は逆台形を呈する。覆土は４層に分けられ、３・４層に炭化物が混入する。覆土中から出土した遺物はいずれも土師器である。

第77図769は内外共に黒色処理されている。772は小型の坏である。器形は、回転糸切り痕を止める底部から僅かに外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に続く。771も底部であるが、やや底径が大きく器形は不明である。773・774は小型の甕の体部破片であり、同一個体のものであろう。破片の断面形からは体部が強く丸みを帯びることが分かるが、全体の器形は不明である。

（４）焼土遺構



第83図　遺構内出土遺物(28)

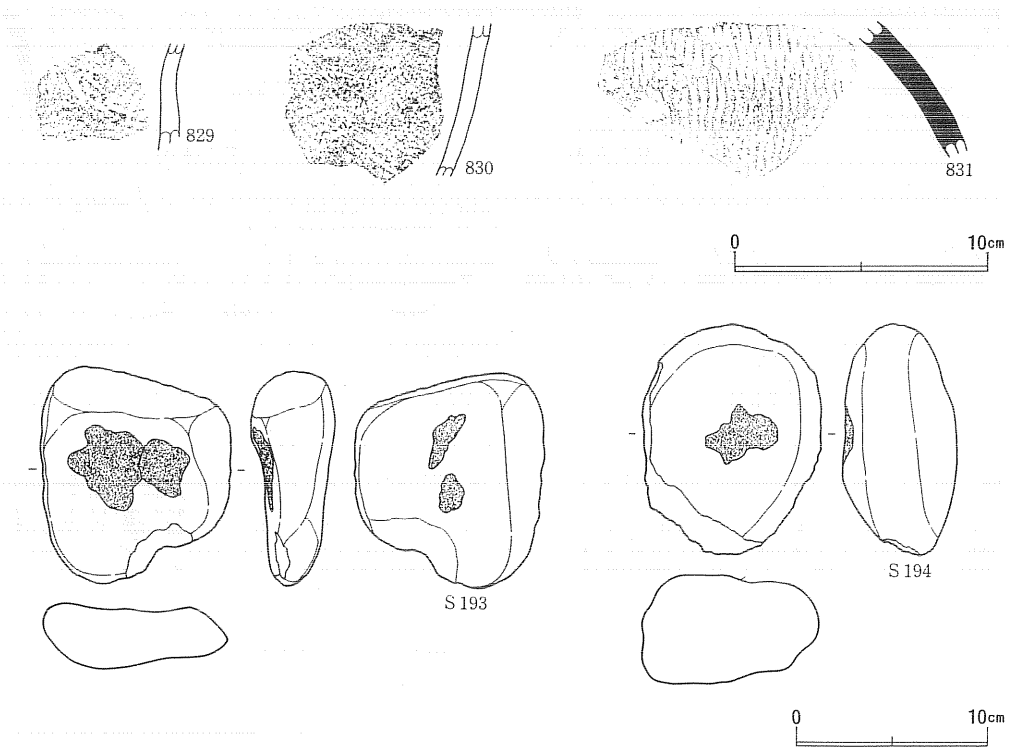


第84図　SQ30

ＳＮ28（第76・83図）

ＬＲ48グリッドで検出したもので、西に隣接するＳＫ29より新しい。また、東側はＳＤ11に切られている。残存する部分は、明赤褐色焼土が40×50㎝程度の楕円形に広がっている。焼土の厚さは10㎝前後である。掘り方は伴わない。焼土上および焼土中から土師器が出土している。

第83図818・819は口縁部が僅かに外傾する坏である。また、820は内外両面を黒色処理した坏の破片である。821の器形はわからないものの、器表面に刻線が見られる。822～825・827・828は甕の破片である。824の口端直下には鍔状に張り出す部分がある。827・828の削りの方



第85図　遺構内出土遺物(29)

向は下から上に向かう。826は体部の立ち上がり具合から甕の底部破片と考えられる。Ｓ192は基部を欠損する不定形石器である。側縁から先端にかけて両面に二次加工が施されるが、腹面に主要剥離面を残している。

（５）集石遺構

ＳＱ30（第84・85図）

調査区西側の斜面下方、ＭＡ44グリッド北東隅に位置する。Ⅱ層中に検出した遺構である。径５～10㎝前後の円礫を集めたもので、集中する部分は径60㎝程の円形を呈する。この集中部分の北側にも同様の礫の集中箇所があり、また東側に散在する礫まで含めると、全体として径1.5ｍ程の円形を呈する。石は斜面上方の地山中に由来するものと考えられる。

集石中に混在した遺物には縄文土器Ⅶ群の土器（第85図829・830）と須恵器甕の体部破片（831）、図示できなかったが土師器把手付土器の把手部分がある。また、集石中に２点の凹石が含まれていた（Ｓ193・194）。

（６）環状溝状遺構

ＳＤ71（第86・87図）

調査区南東部のＬＯ38～40・ＬＰ39・40グリッドにかけて検出した。全体として略方形を呈するものと想定されるが、南西側では途切れており、また南東部分は確認できなかった。他の遺構との重複関係はＳＫ52・72・83・87～89より新しく、ＳＤ11より古い。上面幅30～50㎝、底面幅20～40㎝、深さ10～15㎝である。

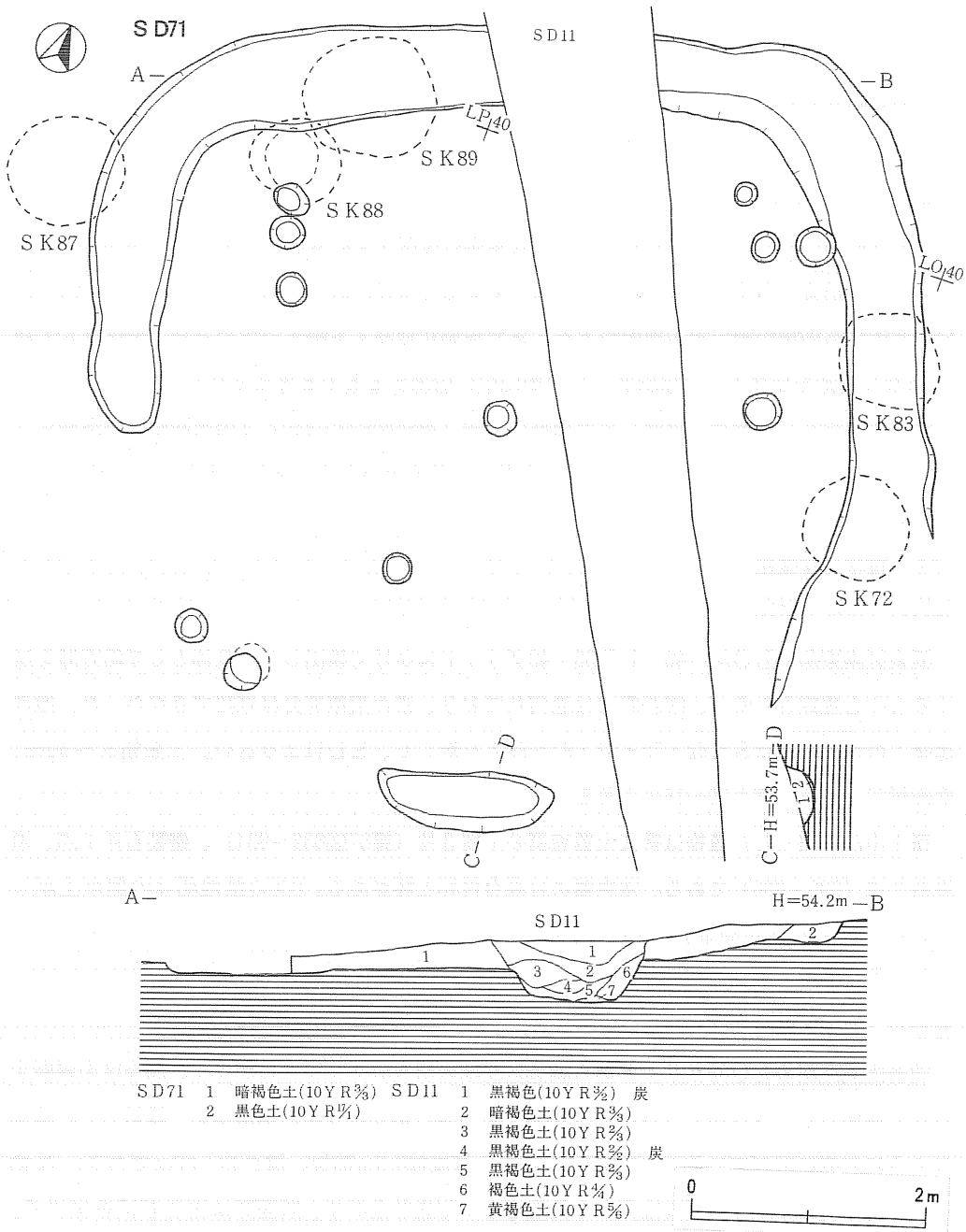
覆土中から出土した遺物は縄文土器Ⅶ群の土器３片（第87図832～834）、磨製石斧１点、須恵器２点（835・836）である。須恵器には高台付坏と坏がある。836の接地部は内側が上がっている。835は灰褐色を呈する生焼け状のものである。

（７）溝状遺構

ＳＤ11（第７・88～90図）

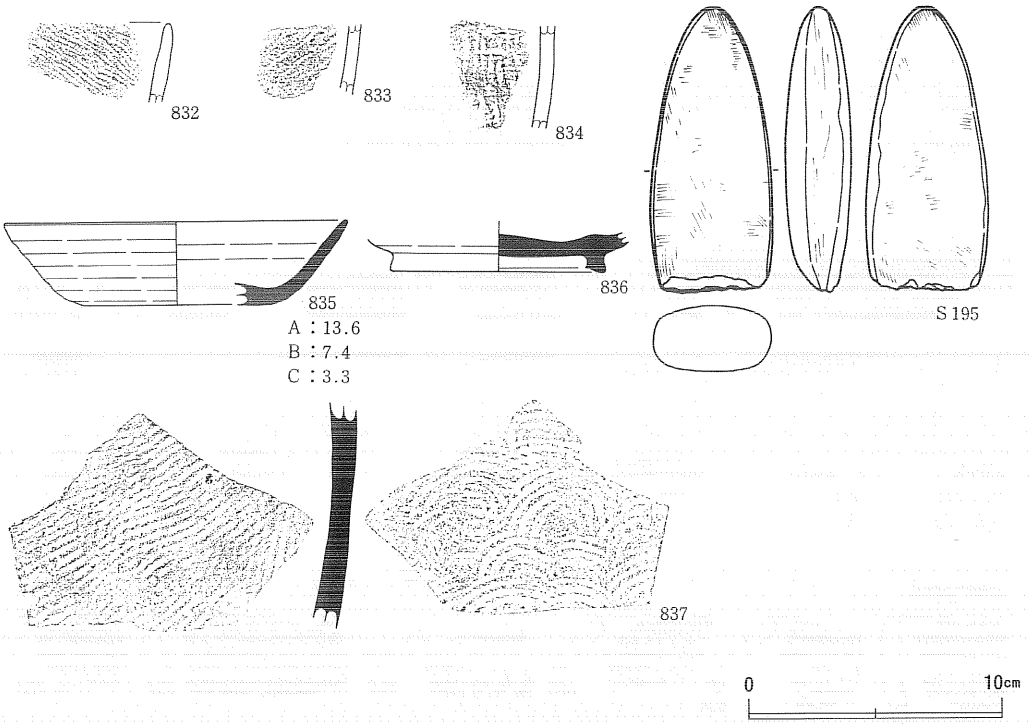
調査区南東部のＬＯ38グリッドから調査区北部のＭＡ57グリッドにかけて、調査区を縦断する形で検出した。ＳＮ28・ＳＤ71・ＳＫ86・90・94と切り合うが、本遺構が一番新しい。遺構はさらに北側に延びている。上面幅1.0ｍ前後、基底幅0.6ｍ前後、深さ40～50㎝である。長軸方位はＮ－20°－Ｗ。平坦な底面から角度をもって立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は所々に地山に由来するブロック状の黄褐色土が混入するが、全体的には黒褐色を呈する。

覆土中からは縄文土器、須恵器、土師器、各種の石器など多くの遺物が出土したが、いずれも遺構埋没過程で流入したものと考えられる。遺物の出土状況は、縄文時代の土坑集中部分の西側では縄文時代の土器・石器が多く、平安時代の土坑が集中する中央部分では土師器が出土し、北半では少なかった。



第86図　SD71

出土遺物は破片が多く、器形が推定できるものは少ない。第88図838～869は縄文土器である。838は口縁部下に沈線で縦位の楕円形区画をとるもの、839・840は沈線が垂下するものである。841～853は鉢形土器の破片である。845の口縁は羊歯状の小波状を呈し、その下に載痕列が施されている。842・843は口縁部文様帯に羊歯状文がみられる。854～859は注口土器の破片で、入



第87図　遺構内出土遺物(30)

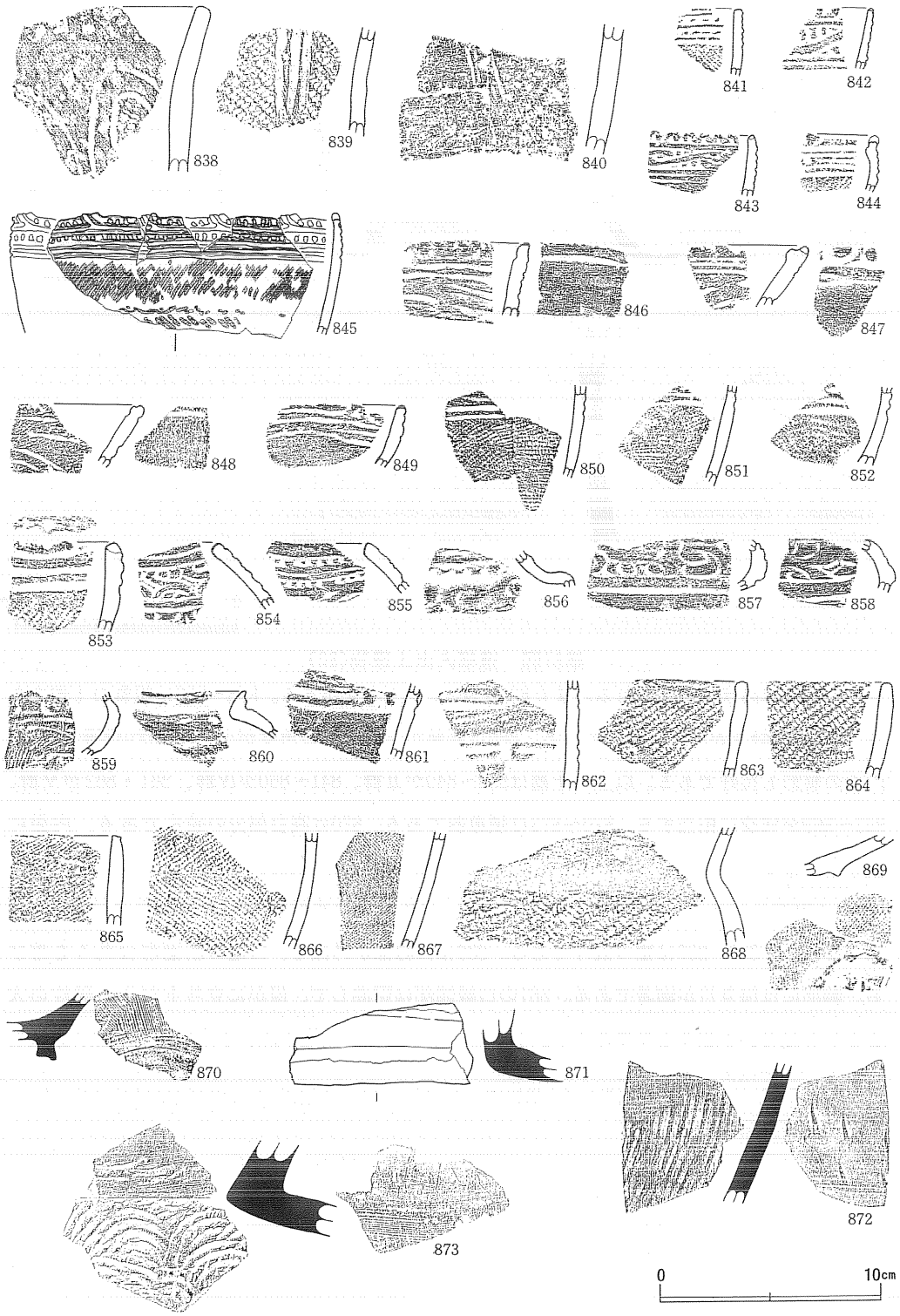
り組み文や羊歯状文が施される。また861・862には工字文がある。863～869は粗製の土器である。868は口縁部が強く屈曲している。869は底部から体部への角度が小さく皿状の器形である。内面の整形も良好である。以上の土器は838～840がⅡ群、841～860がⅣ群、861・862がⅤ群、863～869がⅦ群に相当する。870～873は須恵器である。870は高台部分の破片である。内面に掻き目が著しい。871～873はいずれも甕の破片である。872が灰白色を呈する。第89図874～885は土師器坏である。874～877が口縁部破片、878～885は底部である。886は高台付坏の高台部分である。887～890は甕の破片である。889は口縁部が外傾し、口端の断面形は丸みを帯びる。胴部には掻き目が顕著である。887の口縁端部は屈曲して、僅かに立ち上がる。破片の大きさから見て、小型のものであろう。石器では石鏃４点、石匙１点、不定形石器11点、鍬状石器１点、凹石10点が出土した。

ＳＤ43（第91図）

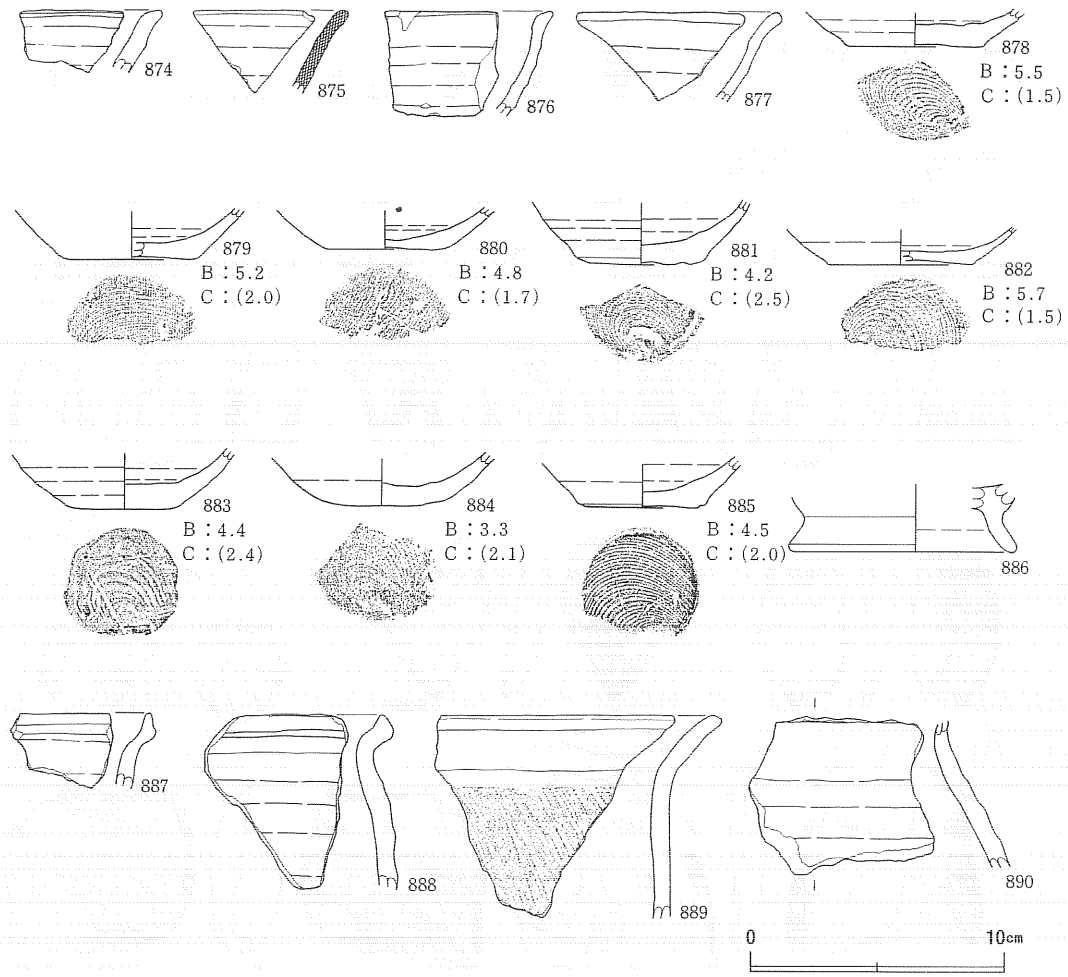
調査区南部のＬＯ36グリッドで検出した。遺構の東側は開田時に削平されたものと見られる。残存長2.2ｍ、上面幅60㎝、底面幅40㎝、深さ15㎝程である。長軸方位はＮ－53°－Ｅ。底面は平坦であるが北東から南西に傾斜する。遺構内から遺物は出土していない。

ＳＤ73（第87・91図）

調査区の南部、ＬＮ39グリッドに検出した。斜面に直交する形であり、ＳＪ40との関係も想



第88図　遺構内出土遺物(31)



第89図　遺構内出土遺物(32)

定される。遺構北半は攪乱を受けている。残存長2.0m、上面幅80cm、底面幅50cm、深さ15cmである。長軸はほぼ南北方向をさす。斜面に位置するため、底面は北から南に傾斜している。底面が丸みを帯び、断面形がU字状を呈する。

覆土中から出土した遺物は第91図837の須恵器甕の体部破片１点である。

2　遺構外出土遺物

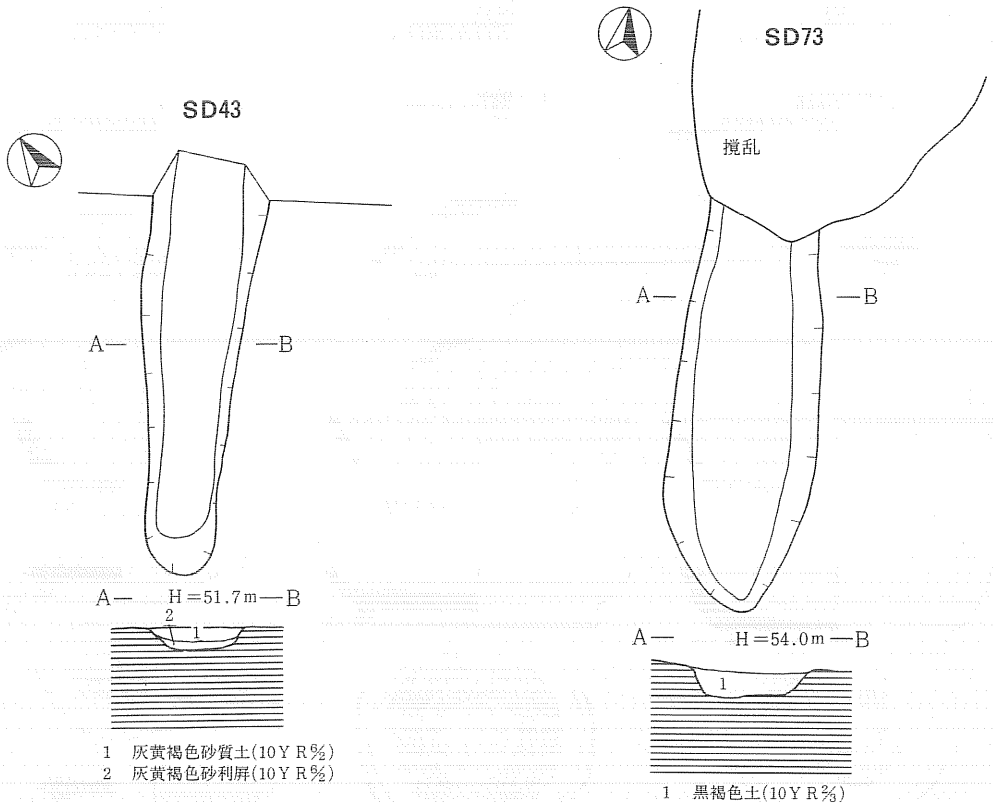
遺物には須恵器・土師器・砥石・鉄製品がある。出土総量はコンテナで20箱程である。

（１）須恵器（第92図891～第95図986）

主に調査区南部の斜面下方で出土した。コンテナで13箱程ある。蓋・高台付坏・坏・壺・甕がある。遺物はすべてが破片であるが、蓋・高台付坏・坏については反転復原により図示した。

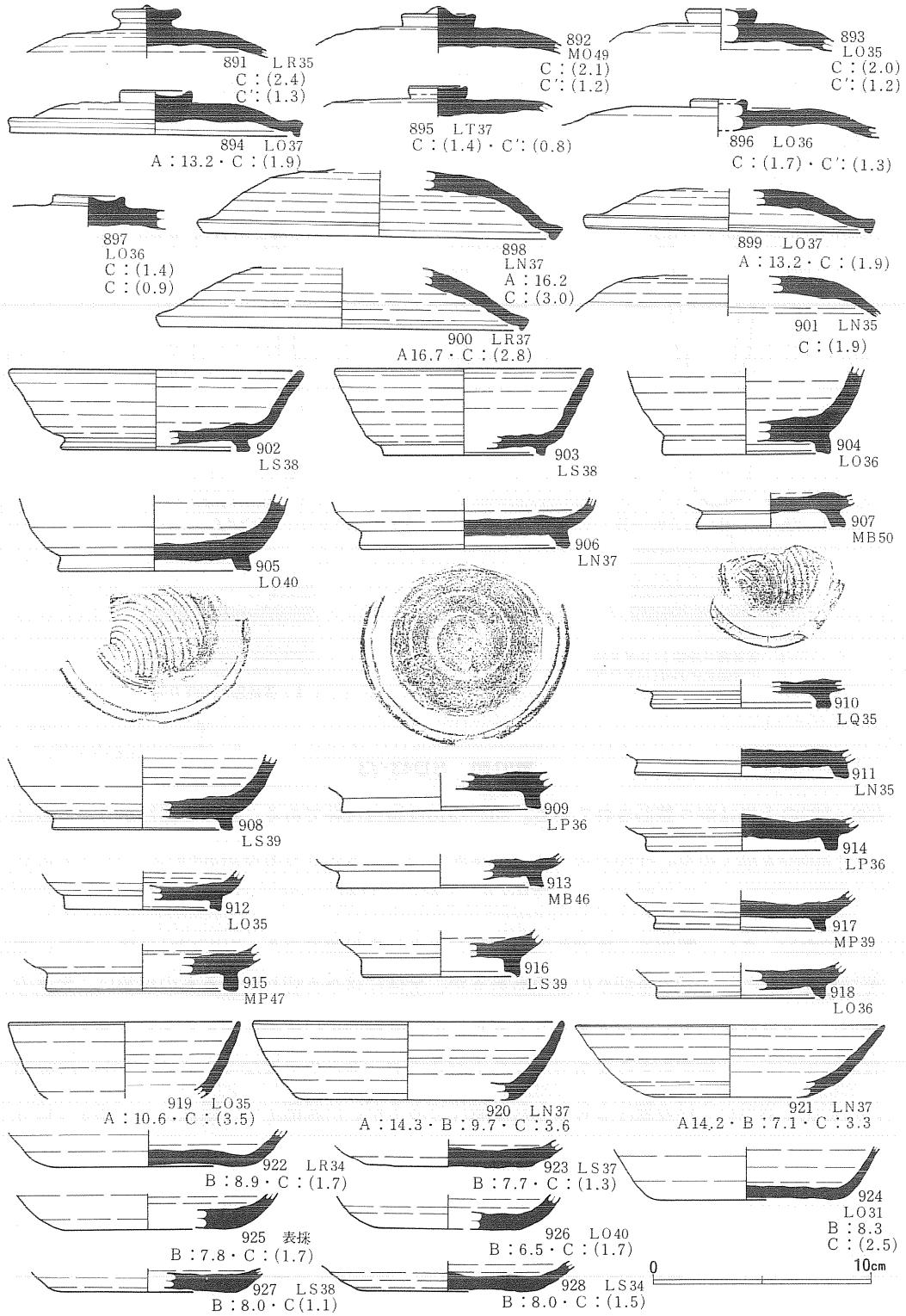
891～901は蓋である。全体の形が分かるものは894だけである。全体に器高は低い。894・

第90図　遺構内出土遺物(33)

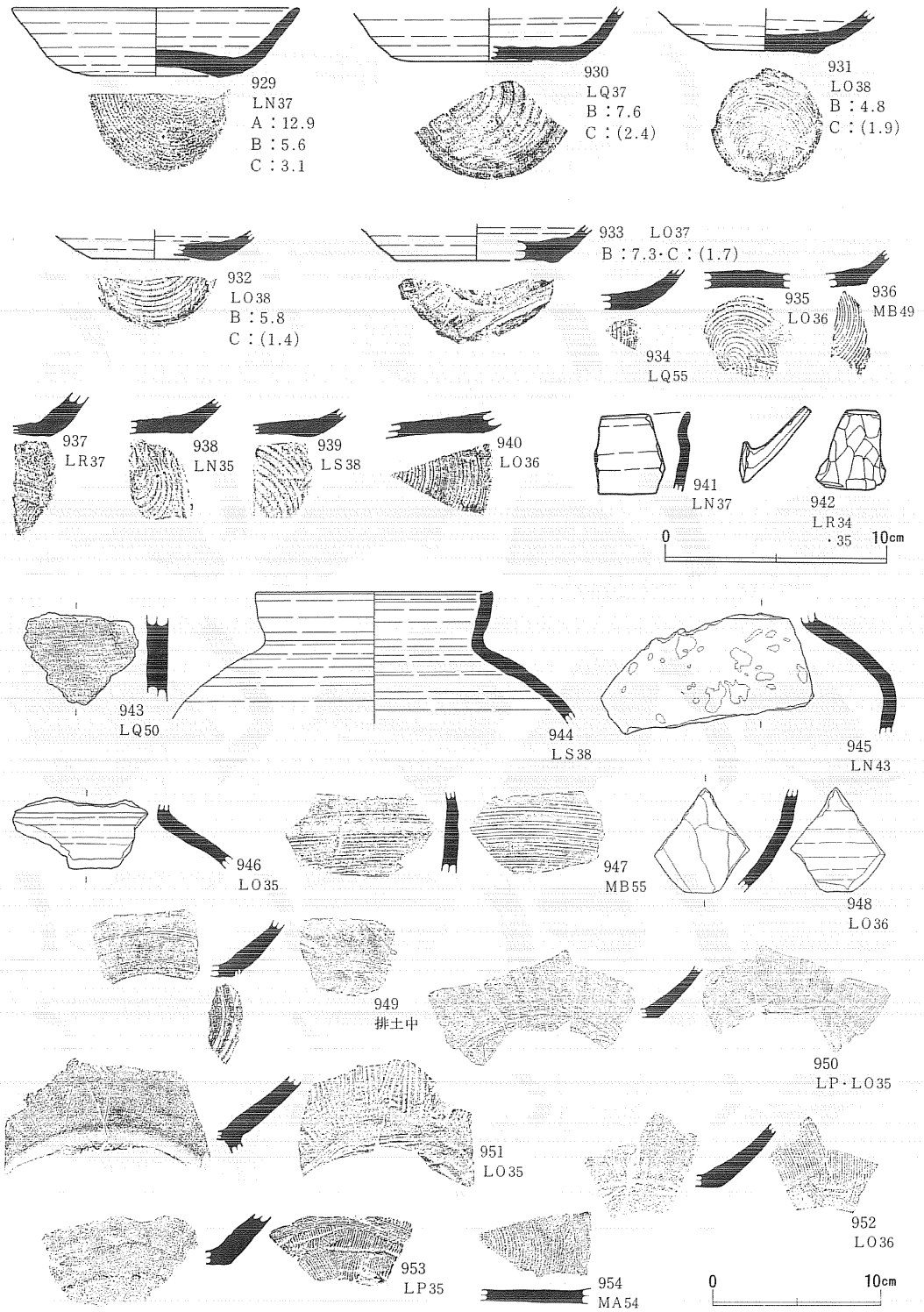


第91図　SD43・73

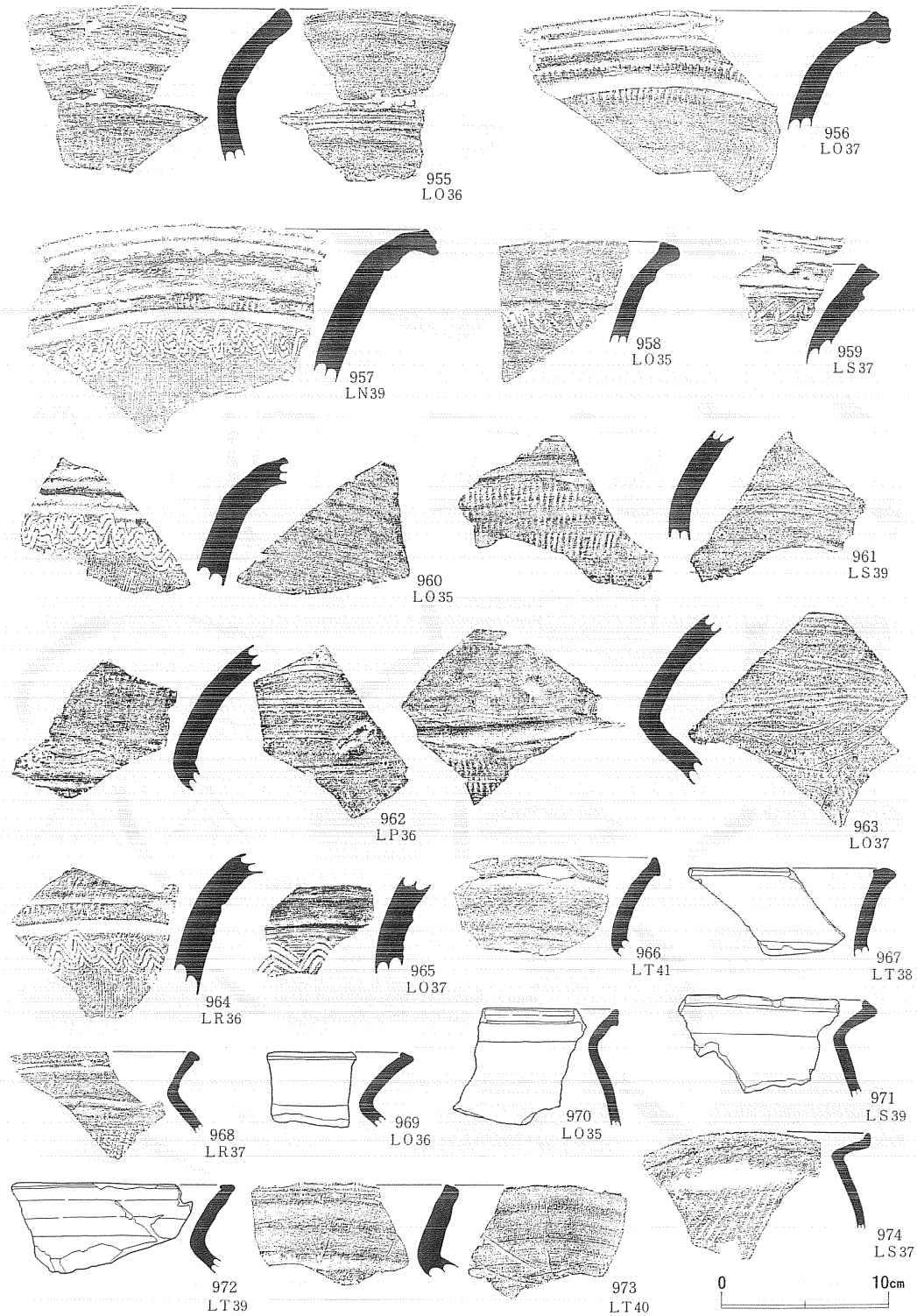
898・899の上半は削り整形されている。902～918は高台付坏である。全体の器形が分かるのは902・903の2点である。坏部の切り離しには905・907の糸切りもあるが906のようなヘラ切りによるものが多い。高台部の高さは平均1.8cmと低い。坏部との接合は若干接地部側に広がるものが多い。また、断面形で接地部の内側がやや上がる特徴を示す。919～941は坏である。底部切り離しは929～940の糸切りのものもあるが、全体にはヘラ切りによるものが多い。全体の器形としては底部からやや角度をもって立ち上がり直線的に口縁部に達するものが多い。931は底径が小さく、体部も丸みをもって立ち上がる点で、他とやや異なっている。941は口縁端部の形状と器厚から坏の破片と考えられる破片であるが、口縁部がやや屈曲している。942は把手付き土器の把手部分である。器面は削り整形されている。943～948は壺である。943は器厚がやや厚いものの、長頸壺の頸部破片であろう。944は広口のものである。949～954は壺・甕類の底部である。内面に掻き目が著しい。いずれも平底を呈する。949・951は台が付くものである。954の内面底部には糸切り痕が認められる。955～986は甕の破片である。いずれも全体の器形は不明である。口縁部破片の断面形状・器厚などの点から大甕（955～965）・甕（96



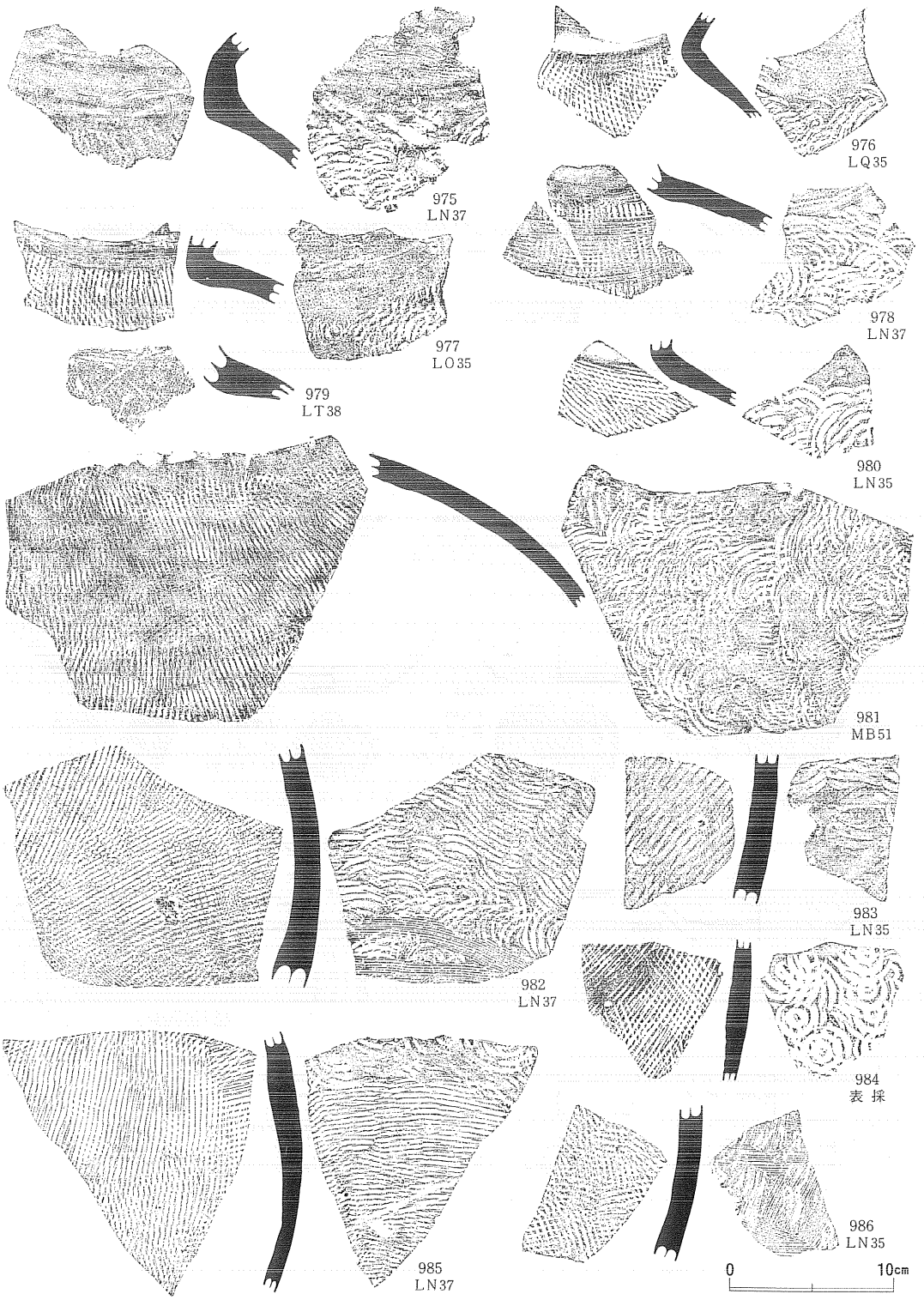
第92図　遺構外出土遺物(28)



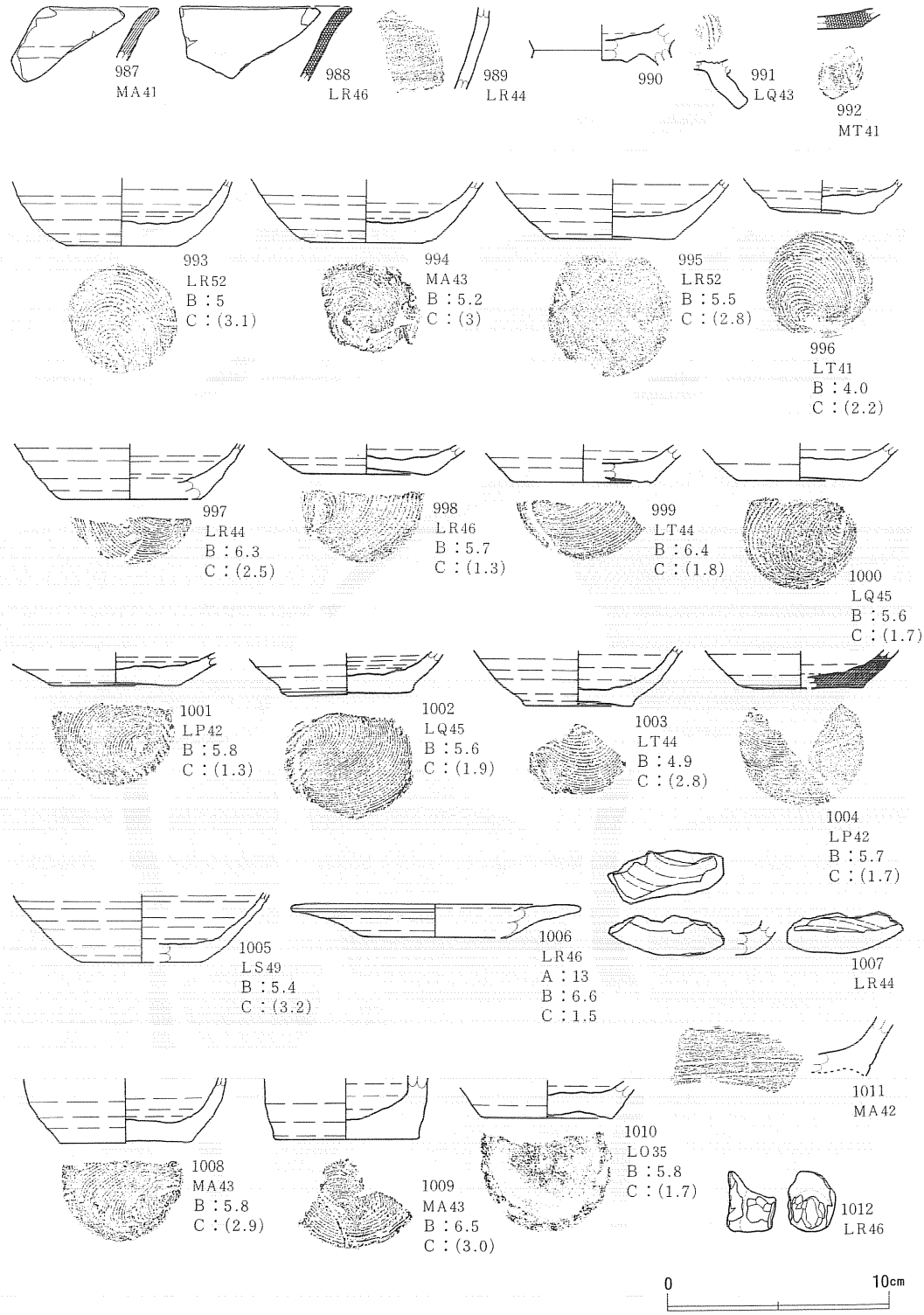
第93図　遺構外出土遺物(29)



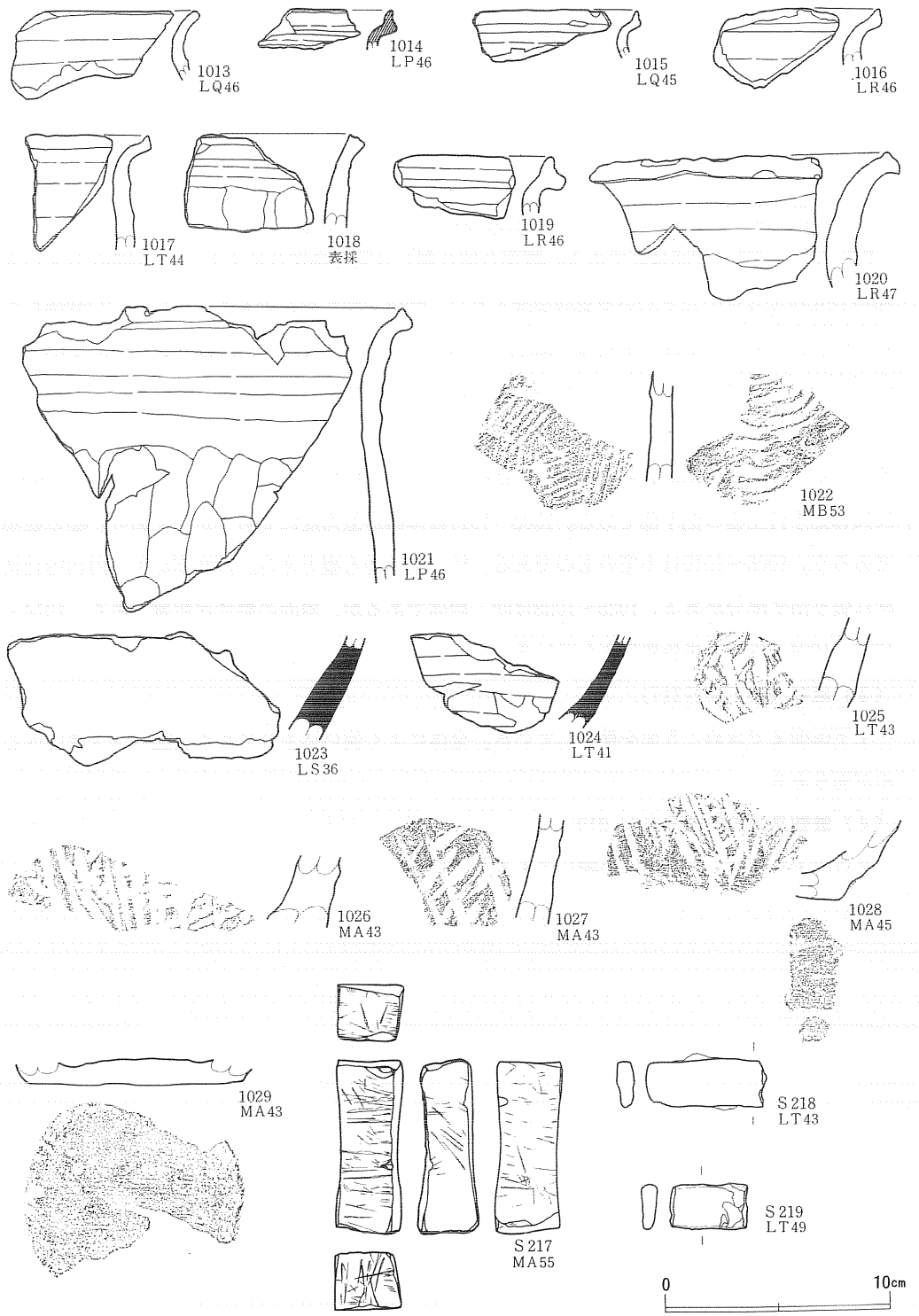
第94図　遺構外出土遺物(30)



第95図　遺構外出土遺物(31)



第96図　遺構外出土遺物(32)



第97図　遺構外出土遺物(33)

6～973）・長胴甕（974）がある。974～986は肩部から体部の破片であり、内外面に叩目を止めている。尚、954・965・973は生焼け状で灰褐色を呈し、909・920・927・941・984・986は焼成良好であるが灰白色を呈する。

（２）土師器（第96・97図）

主に調査区中央西側から出土した。コンテナで７箱程であるが、殆どが細片である。高台付坏・坏・皿・甕がある。

987・988・992～1005は坏である。底部の切り離しは回転糸切りによる。やや径の小さい底部から丸みをもって立ち上がる器形を呈するが、全体の器形を止めるものはなく、口縁部については不明である。底径の平均は5.4cm程である。987・988・992・1004は内面が、また988・992は内外両面が黒色処理されている。このうち992の器面は丹念に削られている。990・991は高台部である。989の器形は不明であるが、ＳＫ27の800・801、ＳＮ28の821と同様に刻線が認められる。1006は体部が底部とほぼ平行に続く皿状の器形を呈する。1007は耳皿の破片である。1012は把手付土器の把手部である。1008～1011は体部が急角度に立ち上がっており、甕の底部であろう。1008～1010は小型のものである。1013・1029も甕である。口縁部破片の内1019は鍔状に張り出す部分がある。1025～1028は同一個体であるが、器面の整形が粗雑である。1014・1023・1024の内面は黒色処理されている。

（３）砥石（第97図Ｓ217）

上下両面まで含めて５面を使用している。全体によく使い込まれており、凹レンズ状にへこんだ面もある。

（４）鉄製品（第97図Ｓ218・219）

２点出土したが、共に刀子の破片である。

第５章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1988年12月22日受領致しました試料について年代測定の結果を下記のとおりご報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Ｃの半減期としてＬＩＢＢＹの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は×線の計数値の標準偏差×にもとずいて算出した年数で、標準偏差（ＯＮＥ　ＳＩＧＭＡ）に相当する年代です。また試料の×線計数率と自然計数率の差が２×以下のときは、３×に相当する年代を下限の年代値（Ｂ．Ｐ．）として表示してあります。また試料の×線計数率と現在の標準炭素（ＭＯＤＥＲＮ　ＳＴＡＮＤＡＲＤ　ＣＡＲＢＯＮ）についての計数率との差が２×以下のときには、Ｍｏｄｅｒｎと表示し、×^{14}Ｃ％を付記してあります。

記

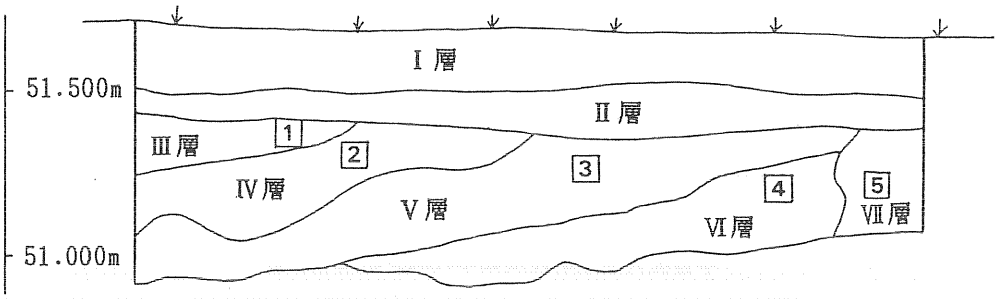
Ｃｏｄｅ　Ｎｏ．	試料	年代（1950年よりの年数）
Ｇａｋ－14184	Charcoal　from　上猪岡遺跡	２２９０±１００
	Ｎｏ．１　８ＫＩＯ－ＳＲ０３	３４０　Ｂ．Ｃ．
Ｇａｋ－14185	Soil　from　上猪岡遺跡	２６８０±８０
	Ｎｏ．２　８ＫＩＯ－ＳＫ２２	７３０　Ｂ．Ｃ．
Ｇａｋ－14186	Soil　from　上猪岡遺跡	３０１０±１１０
	Ｎｏ．３　８ＫＩＯ－ＳＫ８６	１０６０　Ｂ．Ｃ．

第２節　花粉分析

１　はじめに

上猪岡遺跡は、東北横断自動車道建設にともなって発掘調査が行われた遺跡で、秋田県横手市猪岡字猪岡245他に所在する。地形的には横手盆地の南部の沖積地に位置する。周辺は現在水田地帯となっている。

今回の調査は、調査区内で採取された試料について花粉分析を行い、試料中に含まれている花粉・胞子化石を抽出し、その種類や量を調べることによって堆積当時の周辺の植生に関する検討を行うことを目的とした。



第98図　上猪岡遺跡　ＬＰ36の土層断面と分析試料の層位

２　試料

花粉分析試料は、ＬＰライントレンチ（ＬＰ36）の断面から採取された５点（Ｎｏ．１～５）である（第111図）。Ｖ層は平安時代遺物包含層とされ、Ⅶ層からは縄文土器片が検出されている。

３－１　方法

試料から花粉・胞子化石を分離・濃集する方法は次のとおりである。

フッ化水素処理（48％ＨＦ）→重液分離（$ZnBr_2$・比重2.2）→篩別（250μの篩）→アセトリシス処理→ＫＯＨ処理の順に物理・化学処理を行う。処理後の残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成する。光学顕微鏡下でプレパラート全面を観察し、種類（Ｔａｘａ）の同定・計数を行う。

結果は、一覧表と花粉化石群集変遷図で示した。出現率は、各樹木花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が明確でないものである。

３－２　結果

花粉胞子化石は、全試料で良好に検出された（表１）。花粉化石群集は、各試料で多少、異なった群集組成を示した（図２）。

試料番号５（Ⅶ層）の花粉化石群集は、針葉樹のスギ属・マツ属と落葉広葉樹のコナラ亜属の20％前後高率出現により特徴づけられる。この他にブナ属・ハンノキ属といった落葉広葉樹の種類を伴う。草本花粉は種類が多く、イネ科・ヨモギ属が高率に出現した。また、構成比で草本花粉・シダ類胞子が高率に占めるというのも特徴の一つである。

試料番号４（Ⅵ層）では、試料番号５にほぼ類似するものの、マツ属が低率になり、ブナ属が増加し、コナラ亜属・スギ属とほぼ同率の高率出現するという点で異なる。草本花粉の産状もほぼ類似する。本試料で検出されたキク亜科は塊状で出現する特徴を示した。

第３表　上猪岡遺跡　ＬＰ３６花粉分析結果

種　類(Taxa)　　試料番号	1	2	3	4	5
樹　木　花　粉					
モミ属	-	2	-	1	-
ツガ属	-	2	-	1	1
トウヒ属	-	-	1	-	1
マツ属単維管束亜属	1	-	-	-	-
マツ属（不明）	21	275	10	6	37
コウヤマキ属	-	-	-	-	2
スギ属	35	18	11	52	44
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	1	1	3	3
クルミ属	3	-	1	5	2
クマシデ属－アサダ属	8	1	6	4	6
ハシバミ属	3	-	-	2	2
カバノキ属	2	-	-	3	-
ハンノキ属	42	20	19	19	18
ブナ属	25	6	34	41	11
コナラ亜属	36	22	55	45	47
アカガシ亜属	1	-	2	1	2
クリ属	5	-	4	2	-
ニレ属－ケヤキ属	3	-	2	3	3
エノキ属－ムクノキ属	-	1	-	-	-
クワ科	2	-	-	-	-
モクレン属	-	-	1	-	-
モチノキ属	1	-	-	1	1
カエデ属	2	1	-	-	1
トチノキ属	1	-	-	-	-
ブドウ属	-	2	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	1
シナノキ属	1	-	-	-	-
ウコギ科	-	-	1	-	-
トネリコ属	-	-	-	-	1
タニウツギ属	1	-	-	-	-
草　本　花　粉					
ガマ属	2	-	1	-	-
サジオモダカ属	2	-	3	-	-
イネ科	387	53	281	100	193
カヤツリグサ科	9	1	25	10	27
ホシクサ属	-	-	-	1	1
ミズアオイ属	-	-	-	1	-
ユリ科	1	-	-	-	-
ササエタデ節－ウナギツカミ節	2	-	4	2	2
タデ属	2	-	-	-	-
アカザ科	3	1	1	2	-
ナデシコ科	1	-	-	-	-
カラマツソウ属	4	-	5	3	17
キンポウゲ科	-	-	-	-	1
ワレモコウ属	18	2	17	12	1
マメ科	-	-	1	1	-
トウダイグサ科近似種	-	-	1	-	-
アリノトウグサ属	44	41	7	3	14
セリ科	1	1	3	1	4
リンドウ属	-	-	1	-	-
ヒルガオ属	1	-	-	-	-
ネナシカズラ属	-	1	-	-	-
シソ科	-	-	1	-	1
オオバコ属	1	-	-	-	-
オミナエシ属	1	-	2	-	-
ツリガネニンジン属	-	-	-	-	1
ツルニンジン属	-	-	-	-	1
キキョウ属	-	1	-	-	-
ヨモギ属	97	-	84	100	157
他のキク亜科	5	3	6	32	11
タンポポ亜科	8	1	10	5	2
不明花粉	5	6	5	7	-
シ　ダ　類　胞　子					
ゼンマイ属	1	2	1	-	3
他のシダ類胞子	15	4	97	5	132
合　計					
樹　木　花　粉	194	351	148	189	183
草　本　花　粉	589	105	453	273	433
不　明　花　粉	5	6	5	7	0
シ　ダ　類　胞　子	16	6	98	5	135
総　花　粉　・　胞　子	804	468	704	474	751

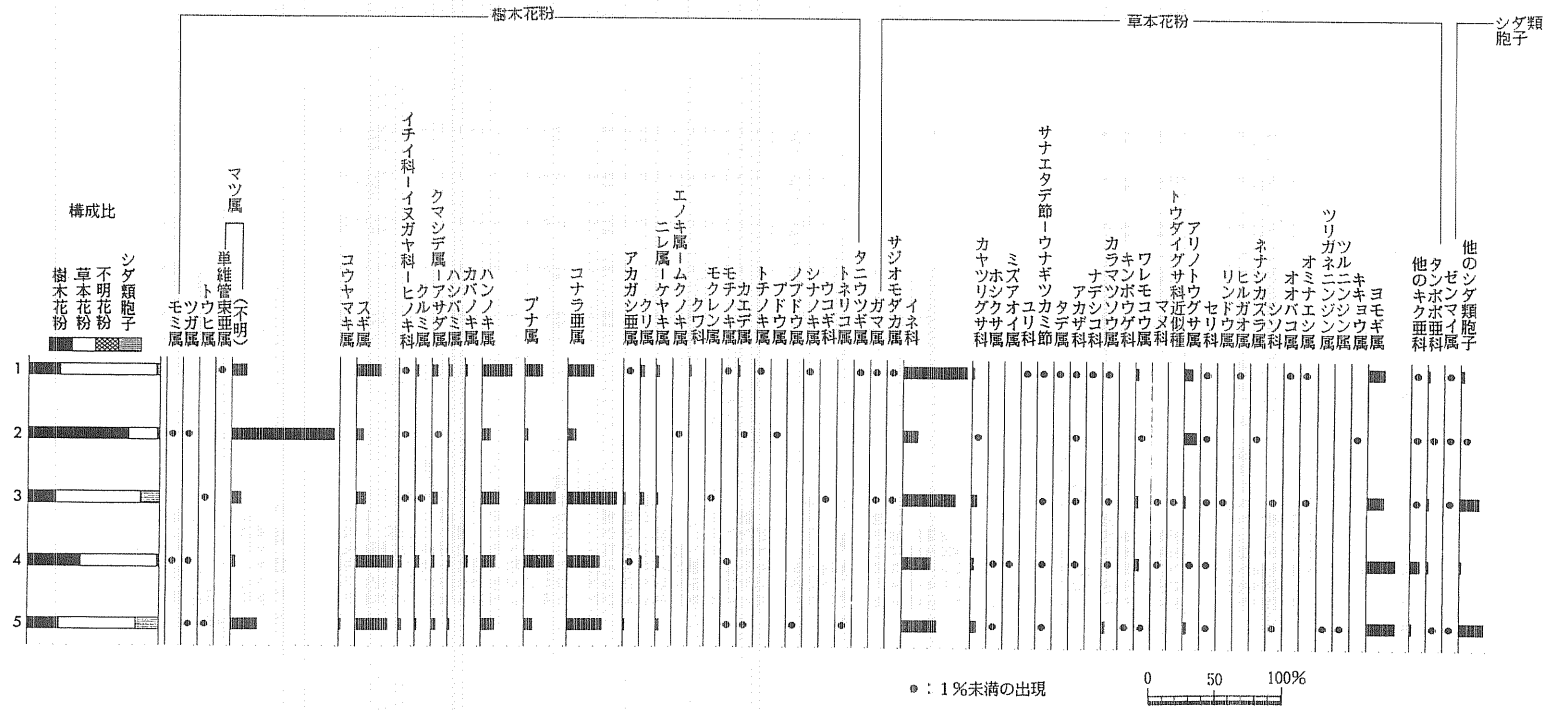


図２　上猪岡遺跡　ＬＰ３６花粉化石群集変遷

第99図　上猪岡遺跡　LP36花粉化石群集変遷

試料番号3（Ⅴ層）では、試料番号5・4で高率であったスギ属が低率になり、コナラ亜属がやや増加する。その他の群集組成は試料番号4にほぼ類似する。草本花粉では、イネ科が増加し、ヨモギ属がやや減少する。

試料番号2（Ⅳ層）では、花粉化石群集が大きく変化し、マツ属が70％以上の高率出現をすることに特徴づけられる。試料番号5～3を特徴づけていた落葉広葉樹の種類は減少する。また構成比で草本花粉・シダ類胞子が占める比率は低率になる。

試料番号1（Ⅲ層）では、再び群集組成が大きく変化する。スギ属・ハンノキ属・ブナ属・コナラ亜属が15％前後の出現率を示すことに特徴づけられる。高率であったマツ属は低率になる。構成比もまた草本花粉が高率を占めるようになる。草本花粉ではイネ科が高率に出現する。人里植物とされるオオバコ属をともなう。

3－3　考察

秋田県内の低地における花粉化石群集は、コナラ亜属－ブナ属（下限不明、上限は約2,700ないし2,000年前）、スギ属－ブナ属－コナラ亜属（上限約1,000年前）、マツ属帯の3地域花粉帯に区分されている（辻, 1981）。今回のⅢ～Ⅶ層で認められた花粉化石群集は、傾向のみについてみれば、低地の地域花粉帯のスギ属－ブナ属－コナラ亜属帯より上位の地域花粉帯に比較される可能性がある。これについては、今後年代学的な検討を行うことにより明らかにされるであろう。

Ⅴ～Ⅶ層の頃は、周辺にナラ類・ブナ類を主とする落葉広葉樹林が成立していたものと推定される。また、その森林にはスギも多少は成育していたことが推定される。辻（1981）は、低地と山地の花粉分析の比較から、スギの増加が主に低地一帯で起こったことであることを指摘している（辻, 1981）。今回の結果は、そのようなスギの増加が、本調査区が位置する横手盆地でも起こったことを示唆し、秋田県内におけるスギの分布拡大を考えるうえで重要な結果でもある。また、調査区の近くには、ミズアオイ属・ホシクサ属・サジオモダカ属といった抽水植物が成育する水湿地が存在したであろう。さらに、樹木花粉に比較して草本花粉が高率であることから、調査区周辺は空間的に開けていた可能性があり、ナラ類などの森林は後背の山地に成立していたものかもしれない。なお、Ⅴ層のスギの減少は、本層が平安時代の遺物包含層に相当することから人類の生業活動とも何らかの関係を有することが示唆される。

Ⅳ層におけるマツ属の急増は、コナラ亜属・ブナ属といった周辺の森林を構成していた種類の衰退に呼応しており、アリノトウグサ属・キキョウ属と言った人類との関係が示唆される種類の増加あるいは出現と一致している。このことを考慮すると、ここでのマツ属の増加が、人為的な植生干渉による周辺のナラ類などの森林の破壊にともなって二次林としてマツ類が分布拡大したことを反映している可能性がある。ただ、本層では礫を交えた砂層に層相変化してい

ることから、周辺地域の土壌状態が不安定になった可能性もあり、そのような地形の変化にともなって適応性の強いマツ類が増加したのかもしれない。

Ⅲ層では、再びⅤ層のような群集組成を示すようになる。このような変化の原因が何であるかは不明である。ただ、オオバコ属といった人里植物が検出されることから、周辺の植生には多少なりとも人類の干渉が及んでいた可能性がある。

今回、調査を行った堆積層については堆積環境や年代学的な検討は充分ではなく、今後の検討が期待される。古植生についても改めて再検討すべきであろう。

引用文献

辻　誠一郎（1981）秋田県の低地における完新世後半の花粉群集　東北地理33-2　P.81-87

第３節　鉱物分析及び屈折率測定

１　はじめに

上猪岡遺跡は、東北横断自動車道建設にともなって発掘調査が行われた遺跡で、秋田県横手市猪岡字猪岡245他に所在する。地形的には横手盆地の南部の沖積地に位置する。周辺は現在水田地帯となっている。

鉱物分析及び屈折率測定は、上猪岡遺跡内の標識的土壌断面の分析を行うことにより、すでに堆積年代が明かにされている示標（しひょう）テフラ層を検出し、断面中に時間軸を設定することにある。

２　試料

鉱物分析及び屈折率測定試料は、ＬＰライントレンチ（ＬＰ44）の断面から採取された14点（Ｎｏ．１～14）である（図３）。その内、示標テフラが検出された試料について屈折率測定を行った。対象は試料番号８と９で、８は斜方輝石及び火山ガラスについて、９は火山ガラスのみについて計３回測定した。

なお、花粉分析試料採取地点の層序の対応関係は、添付資料から不明であった。

３－１　方法

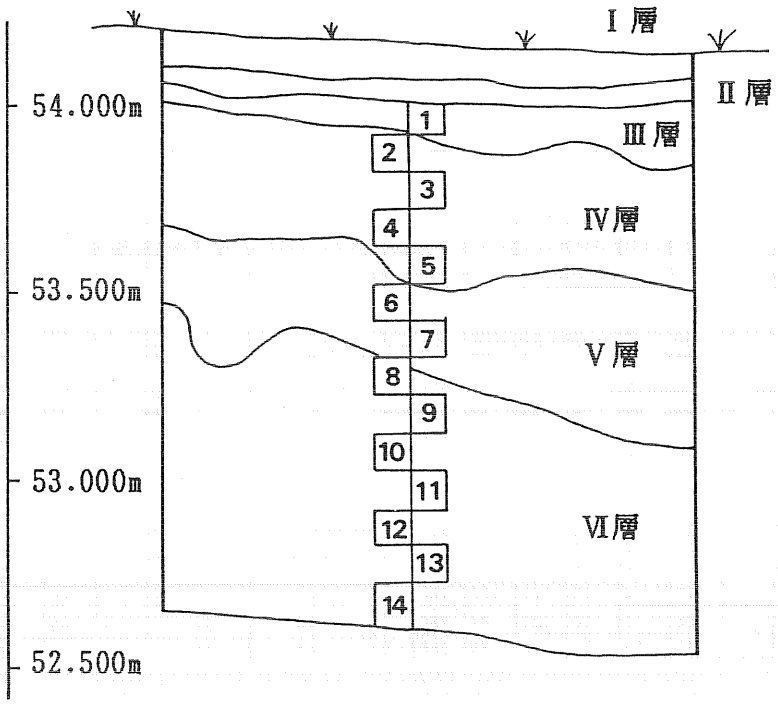
分析は次の手順で行った。

（１）資料60ｇを秤量。

（２）超音波洗浄と分析篩（1／16㎜）による篩別を繰り返し、泥分を除去。

（３）80°Ｃで恒温乾燥。

（４）1／4-1／8㎜の分析篩により篩別。



第100図　上猪岡遺跡　LP44の土層断面と分析資料の層位

（5）テトラブロモエタン（比重2.96）により、比重分離。

（6）重鉱物、軽鉱物それぞれについて250粒を偏光顕微鏡下で同定し、重鉱物組成、軽鉱物組成を明らかにする。

（7）求められたテフラの降下層準について、火山ガラスまたは斜方輝石を対象に、新井(1972）の方法に従い屈折率の測定。

3－2　分析結果

重鉱物組成

重鉱物組成ダイヤグラムを図4に、その内訳を表2に示した。斜方輝石および単斜輝石（あわせて両輝石）の量をみると、試料番号8（重鉱物の63.2%）および9（重鉱物の62.4%）付近に出現のピークがある。おもに滋鉄鉱からなる不透明鉱物の割合は、下位に向かって比較的大きくなる特徴がある。

(1)　軽鉱物組成

軽鉱物組成ダイヤグラムを図5に、その内訳を表3に示す。試料番号8付近に、火山ガラスの出現するピーク（軽鉱物の8.8%）が認められる。火山ガラスには、平板状で比較的分厚いバルブ型や分厚く中間型ガラスが認められる。またこれらのガラスには、褐色を呈する有色ガラスが多い。

第４表 重鉱物組成の内訳

試料番号	重鉱物組成						同定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	
1		56	8	8	30	148	250
2	1	34	9	6	17	183	250
3		33	7		16	194	250
4	1	36	8	1	45	159	250
5	2	80	26	2	44	96	250
6		97	37	6	66	44	250
7	2	83	16	7	52	90	250
8		128	30	5	61	26	250
9		142	14	5	69	20	250
10		101	10	4	90	45	250
11	1	31	4	14	80	120	250
12		17	4	18	101	110	250
13		32	1	10	123	84	250
14		46	10	12	103	79	250

第５表 軽鉱物組成の内訳

試料番号	軽鉱物組成						同定鉱物粒数
	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	
1				19	9	222	250
2	1			19	9	221	250
3	1			17	4	228	250
4	2		1	33	7	207	250
5		1		32	5	212	250
6				42	10	198	250
7		2		33	18	197	250
8	7	12	3	47	43	138	250
9	3	9		66	37	135	250
10	2	1	1	45	19	182	250
11	1			32	23	194	250
12	4	1		43	35	167	250
13	2		1	48	18	181	250
14	1	2	1	54	16	176	250

(2)　屈折率

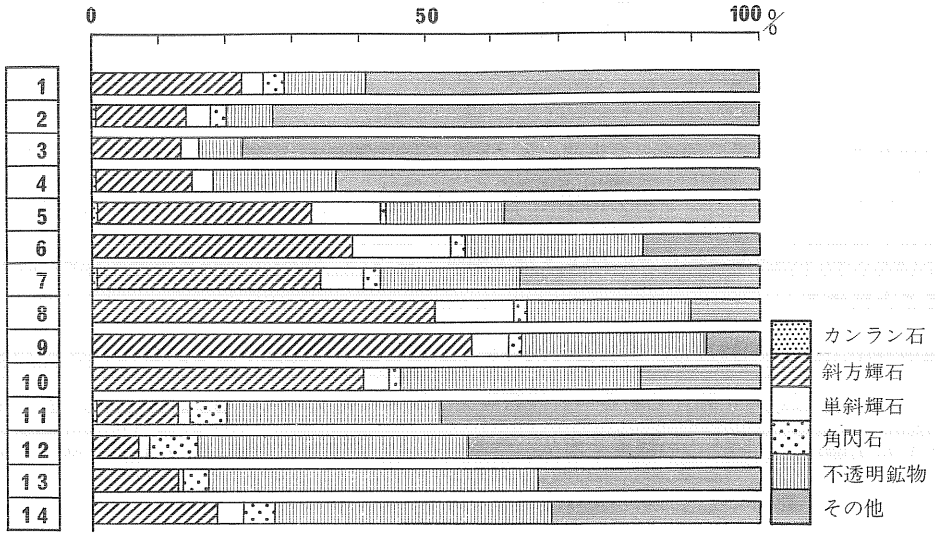
重鉱物組成や軽鉱物組成の検討から、試料番号８あるいは９付近をテフラの降下層準と推定した。そこで、試料番号８については斜方輝石と火山ガラス、また試料番号９については斜方輝石を対象として、屈折率の測定を行った。

試料番号８の斜方輝石の屈折率（ｒ）は、1.705-1.711である。また、火山ガラスの屈折率（ｎ）は、1.497-1.506（特に多い値は、1.499-1.504）である。さらに試料番号９の斜方輝石の屈折率（ｒ）は、1.705-1.711である。斜方輝石の屈折率から試料番号８および９は同一テフラと考えられ、Ⅵ層最上部にテフラの降下層準があると考えてよい。

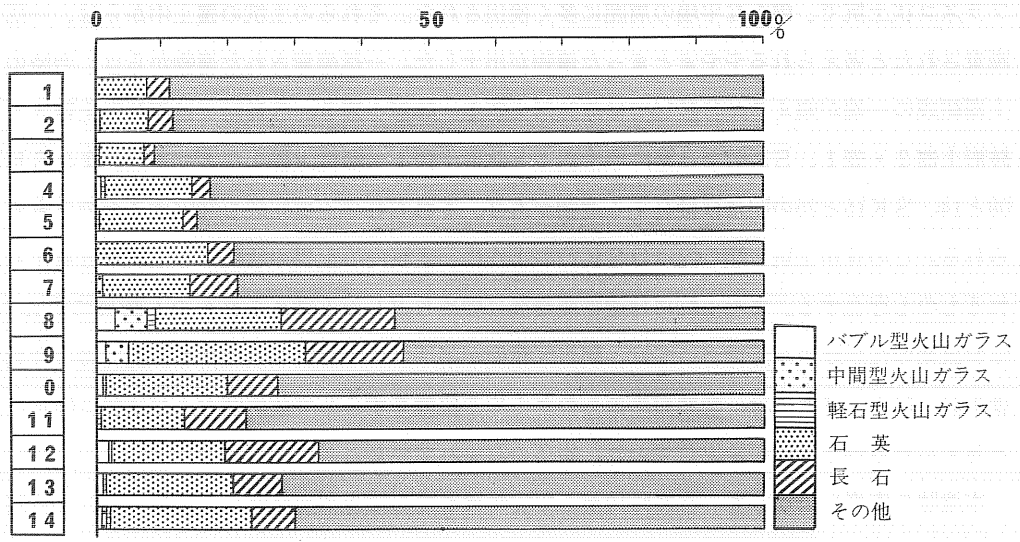
(3)　Ⅵ層最上部のテフラの起源について

横手盆地周辺に分布するテフラについての研究は、これまでほとんど行われていない。また、最近発行された東北日本に分布する示標テフラのカタログ（Arai et al.,1986）ｎｏ中にも、今回発見されたテフラの特徴をもつ示標テフラは今のところ見あたらない。とりあえず今回発見されたテフラの起源については、今後の野外調査に基づいた詳細な研究を待ちたい。

なお、周辺地域のテフラの研究成果を考慮すると、横手盆地地域では表４に示すような第４期後期の示標テフラが発見される可能性がある。



第101図　テフラ資料の重鉱物組成ダイヤグラム



第102図　テフラ資料の軽鉱物組成ダイヤグラム

第6章　ま　と　め

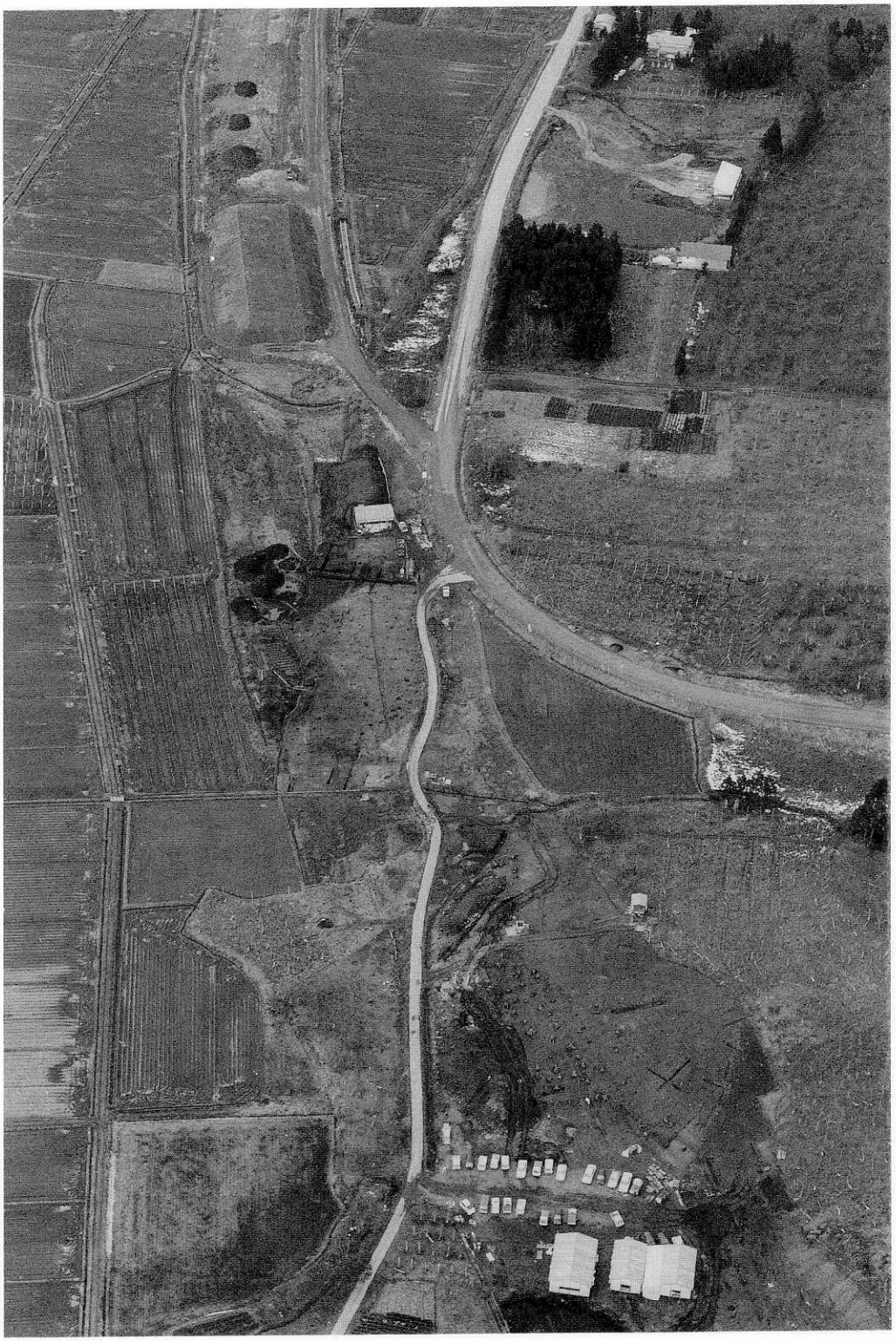
上猪岡遺跡は、横手盆地の中央東部にある中山丘陵の西側斜面端部に立地している。調査の結果、85遺構を検出し、コンテナ100箱におよぶ遺物が出土した。これらの遺構・遺物には縄文時代と平安時代のものがある。以下では本遺跡の各時代・時期の状況を概観し、まとめに代えることにする。

遺構外出土石器のＳ112は、旧石器時代のナイフ型石器の可能性がある。また、ＳＫ15覆土中から出土した110は、細片であるが貝殻腹縁文が施され縄文時代早期に、さらに本書で第Ⅰ群とした土器群は、胎土中の繊維や原体の特徴から同前期前半に位置付けられる。横手市周辺の旧石器時代から縄文時代前期の主な遺跡がおよそ80ｍ前後の台地上に立地するのに対し、標高50ｍ前後である本遺跡から出土したこの時代・時期の遺物は、少量で散発的であり、この時代・時期の主舞台が本遺跡よりも高位にあったことを裏付けている。

この地域において、標高50ｍ前後の場所に人々の活動の痕跡が明瞭に残されるようになるのは、縄文時代中期後半からで、本遺跡でもＳＫ95が構築されている。

晩期前半になると数多くの土坑が作られている。土坑Ｃ類の内規模の大きいものはいわゆるフラスコ状土坑で、僅かな平場の周囲に多く検出された。それらの土坑の覆土中からは、一括廃棄されたと考えられるややまとまった遺物が出土した。一括廃棄された遺物からは、当時の土器組成の一端が窺える。ＳＫ14では深鉢形土器１・鉢形土器３、ＳＫ25では深鉢形土器３・鉢形土器２・壺１、ＳＫ37では深鉢形土器１・鉢形土器１・台付土器１などである。またＳＫ09と14、ＳＫ15と25の間には接合する遺物があり、それぞれの土器組成を補完するものと考えられる。このほか土坑Ｂ類の内にはＳＫ22のように、土坑内の土器の状況から土坑墓と考えられるものも存在する。また土坑には遺物廃棄後に埋めもどしたと考えられものも認められた。なお該期の住居跡の有無については、調査区東側が削平されていて不明である。縄文時代晩期後半および弥生時代には、晩期前半のものからやや位置をずらして住居跡および住居に伴ったと考えられる焼土遺構を検出しており、集落の営まれていたことが知られる。

本遺跡の南東に隣接して、奈良時代から平安時代までの須恵器焼成窯が多数検出された竹原遺跡がある。本調査でも９世紀前半に位置付けられる窯跡（ＳＪ40）を１基検出した。この窯跡も大きく見れば竹原窯跡群を構成する一部と考えられる。また、平安時代の竪穴状遺構や焼土を伴う土坑・上部に配石を伴う土坑は、出土した土師器から10世紀前半に位置付けられるもので、竹原窯跡内の同時期の遺構群との関連も考えられるところである。



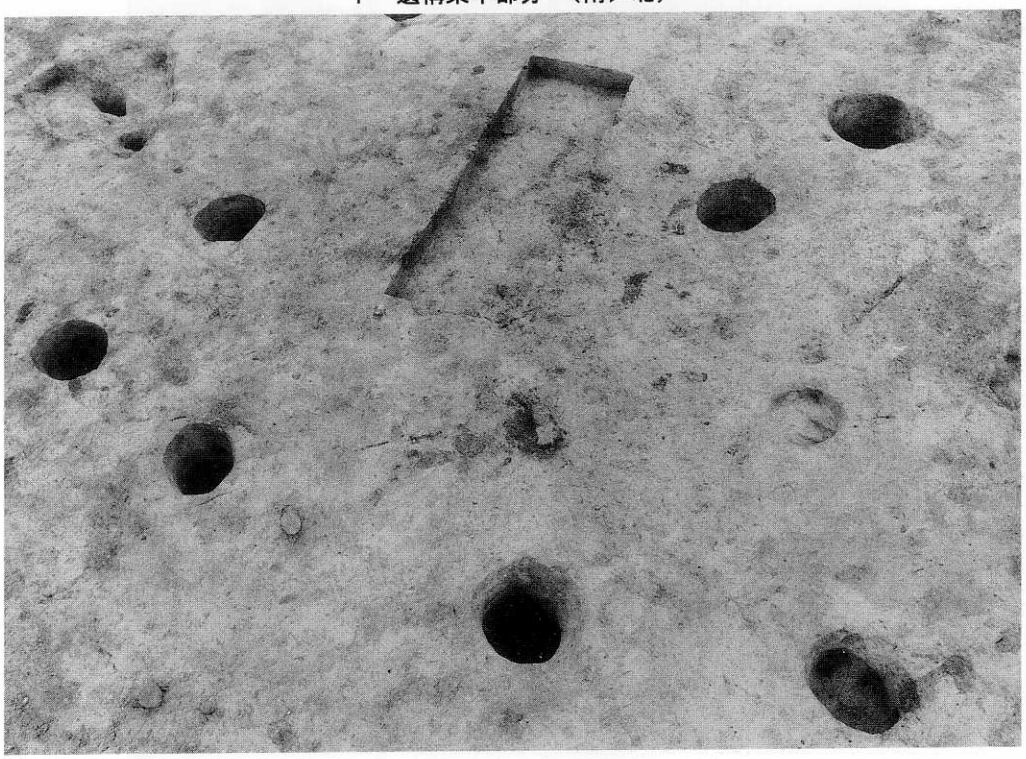
1　遺跡周辺の地形（南▶北）

図版 2

1　調査前（南東▶北西）

2　調査後全景（西▶東）

1　遺構集中部分　（南▶北）



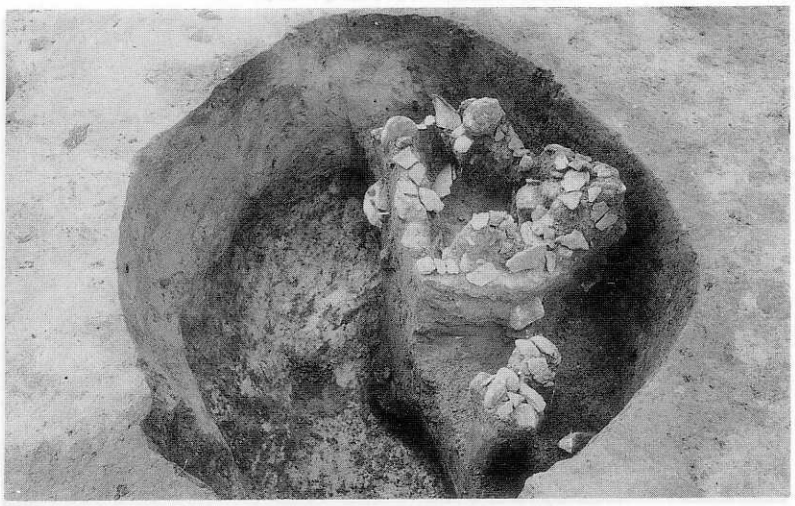
2　SI84（南東▶北西）

1　SK07土層断面（北東▶南西）

2　SK09土層断面（東▶西）

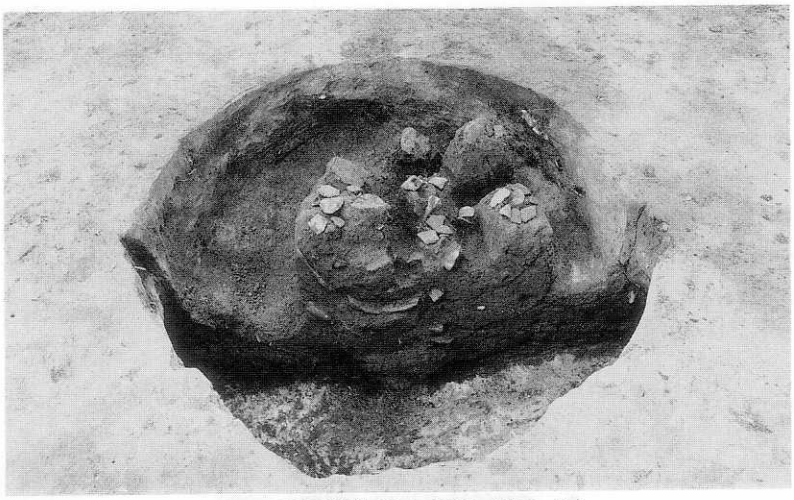
3　SK14（東▶西）

1　SK15検出状況（南西▶北東）

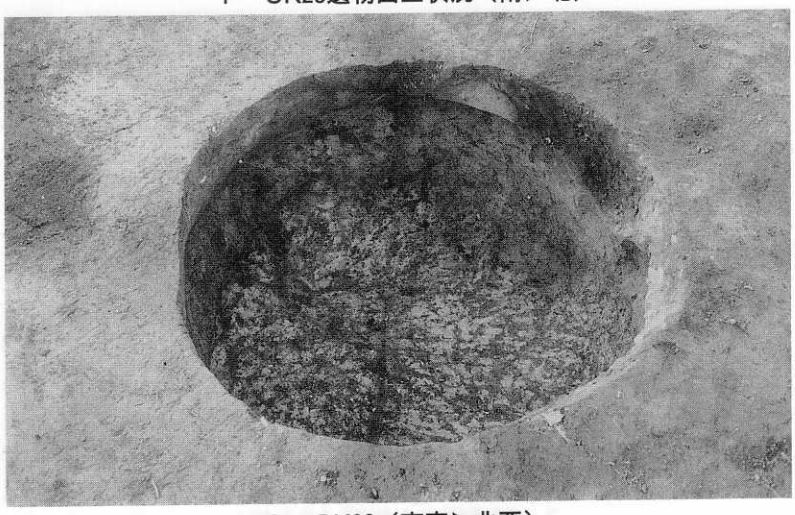


2　同遺物出土状況（北▶南）

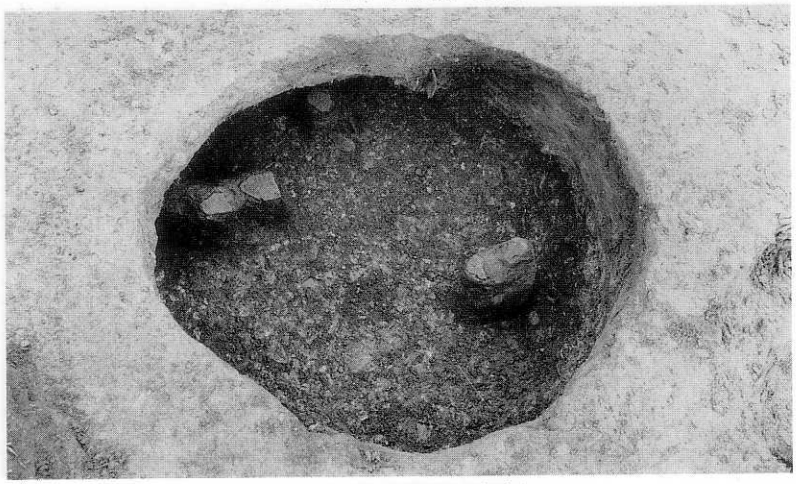
3　SK16土層断面（北▶南）



1　SK25遺物出土状況（南▶北）



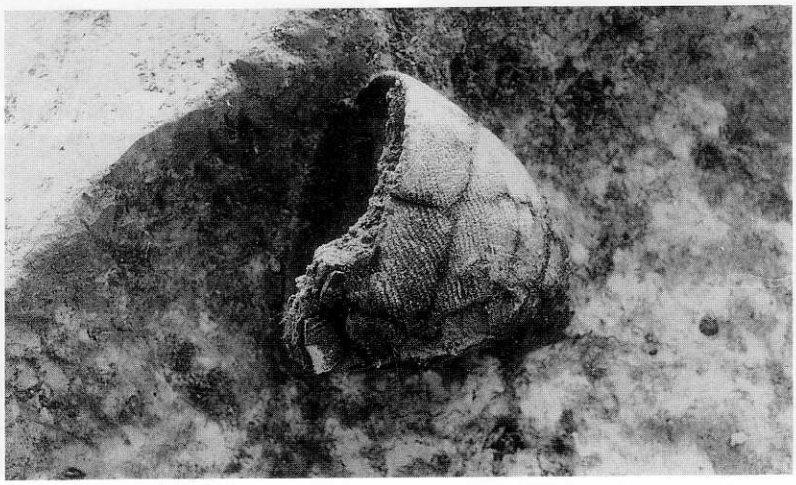
2　SK26（南東▶北西）



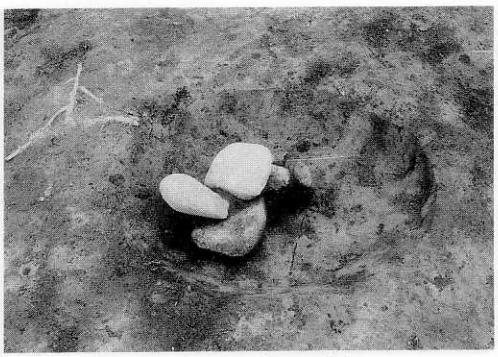
3　SK37（北西▶南東）

1　SK50調査状況（西▶東）

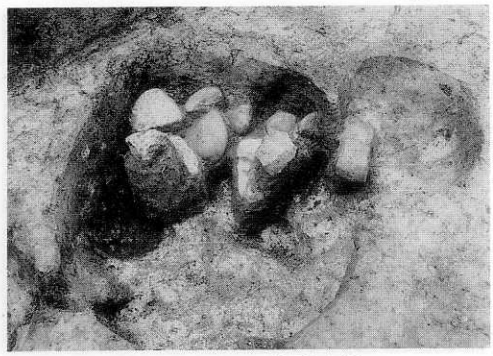
2　SK52（北▶南）



3　SK52遺物出土状況（北▶南）

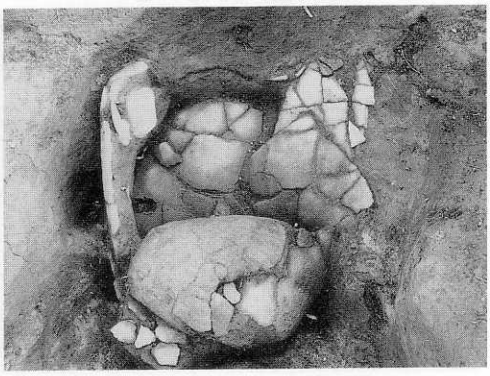


1　SK02（西▶東）



2　SK55（西▶東）

3　SK22・98（西▶東）



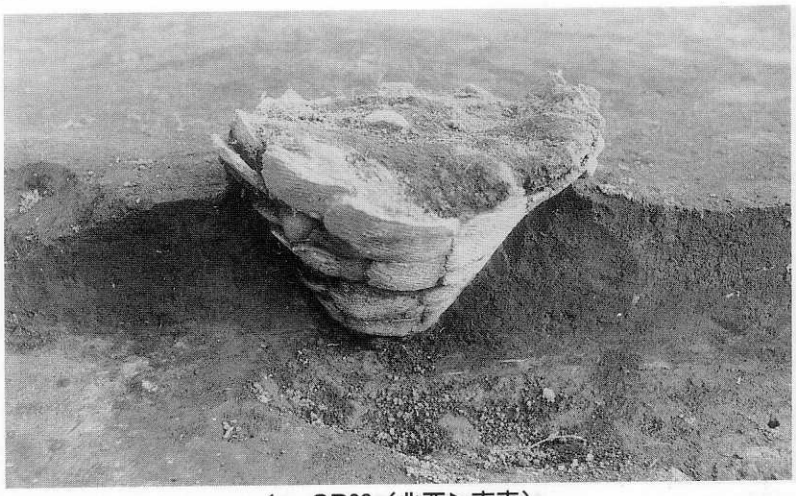
4　SK22遺物出土状況（西▶東）

5　SK95（西▶東）

6　SK32（南西▶北東）

7　SK01（南東▶北西）

8　SK53・54（南▶北）



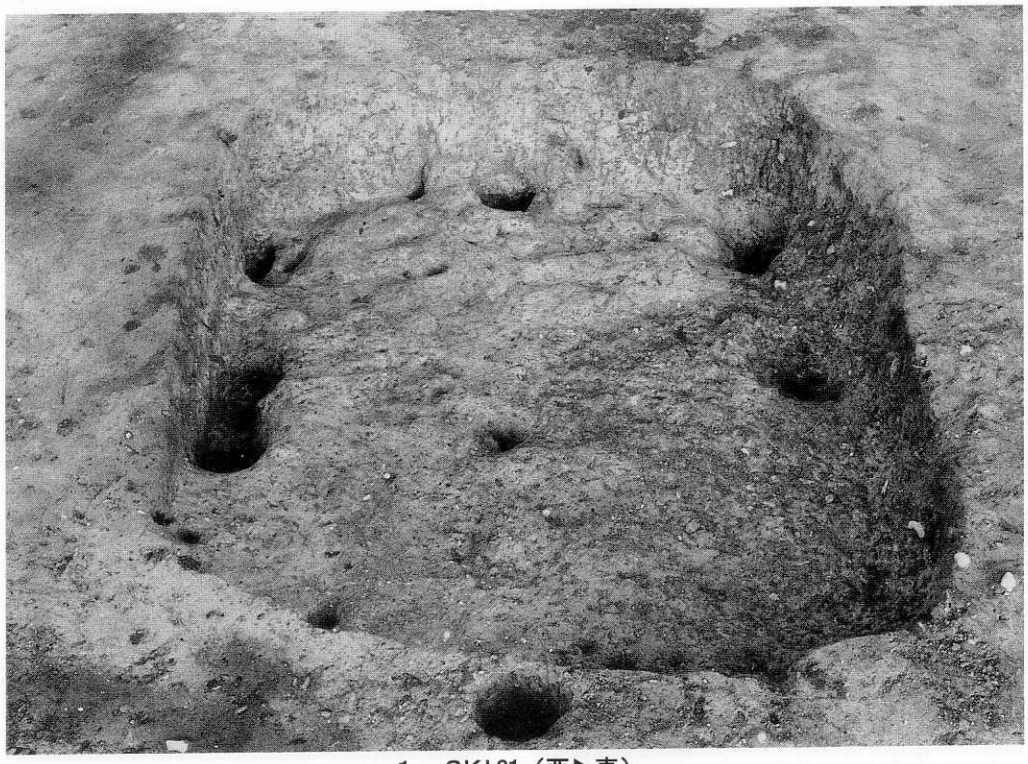
1　SR03（北西▶南東）

2　SD04（北▶南）

3　SD36検出状況（北西▶南東）

1　SJ40調査状況（北西▶南東）

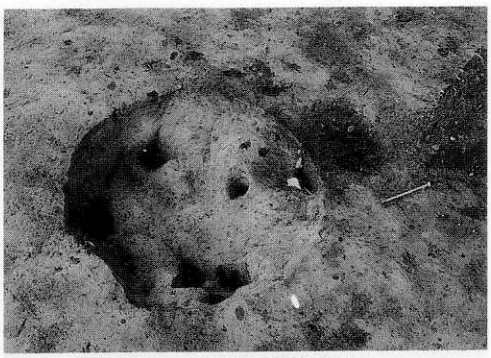
2　SJ40（南東▶北西）



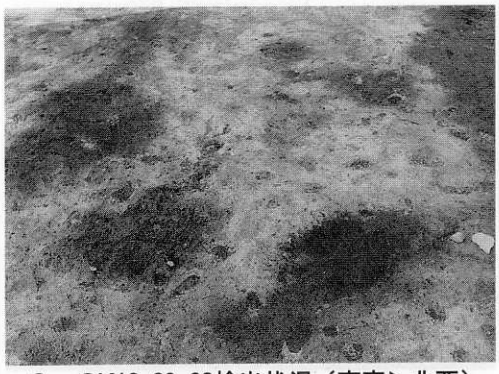
1　SKI31（西▶東）

2　SKI58・59（西▶東）

1　SK17検出状況（南西▶北東）

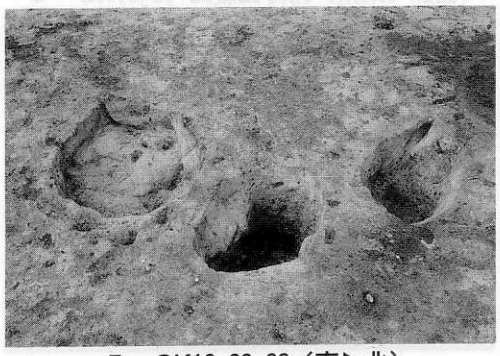


2　SK17（南▶北）



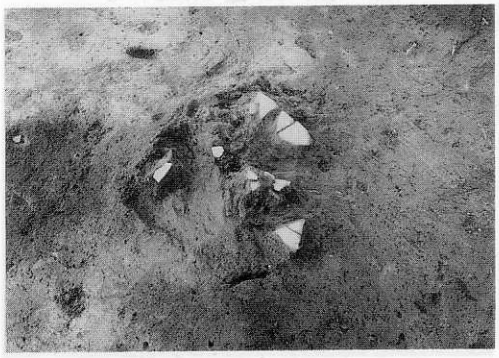
3　SK19・29・33検出状況（南東▶北西）

4　SK19土層断面（北西▶南東）

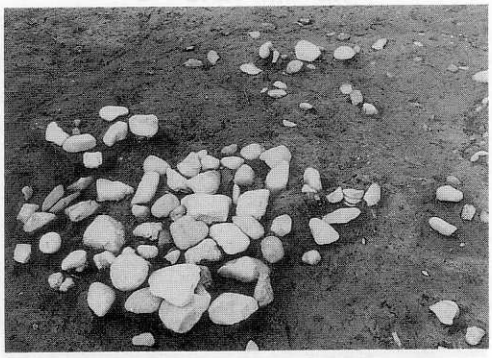


5　SK19・29・33（南▶北）

6　SK20（東▶西）



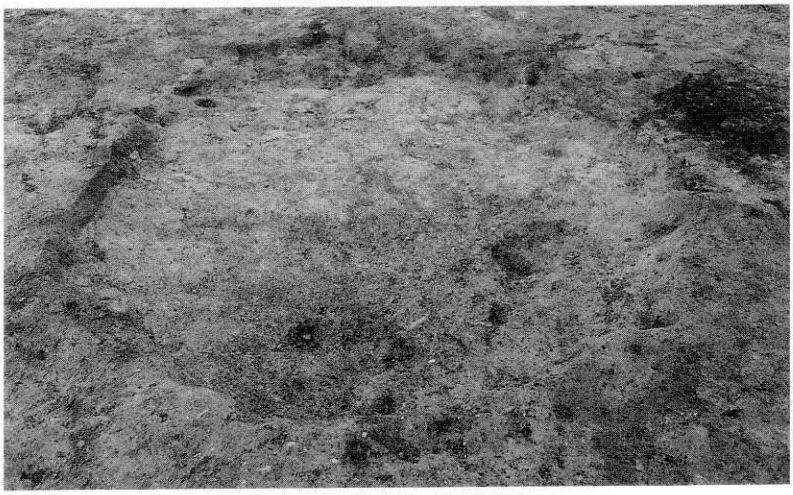
7　SN28（南東▶北西）



8　SQ30（南▶北）

1　SK27上部配石（南東▶北西）

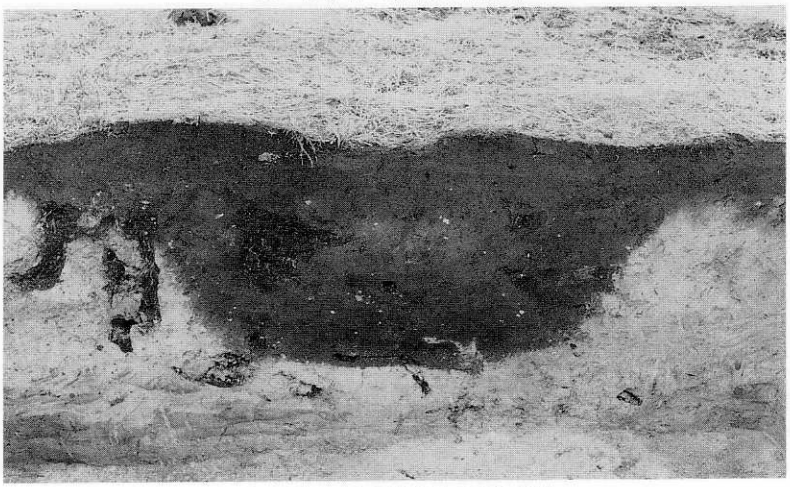
2　同遺物出土状況（南▶北）



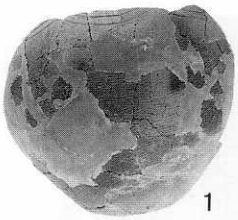
3　同下部土坑（西▶東）

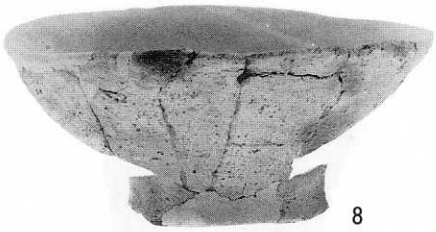
1　SD71（南東▶北西）

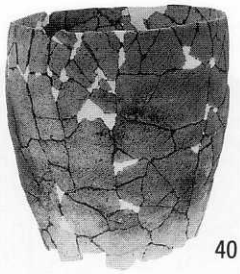
2　SD11（南東▶北西）

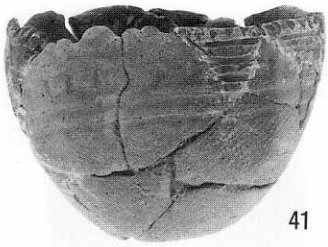


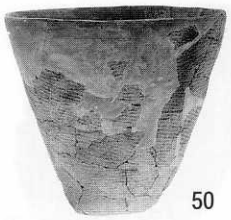
3　SD11土層断面（北▶南）


1

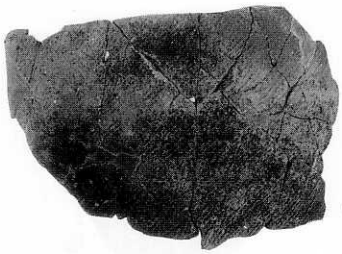

8

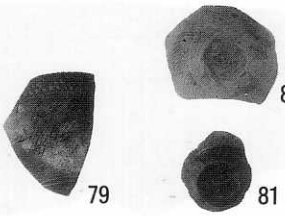

40


41

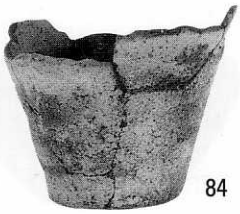

50

55

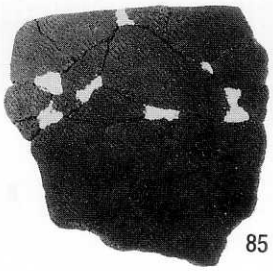

78

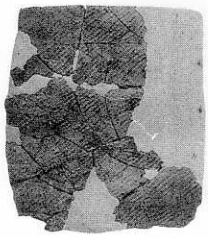

79 80 81

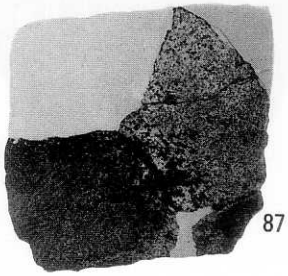
83

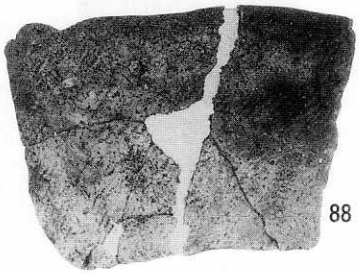

84

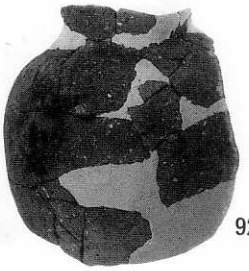
出土遺物(1)

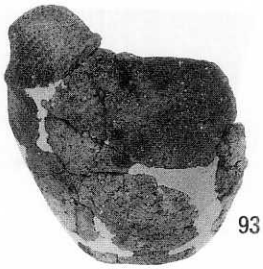

85

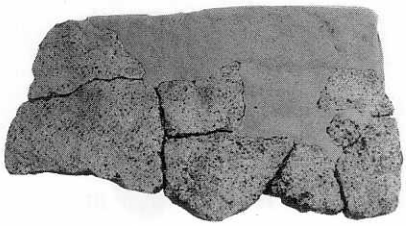

86

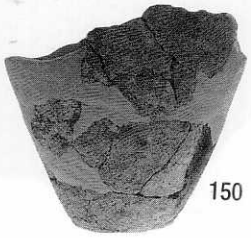

87

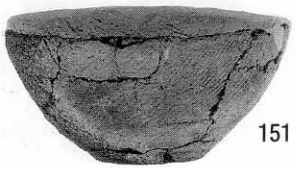

88

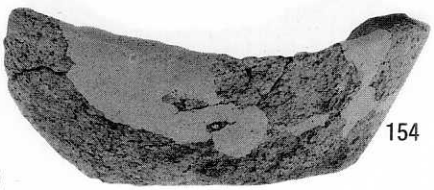

92


93

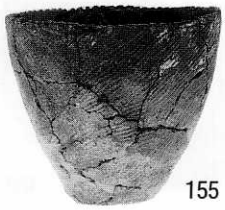

94

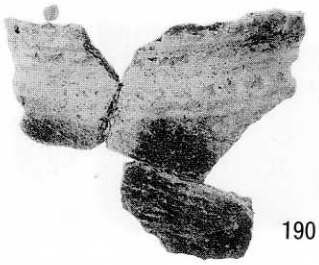

150

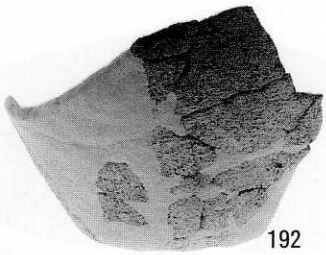

151

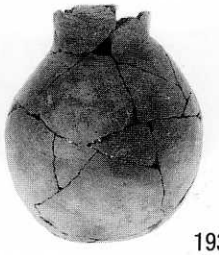

154

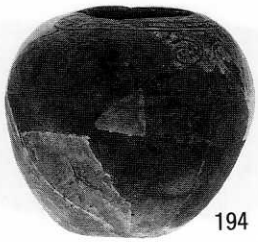
出土遺物（２）

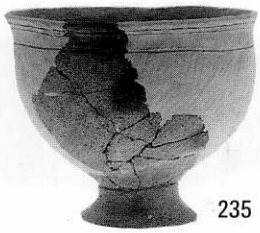

155

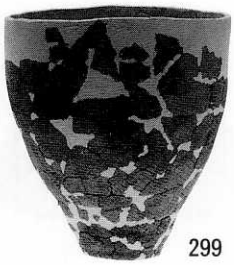

190


192


193

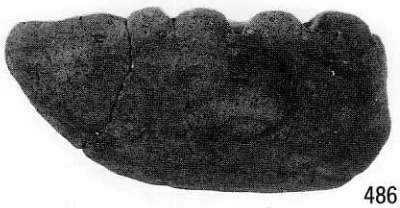

194


235

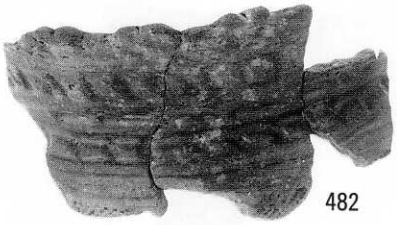

299

306

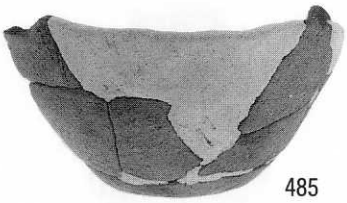
845

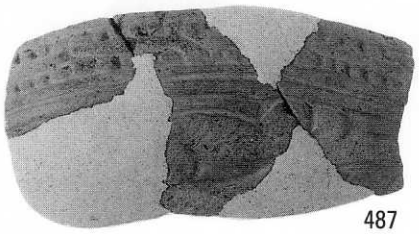

486

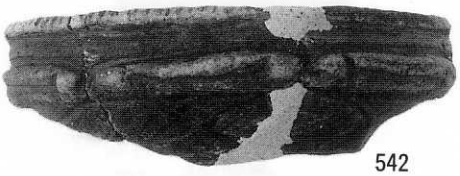
出土遺物（３）

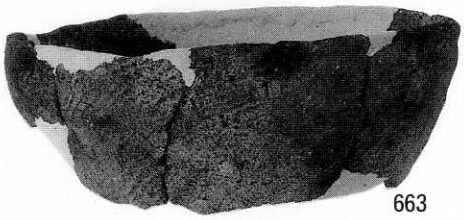

482

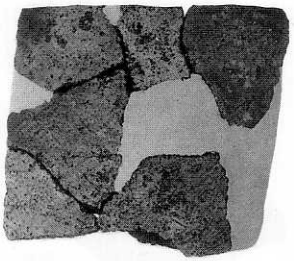
488

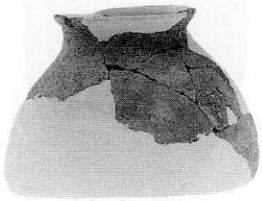

485

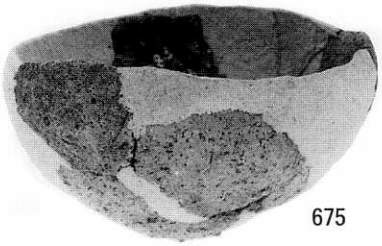

487

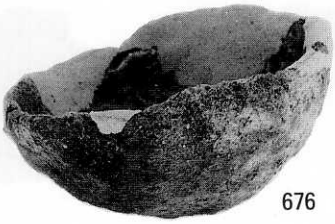

542


663

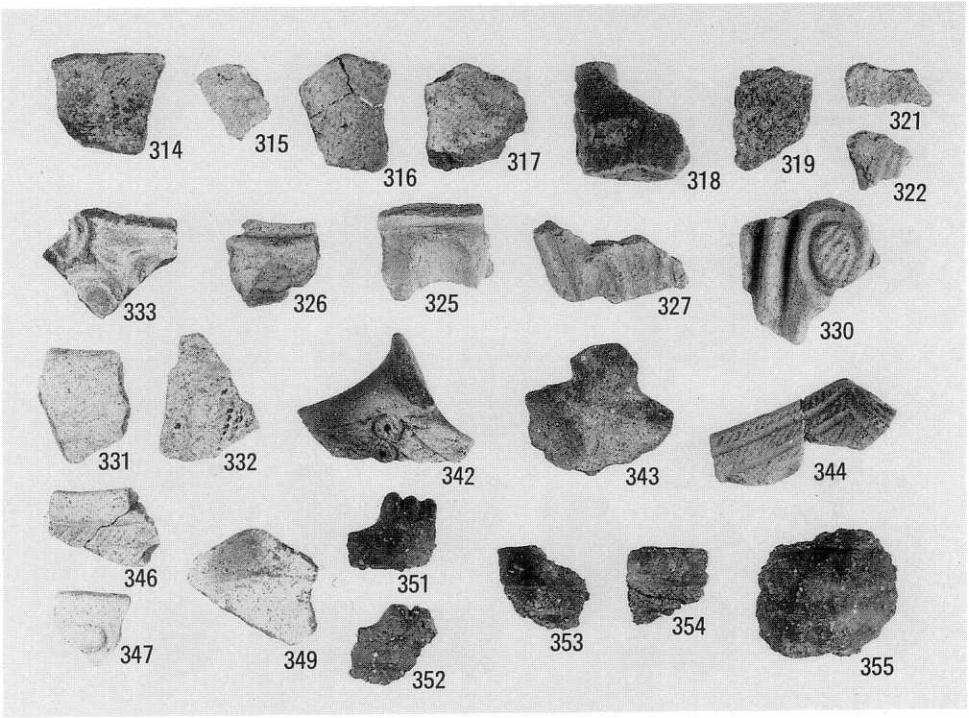



664

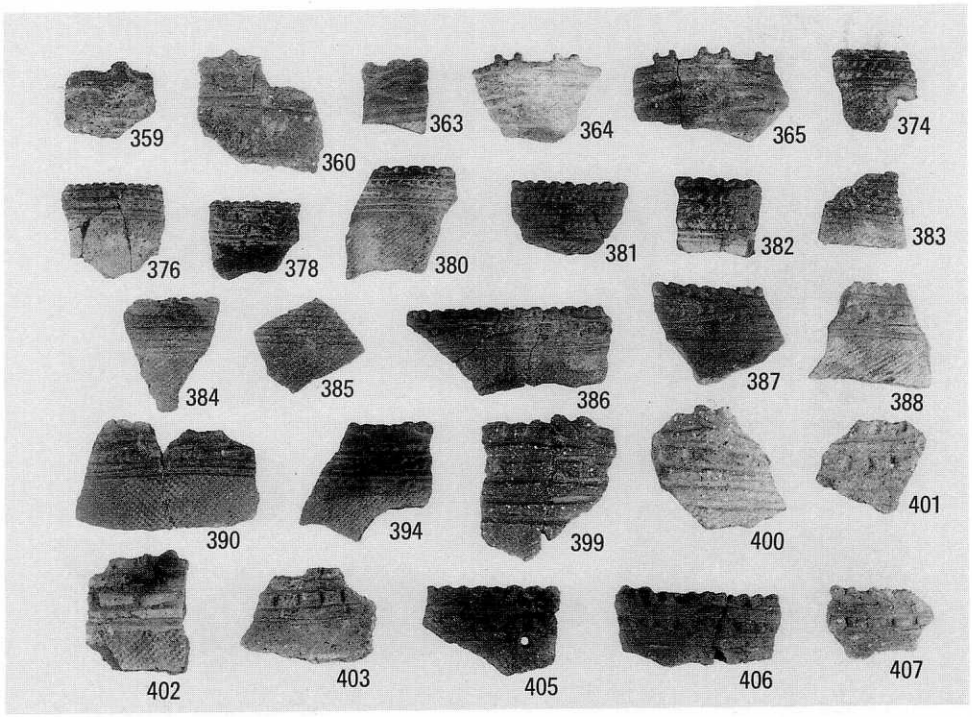

675


676

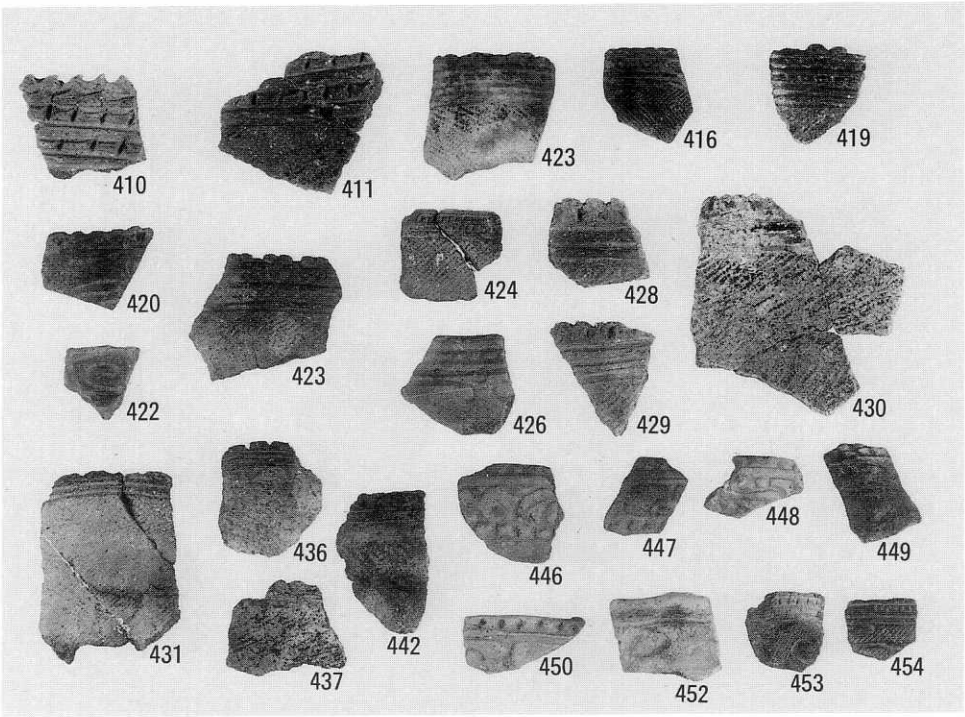
出土遺物（４）



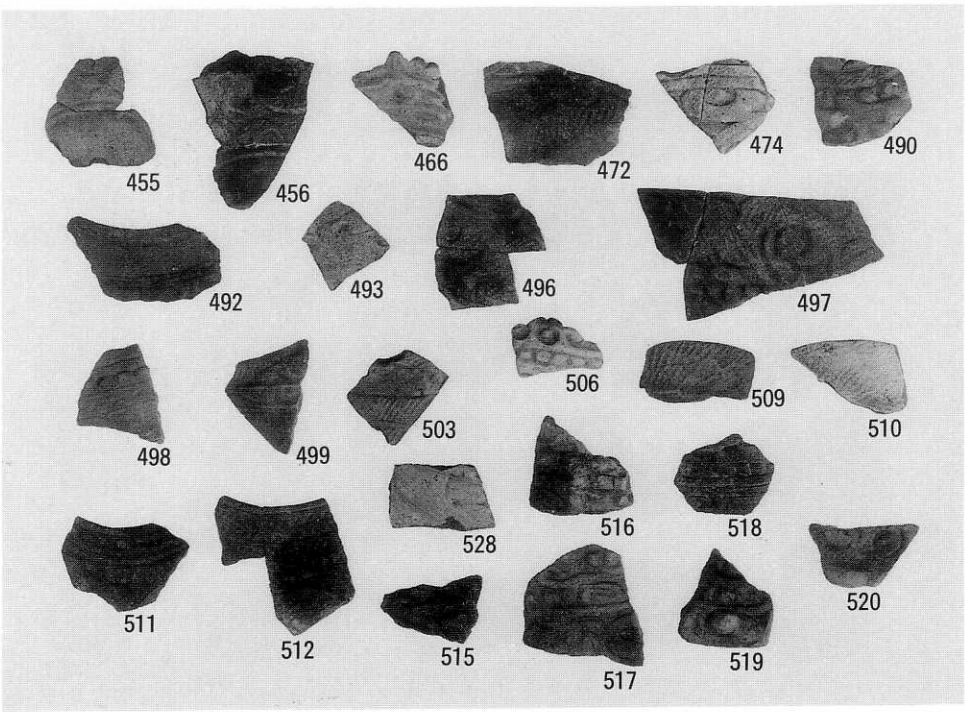
1　出土遺物（５）



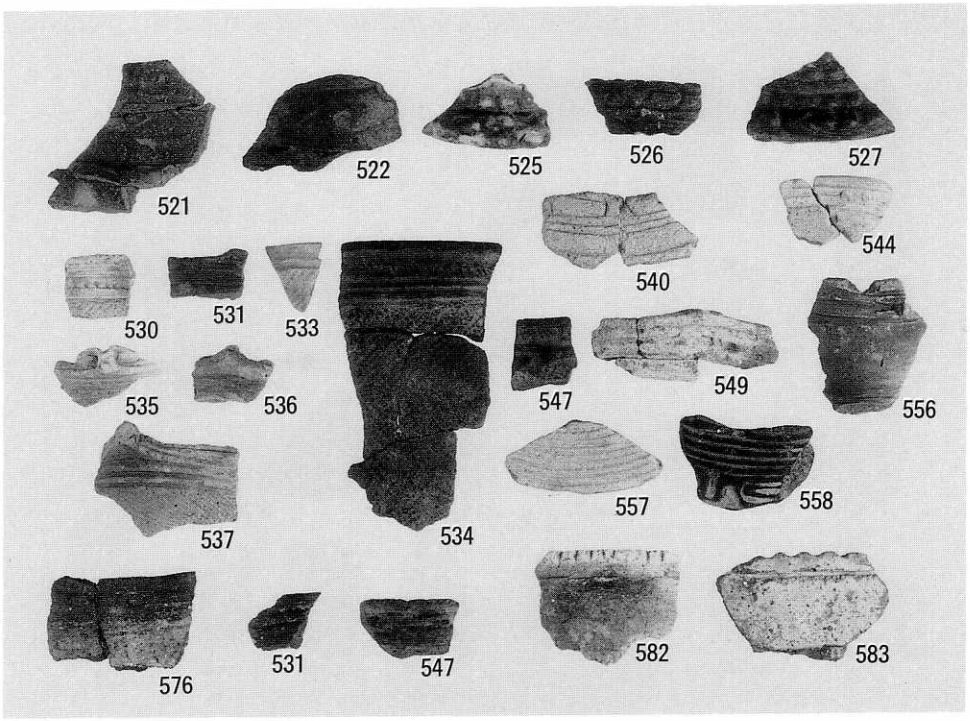
2　出土遺物（６）



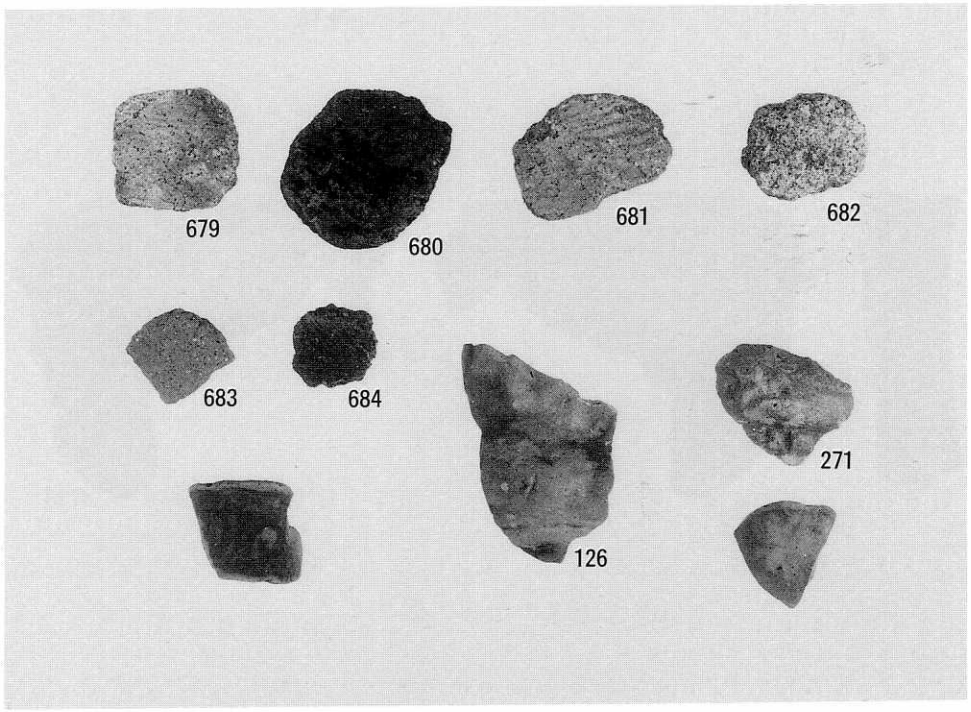
1　出土遺物（７）



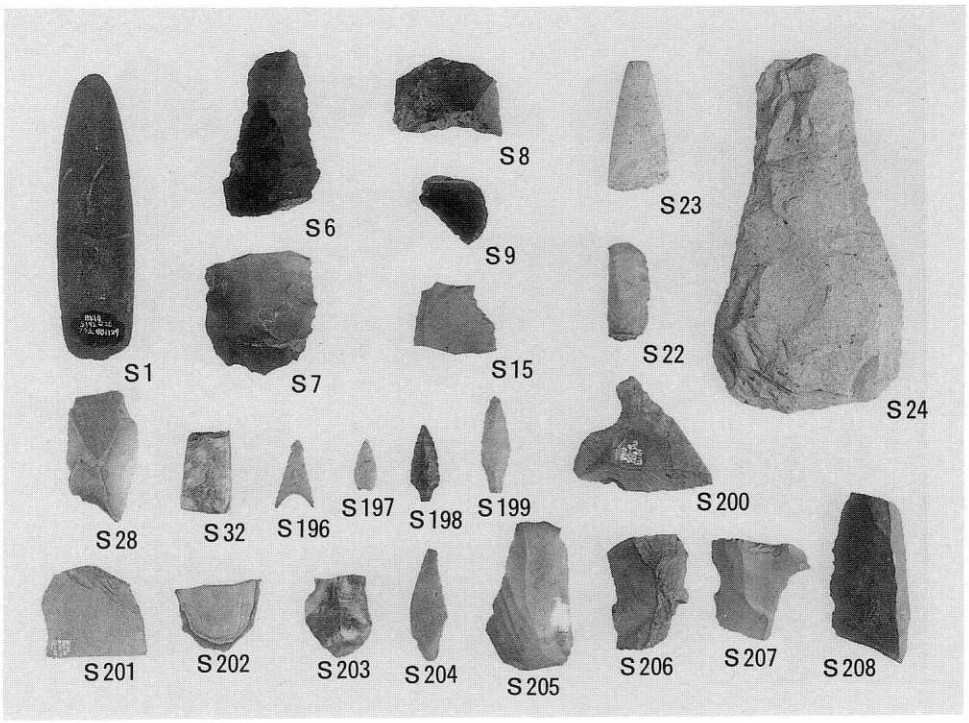
2　出土遺物（８）



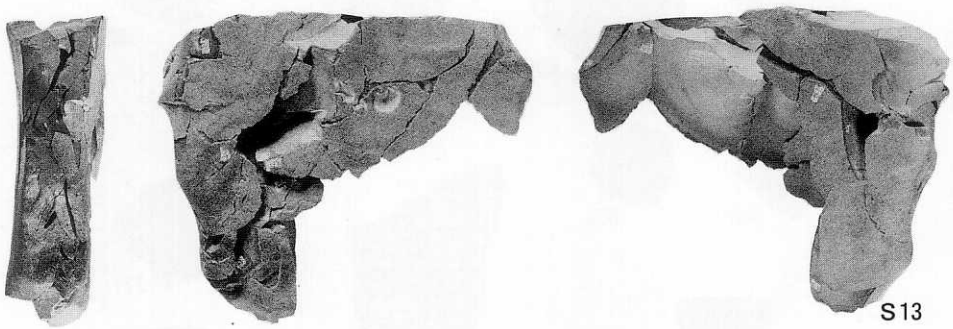
1　出土遺物(9)



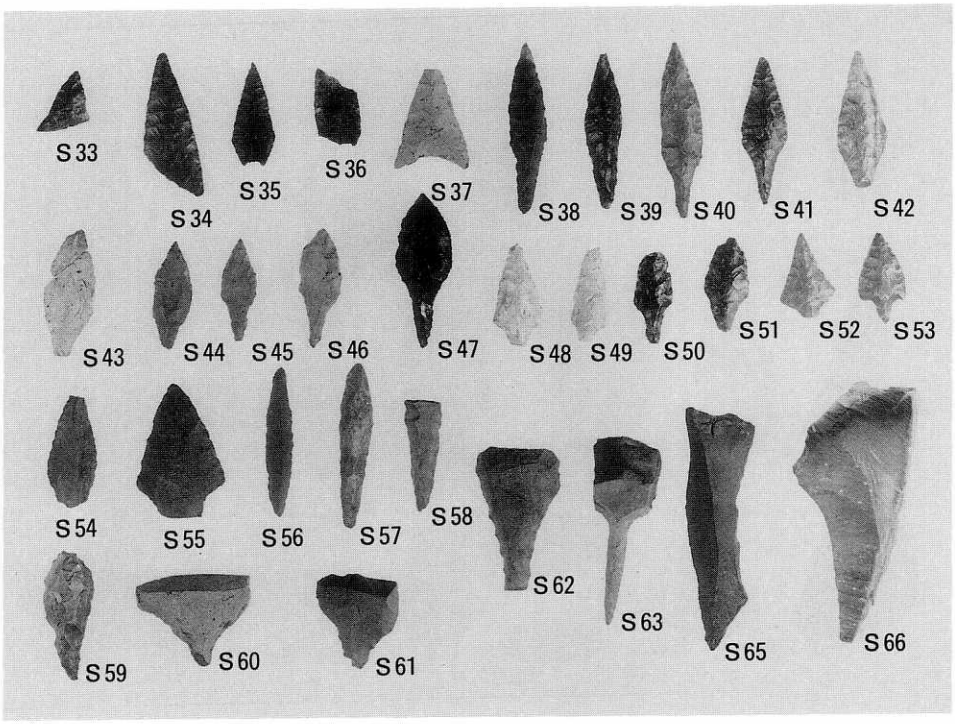
2　出土遺物(10)



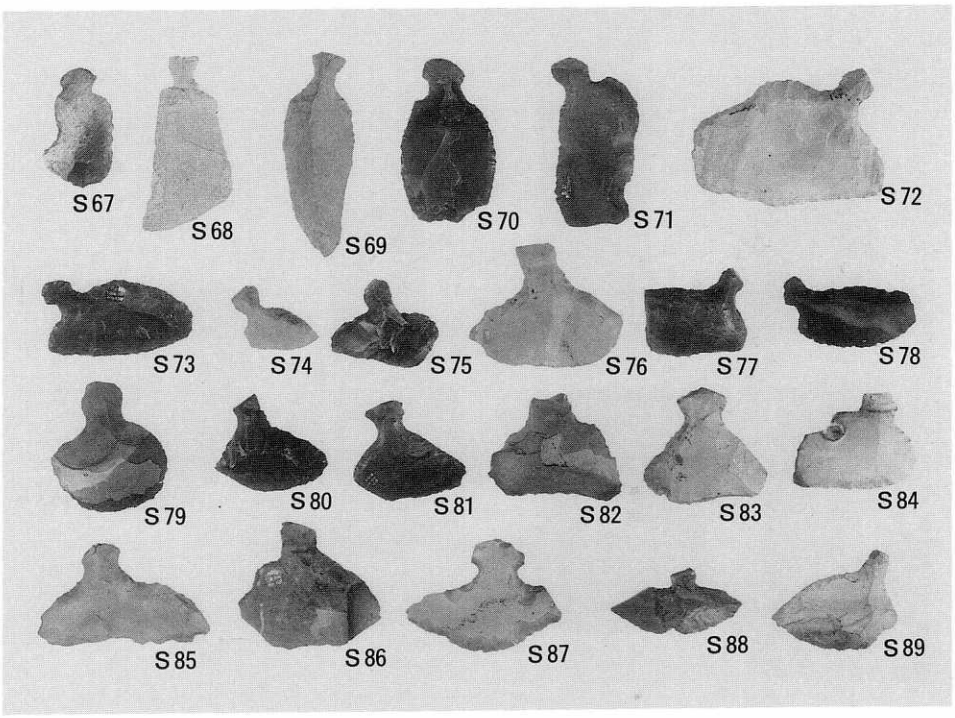
1　出土遺物(11)



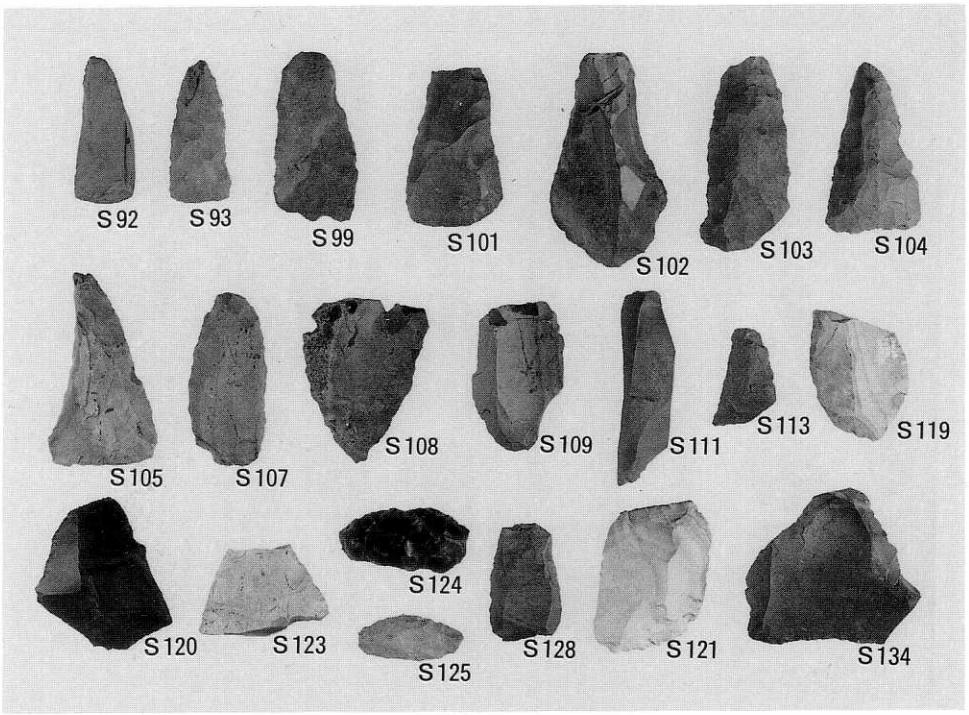
2　出土遺物(12)



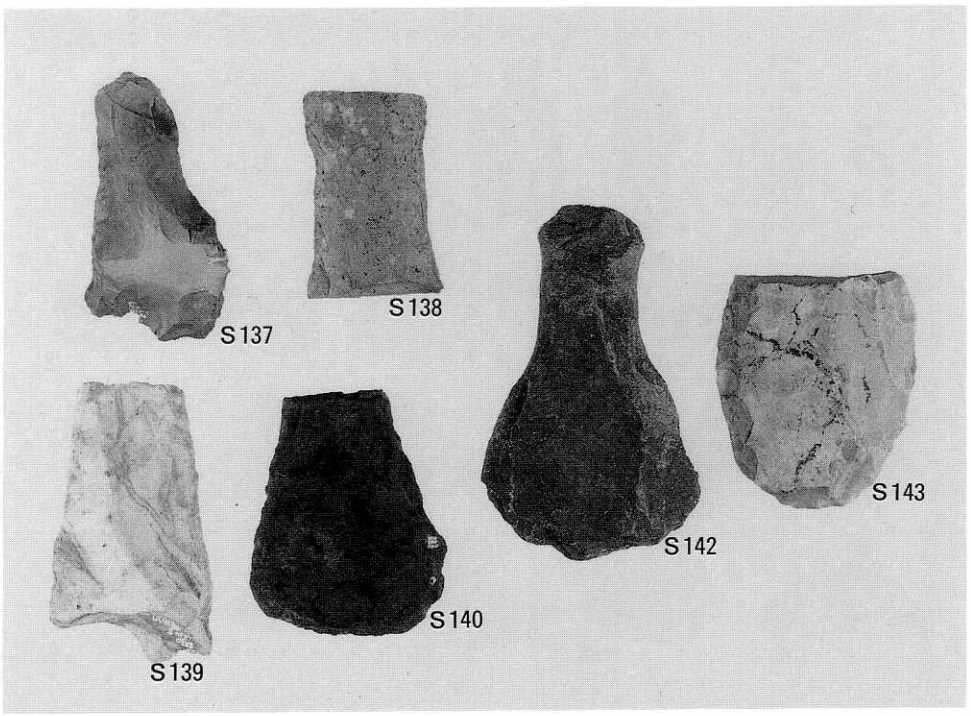
1　出土遺物(13)



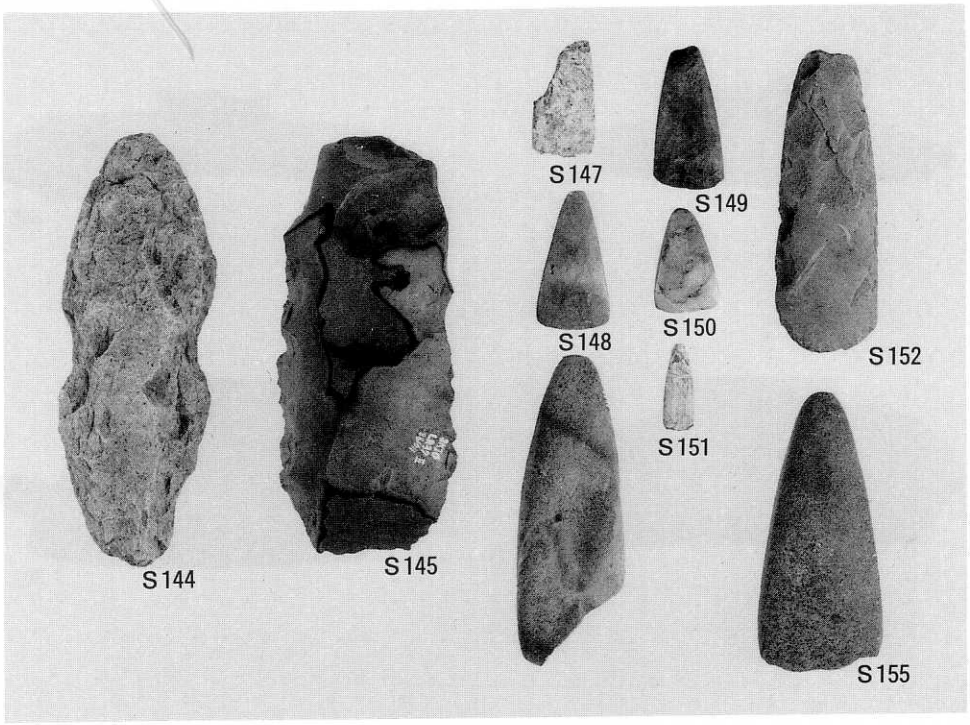
2　出土遺物(14)



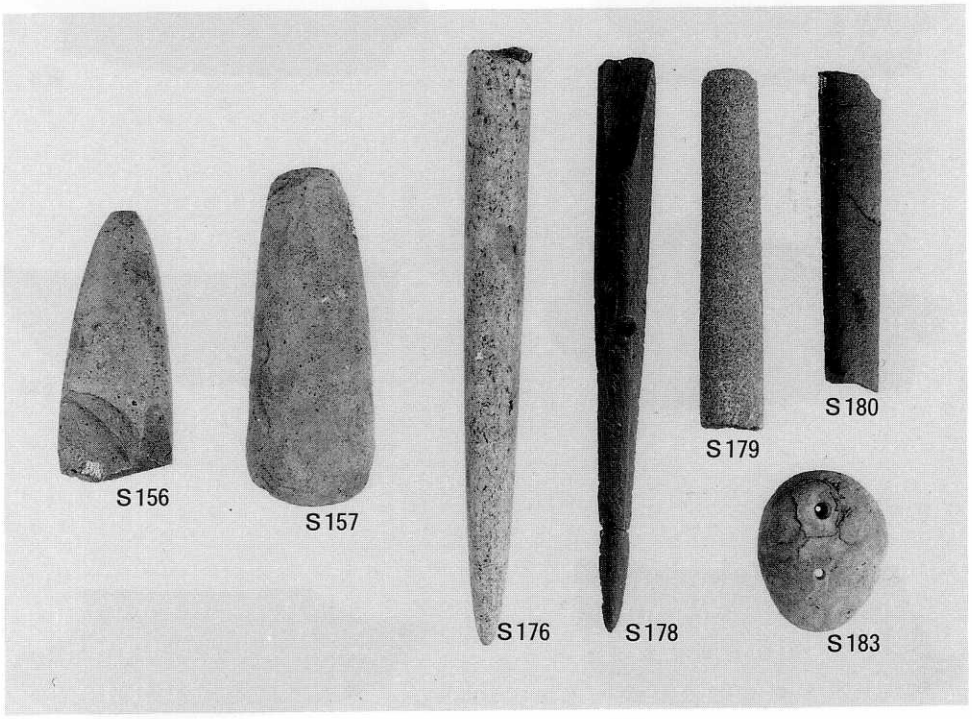
1　出土遺物(15)



2　出土遺物(16)

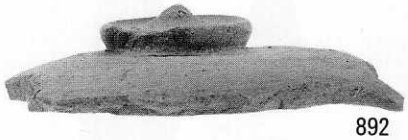


1　出土遺物(17)

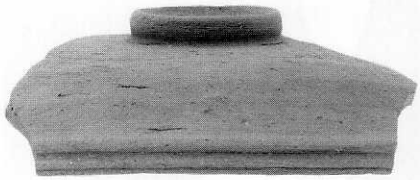


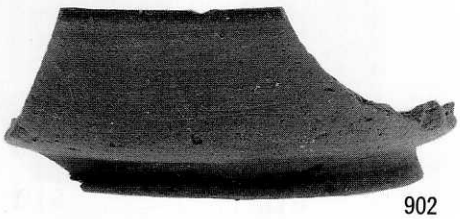
2　出土遺物(18)

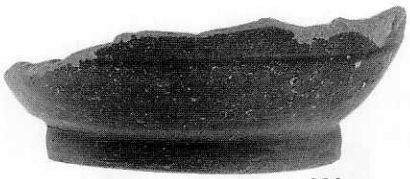
図版26

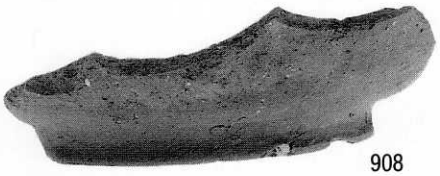

892

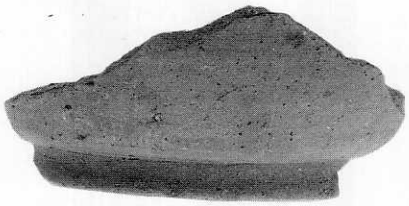
686

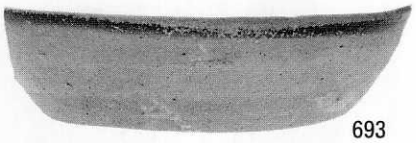

685

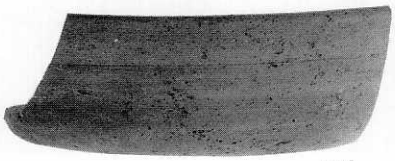

902

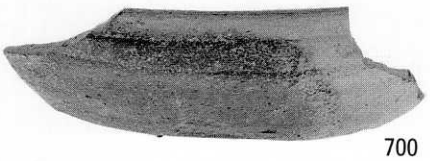

904


908

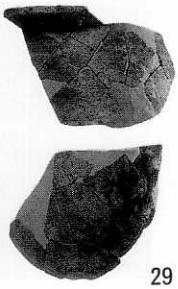

691

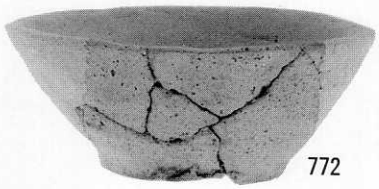

693

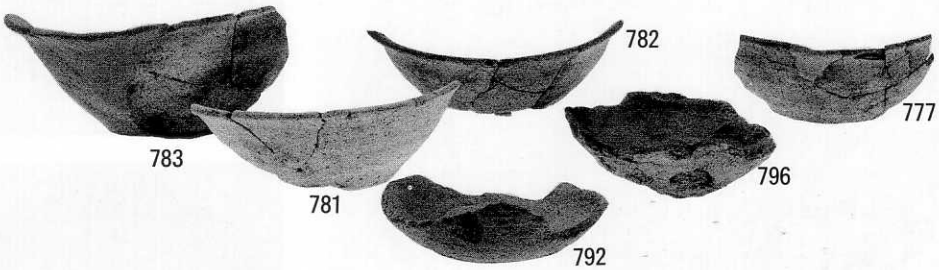

694

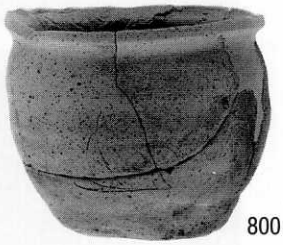

700

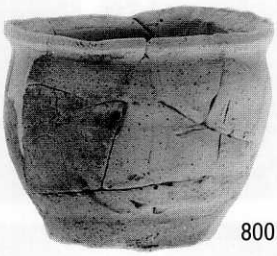
出土遺物(19)


29

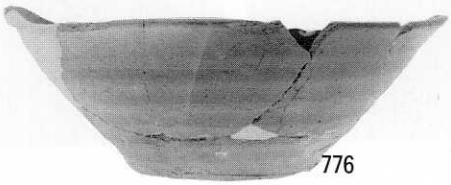

772




800A

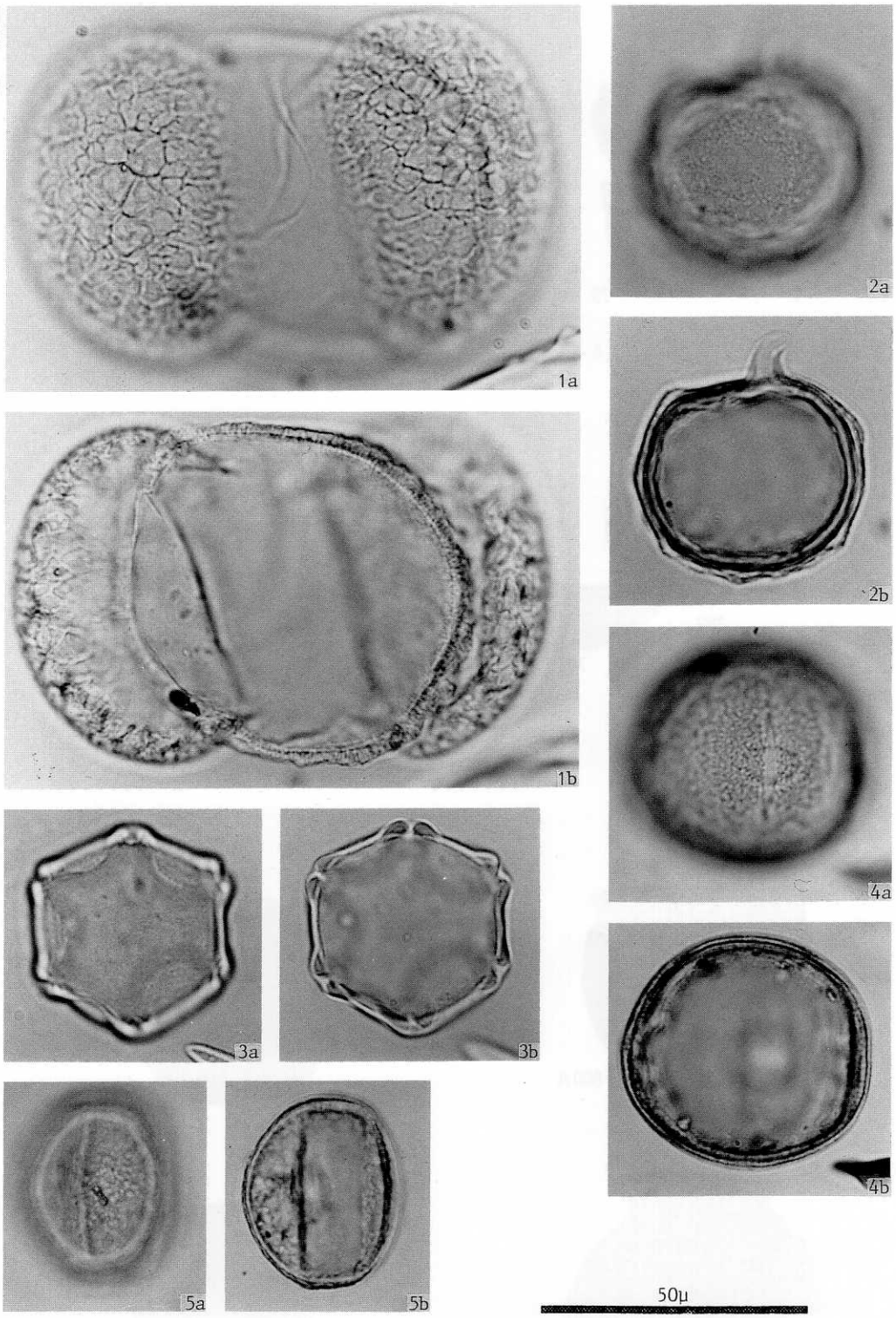

800B

801

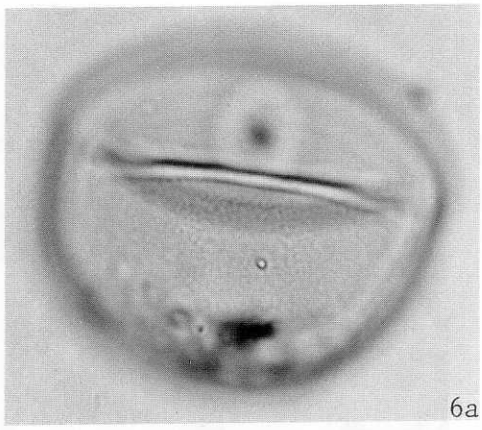

776

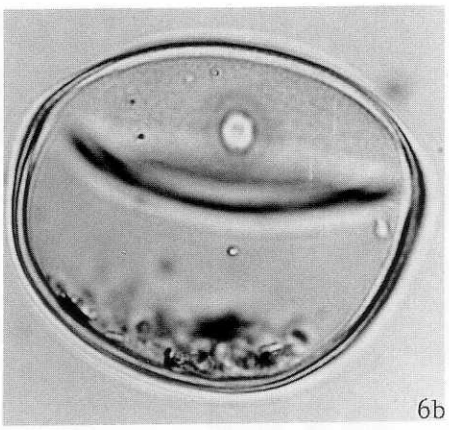
出土遺物(20)

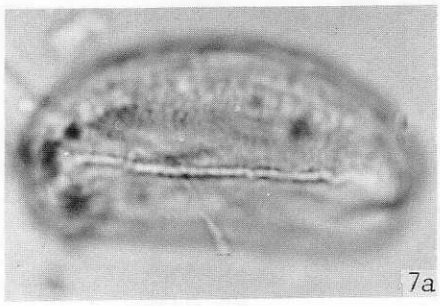
図版28

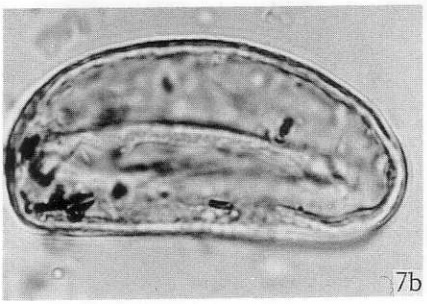


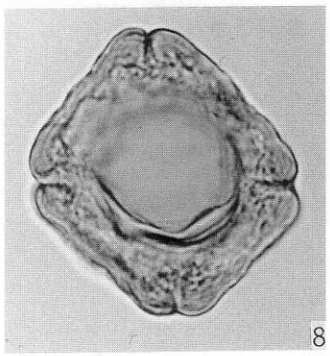
花粉顕微鏡写真（1）

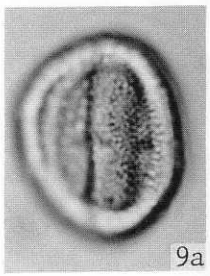


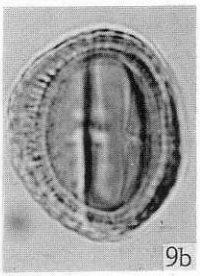












50μ

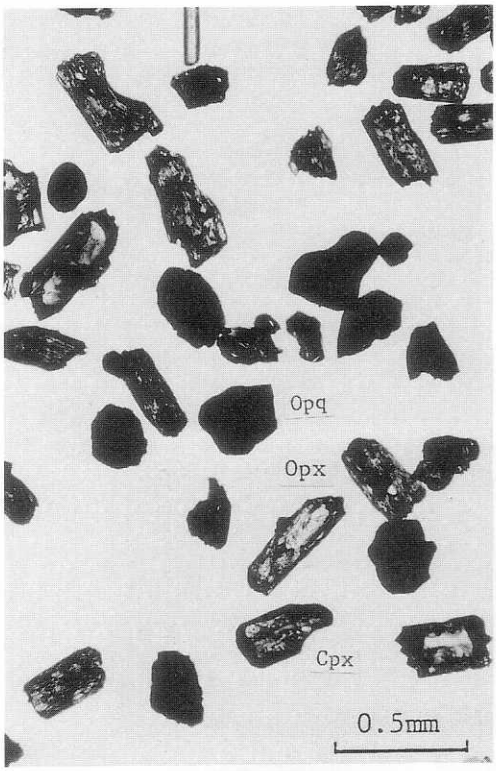
花粉顕微鏡写真（１）

1a，b マツ属複維管束亜属
2a，b スギ属
3a，b ハンノキ属
4a，B ブナ属
5a，b コナラ属亜属

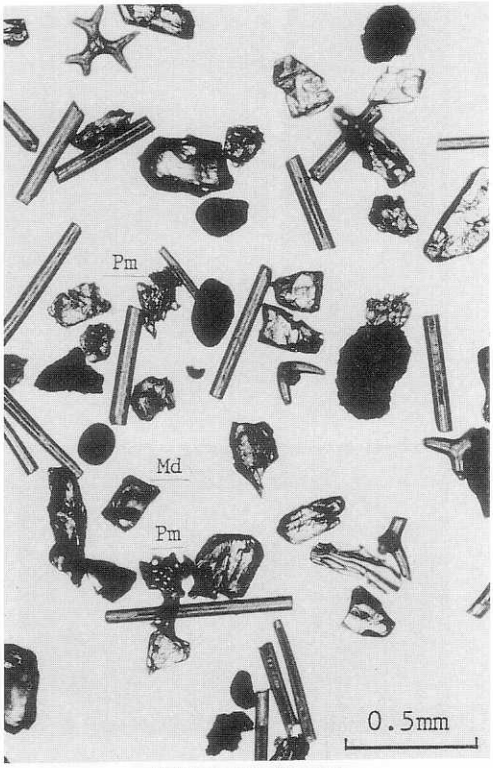
花粉顕微鏡写真（２）

6a，b イネ科
7a，b ミズアオイ属
8　　アリノトウグサ属
9a，b ヨモギ属

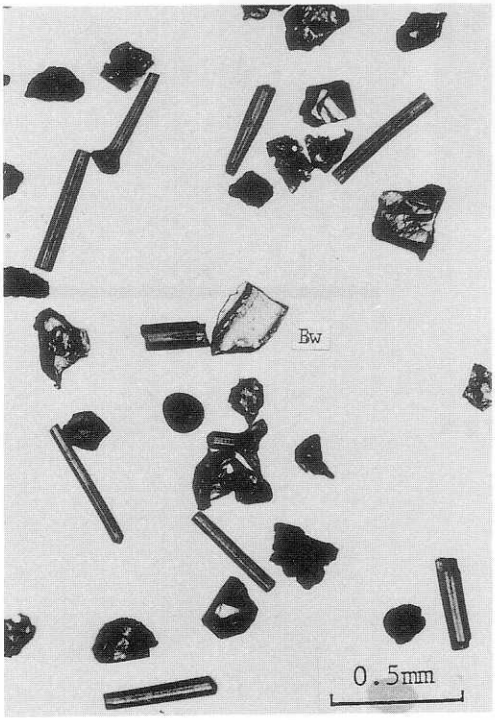
花粉顕微鏡写真（２）



試料番号８重鉱物



試料番号８軽鉱物



試料番号８軽鉱物

Ｏｐｘ：斜方輝石
Ｏｐｘ：単斜輝石
Ｏｐｑ：不透明鉱物
Ｐｍ：軽石型火山ガラス
Ｍｄ：中間型火山ガラス
Ｂｗ：バブル型火山ガラス

試料番号８に含まれる火山ガラス

あ と が き

発掘調査から本報告書の刊行までに２年と６カ月の歳月が過ぎました。この間、発掘調査及び整理作業に携わり、調査を支えて下さった方々の名簿を掲載し、心から感謝申し上げます。

石川孝造　伊藤由次郎　宇元耕二　小野倉之助　神谷昭一　栗田良行　佐藤周蔵　佐藤長一
佐藤雄幸　佐藤良治　佐川和士　鈴木喜代治　鈴木春治　高橋正司　高橋仁助　高橋樹
武内一郎　千田孝雄　松井和夫　松井久廣　松井正助　松川長一　小原信一　高橋真剛
阿部リヨ　小野寺とし子　佐藤松代　佐藤ヨシ　鈴木玲子　高橋愛子　高橋久子　高橋ユキ
高橋孝子　谷口チヨ　土田信子　戸田アイ子　戸田貞子　永瀬ミサ　野本キエ子
北條ツエ子　松井満子　松井ヨシ　松井栄子　松川京子　皆川エミ　山本アキノ
山本小夜子　高橋清子　林イデ子　松井のり子　佐々木範子　佐々木幸子　佐藤栄子
高橋和子　松井尚子　伊藤富治郎　小原伍平　神谷勇蔵　佐々木彦左エ門　佐藤義浩
鈴木恭治　鈴木清左エ門　糯田一　藤原順三　藤屋久太郎　松井純　伊藤清子　伊藤サチ
柿崎エミ　柿崎タイ　柿崎玲子　川崎イク子　加藤チタ　黒沢愛子　佐々木ヒサ子
佐々木愛子　鈴木公子　高橋ちづ子　高橋喜美子　高田真利子　藤屋照子　松井ノブ子
村岡摂子　山本信　鎌田留以子　高橋幸子　高橋よう子　田島洋子　照井蝶子　松井富士子
伊藤昭彦　伊藤美幸　大西英子　奥山文子　加藤悦子　佐々木美紀子　島津竜子　杉山恵美子
鈴木孝子　鈴木智子　高橋孝子　高橋まき子　竹村純子　新田和子　藤本弘子　森川たま子